
咸宜園教育研究センター 研究紀要

第 4 号

「廣瀬淡窓時代の日田祇園」 梅 山 秀 人

「中島子玉の日本史」「若き日の松下筑陰」 佐 藤 巧

「咸宜園の教えを道徳教育に取り入れ、豊かな心を培う
～淡窓教育の学校教育・社会教育への転用～」 中 島 龍 磨

高野長英の咸宜園在塾についての考察 深 町 浩一郎

資料紹介 西村天因 著『亀門の二廣』について (下) 廣瀬旭莊編 溝 田 直 己

咸宜園門下生略伝 (三) 深 町 浩一郎

咸宜園教育研究センター年報(平成25年度)

咸宜園教育研究センター要覧

日田市教育委員会

2015.3

咸宜園教育研究センター

研究紀要

第四号

二〇一五年三月



第 13 回「立志の道を歩こう」（熊本県山鹿市と日田市の交流事業）



国史跡「廣瀬淡窓旧宅及び墓」指定記念シンポジウム（平成 25 年 6 月 13 日開催）

目次

咸宜園教育研究センター研究紀要 第四号

□ 絵

咸宜園教育顕彰事業(教育文化部) 優秀賞受賞作品

「廣瀬淡窓時代の日田祇園」

「中島子玉の日本史」「若き日の松下筑陰」

「咸宜園の教えを道徳教育に取り入れ、豊かな心を培う」

～淡窓教育の学校教育・社会教育への転用～

日田祇園山鉾振興会評議員 梅山 秀人

佐伯史談会 佐藤 巧

三花公民館長 中島 龍磨

五五

高野長英の咸宜園在塾についての考察

咸宜園教育研究センター 深町 浩一郎

七九

資料紹介 西村天囚著『亀門の二廣』について(下) 廣瀬旭荘編

咸宜園教育研究センター 溝田 直己

八九

咸宜園門下生略伝(三)

咸宜園教育研究センター 深町 浩一郎

一一三

咸宜園教育研究センター年報(平成二二五年度)

I. 教育普及事業(展示事業、講座・講演会・イベント等)

II. 調査研究事業

III. 史料収集事業(購入史料・寄贈史料・寄贈図書・咸宜園関係参考文献)

IV. 教育顕彰事業

V. 世界文化遺産登録推進の取組

VI. 利用状況・日誌抄

VII. 各種委員会・職員名簿

咸宜園教育研究センター要覧

I. 沿革

II. 施設の概要・組織

III. 利用案内

IV. 条例・規則

26

27

28

29

25

24

20

18

9

7

1

廣瀬淡窓時代の日田祇園

日田祇園山鉦振興会評議員

梅山秀人



平成 26 年 豆田山鉦 4 基・中城お旅所集結

目次

- 一、はじめに
 - 二、淡窓日記および懷舊樓筆記より
 - 三、淡窓日記から分かること
 - 三一、淡窓は祇園会が好きだった
 - 三二、日田祇園の事故
 - 三三、官府の祇園会関与
 - 三四、太陰暦の豆田祇園会祭礼日を太陽暦に置換
 - 三五、日田祇園の祭礼日
 - 三六、日記、文書による日田祇園の祭礼日確認
 - 三六一、隈町の祇園会祭礼日
 - 三六二、豆田町の祇園会祭礼日
 - 三七、祇園囃子の乗り込み演奏の開始時期
 - 三八、山鉦の争い
 - 三九、淡窓の苦言
 - 四〇、祇園山鉦の建造
 - 四一、淡窓が見た豆田祇園山鉦の基数
 - 四二、淡窓は隈祇園山鉦を見たか
 - 四三、明治三三年電線架設前の祇園山鉦
 - 四、おわりに
- ・ 参考資料
- ・ 後記
- ・ 淡窓日記時代の豆田地図

一、はじめに

長嶋家文書（寛文年間一六六〇～七二年に祇園会があった）や、森春樹の豊西説話（正徳四年一七一四年に豆田・隈同時に祇園山鉾が始まった）に日田祇園についての記載がある。その内容は祇園に係る本で広く紹介されている。同時代に生きた廣瀬淡窓は淡窓日記をはじめ多くの文を残しているが、日田祇園の資料にあまり引用されていない。しかし、祇園に関するものが多くあるはずだ。淡窓日記と懐舊樓筆記に目を通した。はたして予想通り多くの文が残されていた。この内容は日田祇園の歴史の一部となるものと考えられる。その原文と訳、および考察を報告する。



図1 幕末頃豆田上町の室町山鉾の絵
木下逸雲画 高15～16m

二、淡窓日記および懐舊樓筆記より

天明六年丙午（一七八六年）淡窓五歳

（懐舊樓筆記より）

・・・又、祇園會ニ、市中ニ至リ。山車ノ高峻ニシテ。鼓吹ノ喧シキヲ見テ。心オビエテ速ニ歸レリ。

寛政二十一年己未（一七九九年）淡窓一八歳

六月一五日（懐舊樓筆記より）

姪ノ濱ヲ發シテ日田ニ歸ル日。六月一五日カト覺ユ。兼テ博多ノ祇園會ヲ觀ントテ。同塾ノ諸子ニ約ス。夜五更ノ初頃。姪濱ヲ發シ。博多ニ至リシニ。既ヌ

卯牌ナリ。櫛田宮ニ詣テントセシニ。市人告ケテ曰ハク。祭式ハ巳ニ終レリ。此ニ憩ヒテ。山車ノ過クルヲ觀玉ヘト。乃チ一店ニ待テリ。山車凡ソ六ツ。之ヲ昇キテ來ル。行キ過クルコト疾風ニ如シ。頗ル壯觀ナリ。我郷ニモ山車アリ。之ヲ挽テ行クコト遅々タリ。是ハ人ノ多少ニヨルヘシ。祭式早朝ニ終ルコト。禮ニ協ヘリ。我郷ハ大抵日暮ナリ。怠慢ノ至リ。神ソレ之ヲ歎ケンヤ。

文化二十一年甲戌（一八一四年）三三歳

六月一五日

休諸講。昨及今日。郷俗行祇園祭如例。唯風雨慶作。顛倒卒事。・・・晚至長福寺前。觀山車。・・・

（訳）諸講を休んだ。昨日と今日は祇園祭が例年通りあった。ただしば風や雨が来るので、順序を逆にして事を卒ることがある。・・・夜になって長福寺前で山車をみた。・・・

文化二十二年乙亥（一八一五年）三四歳

六月九日

前月二三日來。霖雨不止。是日快晴。・・・此日里中始試山車。（郷俗六月造山車祭神。正藏家正任其役。今年故前月日來。里人衆會。相扶執事。併予所居亦頗喧鬧。此日始成而試之。）

（訳）前月の二三日以来、霖雨（なが雨）が止まらなかつたが、この日は快晴。・・・本日はわが町で始めて山車を出した。（郷土の風習で六月に山車を造って神様の祭りをする。正藏の家が本年は当番である。今年の祭礼と前月来、町の人が集まって、助け合つて仕事をするに似た。私の所もこの町に加わつて山車を造ることになったので人々が集まって大声でやかましかったが、本日始めて山車が出来、ためしに山車を曳いてみるのである）

六月一四日

郷祭如例。・・・

（訳）祭りは例年の通り。・・・

六月十五日

昨今二日。天氣清明。祭儀得序。市中無数。唯以北家任山車之役。喧煩至夜半。

(訳) 昨日も今日も、天氣清明、祭儀も順調。市中も無事故、ただ正蔵の北家だけは山車の当番で相当にうるさく夜半までやかましい。

* 北家・魚町の久兵衛の居宅

文化一三年丙子(一八一六年)三五歳

六月一四日

・・・此日雨。山車不出。

(訳)・・・本日は雨。山車が出なかった。

六月一五日

雨。市中罷祭。

(訳) 雨。市中は祭りをやめた。

六月一六日

(甲子) 雨止。山車出。・・・

(訳) 甲子(一二時)。雨が止んだので山車がでた。・・・

六月一七日

午前無雨。市中行祭。既而數雨。入夜益甚。山車之歸。既二更矣。

(訳) 午前中は雨は降らなかった。市中は祭りが行はれたが、そのうちに、時々ふる雨となり、夜に入っていよいよひどくなった。山車が帰ったのは、既に二更(夜一〇時)になっていた。

六月二〇日

初中城人。為山車所轢。(二七日夜過橋得傷。)此日遂死。・・・

(訳) 初め中城の人、山車に轢かれた。(二七日の夜、橋を通過してひかれた)本日、遂に死んだ。・・・

(※橋は上町と中城の境の城内川に架かっていた石橋と思われる)

文化一四年丁丑(一八一七年)三六歳

六月一四日

魚町招觀祭事。與妻往。供午飯。・・・

(訳) 魚町に祭事を觀に招かれる。妻行く。午飯だされる。・・・

六月一五日

・・・神輿行幸拜焉。晚飯而歸。・・・

(訳)・・・神輿の行幸を拜むまでいた。晚飯をとって帰る。・・・

文政元年戊寅(一八一八年)三七歳

六月八日

豆田三丁目人。始試山車。中城邑人忠兵衛為山車所轢而死。(去々年轢死者。

亦名忠兵衛。)毀山車。・・・

(訳) 豆田三丁目の人が始めて山車を出して試運転したところ、中城村の忠兵衛という人が轢かれて死んだ。(一昨年の轢死した人も忠兵衛という)そこで山車を壊してしまった。・・・

文政二年甲午(一八一九年)三八歳

六月一五日

放學。午後同伯父。益多。之魚街拜神輿。是歲祭事如舊。而以不見山車。寂寞

如常日耳。晚飯而歸。(先是人々有為山車所轢而死者。是歲官命小其製。高不得

過三丈。限行之於街中。豆田則置於牛頭天王祠前耳。)

(訳) 放學。午後、伯父、益多とともに魚町にいつて神輿を拝した。本年も祭事

は元通りであったが、山車を見なかった。ひっそりとしてさびしくて平日と同じであった。魚町で晚飯を食べて帰った。(これよりさき、山車のために轢かれて死んだ人が出たので、本年からは代官所からの命令で、山車を小さく造り、高さが三丈(九・九m)以上はだめとなった。隈町では、この山車を引いて町中をねり歩いたが、豆田の方では牛頭大王(八坂神社)の社の前に据え置いた)・・・

同日 懷舊樓筆記より

魚町二行キ。祇園曾ノ祭りヲ見タリ。此年明府ヨリ命アリ。山車ヲ低小ニスベシトナリ。是ハ近年山車ノ為ニ轆セラレテ。傷ツキ。或ハ死ニ至ル者アリ。故ニ此命アリトゾ。予時ニ詩アリ。ソノ事ヲ記ス。曰ク。
(訳) 魚町に入つて祇園會の祭りを見た。この年代官より山車は低小にせよとの命令があつた。これは近年、山車のために轆かれて、傷ついたり、死んだ人が出たので、この命令が出たという。私はその時、詩を賦した。

鬱々紅塵暗天起 前車方馳後車止

怪底強力能移山 穿街過巷如流水

一夜幻出化人宮 岩巒草木盡錦綺

魯般雲梯墨翟鳶 衆家各自誇長枝

百年風俗觀昇平 無奈淫功遂日生

府中令尹降新政 頓以邱垤代嵩衡

二簋可享經有語 看他損益與時行

時和歲豐神自樂 滿街人聲若雷聲

(讀) 鬱々たる紅塵天を暗くして起る

前車まさに馳せ 後車止まる

怪しき強き力 よく山を移す

街を穿り巷を過ぎ流水の如し

一夜にして化人の宮を幻出す

岩巒草木 尽く錦綺

魯般の雲梯 墨翟の鳶

衆家各自 長枝を誇る

百年の風俗 昇平を觀す

いかんともするなし 淫功日を遂うて生ずるを

府中の令尹 新政を降す

とみに邱垤を以て嵩衡に代ふ

二簋享くべし 經に語あり

看よ損益は時とともに行るを

時和し歲豊かなれば神おのづから楽しまん

万街の人声雷声の如し

(訳) 山車が引かれてくると、日に映じて赤く見える土ほこりが盛んにたつて、空が暗くなつてくる。

前の山車は走つてゆき、あとの山車は止つてゐる。

山車を曳く人達の怪しいまでの強い力は、山をも移すほどである。

大通りをすすみ横丁を過ぎ、山車は水の流れのように進む。

町は一晚で仙人のすまいをまぼろしのように現わした。

けわしく高い岩山や草木まで、すべて美しいあやぎぬで作り変え、魯般の作つたような雲までとどく長い梯子、あるいは墨子の作つたような空をとぶ紙鳶、多くの家がそれぞれすぐれた技を自慢し見せかす。

これは百年もつづいた風習で、世の中が太平であることを示している。

しかし、どうにもならないのは、非常にぜいたくで、巧みな細工が日まじに盛んになる事である。

これを見たまつりごとの長官である代官は新しい命令を下した。

それは、大山や高山を、小さな丘や蟻づかに代えるような儉(節)約の令であつた。市民は驚いたが、しかし昔の経書の中にも、誠の心さえあれば、二つの簋に盛つたほどの粗末なものでも神に供えるに十分であるという。

よく考えてみるがよい、神に供えるものをへらしたり、ふやしたりすることは、時代とともに変わるものである。

天候もおだやかに、豊年であれば、人々喜ぶので神も自ら楽しまれよう。かくて町中の人々の喜びの声は雷のなりびびくようであらう。

文政三年庚辰(一八二〇年) 三九歳

六月一五日

…… 歸路謁祇園祠。觀山車……

(訳) …… 拝謁した歸りに祇園祠にまいり山車をみた……

文政四年癸丑（一八二二年）四〇歳

六月一日

放學。同久兵衛赴魚町長八招。觀山車。日夕歸家。……

（訳）放學。久兵衛とともに魚屋長八に招かれていった。山車をながめた。夕方家に帰った。……

* 隈町の祇園会に行った。隈町の祇園会は六月一〇、十一日。

六月十五日

與妻之魚町。拜神觀山車。供畢面歸。是日之官府賀。放學。

（訳）妻と魚町にいつて神位を拝して山車を見た。神に奉納する山車の舞が終わって帰った。本日、官府へいつて賀詞を述べた。休校。

文政五年壬午（一八三三年）四一歳

六月十五日

病勢益退。

（訳）病気はますますよくなった。（六月七日より下痢をしている）

* 「この年は祇園の記載なし」

文政六年癸未（一八三三年）四二歳

六月十五日

……午後同妻赴魚町招。觀山車。

（訳）……午後、妻とともに魚町から招待されていった。山車を見た。

文政七年甲申（一八二四年）四三歳

六月十五日

……是日。市中當行祇園祭。以雷雨不果。……

（訳）本日は、市中では祇園祭が行はれるはずであったが、雷雨で祭りができなかった。……

六月十六日

詣中城拜祇園神輿。且觀山車。

（訳）中城に詣でて祇園の神輿を拝し、また山車を見た。

文政八年乙酉（一八二五年）四四歳

六月十五日

……是日。祇園神輿行臨如例。拜終而歸。……

（訳）……本日は祇園の神輿がお出ましになったのは、いつもの通り。神輿を拜んでから帰った。……

文政九年丙戌（一八二六年）日記の作成なし。四五歳

文政一〇年丁亥（一八二七年）日記の作成なし。四六歳

文政一一年戊子（一八二八年）四七歳

六月十五日

放學。學家赴魚町招。是日雨。觀山車二。而日已暮。乃歸。是以不能拜神輿行

幸。……

（訳）休校。家をあげて魚町の招待でいった。本日は雨。山車を二台みた。それだけで日が暮れた。そこで帰った。こういうわけで神輿の行事は拝むことができなかった。……

文政一二年己丑（一八二九年）祇園の記載なし四八歳。

* この年は、田代（鳥栖）の東明館へ講義にいつていて、日田にいなかった。

文政一三年庚寅（一八三〇年）四九歳

六月十六日

祇園祭禮（昨以雨不果）應魚町招。陪家君住。……

藤兵衛爲山車所轢。（佐官與兵衛子）

(訳) 祇園の祭礼(昨日は雨で祭礼は休み)。魚町から招かれ、父のともをして往った。・・・藤兵衛が山車に轆かれた(左官与兵衛の子である。)

六月二五日

・・・聞藤兵衛死。(予之構今居。随父来塗壁。故諳其面。憐其以災死。故録)
(訳)・・・山車に轆かれた藤兵衛が死んだと聞いた。(私の工事に父について来て壁を塗ったので、その面はよく覚えてる。災にあつて死んで可哀そうなので録しておく)

六月一六日 懷舊樓筆記より

村民與兵衛カ子藤兵衛。祇園會ニコトアルニヨリ。山車ノ爲ニ轆セラレタリ。後十日程ニシテ死セリ。與兵衛ハ予カ幼時ヨリ熟スル所ナリ。藤兵衛父予カ西家ヲ作ル時。往來シテ壁ヲヌルノ事ニ任セリ。其非命ニ死スルヲ悲ム。故ニ之ヲ詳ニセリ。與兵衛三男二女。皆父ニ先ツテ死ス。其身ハ饑饉二年ニ死セリ。

天保二年辛卯(一八三一年)五〇歳

六月一五日

魚町以祇園祭招。全家皆往。予以疾留守暴雨。・・・
(訳) 魚的から祇園の祭りで招かれて、全家がそろつて往った。私は病で留守をした。・・・

天保三年壬辰(一八三二年)五一歳

六月一五日

祇園祭同家君妻。謙吉。赴魚町招。日暮歸家。是日雨。然亦畢祭。(祇園祭近年必雨。不知神意如何。)

(訳) 祇園の祭、父と妻、謙吉とともに魚町に招かれて往った。日暮れて家に歸った。本日は雨。しかし、祭りは終わることができた。(祇園の祭には近年必ず雨がふるが、神様の心はどういうものかわからない。)

天保四年癸巳(一八三三年)五二歳

六月一四日

陪家君之魚町。觀山車。兩飯而歸。(一於宗家。於仲平家。)
(訳) 父のおともをして魚町へ往つて、山車を見た。二度ごはんをごちそうになった。(一つは本家で、次は仲平の家で)

六月一五日

・・・之中城觀山車。遥拜神輿。雷雨。・・・
(訳)・・・中城へ行き山車をみた。遥かに神輿を拝した。雷雨があつた。・・・

天保五年甲午(一八三四年)五三歳

六月一四日

應仲平招觀山車。同座家君。久兵衛。謙吉。勲平。午飯而歸。
(訳) 仲平に招かれて山車をみた。同座、父、久兵衛、謙吉、勲平。午飯して歸る。

天保六年乙未(一八三五年)五四歳

六月一四日

・・・仲平以祭相招。以疾不往。饋膳。
(訳) 仲平が祭りで招待したが、病気で往かなかつた。膳を贈られた。

六月一五日

魚町以祭招。以疾不往。使妻往。饋膳。・・・田町人爲山車所轆。(瘡輕而不死去。)
(訳) 魚町から、祭りに招待された。病気で往かなかつた。妻を往かせた。膳を贈った。・・・田町の人山車に轆かれた。(怪我は軽くして死にはしなかつたという。)

天保七年丙申(一八三六年)五五歳

六月一五日

詣府而賈。放學。祇園會如例。全家赴魚町招。供午飯。同座叔父。久平衛。拜

神輿(行幸)。晩飯於伸平家。

祇

(訳) 官府へ往つて賀詞を述べた。放学。祇園会はいつもの通り。全家魚町から招かれて往つた。午飯を一緒に食べた。同座は叔父、久兵衛。神輿のお出ましを拝した。伸平の家で晩飯した。

天保八年丁酉(一八三七年)五六歳

六月一五日

晴。詣齋藤氏及官府賀。遂過魚町。拜神輿及觀山車。家人皆往。供午飯及酒。同座。

叔父。長野要人。伸平。久兵衛。諸家眷。晚之伸平家。供酒飯。同座如前。(叔父。要人不與) 今年以歳儉省祭禮。山車低小。街市寂寥。是日放学。

(訳) 晴。齊藤氏と官府へ往つて賀詞を述べた。それから魚町を通り、神輿を拝し山車をみた。家人は皆往つた。午飯と酒を出した。同座は叔父、長野要人、伸平、久兵衛と諸家族。晩には伸平の家へ往つた。同座は前と同じ。(叔父と要人は加わらない。) 今年是不作で祭礼の飾り物を省き、山車も低小で街も寂しかった。本日は放学。

天保九年戊戌(一八三八年)五七歳

六月一五日

詣府而賀。・・・歸路過魚町。供午飯。是日。祇園祭。家人亦往焉。予飯畢先歸。

不得拜神輿且觀山車。暮使種男代往拜神輿。(神輿近暮而出。至中城。則全夜矣。怠慢不敬。神果享乎。)

(訳) 官府へ往つて賀詞を述べた。・・・帰路、魚町を通つて寄つたところ午飯を出した。本日は祇園祭で家人もまた往つた。私は飯が終わつて先に帰り、神輿を拝み、山車を見に行くつもりであったが出来なくて、暮れに種男を代わりにやつて神輿を拝ませた。(神輿は暮れ近くになつて出た。中城に着いた時は全く夜になつていた。これでは怠慢不敬である。果たして神様は享けられるであろうか。)(※この年の豆田・平野町・山鉾の絵がある。淡窓は見にかず、種男を代わりに代参させたが、種男が観た山鉾の一つがこの絵の山鉾であろう)



図2 豆田上町の平野町山鉾の絵
天保9年(1838)

天保十年己亥(一八三九年)五八歳

六月一五日

放学。詣府而賀。・・・歸路過魚町。有酒食之供。觀山車拜神輿。近暮而歸。・・・(訳) 放学。官府へ往つて賀詞を述べた。・・・魚町を通つて、立寄ると酒食のもてなしを受けた。山車を見、神輿を拝した。夕暮れ近くなつて帰つた。

天保十一年庚子(一八四〇年)五九歳

六月一五日

詣府而賀。・・・予以故不往。故无拜神輿觀山車之事。(神輿以申牌發。至中城

則日已暮。山車之歸。及夜二更。紛鬧到爭。事至翌日而平。嗚乎怠慢至此。神其敬乎。) 是日地震。

(訳) 官府へ往つて賀詞を述べた。・・・私は事故で往かなかつた。それで神輿を拝まず。山車をみることもなかつた。(神輿は午後四時に出発して中城に着いたときは、すでに日暮れで、山車が来たのはすでに夜の二〇時。ごたごたとさわいで争いになり、争いは翌日になつて治まつた。あ、何という怠慢だ。神様は喜んでうけられるであろうか(うけはしまい)。本日、地震があつた。

天保十二年辛丑(一八四一年)六〇歳

六月一五日

昨今兩日。當祇園祭。以過密不行。亦不出賀。
(訳) 昨日と今日の両日は祇園の祭りであったが、過密であったので祭りに行かなかった。また、官府へも出賀もしなかった。

*過密(あつみつ)・諒闇(りょうあん)の時に音楽を禁止すること。

*諒闇・天皇家、將軍などの貴人が亡くなること。

*この年の六月二日に郡代・寺西蔵太の死を公にした。

実は、前年の十一月二日に没していたが、それを伏せておいた。

六月二七日

豆田隈町皆有祇園之祭(以過密故延其期也)。應魚町招。家人皆往。・・・未牌神輿及山車過門。暮而歸。是日風雨驟作。隈川原町山車仆地。有傷者。(或云死)・・・

(訳) 豆田、隈町皆祇園の祭りがあつた。(過密であつたので祭りの期日を延期していた。)魚町から招待された。家人は全部往つた。・・・午後二時神輿と山車が門を通過して往つた。本日は風がありにわか雨が降つた。隈の川原町で山車が地に倒れて怪我した人があつた。(あるいは死んだともいう。)

* 隈の祇園会は六月一〇、一一日。豆田は六月一四、一五日である。この年は祭日が延期され同時開催となっている。

天保一三年壬寅(一八四二年)六一歳

六月一五日

放學。詣府而賀。見近臣。魚町以祭招。・・・予觀山車二而歸。(神輿行幸在暮。街居太熱。故不能待。)

(訳) 放學。官府へ往つて賀した。近臣に面接した。魚町が祭礼で招いた。・・・私は山車二をみて帰つた。(神輿の行幸は夕暮れになる。町は非常に暑いので待ちきれないで帰つた。)

天保十四年癸卯(一八四三年)六二歳

六月一五日

・・・是日祇園會如例。與家人赴魚町招。・・・觀山車。拜神輿。乃歸。
(訳) ・・・本日は祇園會いつもの通り。妻とともに魚町の招きで往つた。・・・山車をみ、神輿を拜んだ。そして帰つた。

天保十五年甲辰(一八四四年)六三歳

六月一五日

放學。・・・詣府而賀。・・・昨今兩日。豆田町祭禮如例。但神輿及暮始出。(鍊之助第三兒病痘。故不招客。予不觀山車拜神輿。)

(訳) 放學。・・・官府へ往つて賀した。・・・昨日と今日の両日、豆田町の祭礼はいつもと同じ。ただ神輿は夕暮れになって初めて出た。(鍊之助の第三兒が痘「天然痘」にかかったので客を招かなかつた。私も山車もみず神輿も拝まなかつた。)

弘化二年乙巳(一八四五年)六四歳

六月一五日

詣府而賀。・・・是日祇園會如例。(祭事寂寥。加以魚町有事。予不往焉。使孝之助至耳。○之府時。謁祇園社。)

(訳) 官府へ往つて賀した。・・・本日の祇園会はいつもの通り。(祭の行事がないのでひっそりとしてさびしい。その上、魚町に病人があつて、私は往かなかつた。孝之助を見物にやつた。官府に往く時、祇園社にまいつた。)

弘化三年丙午(一八四六年)六五歳

六月十五日

放學如例。・・・巳牌學家之魚町。祇園會祭也。・・・觀山車一。(今年正祭在一六日。故此日无神輿出行之事。)供畢。乃歸。

(訳) 放學、いつもの通り。・・・一〇時、家をあげて魚町に往つた。祇園祭の祭りである。・・・山車一を見た。(今年の正祭は一六日であるので、本日は神輿がお出ましになることはなかつた。)神様にお供えものが終つて帰つた。

弘化四年丙午(一八四七年)六六歳

六月一日

放學。詣府而賀。歸路過魚町。妻。孝之助亦至。遍觀山車。供午飯及酒。……申牌之中城。拜神輿。焉。

(訳) 放學。官府へ往つて賀詞を述べた。妻と孝之助とともに。歸路、魚町を通過つて寄り、山車をみた。御飯と酒のもてなしを受けた。……午後四時中城で神輿を拝した。

嘉永元年戊申(一八四八年) 六七歳

六月一日

……祇園會如例。家人皆應魚町招。予獨以疾守家。饋膳。

(訳) ……祇園會はいつもの通り。家人は魚町の招待に応じて皆往つた。予は独り病気のため家にいたので、膳を贈られた。

嘉永二年戊申(一八四九年) 六八歳

六月一日

夜雨。詣府而賀。歸路留魚町。受祭供焉。……予先歸。未牌之中城。拜神輿。且觀山車。是日放學。

(訳) 夜は雨。官府へ往つて賀詞を述べた。歸路魚町に留まる。祭りのもてなしを受けた。……予は先に帰る。午後二時中城で神輿を拝し、山車をみた。本日は休學。

嘉永三年庚戌(一八五〇年) 六九歳

六月一日

放學。詣府而賀。……歸路過魚町。有饗。……觀山車二。予先歸。(神輿行幸在日暮。故不能待。先詣祇園祠拜之。山車未觀者二) 是日天氣清明炎熱。(入本月絶无雨者。盖此一日。……)

(訳) 放學。官府へ往つて賀詞を述べた。……歸路、魚町を通過つて寄つたところ、食事のもてなしを受けた。……山車を二台見た。予は先に帰つた。(神輿の行幸が日暮れになったので、待つことができず、先に祇園社に詣で拝してきた。山車

を見ることできず。) この日は晴天で大変暑い。(今月に入り雨が絶えてない。本日も雨がない)

嘉永四年辛亥(一八五一年) 七〇歳

六月一日

放學如例。魚町招以祭。……

(訳) いつものように休校。祭りのため魚町に招かれる。……

嘉永五年壬子(一八五二年) 七一歳

六月一日

……放學如例。魚町因祇園會相招。家人皆往。予以疾不往。饋膳。未牌暴雨募雷移時。(暴雨数十年來所无也。) 神輿行幸。入夜而畢。(暴雨。□々卒) 事。山車皆車壞。无通街者云。

(訳) ……いつものように休校。祇園會により魚町に招かれる。家人は皆往く。余は病気で往かなかつた。膳を贈られた。午後四時暴雨がつのり暴雨に移る。(暴雨は数十年來のことなり) 神輿の行幸があつた。夜になり終わった。(暴雨のため早々に終わった) 山車は皆解体した。街の通る者なし。

嘉永六年癸丑(一八五三年) 七二歳

六月一日

赴魚町祇園會祭。家人皆往。觀山車三。午飯畢。予先歸。……

(訳) 祇園祭で魚町に赴く。家人も皆往く。山車を三台みた。午飯を食べた。予は先に帰る。……

嘉永七年甲寅(一八五四年) 七三歳

六月一日

範治詣府而賀。之魚町觀所造山車。供酒飯。南陔判客。(山車以輪次造之。今歲源兵衛家番。以予生夾敷之。予一三歳。三四歳。五二歳。至此凡四回。) 放學如例。

(訳) 範治が官府へ往って賀詞を述べた。魚町で山車を造るのを見た。酒と御飯のもてなしを受けた。南陔が客を伴ってきた。(山車を造るのは輪番である。今年は源兵衛の家の順番である。予が生まれてから一三歳と三四歳と、五二歳と今回の四回である。) いつもと同じく休校。

* 南陔・廣瀬久兵衛

* 源兵衛・廣瀬久兵衛の長男。淡窓の甥。

六月一六日

豆田祇園祭。至此日止。(不行之於朝氣清淑之時。而以午後。必至逢雨點燈而止。我不欲觀之。不拜幸。)

(訳) 豆田は祇園祭であった。この日に止った。(朝の気が清々しい時より行なわず。午後は必ず雨にあう、それで提灯の点燈を止める。私はこれを観なかった。行幸も拜せず。)

嘉永八年乙卯(一八五五年) 七四歳

六月一五日

赴魚町祇園會祭。範治。孝之助従行。…午牌饗畢而歸。送以肩輿。(神輿行幸在暮。

年号	西暦	淡窓歳	日記記載
文化11年	1814年	33歳	有り
文化12年	1815年	34歳	有り
文化13年	1816年	35歳	有り
文化14年	1817年	36歳	有り
文政元年	1818年	37歳	有り
文政2年	1819年	38歳	有り
文政3年	1820年	39歳	有り
文政4年	1821年	40歳	有り
文政5年	1822年	41歳	無し・病気
文政6年	1823年	42歳	有り
文政7年	1824年	43歳	有り
文政8年	1825年	44歳	有り
文政9年	1826年	45歳	日記無し
文政10年	1827年	46歳	日記無し
文政11年	1828年	47歳	有り
文政12年	1829年	48歳	無し・田代
文政13年	1830年	49歳	有り
天保2年	1831年	50歳	有り
天保3年	1832年	51歳	有り
天保4年	1833年	52歳	有り
天保5年	1834年	53歳	有り
天保6年	1835年	54歳	有り
天保7年	1836年	55歳	有り
天保8年	1837年	56歳	有り
天保9年	1838年	57歳	有り
天保10年	1839年	58歳	有り
天保11年	1840年	59歳	有り
天保12年	1841年	60歳	有り
天保13年	1842年	61歳	有り
天保14年	1843年	62歳	有り
天保15年	1844年	63歳	有り
弘化2年	1845年	64歳	有り
弘化3年	1846年	65歳	有り
弘化4年	1847年	66歳	有り
嘉永元年	1848年	67歳	有り
嘉永2年	1849年	68歳	有り
嘉永3年	1850年	69歳	有り
嘉永4年	1851年	70歳	有り
嘉永5年	1852年	71歳	有り
嘉永6年	1853年	72歳	有り
嘉永7年	1854年	73歳	有り
嘉永8年	1855年	74歳	有り

表1 淡窓日記と作成年と祇園会記載の有無

暑熱方甚。故不能待。…
 (訳) 祇園祭を行なっている魚町に往いく。範治と孝之助を連れて行った。…正午饗宴が終りカゴで送ってもらい帰った。(神輿の行幸が暮にあった。甚だしく暑かったので待たなかった。)…



図3 豆田上町の八幡町山鉾の絵
文久3年(1863)

三、淡窓日記から分かること

三十一、淡窓は祇園会が好きだった

淡窓が日記を書き始めてから亡くなるまでの四二年間で、日記を書いている二年間を除き、祇園会について書いていない年は二回しかない。一回は四一歳の病氣時(下痢)で、もう一回は四八歳の時、田代(鳥栖)東明館に講義に行つ



図4 明治元年 平野五岳圖 (日田祇園囃子より)

ていた時である。毎年欠かさず書いていることから、淡窓は祇園会が大好きだったと思われる。また、神輿や山車の巡行に関して、いろいろな苦言を呈している。これは、祇園祭に関心があがり好きだったため、自分なりの改善点を指摘しているのであろう。また、神輿を拝むことを重視していたことも分かる。

三二、日田祇園の事故

淡窓の時代は事故が多い。日記で分かる事故者数は、死者三名(四名)、怪我人二名(一名)である。原因は轢かれたが五例、死者三、怪我一。山鉾の転倒が一例、死者(一)、怪我一である。

轢死が多いのは、現在の山鉾には着けられている、巻き込み防止の安全カバーの役割をしている助け板がなかったからと思われる。山鉾巡行中に転び、車輪に巻き込まれたのである。

山鉾転倒の原因は、山鉾の高さが現在より高く、一五〜一六呎あり、そのため山車の重心が高くなり不安定になっていたためである。重心を下げるために館を紙で作るなどの軽量化を図っていたようだ。現在は重心を下げるために両側に土俵を取り付けているが、当時の山鉾には土俵は着いてなく、極めて不安定であったと思われる。

江戸時代末の絵(図1)を見ると、土俵が書かれていない。明治元年の平野五岳の絵(図2)では助け板がないことが分かる。土俵も着いてない。

江戸時代の山鉾は構造上、不安定なので急発進、急停止、走り込みなどの俊敏で勇壮な巡行はできなかつたと思われる。それでも轢死者が出ているのはお酒が入っていたためではないか。酒の購入は山鉾一基で五斗一升と明治三年(二九一四)の松尾家文書に記述されている。

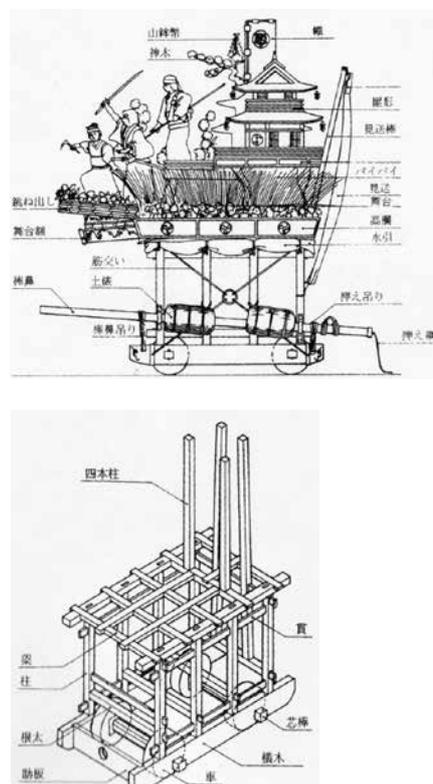


図5 山鉾各部の名称

三三、官府の祇園会関与

現在でも祇園会で事故が起これば、当局から運行責任者への事情聴取が行なわれ、山鉾や巡行体制などへの改善指示・命令が出されると思われる。江戸期の祇園祭では死者が出ることが多く、そのため安全に巡行するための適切な指示・命令が官府(郡代役所)より出されている。

文政三年(二八一九)に山鉾の高さ制限が出された。従来は高さが一五〜一六呎ほどあったと思われるが、この前年の文政二年から三丈(九・九呎)以内になっている。時の郡代・塩谷大郎から官府命令が出ている。

これは、文化二三年(二八一六)と文政元年(二八一八)と続けて轢死者が出たため、安全な山鉾巡行を担保するために出されたもの。また、華美になっていた山鉾を質素にするようにとのお達しである。

この時に日田御役所から出された御廻文の書取が限町年寄の記録に残っている。

御廻文并差上書附留(限町年寄りの記録)
塩屋郡代からの指示

書取

両町

中城村
城内町
竹田町

両町并右村祇園山鉾近年迄は至て質素に相聞候処、貳三拾年来重も大違に相成候旨、右は両町は商筋先年より利分多く候故神事等之入用銀相増候ても差支無之と申意味も可有之候得供、百姓方にては先年より方取実多きと申すにも有之間敷、一村之地面広く相成候にも無之、年部分取入程合大躰相極居可申処、近年に至神事入用銀等相増、左候ては取入は極り有之町内の諸入用は相増候故、困窮いたし候外無之既御年貢筋之儀取実程有之候に付、本免より少々相増候ても相敷き候は永年且年々故之儀に可有之。然候上は神事祭礼も永年年々之儀猶更古風相守り、古来之仕来より入用不相増様可心懸処其儀無之万事月日に花実相成候儀は不心附困窮に相成候得は、時節悪敷杯申之時節を恨み候様に相成、又は花実を好候儀は若きもの仕業にて、いたし方無之杯申之親之身分にて子之取締りも不相成様に相見候。乍然右躰無益之入用に費し候程有餘有之候は、御年貢筋は勿論、諸冥加筋の出精相増相納候様可致處、取下又は諸冥加等相減候も有之、前文之通神事等自促之儀には花美相増有餘ながら上納物相減候筋に相成、公務を等閑にいたし候に相当たり、罪に寄其促に難差置次第に候。殊に祇園会山鉾は花美に相成、高さも相増四五丈も有之趣、左候ては尤危く万一怪我有之人命に拘り候儀等出来致間敷ものにも無之候。且又両町辻も古来よりもうけ筋相増候と申事にも有之間敷旁古来に復し万端質素にいたし神も人も永久繁昌いたし候様可心縣事專一に候。

山鉾高さ屋台より上惣高壹丈八尺に可限事。但旗共、に

※ 両町限・豆田町

※ 山鉾の高さは屋台より上が、壹丈八尺（五m九四cm）で幟旗こみ。

※一丈二・三m

※ 屋台の高さは一・二丈と思われる（淡窓日記に全高が三丈になったとの記述がある）

天保八年（一八三七）は不作のため、山鉾が低く、小さなものであった。と記述されている。この頃は江戸時代三大飢饉と言われる「天保の飢饉」の真っ只中であり、廣瀬家も粥の炊き出しの奉仕をしていた。山鉾を低小にしたのは官府からの命ではなく自発的なのだったと思われる。塩谷郡代が江戸に呼び戻された後の代官は長崎奉行の高木作右衛門で、天領日田は長崎奉行預りとなっていた。

また、お上の関与は明治時代になつても続いている。豆田町の町方元締の申し決めとなつているが、時の日田県知事・松方正義の指導があつたと思われる控え書きが残っている。

明治四年辛未五月（一九一五） 儉約質素申極書扣

町方元締相背候節右之通写

覚

- 一、過料金 三両 重立候者
- 二、同 壹両 中ノ処
- 三、同 貳歩 本人

小前壹歩

組合壹歩

× 品物受候者は右半高

差出可申候事

右過料金差出候半分分分告知告候者江褒美二遣し残平方町方へ備置町方臨時入用并道橋入用二いたし可申候事

申極書事

一正月・・・ 一三月（ひな祭りについて）・・・

年号	西暦	太陰暦	太陽暦
文化11年	1814年	6月15日	7月31日
文化12年	1815年	6月15日	7月21日
文化13年	1816年	6月15日	7月9日
文化14年	1817年	6月15日	7月28日
文政元年	1818年	6月15日	7月17日
文政2年	1819年	6月15日	8月5日
文政3年	1820年	6月15日	7月24日
文政4年	1821年	6月15日	7月14日
文政5年	1822年	6月15日	8月1日
文政6年	1823年	6月15日	7月22日
文政7年	1824年	6月15日	7月11日
文政8年	1825年	6月15日	7月30日
文政9年	1826年	6月15日	7月19日
文政10年	1827年	6月15日	7月8日
文政11年	1828年	6月15日	7月26日
文政12年	1829年	6月15日	7月15日
文政13年	1830年	6月15日	8月3日
天保2年	1831年	6月15日	7月23日
天保3年	1832年	6月15日	7月12日
天保4年	1833年	6月15日	7月31日
天保5年	1834年	6月15日	7月21日
天保6年	1835年	6月15日	7月10日
天保7年	1836年	6月15日	7月28日
天保8年	1837年	6月15日	7月17日
天保9年	1838年	6月15日	8月4日
天保10年	1839年	6月15日	7月25日
天保11年	1840年	6月15日	7月13日
天保12年	1841年	6月15日	8月1日
天保13年	1842年	6月15日	7月22日
天保14年	1843年	6月15日	7月12日
天保15年	1844年	6月15日	7月29日
弘化2年	1845年	6月15日	7月19日
弘化3年	1846年	6月15日	8月6日
弘化4年	1847年	6月15日	7月26日
嘉永元年	1848年	6月15日	7月15日
嘉永2年	1849年	6月15日	8月3日
嘉永3年	1850年	6月15日	7月23日
嘉永4年	1851年	6月15日	7月13日
嘉永5年	1852年	6月15日	7月31日
嘉永6年	1853年	6月15日	7月20日
嘉永7年	1854年	6月15日	7月9日
嘉永8年	1855年	6月15日	7月28日

表2 太陰暦祇園祭礼日を太陽暦置換

一五月(節句)・・・一六月朔日・・・
 一山鉾 こふらん限四柱なし

但 流引きなし一四日一五日共山曳賄町内限り

手弁当之事

一七月七夕・・・一初盆・・・一俄
 一放正会・・・一紐解・・・一歳暮・・・
 等々、まだたくさん書かれている。

過料金の額と密告者への報奨金まで決めている。こまごまと取り決めが書かれている。その中に「祇園山鉾の見送り幕(コプラン織)は4柱の山鉾に取り付けない。(展示のみ)

また、流曳きはしない。六月一四、一五日(豆田町祇園会日)とも山曳き賄い当番町内だけが弁当を作ること」とされている。

三一四、太陰暦の豆田祇園会祭礼日を太陽暦に置換

淡窓日記では、祇園会の太陰暦六月一五日前後に雨や雷があったと記載されている日が多い。また、暑くてたまらないので神輿を拝まずに帰ったなどの記述もある。現在は祭事日の変更され、太陽暦の七月二〇日過ぎの土、日曜日となっている。今でも祭事日期間中に雨や雷があるが、一日中雨が降り続く日は少ない。しかし、暑くてたまらない日は多い。ちなみに淡窓日記の期間中の太陰暦六月一五日を、現在の太陽暦に換算すると何月何日になるかを調べた。閏月がある太陰暦では季節が一ヶ月程ずれることもある。梅雨の末期であることもあり、今と季節感が異なり非常に興味深い。

三一五、日田祇園の祭礼日

淡窓日記の豆田祇園会日

豆田の祇園祭は例年、太陰暦の六月一四日と一五日に行なわれている。一五日が正祭日である。しかし、豪雨の場合は順延されていたと記録されている。

・文化一三年(一八一六年)は一四、一五日が雨だったので、一六日、一七日に順延されている。太陰暦の六月一五日は、太陽暦の七月九日になり、ま

だ梅雨が明けていなかったのでは。

・文政七年（一八二四年）は一日が雷雨だったので一六日に順延。太陰暦の六月一日は、太陽暦の七月一日になり、まだ梅雨が明けていなかったのでは。

・文政一三年（一八三〇年）は一日が雨のため一六日に順延。太陰暦の六月一日は、太陽暦の八月三日になり、台風の影響ではないか。

・弘化三年（一八四六年）は理由不明だが一五、一六日である。太陰暦の六月一日は、太陽暦の八月六日になり、台風の影響ではないか。

・嘉永七年（一八五四年）は雨で一五、一六日である。一六日も雨が降り巡行していない。太陰暦の六月一日は、太陽暦の七月九日になり、まだ梅雨が明けていなかったのでは。

過密（あつみつ）のために順延された年もある。

・天保一二年（一八四一年）は六月二七日に延期された。この年の六月二日に郡代・寺西蔵太の死を公にした。このため歌舞音曲が禁止となり祇園会が延期された。実は、前年の一月二日に没していたが、治安治政上それを伏せていた。なお、寺西郡代のお墓は岳林寺にある。

豆田の祇園の正祭日の六月一日は咸宜園の放宇日（休み）。また、淡窓は毎月一日には、官府にあいさつに行っている。

三六、日記、文書による日田祇園の祭礼日確認

三一六一、隈町の祇園会祭礼日

大原宮日記

天明八年（一七八七）

六月十日

陰天折々雨、当日より隈祇園会なり、・・・

六月十一日 雨天

隈町祇園会故日延二相成、・・・

六月十二日

朝少シ晴、終日雨天、無別条、隈祇園延、・・・

六月十三日

・外隈祇園会日延二而当日之神事、・・・

文化二年（一八〇五）

六月十一日

夜分隈町祇園会神幸あり、

天保五年（一八三四）

六月十一日 晴

隈祇園会目出度相済、

日隈文書

天明八年（一七八七）

祇園社 是者毎年六月一日祭禮仕候、・・・

森家 御廻文并願書留

文政五年（一八二二）

年恐以書付御届奉申上候

六月一日隈町竹田村祇園会祭礼定日二御座候、若雨天之節者日送りを以相勤来り申候、右為御届連印以書付奉申上候

竹田村庄屋 新兵衛

隈町年寄 三人

午六月九日

日田 御役所

隈町の祇園祭礼日と雨天の場合は日送りする旨の届出書状を、祭礼日の前日に御役所に提出していることが判る。

現在の山鉾巡行も、詳細の運行順路図と時間表を事前に作成し警察署へ提出している。併せて、警察への説明会を開き安全巡行と警察警備体制の摺りあわせを行なっている。

南高瀬庄屋日記（諸家日記二）文政八年（一八二五）
六月一日 晴天
恵良川居り、兩人共参候。

松尾家文書 申極熟談書之事

安政六年（一八五九）川原町中組

・・・市中打寄年々六月一〇日。一二両日押引相済候上。・・・

江戸時代は隈町の祇園会は太陰曆六月一〇日、六月一日（正祭）であることが分かる。

隈の祭礼日は明治になり変わっていることが次ぎの文書でわかる。

松尾家文書 山鉾約定書 川原町中組

明治二八年（一八九五）

祭礼日は旧六月一四、一五日と書かれている。

明治三二年（一八九八）

祭礼日は旧六月一四、一五日と書かれている。

日田新報

明治三四年（一九〇一）

再昨日廿九日（舊一四日）一昨三〇日（舊一五日）は例年の通り両町祇園祭
禮なりしが雨天にも拘らず・・・

明治時代になり隈町の祇園会は太陰曆六月一四日、一五日に変わり、豆田と同じ日になっている。

三一六一二、豆田町の祇園会祭礼日
享保・明和日記（諸家日記三）享保七年（一七二二）
六月一五日
祇園祭り、魚町通物踊り大当たり。

大原宮日記

天明八年（一七八七）

六月一五日 曇天

・・・豆田町祇園会ハ無滞御神幸有之候事、・・・

文化二年（一八〇五）

六月一五日

豆田町祇園会相済也、

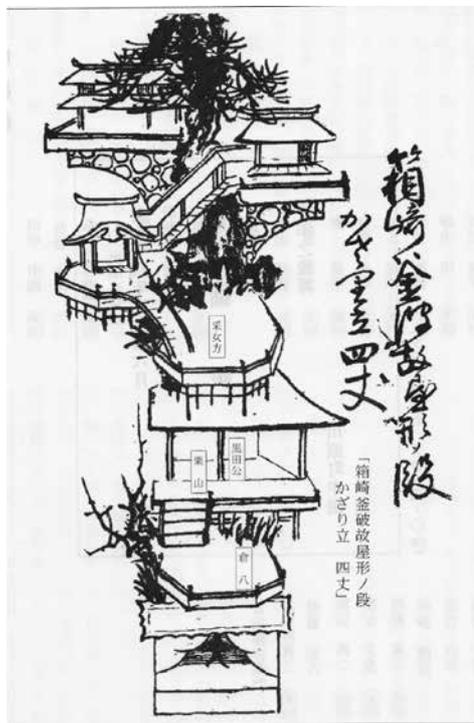


図6 川原町中組・明治18年（松尾家文書）飾り高さ四丈

天保五年（一八三四）

六月一五日 晴天

昼七ツ頃より大夕立、豆田祇園会神事有り、

江戸時代は豆田町の祇園会は太陰曆六月一四日、六月一日（正祭）であることが分かる。

三一七、祇園囃子の乗り込み演奏の開始時期

祇園囃子の歴史では「文化年間（一八〇四〜一八）に郡代の目明しであった小山徳太郎が、代官のお供で長崎に向いた折、長崎の明笛を習得し、当時の俗曲や端唄を笛にアレンジした」とある。徳太郎は慶應二年（一八六六）没。その子松吉は音曲的に優れた才能を持ち日田祇園囃子を大成させたと言われる。松吉は明治二四年（一八九一）没。

淡窓日記には祇園囃子に関する記述が全くない。しかし、淡窓の回顧録である懐舊樓筆記では、天明六年（一七八六）淡窓五歳。「祇園會二、市中ニ至リ。山車ノ高峻ニシテ。鼓吹ノ喧シキヲ見テ。心オビエテ速ニ歸レリ」とある。鼓吹とは、太鼓の鼓と笛の吹のことで、祇園祭に囃子が奏じられていたことが書かれている。一方、寛政十一年（一七九九）の懐舊樓筆記では、博多山傘と日田祇園の比較文があるが、日田の祇園囃子の事を書いていない。淡窓五歳と一八歳の時点では、日田に小山徳太郎の祇園囃子は導入されていなかった。でも囃子はあったようだ。

日記の書かれた淡窓の壮年、晩年時代は小山組の日田祇園囃子導入の創成期にあたるが、現在のように囃子方が山鉦に乗り込んで演奏していたのか。淡窓日記や江戸末の三松牛之助の「祇園會之記」（後に掲載）にも祇園囃子についての記載がない。江戸期や明治元年の山鉦図にも、山鉦に乗り込んで囃子方は描きこまれていない。山鉦に乗って演奏し始めたのはいつだろうか。祇園囃子を大成させた二代目松吉の江戸末〜明治初ではないだろうか。

松尾家文書の明治三年（一八七〇）の川原町中組の記録に、囃子方に一貫三六〇匁支払ったとの記録がある。明治九年（一八七六）、明治一八年（一八八五）にも記録あり。また、太鼓は大太鼓一個と締太鼓一個を使っていたと記録されている。太鼓二個が山鉦に載せられていたようである。大太鼓は山鉦の中で立って打つことになり、今の祇園囃子と様子が異なる。

三一八、山鉦の争い

山鉦は道幅一杯の幅で作られているため、山鉦同士の離合ができなかった。巡行途中で鉢合わせをした場合、お互いに道を譲ることなく（道を譲るといふこ

とは後退し横丁に引き入れることを意味する）争いがあった。

三一九、淡窓の苦言

天保九年戊戌（一八三八）五七歳
神輿は暮れ近くになって出た。中城に着いた時は全く夜になっていた。これでは怠慢不敬である。果たして神様は享けられるであろうか。果たして神様は享けられるであろうか。

天保十一年庚子（一八四〇）五九歳

神輿は午後四時に出発して中城に着いたときは、すでに日暮れで、山車が来たのはすでに夜の十時。ごたごたとさわいで争いになり、争いは翌日になって治まった。あ、何という怠慢だ。神様は喜んでうけられるであろうか。

嘉永三年（一八五〇）の千原家文書「申極書文事」によると、豆田町で山鉦巡行の取り決めを行なっている。

祇園会山鉦の儀、是迄挽回し方遅々いたし、夜に入り怪我人でき致すべくもはかりがたきにつき、已後は正九ツ時（二二時）通し物祇園社へ相揃え、九ツ時（二三時）山鉦押し出し申すべき事。

また、服装についても取り組めをしている。

祇園会山引き、子供は格別、大人縮緬の類相用い申すまじき事。

三一〇、祇園山鉦の建造

山鉦を町内間の輪番で建造していた。廣瀬本家のある魚町では淡窓の生涯で四回山鉦を造っている。

永山布政史料によれば、

当時川原町は竹田村の内なりしが、住民の生業風俗限と同じきを以て山鉦も毎年造りて之を献ず。次に田中町・紺屋町、隔年之を飾る。其の次は中町・我有ノ木にして此れも同じく隔年なり。第四は上横町にして町内広闊なるを以て、毎年此れを献する筈なりしが、後減じて二年に一度作る事となせり。豆田にあり

ては田町はもと市街をなさざるを以て山鉾もなかりしが、人家次第に殖えたる故毎年作るようになれり。上町は室町・平野町・八幡町三年更代なり。下町は一丁目・二丁目・三丁目更に之を作る。中城は南北二組隔年其の任に当たる。此制今にも続きて町内の一大事業たり。

豆田町の建造基数の記録文書

「祇園会之記」 三松牛之助 江戸時代後期作

牛頭天王社在豆田之西北。毎歳六月一四日至一五日。昼夜為祀。謂之祇園会。自古為山鉾。而以供神。其数四也。凡山鉾者人之所見聞也。嘗聞京師之夏祭者。其名冠於日東矣。鉾有数品供神也。或云月鉾。或云長刀鉾。或云函谷鉾。或稱白樂天。又有螭螂山。或有岩戸山之名。他略之。每鉾其長千丈。施車輪四。左右著大繩。数千人曳之云矣。

今我豆田之鉾者此之雖小。倣昔時和漢邦家之故事。巨象古戰場之図。各雖異其工。而大抵皆設城郭之状。為虹橋之状。或有廻廊宮殿之飾。鉤心闔角。極盡美麗。又旁設山巖之状。瀑布飛流。恰如布練。其善足以稱。其美足以觀。其鉾長三丈。施車輪四。左右設二大木如轆。郡兒登其上。以團扇揮揚之。十五日。迂神輿行幸於東南旅所之時。四鉾隨之。家々亦童男童女從。蒙甲冑。或画眉目。随神輿。而為行伍。謂之通物。行幸之道。有一橋。四鉾皆過之。而甚往難於旅所。然容易不能過。故健夫誇力之徒各爭進。而振勇極力。漸上石橋之中央。其聲轟然。過其中央。其速如箭也。其声轆々。如雷霆之驚。直達旅所。其勢殆欲覆者数矣。然皆無有覆。此曳山鉾之所難也。夫日田之為為地也。雖偏小。然有此盛観。誠非昇平之一樂事乎。難然凡事積年之久。則易變。則唯恐。其廟壞祀廢。是以余備記之盛事。以遺後世人云々。

三松牛 百拝

(訳) 牛頭天王社(祇園社)は、豆田の西北に在り。毎歳六月

一四日より一五日に至る昼夜祀りをなす。之を祇園会という。古より山鉾をなす。而して以て神に供す。其の数四なり。凡そ山鉾は人の見聞する所なり。嘗て聞く京師の夏祭りは、その名日東に於いて冠たり。鉾に数品有りて神に供するなり。或は月鉾と云い、或は長刀鉾と云い、或は函谷鉾と云い、或は白樂天と稱す。又螭螂山あり。或は岩戸山の名あり。他は之を略す。鉾毎にその長さ一〇丈、車輪四を施す。左右に大繩を着く。数千人にて之を曳くと云う。

今、我が豆田の鉾は、之に比すれば小なりと雖も、昔時の

和漢邦家の故事に倣い、且つ古戦場の図を象る。各々その工異ると雖も、しかし大抵皆城郭の状を設け、虹橋の状をなす。或は廻廊宮殿の飾りあり。鉤心闔角。極めて美麗をつくす。又傍らに山巖の状を設く。瀑布飛流。恰も布練の如し。その善きこと以て稱するに足り、その美なること以て觀るに足りるなり。その鉾の長さ三丈、車輪四を施す。左右に二大木を設くること轆の如し。群兒その上に登り、団扇を以て之を揮揚す。一五日。神輿、東南の旅所に行幸の時、四鉾之に隨う。家々もまた童男童女を従わしむ。甲冑を蒙り、或は眉目を描き、神輿に隨う。しかして行伍となす。之を通物(とおしもん)と謂う。行幸の道に、一の石橋あり。四鉾みな之を過ぐ。しかして甚だ旅所に行き難し。しかして容易に過ぐることを能わず。故に健夫力を誇り、之の徒各々争て進む。しかして勇を振つて力を極む。漸く石橋の中央に上がる。その声轟然、その中央を過ぎる。その速きこと箭(矢)の如きなり。その声轆々、雷霆の轟くが如し。直ちに旅所に達す。その勢い殆ど覆らんと欲することしばしばなり。然に曾つて覆らんこと有る無し。この山鉾曳きの難所なり。夫れ日田の地たるや、偏小と雖も、然にこの盛観あり。誠に昇平の一樂事にあらざるか。然りと雖も凡そ事積年之れ久し。則ち変り易し。則ち唯だ恐る、その廟の壞れ祀りの廢れんことを。これを以て余は之の盛事を備え記して、以て後世の人に伝えんのみ。

三松牛 百拝

* 三松牛之助は豆田町年寄り、順平の子なり。頗る才氣あり。讀書を好めり。文政一二年一八二九年に入門。(懷舊樓筆記より)

松尾家文書 申極書 文政二年(二八一九)隈・川原町中組

山鉾之儀、是迄之通三組で隔年。

(訳) 川原町内の三組(上、中、下)が隔年で山鉾を造る。

松尾家文書 祇園会山鉾造立並押曳三ヶ年試熟談申極書之事 弘化四年
(二八四七) 隈・川原町中組

山鉾造り立方之儀は、川原町を三組二分ケ、順番を以。老組限り造り立、押曳之儀は、町中一統二致来候処。・・・

(訳) 山鉾は川原町を三組に分けて順番に造る。一組だけが建造にあたる。山鉾の巡行は町内全員で協力して行なう。・・・

江戸時代後期、隈町は毎年三〜四基の山鉾を建造していた。豆田町は毎年四基の山鉾を建造していた。それに加えて、淡窓日記にあるように、廣瀬家のある魚町も約二〇年に一回の頻度で建造していた。

現在(二〇一二年)は隈・竹田地区は四基繰り出す。大和町、隈町、川原町、若宮町の四町が毎年各一基建造している。

豆田地区は四基繰り出す。上町、下町、中城町、港町の四町が毎年各一基建造している。

三一一、淡窓が見た豆田祇園山鉾の基数

淡窓が観た豆田の山鉾の基数(淡窓日記に記載あり)

文政一一年戊子(一八二八年) 四七歳・・・二基

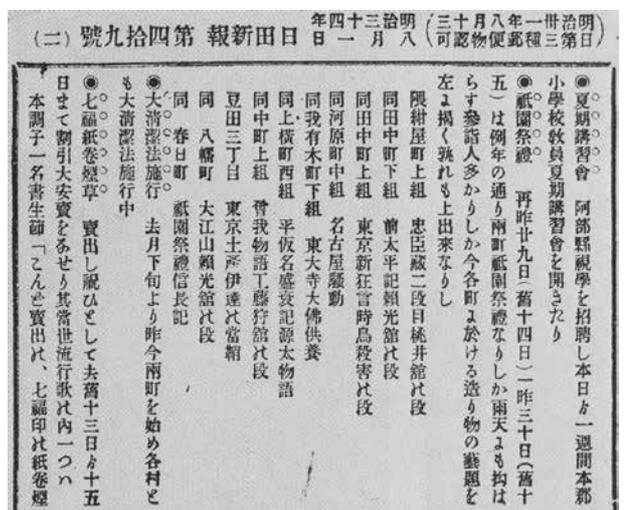
天保一三年壬寅(一八四二年) 六一歳・・・二基

弘化三年丙午(一八四六年) 六五歳・・・一基

嘉永三年庚戌(一八五〇年) 六九歳・・・二基

嘉永六年癸丑(一八五三年) 七二歳・・・三基

なお、明治二八年(一八九五)の松尾家文書では、隈地区で山鉾四基(川原町、紺屋町、我有木町、上横町)と笠鉾(川原町、隈町、隈町)三基の合計七基が建



明治34年 日田新報

造されている。笠鉾はこの年から新設され巡行の順番に組み入れたと記されている。

明治三四年(一九〇一)の日田新報によると、現在より多い一〇基の山鉾と笠鉾が建造されている。その内訳は隈が山鉾と笠鉾合わせて七基(紺屋町上組、田中町上組、田中町下組、川原町中組、我有木町下組、上横町西組、中町上組)と、豆田が山鉾三基(豆田三丁目、八幡町、春日町(中城))。

明治後期の川原町中組の記録では、山鉾の高さは二丈(約六m)。電線架線で山鉾が低くなっている。

三一二、淡窓は隈祇園山鉾を見たか

淡窓の時代の祭礼日は豆田が六月一四、一五、一六日、隈が六月一〇、一一日なので、山鉾巡行の参加者でも両方の祭礼を観る事ができた。しかし、淡窓は三三歳から七五歳まで日記をしたためているが、日記に隈の山鉾を観たとか隈・八坂神社を参拝したといった記載はない。また、三三歳以前の事については、回顧録として

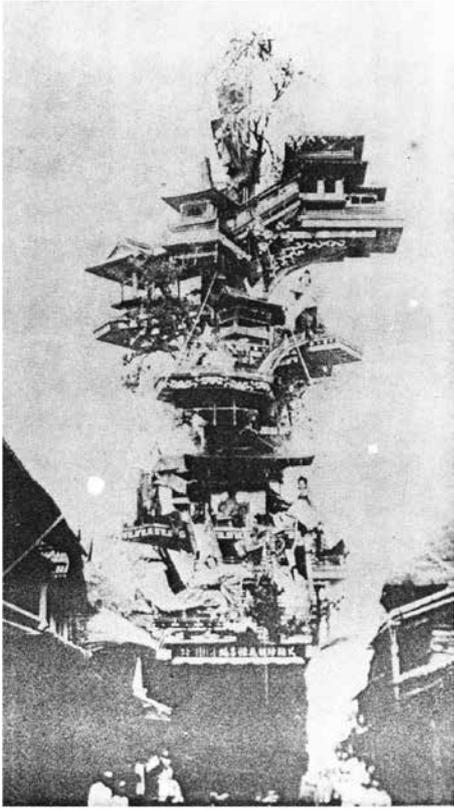


図8 明治22年（日田祇園囃子より）



図7 明治20年（日田祇園囃子より）

懐舊樓筆記を残しているが、ここにも隈の祇園を観たという記載はない。従って、淡窓は隈の山鉾を観ていない可能性が強い。
氏神と氏子という関係からみれば、同格の他地区の神社の祭りを観たり参拝したりする理由はない。淡窓時代の豆田・隈の人たちはそのように思っていたのではないか。



図9 明治中期 隈の辺り（写真集日田）

三一三、明治三三年電線架設前の祇園山鉾

写真から分かることは、

- ・高さは山鉾本体が一五m、幟を含めると二〇mほど。
- ・搭載している人形の数が多い。（五〜六体）
- ・不安定かもしれないが、上部が横に拡がった姿である。
- ・地上から舞台額までの高さが高い。
- ・山鉾が高いので、転倒防止の綱を四方に張っている。
- ・お揃いの格好をしているようだが、法被は着ていない。



図10 日田祇園会館展示・模型 明治36年作
1/5の模型 明治33年電線架設以前の山鉾

四、おわりに

廣瀬淡窓日記の祇園に関する部分の全てを抜粋し記載した。この部分は、日田の祇園を語る上での基礎資料になることを望む。

これ以降の章は、淡窓日記を素材にして日田祇園山鉾についてさまざまな考察をした。また、祇園山鉾の江戸時代の絵と明治時代の写真を挿入し、淡窓の時代の日田祇園山鉾が、現在の山鉾と較べていかに盛大にして豪華絢爛だったかが想像できるようにした。

この豪華な山鉾を観ていた淡窓の日記は少し淡白で事務的過ぎるように思う。但し、祇園山鉾について吟じている漢詩は山鉾に心を動かされている様子が伝わってくる。

願わくば、豆田と隈に昔と同じ高さの（山鉾本体一五m、幟込みで二〇m）山鉾を一基づつ再現したいものだ。この山鉾は曳かなくてよい。豆田と隈の町並に溶け込む外観・意匠を施した収納庫に保管し、常時、観光客に見てもらえるようにしたい。これは、国指定の日田祇園曳山行事の本来の山鉾の姿を復元新調する事業である。宗教行事ではなく地域振興のための観光資源として活用する事業でもある。勿論、市県協同で建造して頂きたい。

終わりに、日田祇園山鉾が、今後も皆から愛される祭礼であり続けることを祈りつつ筆を置く。

参考資料

- 1、増補 淡窓全集 上・中・下 一九七一年復刻 日田郡教育界 思文閣
- 2、廣瀬淡窓日記 一一九八年 井上源吾 葦書房
- 3、廣瀬淡窓日記 二〇四 二〇〇五年 井上源吾 作弦書房
- 4、天領日田の文化財 一九八四年 染谷多喜男、段上達雄 大分県教育委員会
- 5、日田市郷土史料・大原宮日記 一九八一年 高倉芳男 日田市教育委員会
- 6、日田市郷土史料・大原宮日記二 一九八二年 高倉芳男 日田市教育委員会
- 7、豊後日田 永山布政史料 上巻 一九三六年 千原豊太 武石繁次
- 8、日田祇園祭禮記 一九九一年 田中 晃 秋風庵
- 9、日田祇園祭禮記 一九六九年 田中 晃 自費出版
- 10、日田市郷土史料・諸家日記二 一九七三年 高倉芳男 日田市教育委員会
- 11、日田市郷土史料・諸家日記三 一九七四年 高倉芳男 日田市教育委員会
- 12、日田市郷土史料・御廻文并願書留 二〇〇五年 岩波光夫 日田市教育委員会
- 13、日田御役所から日田縣 一九六九年 広瀬恒太
- 14、日田市郷土史料・御廻文并差上書附留五 一九九五年 田中 晃 日田市教育委員会
- 15、豊西説話 一八八九年 活字出版 森 春樹
- 16、日田市史 一九九〇年 日田市
- 17、日田郷土史料・申極御仕置集 一九七一年 高倉芳男 日田市教育委員会
- 18、ふるさとの思い出写真集・日田 一九八一年 広瀬恒太 国書刊行会
- 19、日田祇園山鉾祭礼関係資料集 二〇〇三年 後藤重巳
日田祇園山鉾振興会
- 20、日田祇園囃子 一九六七年 池田範六 日田市観光協会

後記

淡窓の生母は、うきは市吉井の瑞高山東光寺の七世住職・後藤恒龍の娘「ゆい」である。

東光寺は久留米・有馬藩の城内にある慈恩院祇園寺の末寺となり、神仏混交の江戸時代は、祇園社も合わせて祀っていた。東光寺には寺子屋が開かれ、多くの吉井商人の子弟が学んでいた。明治維新の廃仏毀釈で東光寺は廃寺となり、祇園社は素戔鳴神社と改称し残った。

現在のうきは市吉井・素戔鳴神社は大きな神社で、東光寺が大きかったことを偲ばせる。吉井は今も祇園山鉦の祭りを行なっていて、祇園囃子は日田の小山組の指導を受けたものを演奏している。

このような背景をもった生母に育てられた淡窓が、私塾の咸宜園を開いたり、祇園会が好きであったことは、自然の成り行きであったであろう。

平成二五年三月二七日（二〇一三）完

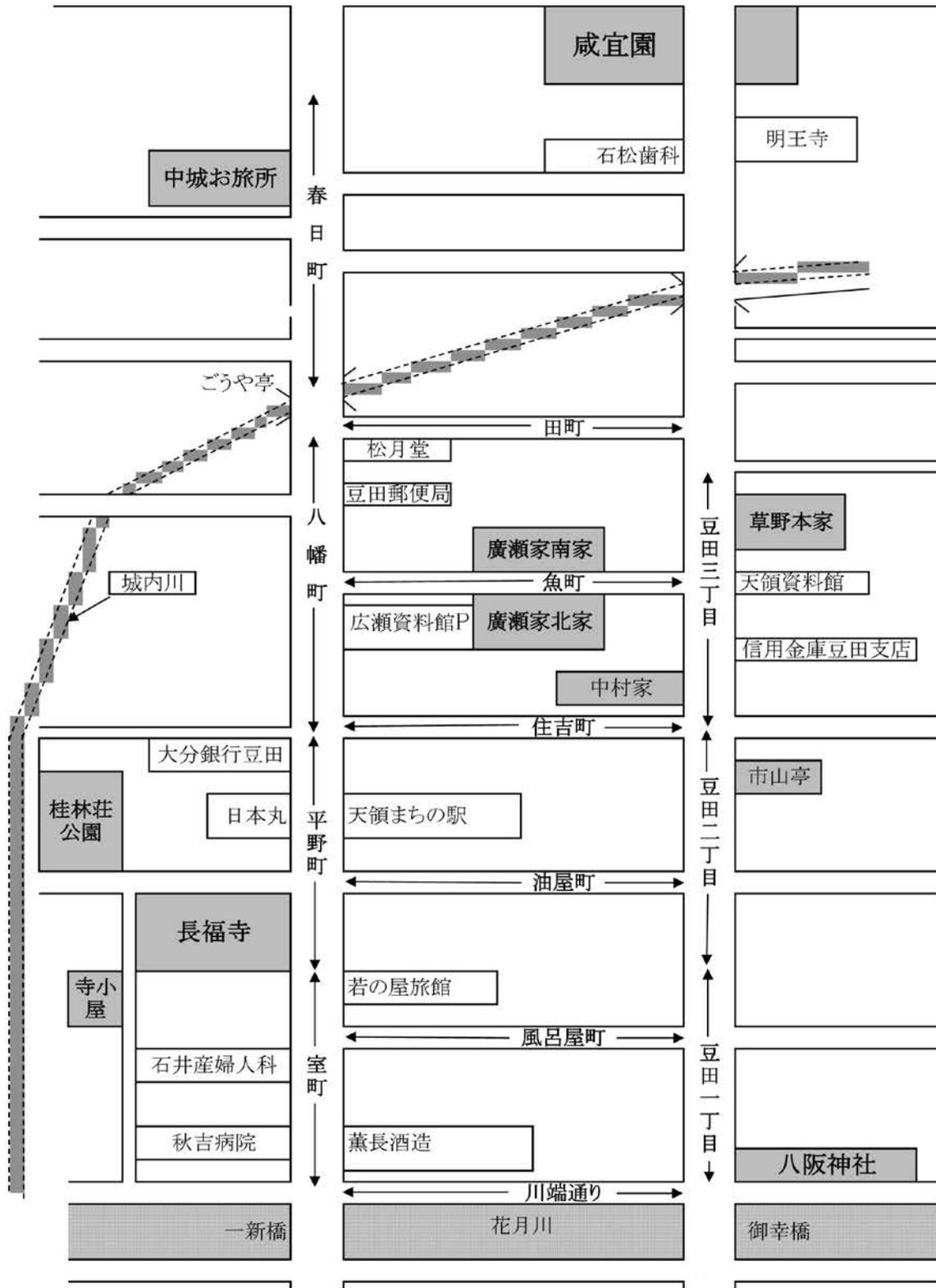
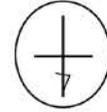
著者 梅山秀人

昭和三十三年一月二五日生

日田市豆田町三・一五

淡窓日記時代の豆田地図(町名、寺社、塾など)

豆田の道は江戸時代から変わっていない。



「中島子玉の日本史」「若き日の松下筑陰」

佐藤 巧

江戸時代、豊後国佐伯藩には「四教堂」と称する藩校があった。私たちは地域の誇るべき佐伯の教育のすばらしさを明らかにするため、藩校の名を冠した「四教堂塾」を立ち上げた。塾では「四教堂」に関係する人物を調べ、文芸作品（和本）として作成する活動に現在も取り組んでいる。作品の中で用いた挿絵は、すべてオリジナルの切り絵であり、市内小学生にも指導している。

今回の受賞作品は、四教堂の初代教授で、廣瀬淡窓が師事した松下筑陰（号は西洋）と佐伯藩士で淡窓門下の第一の英才と賞された中島子玉に関するものである。本稿では、紙面の都合上、作品の全てを掲載することができなかつたため、以下にその概要を示してその代わりとしたい。

※「」内は作品名

「中島子玉の日本史」（全一〇三頁）

子玉は咸宜園で漢学を学んだ後、幕府の昌平坂学問所に進んだ人物で後に四教堂の教授となった。作品では刊本の『日本詠史新樂府』と『東瀛詩選』に掲載された子玉の漢詩や淡窓が子玉のことを詠んだ漢詩などを中心にとまとめたものである。本掲載では前者を省略した。

「中島子玉の人物志」（全一六頁）

子玉と廣瀬淡窓の関係についてまとめた人物志。今回、掲載なし。

「若き日の松下筑陰」（全五八頁）

久留米の儒学者・松下筑陰は、若き日に参加した詩会で会友が詠んだ漢詩を編集して『窃窺編』としてまとめた。また、その会に招かれた同郷の宝月和尚（日田長福寺住職）や佐伯の僧で咸宜園門下生の小栗憲一について紹介した文も所収した。今回の掲載では、目次は全体を記したが作品の後半は一部省略した。

「松下筑陰の人物志」（全一〇頁）

松下筑陰と佐伯との関わりを中心に記述した人物志。今回、掲載なし。

日本詠史新樂府

佐伯藩校四教堂

中島子玉の日本史

日本詠史新樂府
 豊后 海棠窩主人著
 天窟闔
 天窟闔。六合黑。天窟開。六合白。一開一闔。唯下日懸。
 將。不。落。餘。光。分。照。六。大。洲。何。况。劉。興。羸。蹶。國。
 一。號。大。雲。貴。伊。排。諾。長。女。御。於。高。天。原。
 弟。素。蓋。鳴。尊。勇。悍。害。物。太。神。避。入。天。石。窟。闔。
 出。六。合。之。中。不。辨。晝。夜。於。是。羸。在。會。天。安。河。
 原。奏。樂。天。鈿。女。命。為。優。於。宮。
 勝。戶。籠。馬。手。太。力。雄。命。
 復。明。矣。六。木。洲。一。日。
 六。日。西。北。尼。葉。刺。於。
 六。日。北。亞。墨。刺。於。

現代語訳版
 編集・切絵
 さとうたくみ

2012 四教堂塾



- 1 -

東瀛詩選序
 日本之興衰中土同文字也由來久矣在唐宋之世彼
 邦人士已有將屢中邦姓名文采如東田仲滿路本吉
 其人者況至今日而輻輳之使文字中外交遊唐宋時
 之隔絕不通者可比乎余輩者曾見其國人物或所之
 論語復安并仲平之管子著詩讀而喜之嗣後宋國諸
 君子不我遐棄每至江浙者必留我於其中春在堂或
 湖上春樓遂有以吾國人而撰詩百數十家請余選定
 者余哀其孤亦足以任其假以與海外諸君信文字
 之係未始非東年之一舉也其國文運摩挲於天運處於
 元係而天運開之不可得而見可見者自元和寬永
 始在中國則有明萬曆天啟時也自是至於今垂三百
 年人材輩出詩聲日盛其始稱揚聲名者有汪汝物
 杜棟出我時方學慨然以復古為教遂使家有法漢之
 集人抱余洲之書詞藻高翔風骨重其氣與有明之子
 是皆爾雅得之既久而其氣益壯其文益出則又
 變而為清麗靈法遠景物以厚其氣而清其氣
 遠而後可及使人讀之有愈以愈高之歎余就其有

大清光緒九年歲在
 癸未春三月
 衡陽彭玉麟
 書

東瀛詩選
 四十卷補
 遺四卷

東瀛詩選序
 以上復刻版の佐野正巳「解題」より多く引用し
 たが、郷土作家の作品を是非、佐伯市民に紹介した
 たく、抜粋して佐伯史談会の木村博先生に漢詩解
 説を依頼した。約二年におよぶ奮闘の結果、中島子
 玉の三四首と秋月橋門の二首、加えて子玉や佐伯と
 関係のある広瀬淡窓の十二首を編集した。
 なお、先学、後学の叱責訂正を乞う。挿絵には「山
 水留作画帖」より適宜配したが、漢詩作品とは何ら
 関係のないものである。
 平成二十四年十一月 さとうたくみ

まえがき
 『東瀛詩選』は明治十五年（一八八二）岸田吟香が
 日本人の詩集百数十家をもつて、中国清朝末期の
 大学者俞樾（俞樾）にその選定を依頼したといふ。
 東瀛とは東の大海に浮かぶ日本のことである。
 俞樾は清の徳清（浙江省）の人で、河南学政提督と
 なり蘇州府で経学を治め、杭州の経精舎の主講
 を勤めていた。病氣療養中であつた俞樾は日中文化
 交流のために、あえて依頼を受けたといふ。晩年は曲
 園居士と号し、光緒三二年（一九〇六）八六才で歿
 した。
 俞樾が選定した「詩選」には、日本古今の作家五
 五〇名と漢詩約五〇〇首が採択されている。特に
 多いのは広瀬旭窓一七五首、釈六如一二三首、官茶
 山一二一首、梁川星嶽一〇一首、広瀬淡窓九二首
 などである。中でも中島子玉三四首、秋月橋門二首
 が含まれ、二人とも淡窓門下で佐伯藩校四教堂の
 教授であつた。
 本書は有名なわりに案外入手困難で、昭和五六
 年に佐野正巳編の復刻版が汲古書院より刊行され
 た。これによつて大学教授など研究者の関心が高まら
 ったのらう。故郷生熊巖先生は昭和五七年の大分合
 同新聞に、佐伯の文人秋室と子玉を連載され、その
 冒頭に「九大教授や慶応大学の教授がわざわざ佐
 伯まで調べに來られる目的は、中島子玉なのである。」
 と書き残している。

- 2 -

もくじ

(作者別通し番号とページ)

中島子玉	4
① 冬夜 一元敵に奇す	5
② 夏日	5
③ 夜歸る	6
④ 雲華上人に聞し其の談 「富山の勝」を聴き賦して呈す	6
⑤ 小竹郵便の途中	8
⑥ 専念寺	8
⑦ 関長 聊宅に寓す	9
⑧ 片山完吉の新居を訪ぬ	10
⑨ 寓を叔容家に重ぬ	10
⑩ 秋 月	11
⑪ 陶靖節の図に題す	11
⑫ 桃源図に題す	12
⑬ 戯れに三聖菩薩図に題す	12
⑭ 病 婦	13
⑮ 雑 詠	14
⑯ 画に題す	14
⑰ 海棠窩集 諸士に同賦す	15
⑱ 木刀村に抵る	16
⑲ 龍川舟遊	16
⑳ 夜歸る	17
㉑ 雨後玉亀山荘に遊ぶ	18
㉒ 来京後始めて鏡を覽る	18
⑳ 李長吉を夢む	19
㉓ 芳 野	20
広瀬 健	21
① 同社五首を記す	21
小関長 卿は柚木村の人	21
麻生彦国の居は龍門寺瀑布に近し	22
兄玉有台の祖伸英は蘭・と号す	22
劉君鳳は平川村の人	23
中島子玉の家は南海に近し	23
① 小関長 卿・中島子玉へ 論詩を贈る	24
③ 佐野君朗・中島子玉と東村散步 歸りて同賦す	26
④ 子玉の彦山紀行を読み賦して贈る	26
⑤ 懷旧四首	27
⑥ 聲年初めて字を識る	27
清絶長溪の路	27
時枝に友を尋ね宿る	28
佐伯は国の南嶺	28
秋月 龍	29
① 漁夫の図	29
② 春雨乍晴れ舟を龍溪に泛ぶ	29
〔参考〕『東瀛詩選』の遺者愈戀	30

中島大賚
子玉は官儒官主として政を学ぶ。僅かに三十有四にして卒す。臨終に一絶句を口占して曰く
高情自ら世人と違ふ。我は是れ南豊の一布衣。
三十六鱗猶お二を欠く。今朝 天上に龍と化して飛ぶ。
亦奇士なり。誌未だ刊刻せずして止む。写本 字迹有り。弁すべからざる者多し。故に録する所、
多かる無し。其の佳句 圖より此に尽くさす。



愛琴堂全集



海棠窩蔵書



日本詠史続楽譜

中島子玉



中島子玉の肖像

○中島子玉の略歴

(一八〇一—一八三四)

本名は大賚。字は子玉。別の字は如玉。号は米華。海棠主人。古香外史。豊後国佐伯藩の徒士中島幹右衛門の長子。享和元年佐伯城下鉄砲町に生まれる。幼名盛太郎。後に増太。十六才、藩命により広瀬淡窓に入門。代講、副監をつとめる。額山陽から文才を絶賛される。二十五才、江戸昌平齋に入る。名作を発表。文名上がる。二十五才、藩校四教堂教授。子弟多数を教育。天保五年三十四才、佐伯で病没。淡窓はその死を大いに悼んだ。墓碑(淡窓撰)は佐伯城下神護寺通り久成寺境内にある。

(著書) 愛琴堂全集七巻、米華遺稿、日本新楽府、未稿、雜書多数。

①冬夜奇元猷

朔風生残夜 冬夜元猷に寄す
朔風 残夜に生ず
推爐然死灰 爐を擁して死灰を燃やす
定知非是雪 定めて知る是れ雪に非ざるを
不見子猷来 見ず子猷の来るを

夜ふけて北風が起り、寒さに炬を抱えて暖をとる。外は雪でもないのに、子猷は姿を現さない。
(子猷の安否消息を案ずる心情。)

②夏日

茶竈烟濃一院香 夏 夏 茶竈 烟濃かにして一院香し
嘉微靡日洩斜光 暮微かにして靡に日斜光を漏らす
池塘芳草成春夢 池塘の芳草は春の夢を成し
殿閣薰風送晚凉 殿閣の薰風は晩涼を送る
得病因詩猶作詠 病を得て詩に因り猶お詠を作し
鎖閉除睡更無方 閑を鎖すに睡を除けば更に方無し
樽中幸有忘憂物 樽中 幸いに憂を忘るる物有り
喚取隣翁共舉觴 隣の翁を喚取して共に觴を挙ぐ

院内は茶の香り満ち、夏の夕日が斜めに射し、池の堤に芳草はまだ香つく風が心地よい。病む身にも詩作に耽り、暇有れば気ままに眠る。樽中に酒をうつけては隣の老翁を呼んで盃をあげる。



子猷 書聖王羲之の子、王徽之の兄、王徽之の子(あざな)。書家。王子猷雪夜に乘じて山陰に戴安道を訪ひし故事。こゝは元猷を指す。
朔風 きたかぜ。北風。朔吹。
残夜 夜明け。しのめ。
死灰 火気なきはい。転じて、人の心の無欲にしてる利に冷ややかなるとえ。

茶竈 ちやがま。茶を沸かす釜。
池塘 池の堤。池城。池。
芳草 かおりのよい草花。
殿閣 おたやかな初夏の風。青葉の香を吹き送る風。南風。和風。
晚凉 夕方のすずしさ。
閑のどか。のんびりしている。ひま。
睡 ねむる。いむわりする。すわったままねむる。「仮睡」。ねむり。床につく。
方 向かう所。でたて。やりかた。
喚取 よびとめる。

③夜歸

残星低山光滅明 夜歸る
深夜荒野断人行 深夜の荒野 人行断つ
獨樹如人石如虎 獨樹人の如く 石虎の如く
樹杪怪禽忽一聲 樹杪怪禽 忽ち一声

夜明けの星がまたたき、寒村の深夜は道行く人もない。木立の樹は人に見えて気味悪く、すわつた石は虎かと思えて恐ろしい。不意に森の梢の不気味な怪鳥の声を冷やした。

①謁雲華上人聽其談富山勝賦呈

吾久慕道人 吾久しく道人を慕い
笑談入夢想 笑談 夢想に入る
吾嘗聽富山 吾嘗て富山を聴き
心情寄圖象 心情 図象に寄す
夢間圖上終恍惚 夢間圖上 終に恍惚
何殊隔靴爬痒 何ぞ隔靴痒癢を爬くに殊ならん
維歲戊寅秋之殘 維れの歲 戊寅の秋の殘
孤錫一留隈水邊 孤錫一たび隈水の辺に留む



残星 夜明けの空に残っている星。
滅明 灯火などの暗くなつたりすること。また、遠くにある物などが見えかくれること。明滅。
荒野 荒れた村。
人行 人の往来。
樹杪 木のこすえ。木の先。

雲華上人 竹田の万徳寺に生まれ、中津の正行寺の養子に入る。東本願寺の講師を務め全国を行脚。詩書画の才能を発揮した。
富山勝 富士山の絶景。
道人 道を身につけた人。神仙の道を得た人。道教を修めた人。俗世間をのがれた人。仏門にはいった人。
図象 (画像) 絵に書いた肖像。画像。
恍惚 ある物事に心を奪われて我を忘れる様子。うつりする様子。
隔靴癢癢 (隔靴搔癢) 靴を磨って、かゆい所をかく、はがゆいこと。
戊寅 文政元年(一八一八)。
錫 道士や僧の使うつえの一種。錫杖。
孤錫 ひとりごつの錫。ひとり道の士。



呻支荷為衣蕙為帶
 容姿瀟灑出泥運
 自說無心亦好奇
 單身曾到富嶽嶺
 足踏八架玉芙蓉
 手摩星辰相周旋
 石室雲洞探已遍
 神秘驅入五字篇
 寫之絶頂千秋雪
 長與嶽色爭輝妍
 道人奇絶山奇絶
 吾取兩奇亦奇縁
 君不見
 蚌口鵝鶩互爭勝
 漁人坐觀兩得旃

呻支荷もて衣と為し蕙もて帯と為し
 容姿瀟灑にして泥運より出ず
 自ら無心を説くも亦好奇にして
 單身曾て富嶽の嶺に到る
 足は八架玉芙蓉を踏み
 手は星辰相周旋するを摩す
 石室・雲洞・探ることに遍く
 神秘・五字篇に驅入す
 之れを写す絶頂は千秋の雪
 長えに嶽色と輝妍を争う
 道人奇絶・山奇絶にして
 吾兩奇を収むるも亦奇縁なり
 君見ずや
 蚌口鵝鶩互いに勝を争い
 漁人坐觀して兩つながら旃を得たるを

雲華上人の話につどりさせられた。以前富士の絶景を画像で見て心を奪われたが今一の感があった。雲華上人は隈川にしばらく居たが、風流な姿となり、無心の境地で富士山に登った。絶景の頂に立ち、星にも手がとくほど、奥深い神秘の詩も成った。千年の雪と山嶽の姿のみことな美。上人も、山も、自分も思ひがけない、ふしぎなめずらしさに出会えたとであった。思ひもかけず「漁夫の利」を得た幸いであろうか。



⑤ 小竹郵途中
 石田拳 確畦隴開
 西山北來至此別
 一水貫中三十里
 直浮山影西南折
 前人右渡後人左
 臨岸民居互出沒
 忽見水激兩岸狹
 東家西家炊烟結
 奇境不知應接忙
 風壤自與塵寰別
 卻恨詩中無丹青
 欲揮彩毫慙摩詰

小竹郵の途中
 石田拳・畦隴開き
 西山北來 此に至つて別る
 一水中を貫く三十里
 直に山影を浮かべて西南に折る
 前人右に渡り後人左す
 岸に臨む民居互に出沒し
 忽ち見る水激しく兩岸狭く
 東家西家 炊烟結ぶ
 奇境知らず應接忙しく
 風壤自ら塵寰と別る
 却つて詩中丹青無きを恨み
 彩毫を揮わんと欲すれども摩詰を慙す

⑥ 專念寺
 遙聽鐘聲出薛蘿
 昇天橋畔路盤陀

專念寺 日田
 薛蘿 かずら。つる草の一種。転じて隱者の衣服。また、住居。
 盤陀 石のわだかまつているさま。馬の鞍。

山にも畑にも岩石が多い中を、一つの川が山を映して遠くへ走る。道行く人が右往し左往する。岸の家が不揃いに狭く、水がはげしく流れ、炊煙が昇つている。珍しい姿にみれば俗界とのちがいがいひかれる。この風景は絵の具を使う必要はない。摩詰(山水画の名手)に任せれば充分である。

春深隴麥初藏雉
雨足溪頭已聚鷓
出戸茶烟當竹斷
捲簾山色入樓多
請君借與三弓地
通世築成安樂窩

隴 ながさか
雨足 雨のあふり
出戸 出でた
捲簾 せきり
請君 お願い
通世 とうせい
築成 たくわ

春深くして隴麦 初めて堆を蔵し
雨足りて溪頭 已に鷓を聚む
戸を出れば茶烟 竹に当たつて断ち
簾を捲けば山色 楼に入りて多し
君に請う三弓の地を借与せば
世を通して安楽の窩を築成せん
か。別荘。

⑦ 寓關長卿宅

限上分襟夢一場
豈圖鷄黍會君堂
談多昨日連今日
情熟他鄉似故鄉
老樹半沾春雨細
殘花未落晚風香
芸窗相對繡新著
喜鵲聲喧繞柳塘

日田の地で別れて久しく、いま君と会食する。故郷に帰つた感じ、春雨に残花も香る。本を開けば柳の土手に
鵲がしきりに鳴いている。

關長卿宅に寓す

限上 襟を分かつて夢一場
豈 豈図らんや鷄黍君が堂に會す
談多 談多くして昨日今日に連なり
情熟 他郷 故郷に似たり
老樹 老樹半ば沾い春雨細に
殘花 殘花未だ落ちず晚風香し
芸窓 芸窓相對して新著を繡けば
鵲聲 喜鵲聲 柳塘を繞る

關長卿 日田郡柚木村醫師小園敦球の子。秋月書院 加筆婦愛の養子となる。通稱 号を長卿。広瀬 窓門 人 淡窓五才子の筆頭に挙げられる。鷄黍 にわつりを殺してあつものを作り、さびの飯を、たく、人を接待すること。客をこころからもてなすこと。散り残つた花。色香のうせた花。

晚風 夕暮れの風
香 か。かおり。におい。こうばい。
芸窓 技芸のまど。
鵲聲 カササキの声。
柳塘 やなぎのはえているつみ。
柳堤。



⑧ 訪方山完吾新居

案上紛綸書冊推
數楹新築向江開
催詩雨趁鳴鳩至
載酒人先宿燕來
筍綠初為新運竹
石青猶帶舊山苔
南軒話罷還高枕
一榻風清夢蟻槐

机上に書物が重なつて新築完成。詩を作り、酒が運ばれて人も集まつてきた。竹の子も伸び、石の苔も青い。さて一眠りして楽しい夢でも見させてもらおう。



方山完吾の新居を訪ぬ

案上 紛綸 書冊を積み
數楹 新築 江に向つて開く
詩を催せば雨を趁うて鳴鳩 至り
酒を載え人先ず宿れば燕來たる。
筍 緑 初めて新運の竹と為り
石青 猶わ旧山の苔を帯ぶ
南軒 話罷んで高枕に還り
一榻 風清し 蟻槐の夢

⑨ 寓重叔容家

倦枕常先鷓鴣起
偏知客夜入秋長
園丁汲水塚為井
溪女採菱盤作航
土俗稍因留滯熟
鄉情頗為戲嬉忘
男兒自抱桑蓬志
休道萊衣負北堂

寓を叔容家に重ぬ
枕に倦んで常に鷓鴣に先じて起き
偏えに知る客夜 秋長に入るを
園丁 水を汲んで塚を井と為し
溪女 菱を採れば盤航を作す
土俗 稍留滯に因りて熟し
郷情 頗る戲嬉を為して忘る
男兒 自ら桑蓬の志を抱く
休道を休めよ萊衣北堂に負つて

叔容家 知人宅。
鷓鴣 からすとかささぎ。
客夜 旅の夜。
園丁 庭また畑の作業をするために雇われている人。
留滯 ことまり、とどこおる。停滯。
桑蓬の志 男子が四方に雄々しく活躍しようとする志。
萊衣 老萊子が五色の衣を着て、老親の心をなぐさめたという。その衣。
北堂 主婦の居室。堂（表座敷の北にある）。主婦。母。母堂。劇の中の位牌を置く所。

朝寝坊をして起きる。すっかり秋の夜長の頃となつた。圍丁は水を汲み、妻取り女は仕事をほじめる。その土地に逗留して故里も忘れがらなくなつたか。だが男子は立身の夢あり、老親をなぐさめるに尽きるにはあらず。他郷に居て自らを励ます。

⑩ 秋月

秋月

青松如帶路趨東

青松帯の如く 路東に趨き

秋色遙分香露中

秋色遙かに分つ香露の中

細雨隔山來不得

細雨山を隔てて來り得ず

斜陽映作一條虹

斜陽映し作す一條の虹

月は空に、松林が遙かに霞の彼方にうつすらと延びている。細い秋雨は山の向こうに、折から夕陽が一すじ虹を映している。

⑪ 題陶靖節圖

陶靖節の圖に題す

不愧鳥紗巾上天

鳥に愧じず紗巾もて天に上るを

高風猶入畫中傳

高風 猶お畫中に入りて伝う

伯牙絶後無人繼

伯牙絶後 人の繼ぐ無し

休怪先生琴没絃

怪しむを休めよ先生 琴 絃を没す

うすい絹頭巾で天のぼる。みことなうかく、伯牙の絶絃以後、誰も続かない。すくられたせせう、守るべきみさお、守るべきすみちみち。



⑫ 題桃源圖

桃源圖に題す

咸陽宮殿已爲灰

咸陽宮 殿已に灰と爲り

徐福樓船何日回

徐福の樓船何れの日にか回る

咫尺桃源求不得

咫尺に桃源求むれども得ず

笑他辛苦問蓬萊

他の辛苦を笑つて蓬萊を問う

秦の都咸陽亡び、始皇帝の命令で不老不死の薬を求めた徐福はついに帰らず。理想郷はすぐそこにはない。仙人の住む別天地はどこにもなかった。

⑬ 戲題三聖嘗醞圖

戲れに三聖嘗醞圖に題す

佛云醞味甘

仏は醞味を甘しと云い

老云醞味苦

老は醞味を苦しと云う

三聖論味各不同

三聖 味を論ずも 各同じからず

得其正者唯尼父

其の正しきを得たる者は唯尼父のみ

大道一裂衆論沸

大道一裂して衆論沸く

豈唯洙水混涇涇

豈唯 洙水に涇涇を混ずのみならんや

青牛入關紫氣衰

青牛 関に入り紫氣衰え

白馬入寺緇衣貴

白馬 寺に入り緇衣貴し

可憐世上乳臭兒

憐れむべし世上の乳臭き兒

徒就糟粕求真味

徒らに糟粕に就いて真味を求む

酔は甘いか苦いか。誰が味を論しても同じではない。正しきを知るのは孔子のみである。いくつ論しても大河に清濁を注ぐようなもの。牛も馬も使いようによつて活かされる。無知な人間ほどつまらない問答をするものだ。

⑭ 病婦

経月歌聲歇
 芳塵日滿梁
 叙寒金翡翠
 衾冷古鴛鴦
 青鳥歸何晚
 離鸞恨未償
 多情遂醜病
 薄命易摧殃
 巫拙難呈技
 醫窮屢易方
 遁辭時舌問
 強笑卻增傷
 暈臉啼痕淺
 翠眉黛色長
 誰知心上事
 唯炷影前香
 衣袂遮嬌面
 枕函藏艷章
 痴情私自愧
 夢裡或呼郎

病婦 病の婦人。
 経月 幾月もたつこと。幾月か前。
 歌聲 つかえる。やどる。むなし。
 芳塵 かくわしいちり。ほこり。
 叙 かんざし。二本足のかみかざり。
 翡翠 ひすい。緑色の鉱石。硬玉の一種。
 衾 ふすま。ねまき。きよかつたひら。
 鴛鴦 おしどり。(鴛鴦) 鴦。夫婦が一緒
 に寝る道具。
 青鳥 青い鳥。仙女の使いとして青い鳥が
 来たという故事から。使者・手紙のこと。
 離鸞 鸞は鳳凰また天子。天子のそばをほ
 なれる。
 多情 多感。愛情が深い。うつりぎ。
 薄命 かもす。運命が浅い。うつりぎ。
 巫 命。ふしあわせ。運命にくれまぬこと。
 拙 わざわい。神仏の下すことが。天罰
 方を易う。てだてをかえる。
 遁辞 言ひのがれ。にげ口上。
 強笑 問いに答える。問答体で書いた文章。
 暈臉 目の下のくま。
 啼痕 泣いたあと。
 黛色 まゆすみの色。
 誰か知らん心上の事
 唯・影前に香る
 衣袂 ころものたもと。
 嬌面 愛らしい顔。なまめかしい顔。
 枕函 まくらものふた。文書箱。
 艷章 なまめかしい手紙。恋文。
 痴情 情のこもった。色欲の情。色情のまじい。
 夢裡 ゆめのうち。夢中。

幾日経つても歌声も聞えず、相手の男性から音沙汰もなく、愛情も冷えたまま、多情の病婦には巫女も医者も病を治す手だてはない。顔色容貌衰えて自分の心の中を解してくれる人もない。灯の前で袂で顔を覆いながら恋文を隠すと色情を恥じながらも、夢中である男性の名を手ぶ。



⑮ 雑詠

唾手青雲志未伸
 談經奪席頗艱辛
 轉嘆洙水淵源遠
 難識廬山面目眞
 刷洗弊風應有術
 維持名教豈無人
 十年不結繁華夢
 獨與周公夜夜親

雑詠
 手に唾して青雲の志 未だ伸びず
 経を談ずるに席を奪うこと頗る艱辛
 轉嘆す洙水淵源遠く
 廬山の面目 眞を識り難し
 弊風を刷洗するに術あるべし
 名教を維持するに豈人無からんや
 十年結ばず繁華の夢
 独り周公と夜々親しむ

⑯ 畫

山村連水郭
 高下入新晴
 芳草藏驢背
 人如空際行

畫に題す
 山村 水郭連なり
 高下 新晴に入る
 芳草 驢の背を蔵し
 人 空際を行くが如し



若き日の志は未だ伸びず、自分の席を確保するのままたまならない。大河の源は遠く大山の眞の姿を見ることができない。の沈滞した風を刷新するために、誰か儒教を教える人はいないだろうか。十年も突らない夢を見てきたが、今も一人で周公を読んでいる。

山の村、水辺の町、飽く低く新たに晴れ、芳草が茂って驢馬の姿を隠した形となっているので、乗った人があたかも空の中を歩いているように見える。空際、空と地と接して見えるようなはるかな空。

⑰ 海棠窩集與諸士同賦

海棠窩集 諸士に同賦す

向晚微雨收
 壁露滴林杪
 涼月入澗蘿
 空庭生行藻
 幽人病未癒
 伏枕飲娛少
 有客敲柴門
 剥啄驚宿鳥
 呼童掃階砌
 設席傍池沼
 舊醕酌濁醪
 新炊薦香稻
 吾久事宦遊
 擔簞馳遠道
 文章何所成
 歸去悔不早
 桃達談昨夢
 金蘭樂新好
 詩成月稍傾
 械械風動篠
 北隣有牛醫
 藥杵夜深搗

海棠窩 子玉の号。「海棠窩集」子玉の詩集。
 海棠 バラ科の落葉低木。
 高川いわや、すみか、別荘。
 微雨 こさめ、ぬか雨、細雨。
 涼月 秋の夜の月。
 澗蘿 かすら、隠者の衣服、住居。
 空庭 何も植わっていない庭。
 行藻 あさぎ、はなぢゆんさい、水草の一種。
 幽人 世をさけて暮らす人、隠者。
 飲娛 よろこびあしむ。
 柴門 しばの門、むさくるしい家。
 剥啄 こつこつ、門をたたく音。
 宿鳥 ねぐらで寝ている鳥。
 階砌 きさはしの下の石だたみ。
 旧醕 ふるいどぶろく、じり酒。
 濁醪 にこり酒、どぶろく。
 官道 仕官を求めて他郷に旅する。
 簞 かき、遊字して仕官を求める。
 擔担 になう、かつく。
 桃達 行き来して逢う。
 金蘭 非常に親しい交わりのたとえ、金より
 も固く剛よりもかんばしい交友、「金蘭の契」
 「金蘭の交」
 新好 あらたなよしみ。
 械械 かえて、葉ががれおちる様。
 藥杵 薬草をうつす杵。
 搗 つく、うつ、たたく。



⑱ 抵木刀村

木刀村に抵る

東風似爲我行謀
 吹盡餘寒暖上裘
 花逕頻迷類胡蝶
 山途屢喘似吳牛
 鐘聲度水知僧寺
 旗影抽林認酒樓
 且喜今春流潤月
 好將一半附閑遊

木刀村 佐伯領木立村。
 東風 ひがしかぜ、こち、春風。
 余寒 大寒があけて後の寒気、立春
 後になお残っている寒さ。
 上裘 上着のみわころも、毛皮で作
 った衣服。
 花逕 花の咲いている小径。
 胡蝶 虫の名、ちよう。
 山途 山のみち、みちすじ、途中。
 吳牛 「畏牛月に喘く」呉は南の昔
 ついであえて、牛が月を日と見誤
 ったため、びびるたたとえ。
 鐘聲 鐘の音。
 僧寺 てら、僧院、僧堂。
 旗影 はたのかげ。
 酒樓 料理屋、お茶屋。
 流潤 潤月が流く。
 一半 はんぶん、半分。
 閑遊 のんびりあそぶ。



⑲ 龍川舟遊

龍川舟遊

四社宮前水拍天
 六松堤下柳含烟
 今宵弄月人多少
 半在高樓半在船

龍川 番匠川下流、龍護寺川。
 舟遊 ふなあそび。
 四社宮 船頭町住吉神社。
 六松 芳島六本松河原。
 堤下 つつみ、土手の下。
 弄 もてあそぶ、めぐる。
 高樓 たかどの、高くて立派な家。



十里澄江流向東
雙槳搖去柳灣風
女兒戲捉波間月
不省銀釵落水中
澹鶯鶯聲雜風聲
欲娛誰識已三更
輕舟別有吟詩客
故覓遊船少處行

神社前の川は勢よく流れ、河原の柳は煙つて見える。今夜は月見の客が多く、棧にも船の上にもいっぱい、遙かに番匠の川が東に流れ、二挺立ての船が湾に漕ぎ去つていく。船べりの少女が波間の月を捉えようとして、危うく衆の釵を川に落としてしまふ。おだやかに水は流れ、紳士淑女、仲むつまじい夫婦の語らいが楽しげ。はや夜も更けたが、詩を吟する客人を乗せた一艘の船が、賑わう遊船を避けるまじうに漕いで行く。

十里 澄んで江流、東に向い
雙槳 ふたつのかじ、かい
柳灣 やなぎのはえている湾
銀釵 銀のかんざし
澹鶯 水の流れと草のしげり、ゆつたりおだやかな様子
鶯声風声 (鶯聲) 神鳥の名、低じてすくれた土や有徳の君子のたとえ
同志の友、仲のよい夫婦のたとえ
欲娛 よろこび楽しむ
三更 (五更第三の時刻) 今の午前0時前後、子の刻、吟詠 詩をうたう
詩吟

⑳夜 歸

春日雖難暮
奚囊每夜回
怪巖疑虎臥
獨樹似人來
股冷頰沾水
衣香屢觸梅
村童猶未睡
燈火耿雲臺

夜 歸る
春日 暮れ難しと雖も
奚囊 囊まん毎夜回る
怪巖 虎の臥すかと疑い
獨樹 人來たるに似たり
股 冷えて頰りに水を沾し
衣 屢 梅に触れて香る
村童 猶お未だ睡らず
燈火 芸台に耿なり

春日 春の太陽、日さし、日あし、春の季節
奚 なんぞ、いすく、なに、なにをか
巖 ふくろ、つとも、おさめる
怪巖 あやしむ岩
股 はきもの、木製のはきもの、げた
沾 ます、あふれる、うるおす
村童 むらのわらべ、こども
芸台 芸園 書庫、蔵書のくら、書箱

春の日は長く、包みを抱えて毎夜出かける。怪しい岩が虎に見えたり、木が人に見えたり。凍りつく草履を水で溶かし、着物は梅に触れて香る。村の子供はまだ眠らず、書庫の窓が明るい。

㉑雨後遊玉龜山莊

雨後玉龜山莊に遊ぶ
祝人柴田氏別墅

祠門晝暗鎖烟蘿
展衝泥客自過
社樹百圍風出竅
溪流十里水盈科
修篔解縹呈新粉
乳燕分泥補舊窠
日暮山堂吟尚苦
隔林相和挿秧歌

祠門 晝暗く烟蘿を鎖し
展衝 泥を衝いて客 自ら過ぎる
社樹 百圍 風竅を出で
溪流 十里 水科に盈つ
修篔 縹を解きて 新粉を呈し
乳燕 泥を分けて舊窠を補う
日暮 山堂 吟尚お苦し
林を隔て相和す挿秧の歌

神社の門は昼なお暗く、煙りの垣根に閉ざされ、下駄で泥を跳ねながら客が過ぎて行く。社叢の森を風が抜けて、溪流は多くの村々の水田を満たしている。竹藪の竹は古い皮を脱いで若い、親づばめは泥を運んで巣を補っている。日暮れの山堂にまだ詩は浮かばない、林を隔てて田植唄が聞こえてくる。



玉龜山莊 祝人柴田氏別荘とある。
「寺社記」には、享保十六年(一七三二)大坂本堂右神社が道立遊宮され、時の社人は柴田主計、同市之連、玉龜山莊の所在は不詳。
祠門 神社の門。
烟蘿 けむりのかきね。
展衝 ころを衝ったげた、あしただ。
百圍 おおくかこむ、ひろくおおう。
盈科 あな(穴)、あなをあける。
竅 穴にあなにあな。
篔簹 たかむら、たけやぶ、たけ、修篔、たげのかわ、たげのこ皮、草。
乳燕 子育てのつばめ。
舊窠 古い巣。
挿秧 苦心して詩歌を考へ作ること、苗を植えること。田植えする。

㉒來京後始覽鏡

來京後始めて鏡を覽る
病瘦近來知若何
菱花試向曉窗呵
自驚面貌千年老
始覺難經日多

病に瘦せ近來 若何を知り
菱花 試みに曉の窓に向つて呵る
自ら驚く面貌 千年、老ゆ
始めて覚ゆ難經の経日多しを

若何 疑問の意を表す。どのようか。
菱花 ひしの花、鏡の別名。
呵 しかる、呼びあう、わらう。
面貌 かおのかたち、顔の様相。
千年 千歳、ちとせ、長い年月。
難經 目的を達成するまでに経験した、大変な苦労。
経日 日を経る、日ごと。

塵染征衣縮化素 塵、征衣を染め、縮化して素なり
 風梳客鬢黑將暈 風は客鬢を梳つて黒、將に暈ならんとす
 傍人休笑無侯骨 傍人、侯骨無きを笑うを休めよ
 吾輩元宜著釣蓑 吾輩は元宜しく釣蓑を著すべし
 病に瘦せし近來しうしたものと、鏡に向かつて問ひかけた。自分の老いた顔を見て驚き、勞苦に耐えなかつた日々を思ふた。軍服は塵に染まり、色あせて、風にさらされた髪は白くもた。人よのみすばらしさを笑つた。私は元々漁師だつたのだ。

⑳ 夢李長吉

夜夢神宮傳天語 夜夢む神宮、天語を伝うるを
 手中拈花撒江雨 手中の拈花、江雨に撒く
 金門半開壁微白 金門、半は開いて壁微かに白く
 雲樓瓊閣誰是主 雲樓瓊閣、誰か是れ主なる
 隴西才子通眉容 隴西の才子、眉容に通じ
 錦囊曾拭青蚪角 錦囊、曾て青蚪の角を拭う
 玉樓記成不知年 玉樓、記成りて年を知らず
 天上桂子幾回落 天上の桂子、幾回か落つ
 有手君亦爲吾拍 手有り君亦吾が拍と爲し
 有詩吾且爲君歌 詩有り吾、且く君の歌と爲す
 如今驛人喜宗詩 如今、驛人、宗詩を喜び
 黑鳳誰分雄與雌 黑鳳、誰か雄と雌とを分たん
 燕石十襲各自珍 燕石、十襲、各自、珍し
 荊璞三獻無人知 荊璞、三獻、人の知る無し
 曉窗驚坐悄無有 曉窓、驚いて坐す、悄有る無し
 一卷遺稿當好友 一卷の遺稿、當に友を好むべし
 悲風嘯落青林月 悲風、嘯落、青林の月
 鬼語如人隔高柳 鬼語、人の高柳を隔つが如し

李長吉 中唐の詩人、李賀の字、天語、天のことば、拈、ひねる、つまむ、(拈華微笑) 拈花、黄金色の門、壁、たま、円形で穴のあいた玉器、雲樓瓊閣、雲の上のやぐら、高殿、隴西、隴は甘肅省、西は甘肅省、眉容、美しい容貌、錦囊、錦の袋、詩の原稿を入れる袋、青蚪、とのさまがえる、玉樓、美しい高殿、りっぱな舞臺、桂子、桂の実、人の子をいう天孫、驛人、「驛驛」の作者屈原や、その門弟宗玉等の流派の詩人、詩客、驛客、(驛人、驛客)、黑鳳、くろいおとり、瑞鳥、鳳は雌、燕石、燕山から出る、玉に似て玉でない石、似て非なるもの、真偽のないもの、のたとえ、荊璞、荆、荆の名、楚の別名、璞、あらたま、掘り出したままで、まだみがかない玉、嘯、うそぶき、おとりの、鬼語、うにのこぼし、高柳、高いヤナギの木

征衣、旅行中の衣服、軍服、細く、黒色、黒色の衣服、前衣、びんすら、耳ぎわの髪の毛、傍人、かたわらのひと、そばのひと、侯骨、りっぱな骨組み、釣蓑、つりみの、漁人。

夜夢に天の言葉聞き、手中の花を雨降る川にまいた。金門が開いて白い玉が見えた。この高殿の主は誰だろう。東西の才子(長吉のこと)は眉がながつて、その詩篇はかたて青蚪の角をめぐらした。玉樓の記を成して長吉が死んで何年たつただろう、皇帝の子孫も度々代わつた。君は私に手を拍つてくれ、私は君のために歌を作ろう。今や宗の流派が喜ばれ、誰が詩歌の優劣を分かたず、まがいのものを受け継いで自己満足し、本物の原石を見損なうとは、私は彼の遺稿を読んで驚いた。悲風うそぶく青林の月のように、鬼語は人と高柳とを隔てる。



李賀 (791 ~ 817) 中国中唐期の詩人。字は長吉。官職名から李奉礼、出身地から李昌谷とも呼ばれる。その詩は伝統にとらわれず、はなはだ幻想的で鬼才と評された。27才歿。「李長吉小伝」には、「天帝が白玉樓を完成し、その文章をつくらせるために長吉を召した。」と記されている。

㉑ 芳野

神龍失勢頗艱辛 神龍、勢を失つて頗る艱辛
 魚服蒼黃出帝闈 魚服、蒼黄、帝を出す
 南北暫分蝸角國 南北、暫く分つ蝸角の國
 江山久汚馬蹄塵 江山、久しく汚す馬蹄の塵
 金戈彫戟成黄土 金戈、彫戟、黄土と成り
 岫幌雲屏想紫宸 岫幌、雲屏、紫宸を想う
 戰血千秋凝不散 戰血、千秋、凝りて散せず
 餘紅染まつて万花の春と作る 余紅、染まつて万花の春と作る

芳野、花の咲きおつている野、神龍、天子の威、艱辛、なやみ、苦しみ、艱難辛苦、魚服、えびら、魚の皮で作つた矢筒、蒼黄、青と黄、あわてるさま、帝闈、帝の城郭、外城の門、蝸角、蝸角の争い、つまらない争い、金戈、金の戈(ほこ)、彫戟、こしらえた戟(ほこ)、黄土、黄色の地、大地、塵、よみじ、岫幌、つらなる山嶺、雲屏、さえぎる雲、紫宸、天子の御殿、天子の居所。

朝廷の軍は勢いを失つて苦しみ、兵はあわただしく城門を出た。国は南北に分かれて戦争にあけくれ、山河は長らく馬蹄の塵に汚された。武器は散乱して墳墓の地となり、つらなる山嶺、さえぎる雲に、帝の安否を想う。戦いの血は固まって永久に消えず、大地を紅に染めて花が満開の春のようだ。

※以下に「詠史楽譜」八首が掲載されているが略す。



廣瀬淡窓肖像と咸宜園図

広瀬 健

字は子基、号は淡窗。豊後日田の人。著は遠思楼詩鈔。初編二卷、二編二卷有り。九州に於ては則ち澗齋廣瀬君、四方の上争いて其の塾に就き、皆成す所有りて後、歸りて其の所業をなすは、其の人と為りと詩を為す所以を知るを以てなり。晩年、処士を以て旌命の擧を蒙り、述懐詩六百有るは蓋し亦異數なり。詩は哲門人の刻する所。此の道に於て「三たび眼を折る」を知るなり。(略述)

①記同社五首

- 同社五首を記す
- 長卿博治才
- 善作三唐語
- 幽燕沈雄姿
- 可以任旗鼓
- 身棲橘柚林
- 名播菁華圃

長卿は博學で何でも知り、よく三唐の詩を作る。冷静沈着な姿は軍の指揮官に向いている。彼は柚木村に住んでいて、その名はミカノ畑を広めるという意味である。小関長卿は柚木村の人。



【語註】
同社 咸宜園の仲間
博治 博學治聞、治識の略。広く物事を知っていること。治はあまねし。
三唐 唐の時代の初唐・盛唐・晩唐の三つの区分。
旗鼓 戦場で軍隊を指揮し、号令を伝えるのに使う。はたと太鼓、軍令、軍隊の命令、軍勢。
橘柚 みかんとゆず。みかん類の総称。物の美しい部分。純粹なところ。精華。
圃 はたけ。その、野菜や果樹の畑。まく、種をまく。広く及ぼす。



彦国耽佳句
冥搜要驚人
龍門波底珠
奪為席上珍
奇語謝關子
莫誇髀絕倫

彦生彦國の居は龍門寺瀑布に近し

彦國は佳句の探求にかけり人を驚かせてみせる。龍門滝壺の珠を奪うように、席上をあつと言わせる。伝言を聞き入れて閑所の小役人となつたがひげの絶倫を誇るにはない。彦生彦國の居は龍門瀑布に近し。

九腕跡雖舊
芳蘭有新芽
五郎俊秀人
咳唾聚成花
白圭枉三復
妙語本無瑕

兄玉布黨の祖仲英は蘭と号す

九腕の跡は古くなたが、芳蘭の新芽がある。五郎は才知にすぐれそのまぶたはあざやかな花のようだ。白圭の詩を繰り返すまでもなくその言葉に傳はれない。兄玉布台の祖仲英は蘭と号した。

佳句 よい、美しい、すぐれたる句
冥くらしい。光がなくてくらしい、道理にくらひ、よる、やみ、くらがり、心のおくそこと。
龍門 秋津郡にある龍門の滝。
奇語 ことづてする。伝言、奇言。
關子 閑所の小役人。
絶倫 人なみはずれてすぐれていること。

芳蘭 よきにおいのらん。
俊秀 才知のすぐれていること。
咳唾 せきと、つばき。長舌のことばを放つていう通。咳唾成珠しせき。つばきまでもが珠玉となる。
聚 あららか。あざやか。きらやか。
白圭 白く清らかな珠。「詩経」にある白圭の詩。
三復 いくたびも繰り返す。
枉 まがる。まげる。しいたげる。
妙語 すくれた、いうにいわれぬ味のあることば。
瑕 きず。玉のきず。つみ、とが。



偉いやつだ南海の鳥は今翼を養って堤に休んでいる。その人材から晩年を察するに、誰も彼には及ばないであらう。しかし神馬ですら時には人を噛み踏むことがある。調教するには王良のような名師が必要である。中島子玉の家は南海に近い。

偉哉南溟鳥 偉なるかな南溟の鳥
養翼息池塘 翼を養いて池塘に息つ
人材観晩節 人材晩節を観るに
誰得抗中郎 誰か中郎に抗するを得ん
神駒或齧蹄 神駒或いは齧す
鞭策在王良 鞭策は王良に在り

南溟 南方の大海。
 池塘 池の堤。池塘。池。
 晩節 晩年に同じ。人の一生の末年、老年、老後。
 中郎 中島子玉のこと。
 抗 あらがう。さからう。こぼむ。
 神駒 神馬。神の乗用に供する馬。
 齧蹄 かむ。ふむ。
 鞭策 策もむち。鞭打ちはげます。
 王良 春秋時代の晋の、馬を御するにたくみな人として有名。すぐれた御者の代名詞のように用いられる。

詩家は特別な才能をたたえ、私は平川の子を見た。敵をふせき風行をあやかり、飄々として構えることがない。彼は兄に芳らぬ文才を持っている。その兄はなぜか死んでしまった。劉君鳳は平川村の人、兄圓は才名あつたが早世した。

詩家 特別な才能。
 我見平川子 我、あた。かたき。敵。外敵。
 飄飄不可企 飄々として企つべからず
 此君有鳳毛 此の君、鳳毛有り
 圓也何曾死 圓や何ぞ曾て死せる
 劉君鳳は平川邑の人、
 兄圓は才名有り蚤死す

別才 特別な才能。
 寇 あた。かたき。敵。外敵。
 飄々 飄々として企つべからず。
 鳳毛 鳳の毛。子が父に芳らぬ素質を持っている。ことのとえ、すぐれた容姿、文才のたとえ。
 圓 人名。劉君鳳の兄。

②論詩贈小関長卿中島子玉
 小関長卿・中島子玉へ論詩を贈る

歌詩寫情性 實隨民俗移 風雅非一體 古今固多岐 作家達時變 沿革互有之 苟存敦厚旨 風教可維持 昔當室町氏 禮樂屬禪緇 江都開昭運 數公建堂基 氣初除蔬笋 舌漸滌侏離 猶是螺蛤味 難比宗廟儀 正亨多大家 森森列鼓旗 優游兩漢域 出入三唐籬 格調務模倣 性靈徹蔽虧 里蹟自謂美

歌詩は情性を寫し、實に民俗に随つて移る。風雅は一体に非ずして、古今固より多岐なり。作家は時変に達し、沿革互いに之を有す。苟くも敦厚の旨を存せば、風教維持すべし。昔室町氏に当たり、禮樂禪緇に屬す。江都昭運を開き、數公は堂基を建つ。氣初めて蔬笋を除き、舌は漸く侏離を滌ぎ、猶是れ螺蛤の味にして、宗廟の儀に比し難し。正に多大の家を亨え、森々、鼓旗を連ぬ。兩漢域に優游して、三唐の籬に出入りす。格調、模倣を努め、性靈、蔽虧を卸く。里蹟して、自ら美を謂うは



情性 人が生まれつき持つてゐる本性。
 風雅 「詩経」の国风と大雅・小雅。
 風流 みやび。
 時変 かわつたできこと。國家における大事。
 沿革 移り変わり。變遷。
 敦厚 人情があつて、またそのひと。
 風教 人民を感化して導くこと。風俗と教化。
 禮樂 細くろ。黒色の衣服。僧衣。
 禪緇 細くろ。僧衣。
 江都 江戸の別名。
 昭運 さかんなる運命。
 堂基 堂のもと。土台。
 蔬笋 野菜と、たけのこと。
 侏離 異民族の言葉が通じないこと。
 螺蛤 さざえと、はまぐり。
 宗廟 先祖のみたまや。
 儀 いけにえ。先祖祭祀に供えるもの。
 森々 樹木が高くそびえるさま。さかんにしげるさま。
 鼓旗 つつみやばた。旗鼓。軍隊。
 優游 ゆつたりする。またそのさま。
 籬 まがき。かき(垣)。まがき。
 性靈 こころ。たましい。
 蔽虧 草木が茂つて日光が欠けて見えぬ。
 里蹟 たたかみだれる。



山と此川

歌詩とは情性を写し民俗に從つて移ろふ。風雅は一つではなく古今より多岐にわたる。作家は事實をよく知り、柔軟に対応すること、人情を厚くして人民を感化すべきだ。
 世宣町氏のときに礼楽は神宗に属し都で盛んになり、しばしば公は寺閣を築いた。気風は野卑を除き方言を改めたがなお暖臭く宗廟にさざわしくなかつた。それでも多くの節を整え、軍隊を盛んにした。漢や唐と交易してその格調を模倣したがその精神は遠けた。里の苦しきは傾国の憂きである。
 また時代は代わつて宋朝に倣う。世間の風評をばらけ、新しい考えを取り上げ、おこることを断つとしたが、志に反して放蕩の道へついに國を失つた。誰がその優劣を知り得ようか。隔々に気を配りさらに張良のような軍師があつたら、鶏口にくるか牛後につくか、その進退は自ら知れたことである。我もまた一人前の男子である。李白や杜甫のような詩人となつて、詩の作法を明らかにして、今の表えを起こした。

本非傾國姿
 天明又一姿
 趙宋奉為師
 風塵拂陳語
 花草抽新思
 難裁放辟志
 轉習淫哇辭
 楚齊交失矣
 誰識烏雄雌
 寄言關及鳥
 更張良在茲
 鶏口與牛後
 趨舍君自知
 我亦丈夫也
 李杜彼為誰
 誰明六義要
 以起一時哀

本より傾國の姿に非ずや
 天明又一姿し
 趙宋奉じて師となす
 風塵 陳語を払い
 花草 新思を抽んず
 放辟を裁つと難も
 志 転じて淫哇の辭を習い
 楚齊交 失う
 誰か鳥の雄雌を識らん
 言を関及び鳥に寄せ
 更に張良 茲に在り
 鶏口と牛後と
 趨舍 君自ら知る
 我も亦丈夫也
 李杜 彼の誰どみらん
 誰か六義の要を明らかにして
 以て一時の表えを起さん

天明 天から受けた命令。天の明かな
 趙宋 宋朝（七〇一—一二七九）をい
 う。宋は趙氏なので、南北朝の宗（劉
 志）と区別している。
 陳語 語をつらねる。
 新思 新しい考え。
 放辟 おこりかたよる。
 淫哇 みだらな声。下品な声。
 楚齊 中国の國名。
 寄言 いいやる。ことを告げる。
 張良 漢の高祖劉邦の功臣。戰略に長じ
 賢臣に封せられた。
 鶏口 弱小の団体のかしらにつく。
 牛後 強大なものしりにつくこと。
 趨舍 進むことと止まること。進退
 取捨
 丈夫 ますらお。一人まえの男子。
 李杜 唐代の詩文の名家。李白と杜甫。
 六義 「詩経」の詩の三種の体裁。三
 種の作法。

◎讀子玉彦山紀行賦贈
 子玉の彦山紀行を読み賦して贈る
 石楠花發映幽叢
 石楠花 咲発して幽叢
 春晚巖巒雪始融
 春晚 巖巒 雪始めて融く

の山は青少た。
 岩石や牛が樹木のまばらな助け、人家は崖に沿つて上下にある。慣れた道は新道には及ばないがそれまた好
 い。奇境はあたかも奇書を読むようなものだ。林のさむけに帯よりも細い小道があり、一転して茂みの中から出てく
 る。平野の向こうに牛が伏せいるあたりに、高い峰がづいに見えた。大鳥が飛んでくるはすれに、三人は笑つて高ぶ
 る心と同じく、家に帰つてからも余韻に浸つていた。線先で待つていたが酒は来す、すだれを巻き上げると暮れ方

③與佐君朗中子玉散步東村歸而回賦
 君朗子玉と東村散步、歸りて回賦す
 巖石犖角樹扶疎
 巖石 犖角 樹疎を扶け
 人家傍崖高下居
 人家 崖に傍りて高下して居り
 熟路不如生路好
 熟路は生路に如かずとも好し
 奇境宛似閑奇書
 奇境 宛も奇書を閑するに似たり
 林際有徑細於帶
 林際 徑有り 帯よりも細く
 俄然一轉出歸齋
 俄然 一転して歸齋より出ず
 平野遙分臥犢邊
 平野 遙かに分る臥犢の辺
 高峰竟出飛鴻外
 高峰 竟に出ず飛鴻の外
 三人笑傲心莫逆
 三人 笑つて傲心 莫逆
 歸家猶寬有餘適
 家に帰るも猶お余適有るを覺ゆ
 樓頭待酒酒未末
 樓頭 酒を待つて酒未だ来たらず
 湘簾捲盡暮山碧
 湘簾 捲き尽して暮山碧なり

犖角 山に大石の多いさま。犖、ま
 だらうし。
 疎 あるいは、おおまか、まばら。
 熟路 よくなれたみち。生路の対。
 生路 はじめて通るみち。
 奇境 ふだん通らない境界。
 閑書 めずらしい書物。
 林際 林のきわ。
 俄然 にわか。急に。突然。
 歸齋 草木がおおいしげついているさ
 臥犢 ふせた子牛。寝ている子牛。
 飛鴻 飛んでいるおおとり。大きな
 白鳥。
 傲心 おごる。たかぶる。あなどる
 心。
 莫逆 莫逆の女。たがいにかからう
 ことのない親友。
 余適 余適。残りのしづく。残適。



彦山 豊明の英彦山
 映発 照りはえる。美しくまらめく。
 幽叢 ほのかにむらがる。
 巖巒 いわおの峰。
 雪盡 かみなりのお雪。かみなり音。
 杖屐 つえとくつ。杖長者の持ち物に
 対する敬称。



唯覺雷靈鳴地底
豈知杖屨往天中
羽衣朝會三千客
絳闕晴開南北宮
君自詩才凌謝眺
不須搔首問蒼穹

絳闕 あかくぬつた玉宮の門、宮城。
羽衣 はごろも。天人や仙人が空を飛行するときに着るといふ。道士。朝會 臣下が朝廷にあつまる。謝眺 南朝南齊の人、学を好み英名あり。文章清麗、草隸を善くし、五言の詩に長ず。搔首 頭をかき。心が落ち着かないときの動作。蒼穹 あおぞら。穹は弓なりに見え

シヤクナが照り映えて群がついて、春の夜に岩峰の音がとけはじめ、雷鳴は地底をゆるがし、修験者は天空を歩いているようだ。朝会には道士たち三千の客が、宮門は晴れて南北の扉を開いた。君の詩才は決して謝眺にも劣つてはいない。頭をかいて青空に問ふことはないのだ。

④ 懐舊四首 懐旧の四首

碧年初識字
未及接名流
戎本同渾住
或時就籍遊
鬪歌熊市夜
角觥馬臺秋
嬉戲如前日
忽忽既白頭

懐旧 昔を思いしのぶ。
碧年 垂れ髪をした幼い年ごろ。
名流 有名な(一流の)人々。
戎 えびす。西方の未開人、なんじ。
渾 にごる。くぼみ。水たまり。
鬪歌 足で地を踏みならして調子を取つて歌つこと。
角觥 たがいになつて力の技芸をくらへること。すもう。
嬉戲 遊びたわむれる。
忽々 いそがしい、あたらしいさま。
白頭 しらがあたま。

幼年のころ初めて字を知つたが、未だ名流に習つたことはない。所詮は井の中の蛙、あるときは塾に通つて学んだ。熊市の盆踊りや馬台の相撲など、遊び戯れたのは昨日のようだが、あわただしく年は過ぎて既に頭は白くなつた。

清絶長溪路
修篁蔭緑苔
穿山潜水入
鑿石洞門開
數侍潘輿去
時懷陸橘回
萱堂人不見
其奈涓陽哀

清絶 非常に清らかなこと。
修篁 たけやぶをつくろう。
蔭緑 ひかげ、日光、ひさし。
鑿石 石をうがつ、穴をあける。洞門 耶馬溪、青の洞門。
陸橘 たちばな(みかん)。
萱堂 母親のへや。母親。
涓陽 涓水の北岸の地。

時枝尋友宿
菟狹謁神行
一水通猿渡
羶山拱馬城
旅情隱雨帽
鄉思望雲生
此地発觀海
茫洋我眼驚

時枝 宇佐郡時枝村、中津藩小笠原領。
菟狹 豊前宇佐のこと。
一水 一つの川、伊呂波川のこと。
猿渡 中津平野、伊呂波川下流域に位置する。
馬城 国東郡田楽在真木村のこと。
拱 こまねく。かかえる。めぐる。
望雲 雲をのぞき見る。他郷で故郷を恋したことをいふ。

佐伯國南疆
曾遊四教堂
奇書傾二酉
仙訣聚千方
吹浪江豚黒
連空海鯨蒼
先師墳墓在
夢裏或焚香

南疆 南のさかい、はて、辺境。
四教堂 佐伯藩校。
奇書 めずらしい書物。
二酉 南州の大小二山の石穴中に書千巻を蔵したという故事により、蔵書の多いことをいふ。
仙訣 詩歌・書画などの特につくられた人、訣(けつ) 奥義・秘伝。
江豚 海豚(いりか)の別称。
海鯨 いわし。
夢裏 ゆめのうち。夢中。

清絶なる耶馬溪の道、竹林と日陰の石山をうがち水にもぐつて、岩をうがって洞門を開いた。今や村来の客で賑わひ里の果実を見てまわる。萱堂に人を見ず、涓陽の哀しみをどうしたものか。

秋月龍

字は伯起、豊後佐伯の人



秋月橋門 (1809～1880)
日向高鍋藩秋月氏の土族、水筑之龍、後に秋月橋門と名乗る。日田成宣園に学び佐伯藩校四教堂教授、明治2年葛飾県知事。引退後、長梅外らと漢詩結社「玉川吟社」を結成。

①漁父圖

漁父の図

網汝拳之笛我吹
魚之不得我何知
笛汝吹之網我拳
節之緩急唯任汝
江南無限夕陽山
笑看雙鶴帶雲還

漁父 漁翁程子の父。
江南 長江の南岸一帯の地方。
緩急 ゆるやかであること、きびしいこと。
夕陽 夕日、山の西面。
双鶴 二羽のつる。
帶雲 おびくも、長く横たわる雲。

君は網をあげ私は笛を吹く、魚が取れまいと私はかまわない。君が笛を吹き私は網をあげる、旋律は君に任せ、江南に限りなく連なる夕陽の山、笑って見送る二羽の鶴が雲の彼方に帰るのを。

②春雨乍晴泛舟龍溪

春雨乍晴れ舟を龍溪に泛ぶ

柳渚梅洲酒を載せ行く
一篷残雨滴つて新に晴る
濕雲徐被風吹去
多少青山次第に生ず

春雨 はるさめ。
龍溪 番匠川下流、祖護寺川のこと。
柳渚 やなぎのあるなぎ。
梅洲 うめのあるす。
一篷 一つの舟のとも、速はスゲやカヤを編んで舟のおわりに用いる。
残雨 のこりのあめ。
新晴 あらたにはれる。
濕雲 しめったくも。

柳の渚、梅の洲を酒を載せて行く、舟の覆いに残雨がしたたて新たに晴れた。湿った雲は風に吹かれ去つて、青山が見え隠れしながら次第に姿を現した。



『東瀛詩選』の選者

俞樾(曲園)

俞樾 清代の学者、浙江省徳清生まれ。詩人漁翁の子。字は蔭甫、号は曲園、はじめ曾國藩(清朝軍人)のもと進士となるが数年で退官。のち李鴻章の招きで蘇州紫陽書院を管理。その後上海、徳清、帰安などの書院の長となり教育と著述に従事。王念孫(清朝経学)らの説を継承・発展させ、当世樸官の宗となつた。著書はきわめて多く、「春在堂全集五百余巻の他、日本の漢文学を紹介した『東瀛詩選』など日本学者との交わりも少なくない。また仏教道教にも通じ、漢詩文も能くした。光緒三十二年(一九〇六)、八六才。



俞樾(曲園)肖像 (1821～1907)



蘇州楓橋鎮・寒山寺普明塔

俞樾(曲園)の墨跡
楓橋夜泊 張継
月落烏啼霜天白
江風漁火 愁眠に對す
姑蘇城外寒山寺
夜半の鐘聲 客船に至る



楓橋夜泊の歌碑 寒山寺は唐時代の高僧寒山、拾得の名に由来するが、唐時代の詩人張継の「楓橋夜泊」という漢詩でも有名である。幾度も焼失し現在の堂塔は清朝末期に復興され、「楓橋夜泊」の歌碑も光緒32年(明治39年)俞樾の揮毫によって再建された。

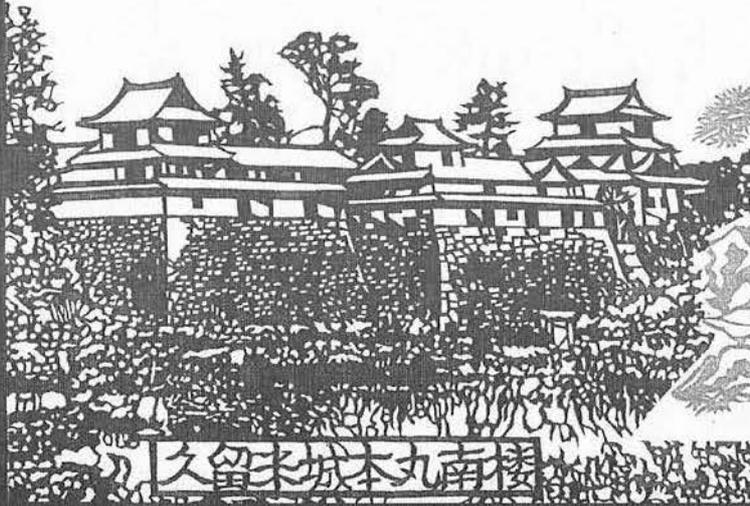


漢詩解説 木許博先生

昭和六〇年教員退職以来、佐伯史談会員として郷土の碑文に取り組み、同十一年、二十四点を収録した「佐伯地方碑文の解説」を発表した。以後も難解な金石文や、漢詩漢文の解説を手がけている。
※写真は櫻野慈濟院で「思蒼復堂上人墓碣銘」を解説する木許博氏。

窈窕篇
松下筑陰編

佐伯藩校四教堂
若き日の松下筑陰



2013 四教堂塾

まえがき

今回は佐伯藩校四教堂の初代教授となった松下筑陰が若き日に編集した『窈窕篇』に取り組んできた。

松下筑陰（世民）は明和元年（一七六四）久留米藩士松下源藏（二五〇石）の次男として生まれ、藩医を勤める叔父元丈（一五〇石）の養子となった。もちろん家業の藩医を次ぐべき境遇であったが、彼は学問を好み、詩文の才に優れていたため次第に儒学者の道を志すようになり、十才年長の榊島石梁（後の久留米藩校明善堂教授）とよく行動を共にしていた。

当時、藩の教育を愛する同好の士が集って演詩結社「東林社」を結成していたようで、天明三年（一七八三）頃の中秋、宝月和尚を招いて詩会が開かれた。このとき集録された漢詩を『窈窕篇』として編集したが、若年十九歳の筑陰である。

宝月師は久留米出身で日田長福寺の住職となり、本山高倉学寮で講師を務めたほどの高僧で、藩の教育を模索する同志の期待が一心に託されていた。

詩会は中秋の十四日から十七日までの四日間、毎夕場所をかえ同志の邸宅や別荘で開かれた。宝月師を囲んで、会友は津山東浪・榊島・榊島石梁など九名、次代の藩教育を担う者々たる顔ぶれだった。

初日は顔合わせともあって宝月師を歓迎し、師の業績や学徳を賞賛する詩歌が多く、宝月師

も故郷に才子の多いことに感心を示し、同志に大いなる勇気を与えたようだ。

二日目は次第に打ち解け、それぞれが抱える人生の悩みや心情が明かされ、宝月師に教えを求めよう場面ようである。

三日目、宝月師は形にとられず名利を求めない生き方を惜し、ここで深刻な話題から色気のある中国古典へと詩題を転じて場をなごませている。

四日目はいよいよ最終日となり、明日からは現実世界へともどるとあって、出征兵士の心境が詩題となった。これから世に出る者、また退く者、互いに志に充たされた四日間であった。

筑陰は一夜が更けて皆横になったが、月輪は松の上に」と、宝月師と自分の立場に置き換えて心境を綴り、最後を締めくくっている。

筑陰の編集した『窈窕篇』は、四〇年後に榊島石梁によって、当時欠席していた二氏の詩を加えて再編された。また昭和七年、鶴久二郎氏が「広瀬淡窓と師筑陰との出会い二百年記念」誌として復刻された。

尚、松下筑陰の恩師宝月師や教え子広瀬淡窓のことが、小栗憲一著『豊絵詩史』に書き残されていたので、抜粋して現代語訳で紹介することにした。今回は自力で漢詩・漢文の解説を試みたので、誤りあれば訂正を乞う。

挿絵はインターネットの肖像画や小学館「原色日本の美術」等を多く参考にして作成した。平成二十五年九月 さとうたくみ



久留米城址



久留米梅林寺

- ◆参考文献
- ◆佐伯市史
- ◆久留米市史
- ◆松下筑陰伝
- ◆「語文研究」高橋昌彦
- ◆魅せられて綴る『漢文学四〇五』
- ◆「佐伯史談」一八七、一八八号
- ◆野間田三千夫



小学生と切絵制作

窃窕篇 もくじ

中秋十四日 積翠亭に集う

- ① 積翠亭に集い試して諸君に呈す 安 宗國
- ② 積翠亭に集い分けて八齋を得る 積 宝月
- ③ 同 宝月和尚の韻に和す 津 懋
- ④ 同 久重恭 4
- ⑤ 同 松 世民 5
- ⑥ 同 東韻を分かつ 樺 公禮 6
- ⑦ 同 宝月和尚に呈す 吉 貞 7
- ⑧ 同 古君元長の韻に和す 積 宝月 8
- ⑨ 同 宝月和尚に呈す 久 重恭 9
- ⑩ 同 久徳老翁の韻を謝し和す 積 宝月 10
- ⑪ 同 分ちて六魚を得る 津 懋 11
- ⑫ 同 津徳御の韻に和す 積 宝月 12
- ⑬ 同 宝月和尚に呈す 樺 公禮 13
- ⑭ 同 四豪を得る 安 宗國 14
- ⑮ 同 文の韻を得る 藤 忠継 15
- ⑯ 同 一東を得る 宇 郁 16
- ⑰ 同 四支を得る 松 世民 17
- ⑱ 同 八庚を得る 吉 貞 18
- ⑲ 同 侵の韻を得る 久 重恭 19
- ⑳ 同 重ねて八庚を得る 松 世民 20
- ㉑ 同 試して古君元長に呈す 松 世民 21
- ㉒ 同 試して諸君に贈る 積 宝月 22
- ㉓ 重ねて分ち一東を得る 安 宗國 23
- ㉔ 重ねて分ち十灰を得る 宇 郁 24

中秋十五日 青松館に集う

- ① 十五夜青松館に集い青の韻を 積 宝月 14
- ② 同 六魚を得る 安 宗國 15
- ③ 重ねて寒の字を得る 安 宗國 16
- ④ 又 「中秋旅懐」を得て試す 吉 貞 17
- ⑤ 又 「中秋寓直」を賦す 吉 貞 18
- ⑥ 同 四支を得る 宇 郁 19
- ⑦ 同 四支を得る 宇 郁 20
- ⑧ 重ねて灰の韻を得る 藤 忠継 21
- ⑨ 同 先の字を得る 松 世民 22
- ⑩ 同 十蒸を得る 松 世民 23
- ⑪ 重ねて十一真を得る 松 世民 24
- ⑫ 同 諸君の見訪を謝し七陽を 樺 公禮 25

中秋十六日 文明館に集う

- ① 十六夜文明館に集う 樺 公禮 26
- ② 同 雲の字を得る 積 法月 27
- ③ 同 十一尤を得る 安 宗國 28
- ④ 同 深の字を得る 宇 郁 29
- ⑤ 同 飛の字を得る 藤 忠継 30
- ⑥ 同 吟の字を得る 津 懋 31
- ⑦ 同 留の字を得る余は北筑より 園 含章 32
- ⑧ 同 諸君の見訪奉謝に霜を得る 松 世民 33
- ⑨ 同 徳御の韻を用う 松 世民 34
- ⑩ 同 席上に題を採し「新嫁娘」 積 宝月 35
- ⑪ 同 「夜度娘」を得る 宇 郁 36
- ⑫ 同 「子夜の歌」を得る 藤 忠継 37
- ⑬ 同 「昭君の怨」を得る 安 宗國 38
- ⑭ 同 「楽を愁うなかれ」 園 含章 39
- ⑮ 同 「古意」を得る 松 世民 40
- ⑯ 同 「卓分君」を得る 樺 公禮 41
- ⑰ 同 「葉婦吟」を得る 津 懋 42

中秋十七日 友竹堂に集う

- ① 十七夜友竹堂に集い「一東」を 積 宝月 30
- ② 同 普明上人へ奉謝を賦す 藤 忠継 31
- ③ 同 題を採し「銅雀台」を得る 積 宝月 32
- ④ 同 「烏樓の曲」を得る 樺 公禮 33
- ⑤ 同 「楊柳を折る」を得る 藤 忠継 34
- ⑥ 同 「子規啼く」を得る 宇 郁 35
- ⑦ 同 「征馬嘶く」を得る 安 宗國 36
- ⑧ 同 「夜狼が啼く」を得る 松 世民 37
- ⑨ 同 「巫山高し」を得る 津 懋 38
- ⑩ 又同 「秋夜独り座す」を賦す 吉 貞 39
- ⑪ 同 松 世民 40
- ⑫ 同 宇 郁 41

付録

- ① 諸君と約し集う積翠亭……島 清 36
- ② 十五夜諸君と約し集う青松館……島 清 37
- ③ 中秋に独り酌む 島 清 38
- ④ 普明上人に贈る 山 清 39
- ⑤ 同 あとがき 石 梁 40

窃窕篇

京門 松下彝世民輯

中秋十四日 積翠亭に集う



① 積翠亭集賦呈諸君

安 宗國

◎積翠亭に集い賦して諸君に呈す

安 宗國

間村亭子 山と隣り
下榻 遙か弄月の人を迎えん
莫道此生無長物
白雲流水 曾ち貧しきを賦す

間村の亭子 山と隣り
下榻 遙か弄月の人を迎えん
道う莫れ 此の生に長物無きを
白雲 流水 曾ち貧しきを賦す

静かな村のあずまやは山の隣にあり、長いすを用意して観月の客を迎える。言わずともよい、この大自然の中に無用なものなどないのだ。白雲や流水なくあるがままを詩にすればよいのだ。

② 積翠亭集分得八齋

釋 寶月

◎積翠亭に集い分けて八齋を得る

竺城南去碧雞啼
雨後郊村 萬木蒼蒼
莫是社陵秋興發
風煙稍似浣花溪

竺城南去碧雞啼いて去り
雨後の郊村 萬木蒼蒼
是れ社陵 秋興を發す莫かれ
風煙 稍 浣花溪に似たり

竺城の南に緑の鶏が鳴き去り、雨上がりの村は全ての木々が整って見える。この鎮守の森に秋の感慨をもらすな、この遠つた風景は、杜甫が住んだ浣花溪を思わせる。



① 亭子 ちゃん、あずまや。
下榻 客を迎えること。
弄月 月をもてあそぶ（ながめ
て楽しむ）。
長物 余分な物。無用な物。
賦 詩歌を作る。

② 竺城 久留米城の別名。密原
城、篠山城、篠原城ともいう。
郊村 城外の村。
秋興 秋の感慨。おもむき。
風煙 風と、もや。
浣花溪 川の名。錦江の支流。
杜甫がそのほとりに草堂を
構えて数年住んでいた。

③ 同和寶月和尚韻

津 懋

風吹江閣水禽啼
露滴芙蓉葉々齊
月下欲尋攀桂地
龍門秋滿第三溪

◎同じく宝月和尚の韻に和す

風江閣に吹き 水禽啼く
芙蓉に滴り 葉々に齊う
月下に尋めるを欲し 桂地を攀り
龍門の秋 第三溪に満てり

風が吹きわたる水辺の高殿に水鳥が鳴き、露は蓮の葉々に等しく滴っている。月下に散策を欲して桂地をよじ登り、龍門の秋は第三溪に満ちた。

④ 同

久 重恭

行露凄其促織啼
幽亭不與俗塵齊
月光滿野都如雪
欲效王猷掉剡溪

◎同じく

行露 凄じきは其れ促織の啼く
幽亭 俗塵と與せず 齊う
月光 野都に満ち雪の如く
王猷に效うを欲し 剡溪に掉す

道の露に、こうろぎの鳴く声がすさまじく、奥まった山荘は俗世間に隔たっている。月光が地上に満ちて雪のよだ、王子猷が同朋を訪ねて剡溪を舟でのぼつた故事にあやかりたい。

⑤ 同

松 世民

郊樹秋晴晚鳥啼
盈々一水荻蘆齊
風吹月湧波如雪
短棹何人向剡溪

◎同じく

郊樹 秋晴れて晚鳥啼き
盈々たる一水 荻蘆 齊う
風吹き月湧いて波雪の如く
短棹 何人ぞ剡溪に向かわん

郊外の樹、秋晴れた夜に鳥が鳴き、満ち満ちた川に秋や音が整然と並んでいる。風が吹き、月が湧き、波が雪のように光り、棹さして誰か小舟で剡溪に向かっている。



王子猷



子猷 剡溪を遊る

③ 江閣 水辺の高殿。
水禽 みずどり。水辺に住む鳥。
芙蓉 はすの花。
月下 つきかげのもと。月光のさす所。
桂 かたつら。ちくせい。秋に芳香を放つ小花を開く。
龍門 人望の高い人のたとえ。司馬遷の生地。同人「史記」。

④ 行露 道土のつゆ。
促織 おおろぎ。はたおりむし。
幽亭 おくふかい山荘。
俗塵 浮世のちり。けがれ。俗世間のわすらしき。
野都 野と都。
王猷 王徽之のこと。字は子猷。中国東晋の人。王羲之の第五子。会稽の山陰に隠居し、風流を好み、特に竹を愛した。
剡溪 地名。浙江省にあり、曹夜に黄蘗を訪れた所。旧友に会うの意。
郊樹 城外の樹。
晚鳥 夜の鳥。
盈々 水の満ちているさま。
一水 一本の川。
荻蘆 おぎと、あし。
短棹 短い棹。
剡溪 前出。



⑥ 同分東韻

樺 公禮

世間離別動西東
暫假湖山對酒筒
家在雲林聽鼠徑
門維野艇鯉魚風
陰々松下人琴瑟
漠々天邊雨鴻鴻
明夜共期牛渚月
莫令踪跡易飄蓬

◎同じく東の韻を分かつ

世間に離別して西東に動き
暫く湖山を仮り酒筒に對さん
家は雲林 聽鼠の徑に在り
門に野艇を維き 鯉魚の風
陰々たる松下 人琴を弾き
漠々たる天邊 雨鴻を送る
明夜 共に牛渚の月を期す
踪跡 飄蓬と易えしむ 莫れ

世間に離別して西東に動き、しばらく湖山を借りて酒を楽しむ。家は山中にあつて、歌道を行き、門に竹なく小舟に秋の風が、松林の下で人は琴を弾き、広く果てしない空に雨が大海を送る。明日の夜も共に深淵の月に出会おう、折角の足跡が無駄にならないように。

⑦ 同呈寶月和尚

吉 貞

遙飛杖錫拂青霞
月滿青山鶴影遮
洞口天風吹不盡
鉢中殊發玉蓮花

◎同じく宝月和尚に呈す

遙かに杖錫を飛ばし 青霞を拂い
月 青山を満たして鶴影を遮く
洞口に天風 吹き尽くさず
鉢中 殊に発く玉蓮花

はるか遠くへ杖錫を飛ばして、青い霞を払って行く。月は青山を照らして鶴の影さえ見えない。洞口に空の風は吹き止まず、山頂の火口は玉の蓮花が開いたかのような姿だ。



⑥ 湖山 湖と山。また広く山河をいう。
酒筒 酒を入れた竹筒。
雲林 雲のかかる林。
聽鼠 むささびと、ねずみ。
野艇 野川にうかべる小舟。
鯉魚 秋風。
陰々 あまねくおおう。木が茂って暗いさま。
松下 広々として果てしない。
天邊 空の果て。遠隔の地。
牛渚 唐の李白は晩年ここに暮らし、船中で水に映る月をとらえようとして溺死したと伝えられる。
踪跡 あしあと。
飄蓬 風にひるがえりながら飛んで行くよもぎ。流浪する者のたとえ。
杖錫 錫杖をつえつく。
洞口 ぼら穴の口。
玉 たま。美しいたとえ。
蓮花 はすの花。極楽浄土にたとえる。



⑧ 同和古君元長韻

釋 寶月

踏盡清溪十里霞
櫻居總絕俗塵遮
晚來迎月歌招隱
題遍淮南叢桂花

◎同じく古君元長の韻に和す
踏み尽くす清溪 十里の霞
櫻居 總じて俗塵を遮き絶つ
晚來り月を迎え 招隱 歌う
題すは 遍く淮南叢の桂花なり

霞の中に静まる淡谷を十里も登つて、仙人の住む山は全く俗世の汚れを知らない。夜には月を迎えて隨者たちが歌っている。題はほとんど中国の古典である。

⑨ 同呈寶月和尚

久 重恭

繡腸珠腋本超群
拈拂玄言陔素聞
今接德輝何所擬
秋澄明月掃頑雲

◎同じく宝月和尚に呈す
繡腸 珠腋 本より群を起え
拈り払う玄言 陔素に聞く
今接するに 德輝かに何所擬う
秋澄み 明月 頑雲を掃う

その文才と学識はもとより群を抜き、そこから発する法話を心狭く聞いていた。今、その徳の輝きに接して疑いは晴れた。秋空は澄んで明月がかたくなな雲を払ってくれた。

⑩ 同和謝久徳老翁韻

釋 寶月

関西家學雅難群
經術詩才天下聞
老去試彈流水調
能教餘響過行雲

釈 宝月
関西の家学 雅にして群難く
經術 詩才 天下に聞こゆ
老去りて 試に流水の調を弾かば
能く 余響 過雲を過ぬ教む

関西の学者は雅で派に属さず、その経術や詩才は天下に聞こえている。私も年老いて試みに流水の曲を弾いてみたが、その響きは空を行く雲さえも止めるほどだ。

⑧ 清溪 清らかな谷川。
櫻居 仙人の住居。
俗塵 浮き世のちり、けがれ。
招隱 世をのがれてかくれている賢人を招き呼ぶ。

淮南 淮水以南の地をいう。淮南子 書名。二十一卷。前漢の高祖の孫、淮南王劉安が学者たちと共に各自の学問を論議させて編集したもの。一学派に片寄らず、当時の諸種の思想、学説が凝りこめられている。
桂花園 木原の花。



⑨ 繡腸 腸にしほはわた。美しき文才にいう。
珠 たま。真珠のように丸玉になつてゐる物。
拈 わき、わきのした。
玄 ふかい。奥深い。老子の説いた道。
陔 陔。狭に同じ。せまい。せばまる。
素 もと。もとより。いやし。そまつな。
頑 かたくな。かたいじ。



⑩ 過雲 とどめる。やめる。さへぎらる。
過雲 空行く雲もとどめるほどのすくれた音曲。歌声、楽音のすくれたのをほめていう。

⑪ 同分得六魚

津 懋

地僻人稀一巾廬
右操琴瑟左圖書
西風玉露將凝夜
明月金天欲滿初
東里先生謀四野
匡廬開士駐三車
隣君幽思存丘壑
劇似問雲自卷舒

◎同じく分ちて六魚を得る
地を僻け人稀なる一巾廬
右に琴瑟を操り左には圖書
西風 玉露 將に夜を凝らし
明月 金天に満ち初むるを欲す
東里 先生 四野を謀り
匡廬 開士 三車を駐む
隣にも君の幽思 丘壑に存し
劇しく問雲自ら巻舒すに似たり

人も稀な僻地に一つの草庵を結び、右手に琴を操り左手には書物を持つ。西風、玉露の秋の夜を一心に、明月が晴れた空に昇るのを待つ。この東の野に先生は野原を開拓し、草庵を開き、説法を施し、文人をよびよめる。隣れにも君の志はこの丘谷に存し、静かな雲の中に才能を隠しているかのようだ。

⑫ 同和津徳卿韻

釋 寶月

同人永日辟疆廬
松竹陰々對著書
鶴唳清虛雲斷後
客歌窈窕月昇初
夜禪慢擬東林社
秋興還隨潘岳車
授簡梁園非我事
胡牀長嘯幾回舒

釈 宝月
同人 永日 疆廬に辟け
松竹 陰々 著書に對す
鶴唳 清虚 雲後を断ち
客歌 窈窕にして月初めて昇る
夜禪を慢り 東林社を擬り
秋興 還 潘岳の車に隨う
簡を授かるも 梁園 我事に非ず
胡牀 長 嘯して幾回舒へん

同人は春の日差しを辺境の庵に避け、松竹の木陰に書を著している。鶴鳴いて青雲とざれ、客の歌おちゆかし、初めて月が昇る。夜の禪をおこたり東林社に代え、秋の感慨もまた昔の文人潘岳の詩に随う。書状を受けても梁園には届かず、長いすに座して詩を歌い続けている。



⑪ 巾 ぬい、めばえ、紳、くさ、いおり。
四野 四方の野原、平原。
匡廬 廬山の別名。江西省九江市の南にあり、殷・周の時代に仙人の匡俗がかくれ住んだので名づけた。
隣 善隣の別名。正しい道を興いで衆生の道を開き導く人。
三車 李白・白居易・蘇軾の三人が訪れ詩歌を残したところ。
幽思 心の奥底に抱く思い。
丘壑 おかたに。俗世間から離れ自然に開かれた土地。
問雲 静かな雲と二羽の鶴、軋じて、世俗にわずさわらずに思いのままにふるまうこと。
巻舒 まくこととばすこと。才能をかくすことと表すこと。
⑫ 同人 のどかな春の日、春の日なが。
疆 辺境のいおり。
鶴唳 鶴の鳴く声。
清虚 清らかでむなしいこと。
窈窕 旅路のうた。
夜禪 おくゆかしい、上品、しつやか。なまめかしい。
秋興 秋の感慨、秋の風物に接しておこる感慨。
潘岳 漢代、梁の孝王が造宮した名園。多くの賓客を集めて遊んだ。
胡牀 背もたれのある腰掛け。
長嘯 声を長く引いて詩歌を舒つるのびる。のべる。

⑬ 同呈寶月和尚

◎同じく宝月和尚に呈す

樺 公禮

高僧定起出青山
白鶴相邀引六環
不惜東林明月色
餘光携得照人間

高僧 定起 青山を起き出で
白鶴 相邀え六たひ環を引く
惜からず東林 明月の色
余光携え人間照すを得たり

高僧は定めし青山を起き出すと、白鶴が出迎えて六度も輪を描いている。東林の詩会に明月は色を惜しまず、余光を携えて俗世間を照らしにくれた。

⑭ 同得四豪

安 宗國

安 宗國

萬嶽秋晴華月高
問窓相近酌村醪
光流鞍水金波湧
影映珠峯玉兔朝

萬嶽 秋晴れ華月高く
問窓 相近え村醪を酌む
光 鞍水に流れ金波湧く
影 珠峯に映し玉兔朝る

◎同じく四豪を得る

山霧蒼々如過雨
風松謾々似生濤
醉來長嘯幽莊裏
謾倚絲桐窈窕操

山霧 蒼々として過ぐる雨の如く
風松 謾々として濤生すに似たり
醉い來たりて 幽莊の裏に長嘯す
謾りて絲桐に倚り窈窕を操る

山の峰々に秋晴れて満月が高く、静かな部屋に客を迎え入れて地酒を酌む。光が川に流れて金波が湧き、影を山嶺に映して満月が過ぎる。山のもやが青々と通り雨のように、松風が鳴り響いて波が起さる音の中で長々と歌う、あなとつて琴に向かい、奥ゆかしく奏でる。



高僧 徳の高い僧。善知識。
東林 東林社のこと。詩会の名稱。
余光 あまつている光。余分の光。おかけ。恩恵。
人間 俗世間。俗界。人界。人類。

⑯ 万嶽 すべての山。華月 花と月。問窓 静かな窓。村醪 地酒。にこりざけ。どぶろく。鞍水 川の名。珠峯 美しい山。玉兔 美しい月。

山霧 山にかかるもや。蒼々 草木などが青くしげるさま。風々 風の起こるさま。松風の音の形容。長嘯 声を長く引いて詩歌をうたう。絲桐 琴の別名。窈窕 おくゆかしい。上品。しとやか。なまめかしい。

⑮ 同得文韻

◎同じく文韻を得る

藤 忠維

藤 忠維

郊南亭館傍江濱
山翠蒼々白日曛
上客風流裁美錦
高僧杖錫下青雲
兼葭月照秋將半
桂樹花開夜自薰
坐久清談迷出處
何來天籟更紛々

郊南の亭館 江濱の傍
山翠 蒼々として白日曛し
上客の風流 美錦を裁ち
高僧の杖錫 青雲を下る
兼葭 月照 秋將に半ば
桂樹 花開き夜 自ら薫る
坐して清談 久しく出處に迷う
何ぞ天籟 来たり更に紛々たり

郊南の亭館は川のほとりに在つて、山の緑が生い茂つて昼なお暗い。上客の風流は着飾ることをせず、高僧が錫をついて青雲を下つてきた。水辺の芦を月が照らし秋まことに半ば、桂の花が開いて夜に薫る。座談も高して出處をためらい、なぜか風の音まで加つて賑やかなことだ。

⑯ 同得一東

宇 郁

宇 郁

水抱孤村一徑通
隔溪雞犬暝雲中
鶴巢門外長松樹
花開籬間老桂叢
明月在天親枕席
青山迎客拂絲桐
故人秋興仍呼酒
不識朝來鬢作蓬

水に抱かれた孤村に一徑通ず
溪を隔て雞犬 雲中に暝る
鶴巢 門外 長松に長じ
花開く籬間 老桂を叢む
明月 天に在り枕席を親しみ
青山 客を迎え絲桐を払う
故人 秋興して仍ち酒を呼ぶ
朝來たり鬢 蓬と作るを識らず

川に抱かれ孤立した村に一本の小道が通じ、谷を隔てた雲の中に鶏や犬が眠っている。鶴の巢は門外の松の木にあり、軒先には花開く桂の古木を集めている。明月は天にあり寝転がって親しみ、青山は琴を払つて客を迎える。故郷の人は秋を堪能して酒を求め、朝になつて髪が蓬の葉のように乱れたことにも気がつかない。



郊南 城外の南。
亭館 別荘。
江濱 川のみどり。
山翠 山のみどり。
白日 輝く太陽。日中。真昼。
美錦 美しい錦。官位。学徳に關していう。
兼葭 水草の名。おぎとあし。桂樹 木犀。
清談 高尚な話。俗ばなれした思想によつて、俗世間の形式的なことを打破しようとする。論じ合つた談論。竹林の七賢で有名。
天籟 自然の音響。風の音など紛々 乱れるさま。こたつこ。

孤村 一つのむら。
一徑 一本の道。
雞犬 にわとりとぬ。
籬間 のきあたりの。のさば。
老桂 木犀の老木。
枕席 まくらとしとね。寝具。転じて、寝ること。
絲桐 琴の別名。
故人 古からの知り合い。昔なじみ。
秋興 秋の感興。秋の風物に接してむこる感興。
蓬 びんのみだれ。蓬髪。よもぎのように乱れた髪。

⑮ 同得四支

松 世民

山館蕭條捲薛帷
月輪初上欲圓時
清風露冷兼葭色
秋雨花開桂樹枝
橋畔吟詩人未睡
雲中飛錫鶴相隨
共言良宴須盡醉
明夜陰晴不可知

◎同じく四支を得る

松 世民

山館 蕭條として薛帷を捲き
月輪 円き時を欲して初めて上る
清風 露冷やかなる兼葭の色
秋雨 花開く桂樹の枝
橋畔 詩を吟じて人未だ睡らず
雲中 錫を飛ばし鶴相隨う
共 共に言う良宴 須く酔い尽くせし
明夜の陰晴 知るべからず



山荘はもの静かに麻の簾を巻き上げ、月は丸くなるのを欲して昇つて来た。秋風の冷たい露が水辺の葭の色を変え、秋雨の中に木屋の枝が花を開かせている。橋のたもとで人は眠らずに詩を吟じ、雲の中では錫を飛ばす仙人が鶴を従えている。共に宴を歡びどにかく酔つてしまへど、明日、十五夜の天気は知つたことではない。

⑯ 同得八庚

吉 貞

明月隣三五
披襟近前楹
林疎看鳥宿
草偃聽蟲鳴
僧自懸珠至
人皆舉桂情
中秋縱可待
誰與卜陰晴

◎同じく八庚を得る

吉 貞

明月 三五に隣る
披襟するは近前の楹
林疎に鳥宿るを看
草偃すに蟲鳴くを聴く
僧自、ら珠を懸け至り
人皆な桂情を舉ぐる
中秋 縱に待つべし
誰ぞ與に陰晴を卜わん



明月十五日の前夜に、山荘に集い心の内を明かす。林の中に散在する鳥の巢を見、草むらに鳴く虫の声を聞く。僧が数珠をかけて到着し、人はみな香り高い木屋の花にたどえた。明日の中秋を楽しみに待とう。誰が明日の天気を占うだろうか。

桂情 桂月日に生えているといふ伝説上の木、月桂。
※桂林の一枝に自分に与えられた官職に満足しないたとえ、少しばかりの出世。桂の林の中の一枝を得たに過ぎない意。
陰晴 くもりと、はれ。

⑰山館 山の別荘。
蕭條 物静かなさま。
薛帷 山荘で編んだとほり、すだれ。
兼葭 水草の名。おぎとあし。
橋畔 橋のたもと。
陰晴 くもりと、はれ。

⑰ 同得侵韻

久 重恭

積翠高堂集
良山晴月臨
一輪將滿夜
四美共并今
酒泛玲瓏玉
人歌窈窕吟
雅筵俱戀賞
遮莫聽難音

◎同じく侵の韻を得る

久 重恭

積翠の高堂に集い
良山の晴月を臨む
一輪 將に夜に満ち
四美 共に今并ぶ
酒は玲瓏の玉を泛べ
人は窈窕を吟じ歌う
雅筵 俱に恋賞し
遮 莫 難音を聴く

積翠館の高堂に集つて、良山の晴月をのぞむ。一輪の月がまさに夜空を照らし、周囲の美しさをも出し出した。酒は透き通つて玉露を浮かべたように、人は奥ゆかしさを吟じ歌つた。雅な宴で秋を観賞しつくし、さもあらんもう夜明けの鶏が鳴きはしめた。

⑱ 同重得八庚

松 世民

江天涼月影盈々
一帶星河歌且橫
吟就淮南叢桂隱
人傳牛渚泛船情
水邊風起青蘋色
樓外雲流玉笛聲
別有高僧來與賞
焚香水簾坐秋晴

◎同じく重ねて八庚を得る

松 世民

江天に涼月の影 盈々と
一帶の星河 歌かに且横う
吟すは淮南叢の桂隱に就いて
人は牛渚に船を泛ぶの情を伝う
水辺の風は青蘋の色を起し
樓外の雲は玉笛の声を流す
別して高僧来る有りて與に賞し
香を焚き水簾秋晴に座す

川と空に涼しい月の影が満ちあふれ、一帶の銀河も輝いて横たわっている。歌うのは淮南に埋もれた才子の「一節、牛渚に舟を浮かせる」情感を人は伝える。水辺の風は水藻の色を起し、樓外の雲は笛の音色を吹き流す。特に高僧が同席して共に觀賞し、香をたき御座を敷いて秋晴れの下に座した。



⑰積翠 山荘の名。緑を集める意。高堂 高く立派な家。
晴月 晴れた空に浮かぶ月。
四美 周囲の美しさ。
玲瓏 透き通るよう美しいさま。
窈窕 おくゆかしい。上品。しとやか。なまめかしい。
雅筵 みやびな筵。
恋賞 心が引かれて、めで眺めること。
難音 にわたりの鳴き声。
⑱江天 川と空。
涼月 秋の夜の月。
盈々 水の満ちているさま。
星河 あまのかわ。銀河。
淮南叢 淮南子に書名。二十一卷。前漢の高祖の孫。淮南王劉安が学者たちに各自の学問を論議させて編集したもので、一学問に片寄らず、当時の諸種の思想、学説が載せてある。
桂隱 隠れた才子をいう。
牛渚 秋の南にある湖の名。明の詩人袁宏道が牛渚に舟を浮かべ詩を詠んでいると、それを聞いていた名家謝朓に認められたという故事。「後漢記」。
青蘋 水草の名。でんじょう。かたはらみ。
玉簾 美しい簾。
水簾 汚れない御座。敷物

中秋十五日 青松館に集う



①十五夜青松館集分得青韻

釋 寶月 積 宝月

西風葉落中玄亭
明月迎人偶此經
冷露有聲飛桂子
輕雲無影散松庭
三秋自命思稽駕
一夜誰浮訪戴舸
豈唯游梁因病癢
滿頭白髮已星々

西風に木の葉が草庵に落ち、明月は人を迎えてこの経に会う。酒を
持て声がかかり、家の子は走り、軽い雲は影もなく松の庭に散る。こ
の三年、自ずから命じて公務を退きたいと思ひ、一夜、思ひ立つて小舟
に乗って訪れた。なぜかたまたま梁に遊ぶだけのこゝろ、ちなみに私は不治の
病、頭には白髪がぼつぼつと満ちている。

◎十五夜青松館に集い分けて青の韻を得る

久留米城の外堀に近い山荘と思
われる。
中玄亭 山亭 桂子 桂子 桂子
玄 老子の説いた道
亭 はずまや
桂子 かつらの実、人の子をい
う美称。
三秋 三ヶ年、三秋の思い。
稽 ところ。
舸 天子の乗り物、籠に乗れる
身分。
舸 いたいたいた小舟。
癢 におらない病氣、不治の病
星々 ぼつぼつと白いさま、白
髪まじり。

②同得六魚

安 宗國

月掛青松冷中廬
清光藉爾弄琴書
袁宏泛艇歌何朗
庾亮登樓興有餘
萬里秋風飄白雁
一江華露滴紅葉
良霄自古多幽賞
不遺詩懷我輩虛

◎同じく六魚を得る

安 宗國

月 青松に掛かり中廬冷ややか
清光を藉り爾琴書を弄ぶ
袁宏 艇を泛べ何ぞ朗かに歌う
庾亮 樓に登るの興余り有り
万里 秋風 白雁 飄い
一江 華露 紅葉に滴る
良霄 古より幽賞多し
詩を遺らずんば我輩虚く懐わん

月は青松の上へかかり山荘は冷ややか。月光を借りて君は琴や書
物を楽しんで。詩人袁宏は舟を浮かべて朗らかに歌い、庾亮は樓
に登って興じた。遠く秋風に渡り鳥は漂い、川の露は紅葉の溝に滴る。
穏やかに晴れた夜、昔から愛でること多く、詩がなければ私には虚し
く思えばかりだぞう。

③重得寒字

安 宗國

月出皎兮海之滄
金波漾々湧清淵
薜蘿牽蔓青綠壁
叢桂垂花紫滿欄
江樹含烟多夜色
山雲映水動秋寒
涼風吹滿光如雪
誰向西宮歌素紈

◎重ねて寒の字を得る

安 宗國

月皎かに出する海之滄
金波 漾々として清淵に湧く
薜蘿 蔓を牽く青緑の壁
叢桂 花紫に垂らし欄に満つ
江樹 烟を含み夜色 多く
山雲 水に映じて動き 秋寒し
涼風 吹き 光満つと雪の如く
誰ぞ西宮に向い素紈を歌わん

満月が海辺に昇り、金波が揺らいで半瀬に湧きあがるよう。山荘の
堀はツタに覆われ、草むらの桂の花が紫色に垂れて欄干を満たしてい
る。川岸の木々は烟を含んでたどがれ、山の雲を映す水は動いて秋の
寒さ。冷たい風が吹き、光が満ちて雪のようだ。誰か西宮に向かつて蘇
東坡の「素紈」を歌っている。

②山廬 草むきのいおり。草庵。
琴書 琴と書物。琴を弾奏する
ことと読書すること。
袁宏 明代の詩人。古文辞派に
反対し自由平明な文体を主張し
た。



華露 花のように美しい露。
紅葉 紅に染まったみぞ。
良霄 よい夜。穏やかに晴れ
た夜。
幽賞 静かにほめ味わう。

③漾々 ただよう。水がゆれ動
くさま。
清淵 きよやかな早瀬。
薜蘿 かすら。つる。転じて隠
者の住居。
叢桂 草むらの桂の木。
江樹 川岸の木々。
涼風 秋風。さわやかな風。
素紈 秋風。秋風。涼しい縲り絹。西川
有。絵を描くための素地。
蘇東坡の詩
素紈 秋風 秋風
まじりつくれば 二に頭ち
来る。無一物中 無尽蔵
花あり月あり樓あり
真つ白い素地が第一。色をつけ
れば第二に落ちる。何もない中
に無尽蔵の景色がある。

⑧ 重得灰韻

宇 郁

明月江天境裏開
暮雲山色影徘徊
廣庭繁露衣裳冷
高樹清風鳥鵲回
始識風流玄度興
肯辭賦詠莊才
嫦娥夜々看肥瘠
却憶明皇百尺臺

◎重ねて灰の韻を得る

宇 郁

明月 江天の境裏に開き
暮雲 山色に影徘徊す
広庭の繁露 衣裳冷く
高樹 清風 鳥鵲回る
始めて識る風流 玄度の興
肯て辞賦し 莊才を謝して詠む
嫦娥 夜々 肥瘠を見るに
却て憶う 明皇百尺の台を

明月は海と空の境を開いて、暮れ方の雲が山の色に影を映して徘徊する。広い庭の繁みに露が衣裳に冷たく、高い木に秋風が吹いてカササギが旋回している。初めて知る、風流玄度の興を、あえて散文をつくり老荘の才に謝して詠む。月が夜々満ち欠けるのを見て、なおのこと玄宗皇帝の広大な台地を思う。

⑨ 同得先韻

藤 忠継

月出滄江渺水煙
清輝何處不嬋娟
波揺漢影蟾借没
雲宿松頭兔欲眠
客酌元規樓上酒
興疑刻曲雪中船
醉凭欄檻閨山夜
向曙誰家玉笛傳

◎同じく先の韻を得る

藤 忠継

月 滄江に出で水煙渺かに
清輝 何処にか輝娟ならずや
波に漢影揺れ 蟾 借く没し
雲宿る 松頭 兔眠らんと欲す
客は酌む 元より規る樓上の酒
興は 刻曲「雪中の船」を疑て興す
酔つて欄檻に凭る 閨山の夜
曙に向い誰の家ぞ 玉笛を伝えん

月が寒い川の水煙の向こうに出て、清らかな輝きは、なんとあでやかで美しい。波に天の川の影が揺れ月も姿を消し、松の上に雲が宿り月も眠たいのどう。客は用意された樓上の酒を酌み、刻曲「雪中の船」を疑して興する。酔つて欄干にもたれる故郷の夜、曙に向かつて誰の家か美しい笛を伝えている。

⑩ 江天川と空

暮雲 夕方の雲
徘徊 うろつき歩く
鳥鵲 からすと、みやびやかなこと
高樹 高樹なおもむき
風月玄度 長い間、会っていない人のことをおもつこと、また、故人を思い出すこと。「玄度」は人の名前。風月は美しいが玄度がいけないのは非常に残念だ。と語った故事から。
詠賦 文体的名、散文的な韻文、莊才、老荘の才。
嫦娥 月の別名。また、月にいるという美人の名。
肥瘠 体がこえていること、やせていこと。
明皇 唐の玄宗皇帝をいう。
百尺 非常に高いことのため



⑩ 同得十蒸

松 世民

雨霽孤城散鬱蒸
河邊樓榭晚峻嶒
瑤琴曲斷天風落
白鶴聲高山月昇
影落半空銀漢水
心寒一片玉壺冰
更知萍跡元難定
階上仙槎不耐凌

◎同じく十蒸を得る

松 世民

雨霽れ孤城 鬱蒸を散らし
河辺の樓榭 峻嶒 晩る
瑤琴の曲 天風落つるを断ち
白鶴の声高く 山月昇る
影落とす 半空 銀漢の水
心寒し 一片 玉壺の水
更に萍跡元を定め難きを知り
階上 仙槎 凌ぐに耐えず

雨晴れ孤城のモヤは散つて、川辺の物見櫓も山嶺も暮れた。美しい琴の曲が空から落ちる風をささきり、白鶴の声は高く山に月が昇る。影を落とす半空に天の川が、心を寒くする美しい壺の一片の水。さらに浮き草の跡は定めがたきを知り、階上に見える仙人の筏も凌ぐに耐えないだろう。

⑪ 重得十一真

松 世民

銀河如帶桂樓間
雨後林丘白露新
風度孤城傳玉笛
雲取萬木轉水輪
清輝每月珠無價
紫氣衝天劍有神
湖上青山秋一色
從君長欲寄斯身

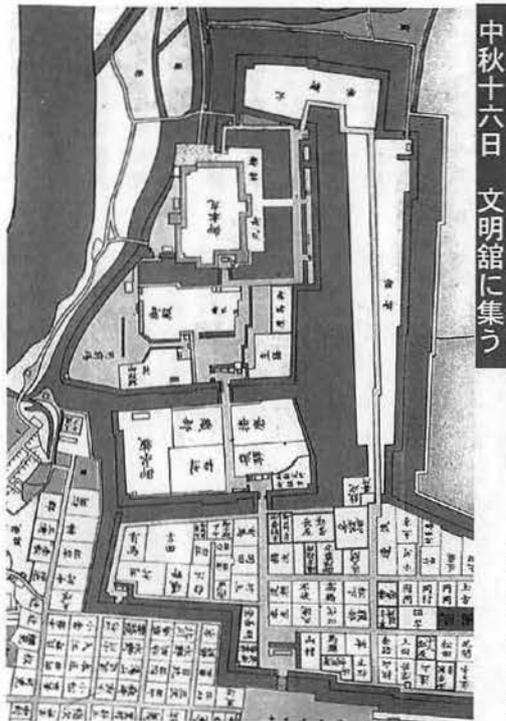
◎重ねて十一真を得る

松 世民

銀河 帯の如く桂樓の間
雨後の林丘 白露新なり
風度の孤城 玉笛伝わり
雲 万木を収め 水輪と転ず
清輝 月珠を奪い 価無く
紫氣 天剣を衝いて 神有り
湖上の青山 秋一色
君長に従い斯身を寄せんと欲す

銀河が帯のように高殿から見え、雨後の林や丘には白い露が新しい。風わたる孤城に笛の音が聞こえ、雲は森を収めて水の輪となる。清き輝きは月の珠を奪って価値を失い、紫の雲が天剣をついて神々しい。湖上の青山は秋一色、目上の者に従いこの身を任せるしかあるまい。





天保時代 久留米城下図 (久留米市史第二巻付図)

中秋十六日 文明館に集つ

⑫ 同謝諸君見訪得七陽
 樺 公禮
 携琴清夜倚茅堂
 翹首乾坤思渺茫
 忽有神僧来卓錫
 更教狂斐各成章
 風吹池面魚潛穩
 月在天心雁影長
 亦恐明朝星散後
 楚雲湘水幾年霜

◎同じく諸君の見訪を謝し七陽を得る
 樺 公礼
 琴を携え清夜の茅堂に倚り
 首を翹げ乾坤渺茫たるを思ふ
 忽ち神僧有り卓錫来たり
 更に狂斐せしめ各章成る
 風吹き池面の魚潜り穩れ
 月天心に在りて雁影長し
 亦明朝星散る後を恐れ
 楚雲湘水幾年の霜



⑬ 茅堂、茅葺きの御堂・草庵。
 乾坤、天地の二の具。
 乾地、即ち天下をかけ、運命を
 かけて、のるかするかの犬勝負
 (さむらいご)。
 神僧、神道力のある僧。
 渺茫、広く奥てしないさま。
 卓錫、錫にすく。名僧。
 狂斐、くるいなびかす。
 明朝、明の朝廷・王朝・時代。
 楚雲湘水、楚の国の雲に湘江の
 流れ。
 秋思、許渾(晚唐の詩人)
 楚雲湘水憶同登
 雲や水の流れに、昔の仲間を思
 い起す。高歌、一曲別館を掲
 ふ昨日の少年今は白頭

① 十六夜文明館集 ◎十六夜文明館に集う

樺 公禮
 昨夜嫦娥盈
 今宵蟾蜍缺
 盈缺雖有時
 清光不曾滅
 況此良宴會
 邂逅遇諸哲
 掀簾坐吟哦
 緇帙互論說
 豐肴滿玉盤
 桂尊美且冽
 琴韻何瀏亮
 月下曲未闌
 西風吹庭樹
 枝葉盡摧折
 歲月款代謝
 人生頻睽別
 常懼朝露身
 宿志中道輟
 豫樂宜及時
 艱虞貴執節
 將子重平生
 千秋實絕

樺 公礼
 昨夜嫦娥盈ち
 今宵蟾蜍欠く
 盈欠の時有時と雖も
 清光曾て滅せず
 況や此良宴に會し
 邂逅諸哲に遇う
 簾を掀け坐して吟哦
 緇帙互に論説す
 豊肴玉盤に滿ち
 桂尊美しく且冽し
 琴韻何ぞ瀏亮として
 月下の曲未だ闌らざ
 西風庭樹に吹き
 枝葉摧折を尽くす
 歲月、款に代謝し
 人生頻りに睽別す
 常に朝露の身を恐れ
 宿志、中道を輟む
 予、樂宜しき時に及び
 艱虞して貴き節を執る
 將に子は平生を重んじ
 千秋實絶する無し



昨夜月は満ち、今宵月は欠ける。満ち欠けの時はあれども、清い光は滅することがない、いわんやこの良宴に會し、諸先輩に出會つた。簾を上げ座して詩歌を吟じ、香物を開いて互いに論説した。豊かな肴が大皿に盛り、樽酒は美しく清い。琴の音も明らかに、月の下に曲はまだ終わらない。西風が庭木に吹いて、枝葉をくしき折り尽くした。歲月はにわかに移り変わり、人生にも別離がある。常にはかない身を恐れ、志に反して中立を廢す。楽しみの中の最中に、極んで音を調整した。まさに子は平常心を重んじ、いつでも動揺しないものだ。

文明館、各詩文より萃するに、久留米城の外門や南樓の見える川岸に立地している。久留米藩の学問所修道館の前身、後の明善堂付近か？
 嫦娥、月の別名。また、月にいるという美人の名。
 蟾蜍、ひきかえる、月の別名。
 瀏亮、みちがけ。
 無端、会つ、めぐり会つ。
 吟哦、詩歌をうたう。哦も、うたう意。
 緇帙、書物を開く、読む。
 桂尊、桂の木で作った酒樽。
 瀏亮、清らかなさま。朗らかなさま。音にいう。
 摧折、くしきおろす。
 代謝、次々と入れかわり移りかわること。
 睽別、そむきわかれる。
 朝露、あさつゆ。はかないもののたとえ。
 宿志、前々からの志。
 予、よるこびたのしむ。
 艱虞、なやみくるしむ。
 平生、ふだん。平常。
 實絶、はるかにかけへたつていいるさま。

② 同得雲字

◎同じく雲の字を得る

釋 寶月

積 宝月

中秋過三五

中秋 三五を過ぎ

清賞亦今辰

清賞 亦今辰

聊謀文雅士

聊か謀る文雅の士

駕言遊河濱

駕言 河濱に遊ぶ

合絃歌窈窕

絃に合わせ歌は窈窕

並翼欣來賓

翼を並べ來賓欣ふ

輕雲飲園樹

輕雲 園樹を飲み

華月麗城闌

華月 麗城の闌

嬋娟擬露竹

嬋娟 露は竹を擬え

離披散風雲

離披 風は雲を散らす

金波沿素景

金波 素景に沿い

紫虛洗纖塵

紫虛 纖塵を洗う

蟋蟀寒近牀

蟋蟀 近床に寒し

悲鳴戀所親

悲しく鳴き恋親う所

感物傷吾心

物に感じ吾心傷め

作詩爲君陳

詩を作るは君に陳ぶるため

離合無常數

離合 常數 無く

身世有屈伸

身世 屈伸 有り

別後逢清光

別後 清光に逢う

相思若比隣

相思 こと比隣のこし

中秋十五夜を過ぎ、親月は今夜も、文雅の士がもくろみ、伝言して河津に遊ぶ。弦に合わせ奥ゆかしく歌えば、居並ぶ客が喜ぶ。輕い雲が園舎にかかり、華月は麗城の外門にかかる。あてやかな露は竹にしたり、ちりじりに風は雲を散らす。金波は月影に沿い、大空は細かい塵を洗う。虫が寒い床の近くに、悲しく鳴いて恋慕うところ。物に感じてわが心を傷め、詩を作るのは君のためだ。離れ会えるも定まりなく、渡世も軒余曲折あり。別れた後に清光に逢い、互いに思うこと隣人の心だ。



③ 同得十一尤

◎同じく十一尤を得る

安 宗國

安 宗國

月上兼霞露氣流

月 兼霞の上 露氣流る

江城夜色映南樓

江城の夜色 南樓 映え

廣寒風冷熾娥瘠

広寒の風 熾娥 冷やかに瘠せ

碧落雲澄鴻雁愁

碧落 雲澄 鴻雁の愁

詩賦高吟青玉案

詩を賦し高く吟す青玉の案

琴樽聊攪紫貂裘

琴樽 聊か攪る紫の貂裘

更闌忽聽清砧響

更に闌 忽ち聴く清砧の響き

腸斷千山落葉秋

腸を断つ千山 落葉の秋

川岸にもや流れ、城郭は夕闇に沈む。風が吹いて月は冷ややかに、空は澄んで旅の愁い。詩を作つて歌い、琴に酒をあおつて衣服を乱す。響たけなわ砧の音が響き、落葉の秋に断腸の思いだ。



④ 同得深字

◎同じく深の字をえる

宇 郁

宇 郁

天高冷露滴空林

天高く冷露 空林に滴り

日落孤雲落碧岑

日落ち孤雲 碧岑に落つ

明月俱懸湖海夢

明月 俱に湖海に懸かる夢

青山未結蘼蘿心

青山 未だ結ばず蘼蘿の心

家々砧杵秋風動

家々の砧杵 秋風 動く

處々樓臺夜色深

処々の樓臺 夜色 深し

取醉何辭同枕簟

取酔 何ぞ辞さん同枕簟を

不知明旦各商參

知らずや明旦 各商 參ずを

天高く冷たい露が空林に滴り、日が落ちて一つの雲が青い峯にかかる。明月とともに湖海にかかる夢、青山はまだ山荘の心を結ばない。家々の砧の音が秋風を動かし、処々の樓台に夜の景色は深まる。酔いをさまして山荘を去る、酔いが覚め、何で同じ寢室を辞すのだ、知らずや夜が明ければ市がはじまる。



①兼霞 水草、おぎと、あし。
②江城 水辺の城郭。
③広寒 広寒宮 月の中にあるという宮殿の名。
熾娥 月の別名。
碧落 あおぞら、碧空。
鴻雁 渡り鳥。
青玉 翡翠。
琴樽 琴と樽、音楽と酒。
紫貂裘 冬服、防寒着。
清砧 冬服、防寒着。
清砧の響き きよい砧を打つ響き

⑨ 同用徳卿韻

松 世民

◎同じく徳卿の韻を用う

飛樓百尺敞秋陰
 握手清宵意氣深
 天冷流星低半樹
 夜寒棲鳥噪空林
 臨風欲下松間榻
 迎月閑揮壁上琴
 莫怪衡門常謝客
 明時好是老清吟

松 世民
 樓を飛ぶこと百尺、秋の陰は長く、手を握ると今宵の意気は深い。空は冷たく流星は低く木の半ばに、夜は寒く住む鳥は空と林にさわがし。風を求めて松林の長いすに下り、月を迎えるひま壁上に琴をふる。怪しむことはない、隱者の住まいは常に客を許し、太平の世に、よしければ老子を吟じよう。

⑩ 同席上探題得新嫁娘

釋 寶月

◎同じく席上に題を探し「新嫁娘」を得る

酒食騰阿舅
 衾牀擁阿姑
 唯慚執巾櫛
 含笑侍吾夫

釋 寶月
 酒食を阿舅に薦むるに、衾牀に阿姑を擁く、唯、慚じ巾櫛を執り、笑を含み吾夫に侍る。

酒と食べ物を舅にすすめる、舅は寢床に姑を抱こうとした。姑はただ取じて櫛をとり、笑みを含んで、わが夫にはべつた。



⑪ 同得夜度娘

宇 郁

◎同じく「夜娘を度る」を得る

玉簪遺碧神
 錦袖拂深前
 只恨新晴月
 分明照露行

宇 郁
 玉簪、碧神に遺し、錦袖、深前を払う。只恨むは新晴の月、分明に露行を照らす。美しいかんざしを草むらに残して、着物の袖を深い茨に取られた。ただ恨めしいのは晴れた空の月、あきらかに露わな行いを照らしていた。



⑫ 同得子夜歌

藤 忠継

◎同じく「子夜の歌」を得る

芳樹花如散
 孤鸞夜似年
 此心君不識
 願寄月明傳

藤 忠継
 芳樹、花、散の如く、孤鸞、夜、年に似たり。此の心、君識らずや。願ひは月明に寄せて伝うを。



⑬ 同得昭君怨

安 宗國

◎同じく「昭君の怨み」を得る

一自辭金闕
 風砂撲玉鞍
 可憐氈帳夢
 夜入塞雲寒

安 宗國
 一たび自から金闕を辞せば、風砂、玉鞍を撲つ。可憐なる氈帳の夢、夜に入り雲の寒さを塞ぐ。

ひとたび自ら宮殿を去れば、風砂が人馬を襲った。可憐なる寢室の夢が、夜になつて雲の寒さを塞いでくれた。



⑪「夜娘を度る」北宗の政治家・詩人寇准の時、夜娘を度る。寇准

煙波、粉粉として千里白頭、香散り東風起る日暮、汀洲を一望する時、柔情斷えず春水の如し。

⑫「子夜の歌」晋のころの女性で歌曲をつくり大流行した。後に梁府の題となり、その曲にあわせて歌詞をつくった。子夜異歌、李白、長安、一片の月、万戸、衣を打つ声、秋風、吹き尽きず、従てこれ玉闕の情、何れの日か胡虜を平らげて、良人は遠征を止めん。

⑬「昭君の怨み」王昭君の略称、漢の元帝の女官、非常な美人であったが、匈奴の后として遣わされ、その地で死んだ。王昭君、李白、昭君、玉鞍を払い、馬上がりて紅顔に啼く、今日、漢宮の妾、明朝、胡地の女。

⑭「新嫁娘」中唐の詩人王建的詩、三日に厨下に入り、手を洗い羹湯を作る。未だ姑の食性を語んざれば、小姑をして嘗めしむ。

⑮「徳卿」津懸（津山東遷）のこと、家老有馬右近の家臣、百尺、非常に長い。清宵、静かな夜。棲鳥、住み着いた鳥。空林、空と林。櫛、長い。腰掛け。衡門、粗末な門、隱者の住まい。明時、よく治まった時代、太平の世。老老子、清吟、清らかな声で吟ずること。

⑯「新嫁娘」中唐の詩人王建の詩、三日に厨下に入り、手を洗い羹湯を作る。未だ姑の食性を語んざれば、小姑をして嘗めしむ。

酒食、酒と食べ物。阿舅、しゅうと、婦人が夫の父をいう。衾牀、寢床。阿姑、婦人が夫の母をいう。巾櫛に侍す、巾櫛（手ぬぐいとくし）をとって夫に仕える意、侍はべる。

⑰「昭君の怨み」王昭君の略称、漢の元帝の女官、非常な美人であったが、匈奴の后として遣わされ、その地で死んだ。王昭君、李白、昭君、玉鞍を払い、馬上がりて紅顔に啼く、今日、漢宮の妾、明朝、胡地の女。

⑱「新嫁娘」中唐の詩人王建の詩、三日に厨下に入り、手を洗い羹湯を作る。未だ姑の食性を語んざれば、小姑をして嘗めしむ。

⑭ 同莫愁樂

園 含章

春日照桑榆

莫愁遊路隅

柔條牽繡袂

願阿有人無

春の日は桑榆を照らしている。莫愁が道端で遊んでいるのを、柔らかな枝に着物のたもとを引かれ、振り返って見た、人の氣配を。

◎同じく「莫愁樂」

園 含章

春日桑榆を照らすも

莫愁路隅に遊ぶを

柔條 繡袂を牽き

願阿 人有るや無しやと

⑮ 同得古意

松 世民

雁歸書懶寄

愁劇夢難成

行路逢人語

胡塵未罷兵

もう雁が滞る季節なのに便りを出すのを怠り、愁うことはなほだし、故郷へ帰る夢は叶いがたい。行く道で人のうわさを聞いた、騒乱の兵はまだ止まずと。

◎同じく「古意」を得る

松 世民

雁 滞るも 書 寄すを懶り

愁 劇しく 夢 成り難し

行路 人語に逢い

胡塵 未だ兵 罷すと

⑯ 同得卓分君

樺 公禮

曾隨貴客感琴心

滌器當埴情更深

誰料一時求鳳曲

無端彈作白頭吟

かつて貴客の琴の心に感して、洗った器を炉で暖め、情をさらに深めた。誰が考えて一時の鳳曲を求めようか、そういう馴れ初めで白髪頭になっても同じ曲を弾いては歌っているのだ。

◎同じく卓分君を得る

樺 公礼

曾 随て 貴客に 随い 琴心 を 感し

滌器 埴に 當て 情 更に 深し

誰 ぞ 料らん 一時の 鳳曲 を 求むを

無 端 無くも 弾かん 白頭

吟 作して 吟す



⑭ 「莫愁樂」 宋の時代 湖北省石城の近くに莫愁という女性がおり、歌謡を得意とした。「六朝詩選」の莫愁の歌。

⑮ 「古意」 唐詩選に盧照鄰の「長安古意」がある。

⑯ 「卓分君」 前漢の司馬相如の妾、蜀の富家、卓王孫の娘、文才があった。司馬相如の琴に魅せられ駆け落ちし、酒肆を開店して家計を支えた。

⑰ 「棄婦の詩」 棄婦の詩、夫に棄てられた妻の悲しみを詠んだ時、魏詩に曹植の「棄婦篇」がある。

⑱ 「白頭吟」 洗った器、埴に當て、情、更に深し。

⑳ 「無端」 無くも弾かん白頭吟。

㉑ 「胡塵」 胡塵、未だ兵、罷すと。

㉒ 「願阿」 願阿、人有るや無しやと。

㉓ 「柔條」 柔條、牽き、繡袂を牽き。

㉔ 「雁」 雁、滞るも、書、寄すを懶り。

㉕ 「愁劇」 愁、劇しく、夢、成り難し。

㉖ 「行路」 行路、人語に逢い。

㉗ 「胡塵」 胡塵、未だ兵、罷すと。

㉘ 「願阿」 願阿、人有るや無しやと。

㉙ 「無端」 無くも弾かん白頭吟。

㉚ 「滌器」 滌器、埴に當て、情、更に深し。

㉛ 「曾隨」 曾、随て、貴客に、随い、琴心、を、感し。

㉜ 「誰料」 誰、ぞ、料らん、一時の、鳳曲、を、求むを。

㉝ 「白頭」 白頭、吟、作して、吟す。

⑰ 同得棄婦吟

津 懋

結髮初嫁日

俱期偕老親

何因詒我肆

不悔處君貧

雙鳳新昏宴

孤鸞舊好身

蛾眉終見棄

願倚一心人

髪を結んで初めて嫁いだ日、共に夫婦の契りを結び親しく会った。それがなぜか、わがままに過ぎ、君の貧しきとを悔やむことはなかつた。仲の良い夫婦の新昏の宴で、昔なじみの才女が現れた。顔立ちのよい美人、ついに新婦を見捨て、願うは一心に思う人のそばへ。

◎同じく「棄婦を吟す」を得る

津 懋

髪を結い初めて嫁ぐ日

俱に偕老 親しく期う

何ぞ因に我肆に詒るも

君の貧しき 処を悔やまず

双鳳 新昏の宴

孤鸞 旧好の身

蛾眉 終に見棄て

願い倚るは一心の人へ

中秋十七夜 友竹堂に集う



⑰ 「棄婦の詩」 棄婦の詩、夫に棄てられた妻の悲しみを詠んだ時、魏詩に曹植の「棄婦篇」がある。

⑱ 「白頭吟」 洗った器、埴に當て、情、更に深し。

⑲ 「無端」 無くも弾かん白頭吟。

⑳ 「胡塵」 胡塵、未だ兵、罷すと。

㉑ 「願阿」 願阿、人有るや無しやと。

㉒ 「柔條」 柔條、牽き、繡袂を牽き。

㉓ 「雁」 雁、滞るも、書、寄すを懶り。

㉔ 「愁劇」 愁、劇しく、夢、成り難し。

㉕ 「行路」 行路、人語に逢い。

㉖ 「胡塵」 胡塵、未だ兵、罷すと。

㉗ 「願阿」 願阿、人有るや無しやと。

㉘ 「無端」 無くも弾かん白頭吟。

㉙ 「滌器」 滌器、埴に當て、情、更に深し。

㉚ 「曾隨」 曾、随て、貴客に、随い、琴心、を、感し。

㉛ 「誰料」 誰、ぞ、料らん、一時の、鳳曲、を、求むを。

㉜ 「白頭」 白頭、吟、作して、吟す。

㉝ 「無端」 無くも弾かん白頭吟。

㉞ 「滌器」 滌器、埴に當て、情、更に深し。

㉟ 「曾隨」 曾、随て、貴客に、随い、琴心、を、感し。

㊱ 「誰料」 誰、ぞ、料らん、一時の、鳳曲、を、求むを。

㊲ 「白頭」 白頭、吟、作して、吟す。

㊳ 「無端」 無くも弾かん白頭吟。

㊴ 「滌器」 滌器、埴に當て、情、更に深し。

㊵ 「曾隨」 曾、随て、貴客に、随い、琴心、を、感し。

この間30P〜35Pが省略されています。

⑬ 同

松 世民

◎同じく

松 世民

江天雨過瀟芙蓉
桂樹花開露氣濃
半夜空堂人隱几
月輪飛上萬尋松

江天に雨過ぎ 芙蓉に瀟々
桂樹の花開き 露気濃ゆし
半夜の空堂 人は几に隠れ
月輪 飛んで万尋の松に上がる

川に空に雨が過ぎ芙蓉に瀟々、桂の木は花を開き露気が濃い。夜中、人気の無くなった御堂、人は机の下に隠れ、月輪は飛んで背の高い松の上にある。



附録

⑭十四夜諸君約集積翠亭余有事不果因賦贈之

島 清

風吹明月散江涯
廻首南郊夜色移
交想陳遵投轄意
酒酣畢卓把螯時
應揮彩筆翻春雪
莫坐清光飛玉卮
愧我風塵奔走甚
無緣携手逐佳期

風吹いて明月 江涯に散り
廻首せば南郊に夜色 移る
想い交え 陳遵 投轄の意
酒酣 車を畢えるは螯を把る時
應に彩筆揮うは春雪 翻るごとく
座す莫れ 清光 玉卮に飛ぶを
我愧ずは風塵に奔走 甚しきを
縁無く手を携え佳期を逐う

風吹き明月は川の水際へ散り、振り返れば南の田野に夜の気配が、想いを交え相つち打つて客をととのめ、酒たけなわに蟹を食い尽くす。まさに彩筆を春雪が翻るごとくに揮い、座らずに清い光が玉の盃に飛ぶような絵を。私は俗事に奔走はなほたしきを恥じ、縁なく手を携え次の機会を逐う。

◎江天、川と空。
芙蓉、蓮の花。
桂樹、かつらの木。木犀。
露気、湿気をふくんだ空気。
半夜、よなか、夜半。
空堂、人気のない御堂。
几、つくえ。
万尋、非常に高いこと。

この間37Pと38Pが省略されています。

附録畢(おわり)

此の編、作者十有二人にして、今七人を喪う。戯れに此其、今を距つこと四十余年か。今や存者も亦、皆齒は墮ち髪は暗く、当時の英勃の気は人々、素落す。懐旧の深きに堪えず。巻尾に小詩を題す。



石梁權自像

四十年光去似馳
忽開此卷憶當時
亡人不返存人老
一讀娛心再誌悲
庚辰十月念一
石梁禮

四十年、光馳せ去るに似たり
忽として此の巻を開けば當時を憶う
亡き人返らず 存す人も老い
一読して心娛しく再誌して悲しむ
文政三年(一八二〇)
十月二十一日

權自、石梁、一七五四〜一八二八、江戸後期の儒學者。名は公礼、字は世儀、通稱男七、石梁と号す。筑後久留米生まれ。天明期に江戸に遊學して細井平州に従う。藩主の信を得て小姓となり、また藩校明倫堂設置に携わって教授となる。のち使番から創物頭に進み、享和二年(一八二二)に松平定信(松平定信)の命で、天明三年(一七八三)に松下世民(松陰)によって編纂されたが、文政三年(一八二〇)に権自が再編された。また昭和七年(一九三二)に権自二冊によって復刻された。

【実践報告】

咸宜園の教えを道徳教育に取り入れ、豊かな心を培う

～ 淡窓教育の学校教育・社会教育への転用 ～

中島 龍磨

この作品は、淡窓の「心」「教え」を学校教育、社会教育の場で取り入れ、その取り組みの様子や成果・課題をまとめたものである。数年間に及ぶ取り組みのため内容も膨大となった。そんな中、紙面の都合上ここではその一部を記載することになり、十分意をつくしたものになってないが、ご了承いただきたい。

目次

実践Ⅰ 学校教育への転用

1. はじめに
2. 淡窓教育の教材としての価値と道徳教育・学校教育活動への転用
3. 道徳教育や学校教育活動の具体例
 - (1) 淡窓先生の「心高身低」と三和っ子の教育活動の実践例
 - (2) 淡窓先生の「立志」と三和っ子の教育活動の実践例
 - (3) 淡窓先生の「敬天」と三和っ子の教育活動の実践例
 - (4) 淡窓先生の「休道の詩」と三和っ子の教育活動の実践例
 - (5) 淡窓先生の「治めて後 学ぶ」と三和っ子の教育活動の実践例
4. 豊かな心の醸成とくらしへの転用
 - (1) 淡窓教育は本当に素晴らしい
 - (2) 豊かな心の醸成に淡窓教育を取り入れる効果は大である
 - (3) 淡窓教育は日田の誇り、実践し広くくらしに活用していくべき
5. 今後の課題
 - (1) 地域教材の開発と学習過程の工夫
 - (2) 豊かな心を醸成する、道徳教育の充実を図る上での家庭・地域との連携の仕方

実践Ⅱ 社会教育への転用

1. 社会教育事業 平成「三花咸宜園」活動計画
 - (1) 目的
 - (2) 名称
 - (3) 対象者
 - (4) 内容
 - (5) 活動計画
2. 平成「三花咸宜園」の計画と実際の活動
 - (1) 第1講 開園式の計画及び実際の活動
 - (2) 第2講 方針・目的・活動内容及び実際の活動
 - (3) 第3講 暁大学との交流計画及び実際の活動
 - (4) 第4講 淡窓学習と夏季課題計画及び実際の活動
 - (5) 第5講 花月川での水質調査計画及び実際の活動
 - (6) 第6講 森林体験活動計画及び実際の活動
 - (7) 第7講 カヌー体験活動計画及び実際の活動
 - (8) 第8講 淡窓・咸宜園の遺物、遺跡見学計画及び実際の活動
 - (9) 第9講 通学合宿計画及び実際の活動
3. 社会教育への転用の実際
 - (1) 平成「三花咸宜園」の活動から
 - (2) 平成「三花咸宜園」の存在から

実践Ⅲ 淡窓・咸宜園教育の啓蒙

1. 平成「三花咸宜園」の心得え
2. 暁老人大学講話
3. 咸宜園世界遺産講座講話
4. 石井小学校総合学習講話
5. 広瀬淡窓の思想・生き方に学び、学びをくらしに生かす

※ 参考資料 資料1～資料11

実践1 学校教育への転用

1. はじめに

(1) 広瀬淡窓と咸宜園

大分県の西部に位置する日田市は、江戸時代徳川幕府の直轄地であった。従って、幕府より代官が着任し、九州各地の大名の一挙一動に目を光らせていた。江戸時代の後半には、西国郡代筋に格上げになり、その威厳も増した。

日田には、この代官の権威を背景に各大名にお金を貸す掛屋商人がいた。当時、大名の踏み倒し（借りたお金を戻さない）が日常茶飯事の中、日田の商人に対してこのことが出来にくかった。何故なら、日田の商人は幕府御用達であり、もし、そのようなことをするものなら幕府から睨まれお取りつぶしにあうこともある。このためこの恩恵を受けて、日田商人は確実に力を伸ばしていった。このような商人の台頭とともに日田の町は文化・経済的にも繁栄していった。従って、江戸・大坂の情報が入りやすく、同時に文化人も多く訪れた。

広瀬淡窓はこのような環境の中で生まれ育っていく。広瀬家も大きな商家であり財を築いていった。父が教育熱心であったため、幼少より学者や医者などの文化人に会う機会も多かった。淡窓は、二四歳を過ぎたころ学問教授を一生の道と決め、私塾を開くが、その教えや生き方は多くの人に共感される。そんな淡窓の咸宜園は全国各地より多くの門下生を集めた。三奪法や月旦評などの特色ある経営は、人づてに広がり、大阪の適塾や長崎の鳴滝塾とも肩を並べるものであった。この日田という地で生まれ、育ったものとして、淡窓の咸宜園教育を大切に、今日の教育に取り入れることは、命題である。そのため、学校教育活動の中に淡窓教育をうまく融合し、実行していくことにした。

(2) 道徳教育に淡窓の生き方や咸宜園でのやり方を取り入れ「豊かな心」を醸成する

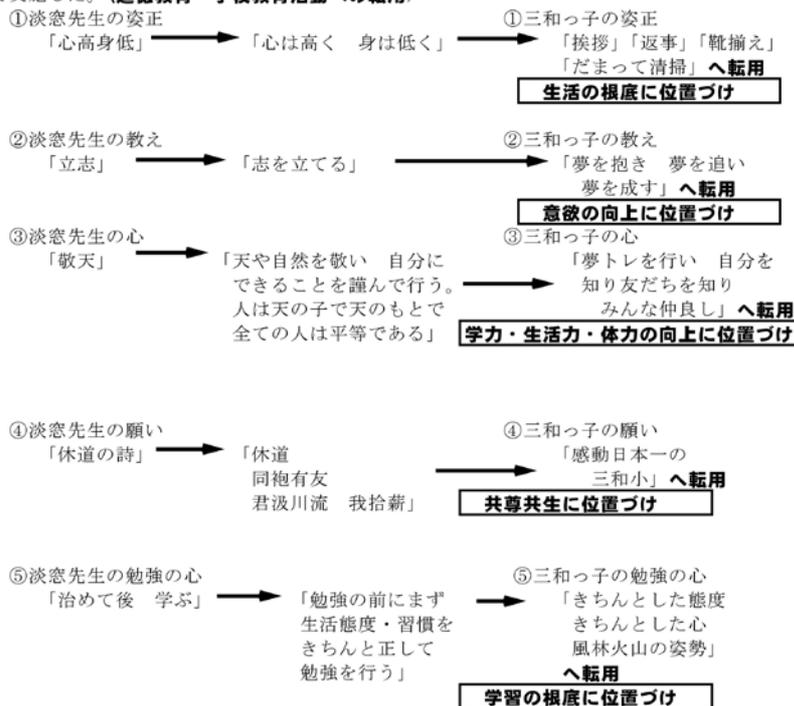
道徳教育の中で、本校が取り上げたのが「豊かな心」である。五感でしっかりと感じ実行すること、共尊共生の考え方、自尊感情の確立、仁や恕の精神に基づく行動などを身につけたときこそ豊かな心が育まれたと想定した。そして、その心が育まれたとき、本校が目指す「かしこく・豊かで、たくましい子」の下地が形成すると考えた。

2. 淡窓教育の教材としての価値と道徳教育・学校教育活動への転用

まず、淡窓の思いや咸宜園での教育の概要をまとめ、図式化し（広瀬淡窓の咸宜園教育の背景にあるもの）教材としての価値を見極めた。（教材としての価値）

この中で本校は、下記の①～⑤「心高心低」「立志」「敬天」「休道の詩」「治めて後 学ぶ」の5点を、「実態」や「目指す教育像」と対比する中で取り上げた。

そして、一つひとつの中身を考察し、道徳教育や教育活動の中に具体的に位置づけ、年間を通じて実施した。（道徳教育・学校教育活動への転用）

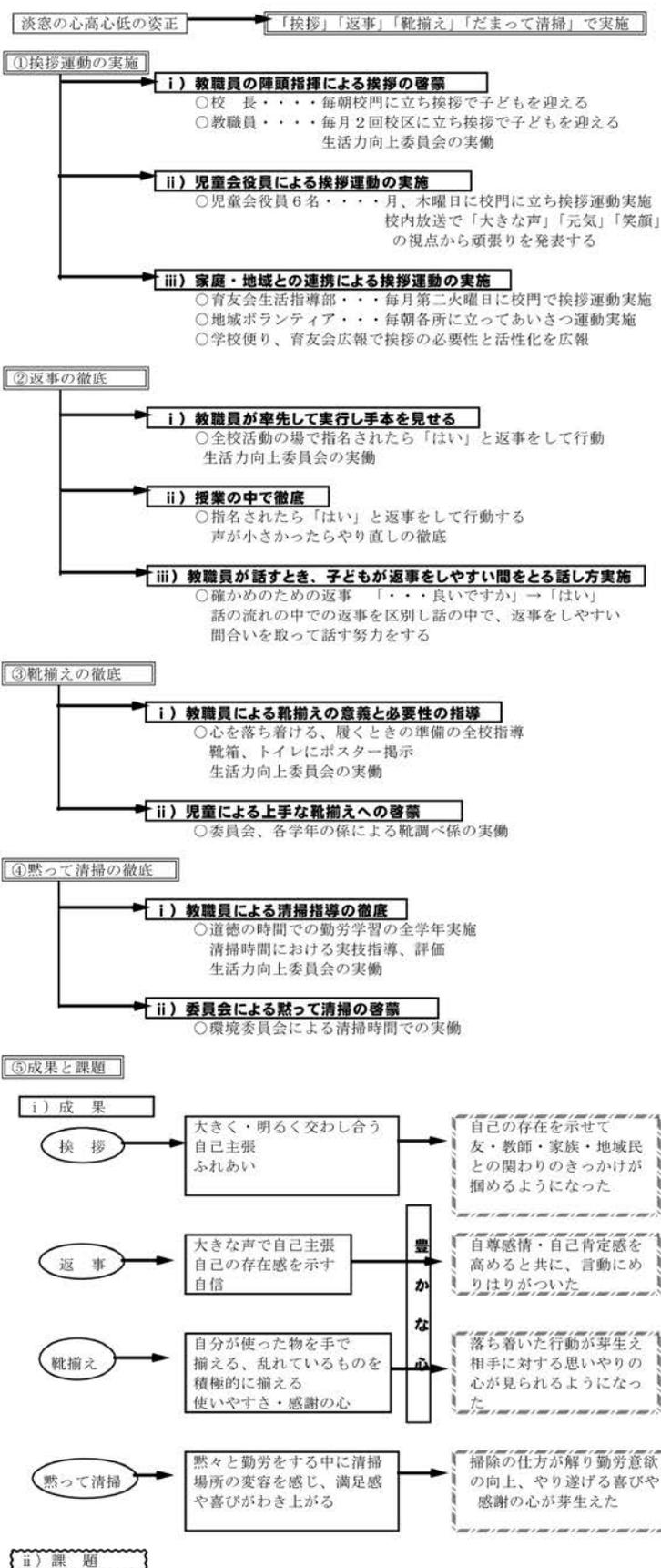


次に、道徳教育の中でこの豊かな心を育む方法・手立てを探ることに力点を置くことにした。従って、年間三五時間実施する「道徳の時間」の充実をもとより、学校教育活動の根底に道徳教育を据え、実行することにした。まず、道徳の時間の充実では、教材の開発と効果的な学習過程を確立した。教材の開発では、日田の先哲である広瀬淡窓の生き方や咸宜園での教えを「副読本」として作り上げた。又、道徳教育では、淡窓の教えを授業で取り上げたり、その教えを学校教育活動の根底に据え、すべての場所・時間で行った。

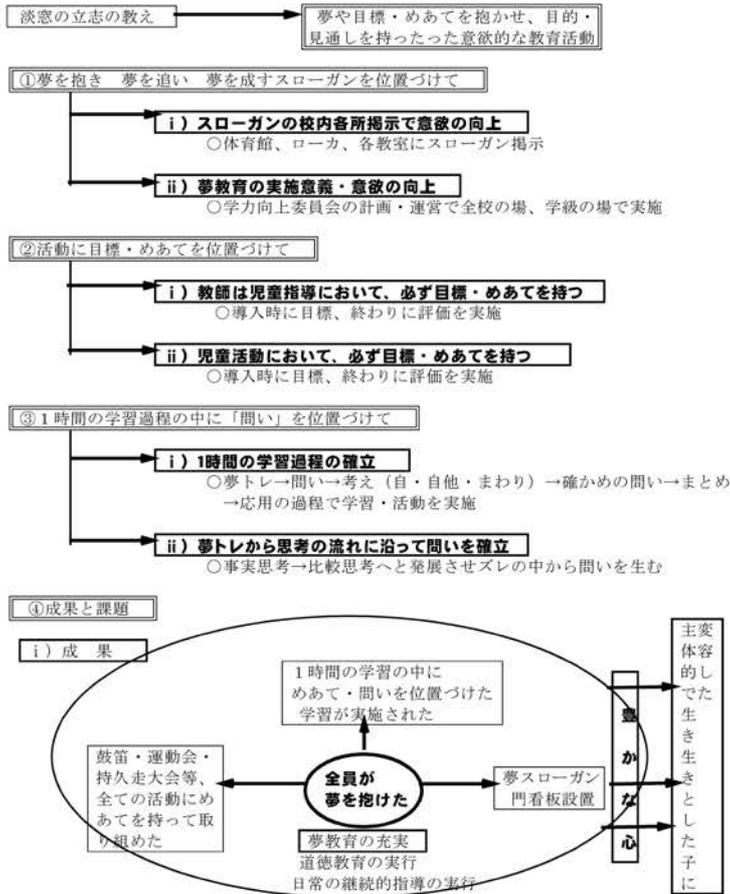
2. 淡窓教育の教材としての価値と道徳教育・学校教育活動への転用

3. 道徳教育や学校教育活動の具体例

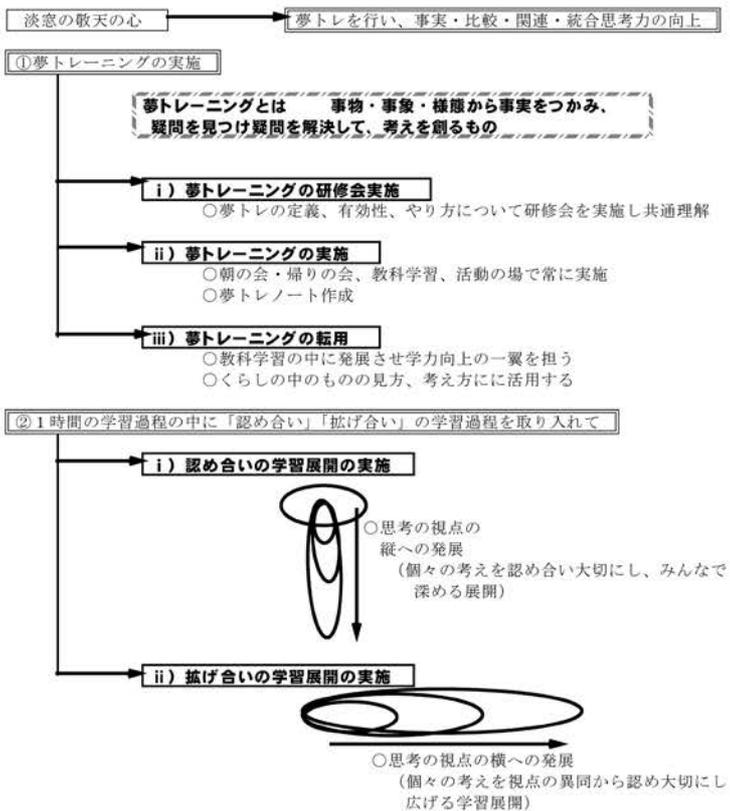
(1) 淡窓先生の「心高心低」と三和っ子の教育活動の実践例



(2) 淡窓先生の「立志」と三和っ子の教育活動の実践例



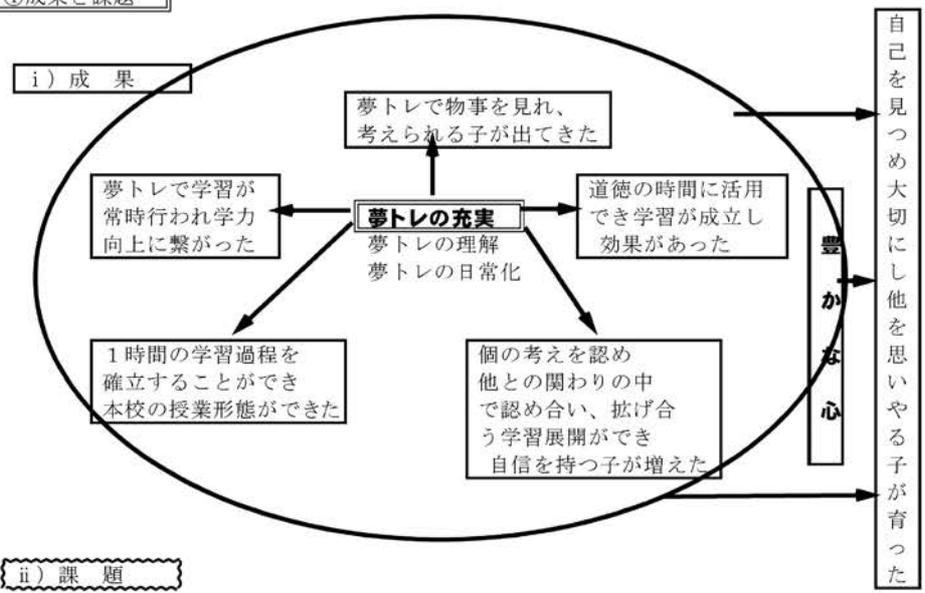
(3) 淡窓先生の「敬天」と三和っ子の教育活動



③ 道徳教育への位置づけ

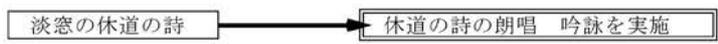
- i) 豊かな心を育む道徳教育の実施**
 - 自尊感情を向上を図る道徳の教育課程の作成
 - 自己肯定感の向上を図る道徳の時間の授業工夫
- ii) 地域・家庭と一体となった道徳教育の実施**
 - あいさつ・安全で共通した取り組みと評価の実施
 - 地域とともに作り上げる地域教材集の活用

④ 成果と課題



夢トレと道徳教育を関連させ実施するので大いに効果があった。一方で家庭との連携の大切さがあらためてはっきりした。今後、道連計を図るかが課題である。

(4) 淡窓先生の「休道の詩」と三和っ子の教育活動



① 全学年朝の会で毎日朗唱

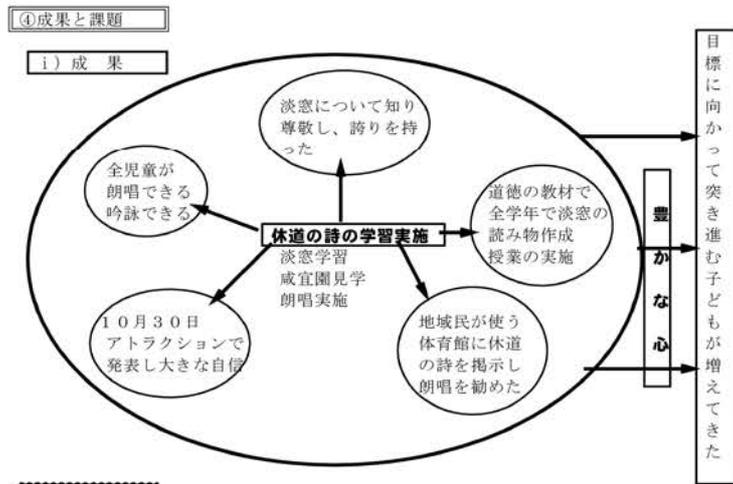
- i) 国語で学習し朗唱**
 - 詩の意味、読み方、朗唱の仕方を学習
 - 朗唱の基本を学習
- ii) 朝の会で、毎日目的を持って朗唱**
 - 全学年朝の会で一斉に朗唱する
 - 学期毎の評価を取り入れる

② 全校朝会で朗唱、吟詠

- i) 集会の前に児童会長の号令で毎回実施**
 - 外部講師による全校指導で更に効果を上げる
 - 児童会長の合図で全校一斉に朗唱する
- ii) 外部講師による指導で詩で吟じる**
 - 休道の詩の吟詠に挑戦する
 - 全校指導で吟詠できるようになる

③ 6年生の吟詠、発表

- i) 外部講師の指導による練習**
 - 淡窓の詩を高学年で詩吟する
 - 外部講師による本格始動
- ii) 発表会の実施**
 - 10月30日の公開研究会のアトラクションで3編の詩を吟ずる



ii) 課題

詩を朗唱でき、又吟詠することができるのは大きな財産である。今後、詩の内容と「くらし」とを結びつけて日々の生活を充実していくことが求められる。その結び付けの方法・手だてを探り、実証していくことが今後の課題である。

(5) 淡窓先生の「治めて後 学ぶ」と三和っ子の教育活動



①学習態度

- i) 学習道具を整える
- 名前の明記、忘れ物無くように徹底する
 - 終わったら「すぐに補充」の意識を高める
- ii) 学習姿勢を整える
- 正しい姿勢、態度の徹底指導と確立
 - 聞き方、話し方のルールの指導と評価の取り入れ

②生活態度の徹底

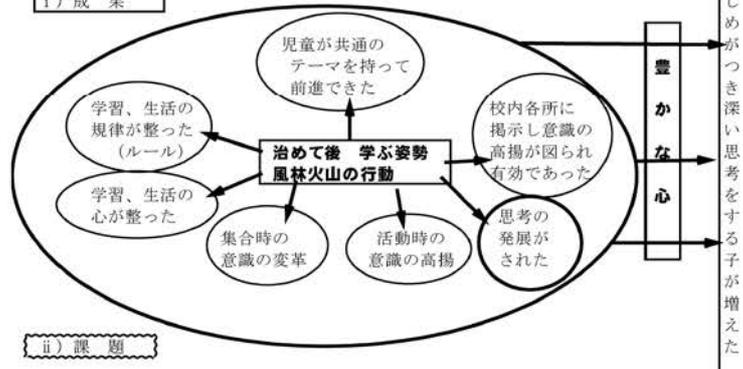
- i) 生活のきまりを守る
- ルールの徹底と実行
 - 適切な評価の取り入れ
- ii) 目的を持ったくらしづくり
- くらしの中に役立つルールの見直し
 - くらしに生きる学習、生活の実行

③行動スローガン風林火山の徹底

- i) 風（行動は早く）
- 全ての行動は素早く（時間の短縮 内容の充実）
- ii) 林（集合は静かに）
- 全ての集合は黙って（指示の明確化 確実化）
- iii) 火（活動は激しく）
- めあてを持って「一生懸命」に「頑張る」
- iv) 山（考えるときはじっくり）
- 考えは事実→比較→関連→統合思考で

④成果と課題

i) 成果



ii) 課題

態度や心を律する大切さを十分感得し、下地もできた。今後、継続することが大切である。課題としては、子どもに感心・意欲を持たせながら継続する方法・手だてを探り、より効果的に実行することである。

4. 豊かな心の醸成とくらしへの転用

(1) 淡窓教育は本当に素晴らしい

広瀬淡窓という人物に触れれば触れるほど、その素晴らしさにいろいろな面から心を打たれる。まずは、病苦を何度となく乗り越えてきたところである。本来、病弱な身ではあったが、これほど病魔に見舞われることがあるうかというくらい大病を患っている。しかし、その都度回りの助けもあり命拾いしている。この経験というか体感から生まれる、「やさしさ」「思いやり」「自然の条理」が「敬天の思想」を生み、三奪法や一人ひとりの塾生を大切に作る姿勢に繋がっている。月旦評の「評」を「表」としない淡窓の思いこそ、「個」を大切に作る現代の教育に繋がるし、「君は、今月昇級していないが、朝暗いうちから係の仕事を生懸命にしていたね素晴らしいことだよ。もう少し努力をしてみなさい。きっと昇級するから」と一人ひとりに声掛けをしてやる気を喚起するのは、今私たちに求められている「望ましい評価」のあり方であろう。

この様に、生き方、教えの一つひとつを取り上げても、本当に素晴らしいと実感している。

(2) 豊かな心の醸成に淡窓教育を取り入れる効果は大である

今回、淡窓教育を教材化し、道徳教育や学校教育活動の中に取り入れ実践してきた。その中で、「事実をしつかり見る心」「感じる心」「相手の立場を認める心」「自己肯定感」等、本校で望む豊かな心が芽生え始めたことは確かである。

本校では、前述の五つを取り入れているが、淡窓の「立志」の教えや「治めて後学ぶ」という姿勢は本当に有効性があり、効果が大きかった。立志の教えは、淡窓の「休道の詩」を通してその素晴らしさ、必要性を実感させられる。また、今様の言葉では「夢」に置き換えられた。目的を持ち、目的に到達するために目標・めあてを立て、一生懸命に頑張る。このことで、頑張るといふことの意義を捉え、主体的な行動を促すことができた。まさにくらしへの転用である。

また、「治めて後学ぶ」という淡窓の姿勢を転用することで、学習・生活を行う前の基本的な姿勢ができ、すべての活動が効果的に行えた。今学校で「学力の向上」が第一課題となっているが、「どんな環境で、どんな方法で、どれだけ」の時間」を使っても、先ず「学習しようとしている子ども」自体、「姿勢や心」

が整ってなければ効果は薄い。淡窓教育で効果が上がったのは、淡窓という立派な指導者がいて、目の前に学習する「姿勢や心」が整ったからである。本校は、「立志」夢」と「治めて後学ぶ」姿勢や心の整え」を取り入れることで、豊かな心を醸成するのに大いに効果があったと確信している。

(3) 淡窓教育は日田(日本)の誇り、実践し広くくらしに活用していくべき

淡窓教育の素晴らしさを感じ、そのことを道徳教育・学校教育活動に転用した。そのことを評価してみると、前述している通り、効果は大である。効果が大きいことを少し視点を変えて取り上げるなら、○学校経営の軸が立つ、○豊かな心が育まれる、○教師の考え方に変容が見られる、○教師の指導法・評価の仕方に変容が見られる、○子どもが主体的になる云々と、限りがない。このことから、淡窓教育の学校教育への転用は正しいといえるし、必要である。

つまり、この様な淡窓教育が存在しうる日田という地は素晴らしいところであり、凄いとこである。「江戸・大坂を通り越してまで、辺地日田に塾生が集まったのは何故か」という長い間自分の中で持ち続けていた問いも、やっと解決できそうである。その答えは、淡窓教育の凄さということだ。

私は子どもの頃、淡窓教育に触れる機会がなかった。同じ境遇の人々は日田市内に多くいると思われる。しかし、今の子どもにはそうあってほしくない。その為には、市内各所の学校において淡窓教育を積極的に実践していかなければならない。一方で、指導する教職員が淡窓教育について見識を深め、そのリーダー性を発揮し積極的に教育にあたり、継続的に実践することである。加えて、行政の継続的なサポートも欠かしてはならない。研修の場、実践の報告会の開催、予算の獲得など必要最小限のことである。

加えて、子どもたちが学んだことをくらしに生かせるような場を多く設けることが必要である。山口県萩市にある明倫小学校に訪問した。ここでは、吉田松陰の「至誠」の教育を学校教育に転用していた。そして、大いに効果を上げていた。そして、校区をあげて学校教育で培ったことが活用できる支援体制が見られた。

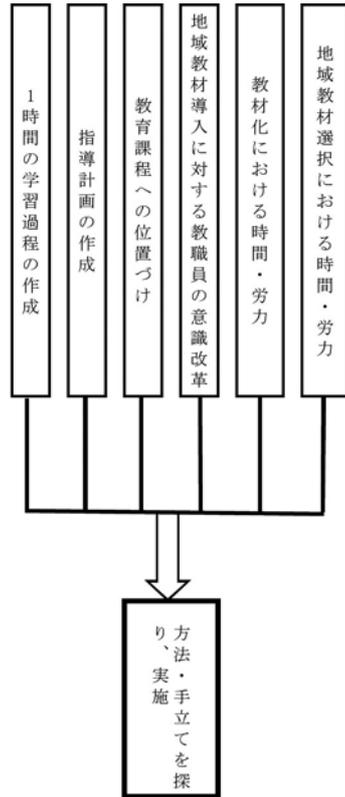
私たちも淡窓教育を各学校で実践し、その効果の大ということを、広く発信し、家庭や地域と連携しながら学びをくらしの中で活用できる場を多く設けることが大切である。

まさに、淡窓教育を転用した、平成の日田教育の発信である。そして、江戸末期淡窓教育として全国に注目されたのと同じように多くの人々の心を高ぶらせた。いや絶対にそうしなければいけない。

5. 今後の課題

(1) 地域教材の開発と学習過程の工夫

○地域教材の開発上の課題



地域教材開発上、課題として浮き彫りになったのは前記のことである。地域教材を活用することの効果は、多くの教職員が認めるところである。しかし、教材化するまでの調査・聞き取りなどの下調べに多くの労力を要することは周知の事実である。

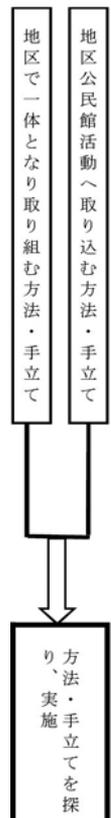
折しも、指導内容の増加や指導時間の確保、又、全国学力テストの実施による点数の公表は、地域教材の導入に大きな障害になっている。そんな中、これらの課題を解決すべく、手立てを見いだしていかなければならない。

(2) 豊かな心を醸成する、道徳教育の充実を図る上での家庭・地域との連携の仕方

○家庭との連携における課題



○地域との連携における課題



家庭・地域と一体となった取組みが効果を上げることは周知の事実である。そして、その方法・手立てを探る中で、学校とより連携を図るためには家庭では育友会、地域では公民館というように、窓口を明確にすることが効果的だといえる。今後、育友会・公民館を窓口としてどのように連携を図っていくかその方法・手立てを探り、実施していくことが、豊かな心を醸成していく上で望まれる。

実践Ⅱ 社会教育への転用

1. 社会教育事業 平成「三花咸宜園」活動計画

(1) 目的

① 広瀬淡窓の咸宜園教育の思想(敬天、立志・治めて後 学ぶ、自治活動、体験活動)を根底に据え、様々な活動を行うことで、自立する心・思いやりの心・たくましい心を培い、日常の暮らしに活かすと共に、郷土を誇り、愛することができるようになることを目的とする。

② 学校教育活動で行った淡窓教育を、社会教育の場に転用し、学社連携の中でより充実を図る。加えて、地域住民にも啓蒙し、郷土の先人として誇り、郷土を愛すると共に、生きる指標となるようにする。具体的には、子どもを中核に据え、中核を活性化し回りの青壮年、婦人会、高齢者へと広げ地域と一体な取り組みを行う。

(2) 名称 平成三花咸宜園

(3) 対象者 三和小学校 六年・五年児童(四五名)・保護者の希望者

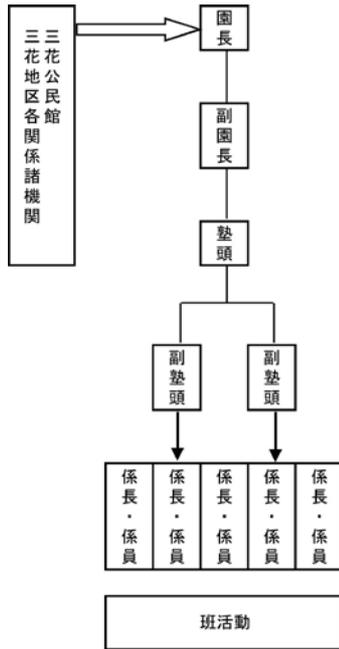
(4) 内容

① 園としての活動

○ 敬天の心・・・人、物に対し感謝の念を持ち、大切にすること。

自分を誇り、相手に優しく、回りと協力する心と姿勢で取り組む。

○ 立志の心・・・夢・目標・めあてを持った上で、すべての活動を行う



- 園長より淡窓先生の教えなど人生の生き方の講話
- 治めて後 学ぶの心・・・一日の始まりは「休道の詩」の朗唱から始め、活動の始まりと終わりは礼で始まり、礼で終わる。礼儀・礼節確立。活動中は風林火山の心で行う。
- 自治活動・・・園長・副園長・塾頭一名・副塾頭二名・係長・係員の組織を作り心が通る、効率的な活動を行う。自立・責任・協調の心を養う。係りは次の通り
- ・塾頭（一名六年より）・・・全体指揮（はじめ・終わりの号令・園長代行）
- ・副塾頭（二名六年より二名）・・・塾頭補佐
- ・学習係（係長一名・係員二名）・・・主に園内での学習の計画・運営
- ・生活係（係長一名・係員二名）・・・園のきまり作り・一日の反省・目標作り
- ・遊山係（係長一名・係員二名）・・・主に園外での学習の計画・運営
- ・放學係（係長一名・係員二名）・・・園外での自由体験活動の計画・運営
- ・清掃係（係長一名・係員二名）・・・清掃計画、指導
- ・食事係（係長一名・係員二名）・・・食事計画、指導
- 班活動：班を編成し、組織的に活動する
- 六班編成・・・（班長一名、副班長一名、班員七名）八名
- 体験活動：多くの体験を通して学び、知行合一の心を培う。
- 園外での宿泊活動（キャンプ）・園内での宿泊活動（通学合宿）・みどりの少年団活動・工作活動・スポーツ活動・奉仕活動など

①具体的な活動の計画及び予算

月	内容	具体的な活動	場所	実施予定日
5	保護者会・開園式	園の目的・運営の説明、園の学習・活動規律	三花公民館内 2階学習室	5月31日
6	淡窓学習会・組織作り・自治活動	淡窓の教え・咸宜園のねらいの講話、班作り・年間計	三花公民館内 2階学習室	6月15日
6	他団体との交流	文化的交流	三花地区内	6月29日
7	淡窓学習会	淡窓の教え・実践	三花公民館内	7月25日
8	野外体験活動	環境学習、花月川の生物調査、花月川で遊ぼう	三花公民館内 花月川流域	8月1日
8	野外体験活動	キャンプ、集団合宿・訓練	大分県内施設	8月7日～8日
9	淡窓学習会・自治活動	咸宜園見学・講話、班自治活動・訓練、詩吟	咸宜園、市内関連施設	9月25日
9	野外体験活動	文化的活動	日田市内施設	9月25日
10	淡窓学習会・室内体験活動	咸宜園の教育学習・体験、講話、班自治活動、詩吟	三花公民館内 2階学習室	10月6日
10	通学合宿	共同生活・訓練、家庭学習の仕方、淡窓講話	三花公民館	10月14日～16日
11	みどりの少年団 野外体験活動	森林愛護、植林	大分県内施設	11月10日
11	石坂石畳野外体験活動	地域の歴史探訪、石坂石畳ウォーキング参加	地域内坂ノ下	11月17日
12	室内体験活動	国際交流大会参加	日田総合体育館	12月7日
12	野外体験活動	コア山国スケート	中津市コア山国	12月27日
1	野外体験活動	地域の歴史・文化に触れる	地域内遺物・遺跡	1月25日
2	淡窓学習会・自治活動	淡窓の教え、講話、自治活動、詩吟	三花公民館 2階学習室	2月15日
3	野外体験活動	宿泊合宿 登山	九重少年自然の家	3月1日～2日
3	野外体験活動	バスを使い、他地域の文化に触れる・お別れ会	大分県内施設	3月 8日
3	活動の振り返り・閉園式	活動の反省、成果・課題のまとめ	三花公民館 2階学習室	3月21日

(5) 活動計画

- ③活動場所 三花公民館、市内・県内各施設
- ④活動日及び時間
 - ・開園式（五月三十一日）夜七時三〇分
 - ・各月一～二回（土曜日） 九時～一五時 計二講
 - ・夏休み・春休みの特設日 五～八日間
 - ・閉演式（三月末）夜七時三〇分
- ※詳しくは、別紙参照
- ⑤運営費
 - ・公民館運営費より 二五万円
 - ・園生より活動費として（一人年間費 三、〇〇〇円）
 - ・活動に応じて若干の活動費徴収

2. 平成「三花咸宜園」の計画と実際の活動

■平成「三花咸宜園」第一講 開園式の計画及び実際の活動
ねらい 「敬天の心」について

I. 開園式の活動内容

- (1) 期 日 二五年五月三十一日(金)
- (2) 時 間 七時～九時
- (3) 場 所 三花公民館 大ホール
- (4) 参加者 児童四四名 保護者四四名 公民館職員二名
三花読み聞かせ「シャボン玉グループ」七名
- (5) 開園式式次第 進行(副園長)

i 開式の言葉 ii 園長あいさつ iii 広瀬淡窓物語 紙芝居「シャボン玉グループ」 iv 園長講話 v 円の活動方針・内容について vi 閉会の言葉

II. 園長あいさつ内容

園生は正座で、姿勢を正し、園長と一礼。あいさつはお互いに正座で正対して行う。淡窓の「治めて後 学ぶ」の心を取り入れたものである。あいさつ後、全員で「休道の詩」を朗唱する。あいさつの中身は下記の通り、

開園したことに對し、多くの方が賛同していただき、本日はたくさんの方が出席してくださり、心よりお礼申し上げます。私は、常々疑問に思っていることがあります。それは、「淡窓先生は、平成の時代に生きる私たちに望むものは何か。願いは何か。」ということです。確かに今、淡窓について、多くの方がその人物や業績あるいは、咸宜園での教育内容等について講演をしたり、論じています。しかし、淡窓が本当に願っているのは、そのようなことではないと思っています。願うことや私たちに期待することは、淡窓が考えたことやしたことを今の私たちに、やってほしいということではないでしょうか。

今、日田市では淡窓の咸宜園を世界遺産にということで、多くの偉い先生方が来て淡窓について色々言っていますが、そんなことより、淡窓が江戸時代にしたことをここ三花で行うことが淡窓先生の思いに一番たがうことです。そんな意味で、今回、あえて平成という名前を頭つけて平成三花咸宜園を、ここ三花地区に開いたのです。みなさん、ここ三花咸宜園で淡窓先生の教えを取り

入れ実施するなかで、江戸の咸宜園で立派な人が生まれたように、ここ三花咸宜園からも立派な人が育つことを期待します。

III. 広瀬淡窓物語の紙芝居 プロジェクターを使用(一五分程度)

淡窓の生い立ちから、学問教授の道を歩む決心をするまでのいきさつ、そして、咸宜園を開き、園の生活、淡窓の決心など、プロジェクターを使い興味深く行なった。とても内容が濃く、園生にとつて大いに参考になった。

IV. 園長講話 「敬天の心」について

今日は、淡窓先生が一番大切にしている「敬天の心」について私なりに考えたことをお話しします。敬天とは、天を敬うと書きますね。この言葉は咸宜園の一角にある秋風庵の入り口に掲げられています。淡窓先生がこの言葉を大切にしていた要因としては、まずは、病気に何度もかかったことです。大病をして生死の淵をさまよいながら、もうだめだと何度も言われ回復しています。つまり、生きる死ぬことは、自分ではどうしようもなく、天命というか、その人その人の運命に関わっていることに気がつきます。つまり、死にたくても死ねないし、生きたくても生きられないことがあり、これらは全て天の決める流れの中に従うしかないということに気がつきます。従って、淡窓先生は、生きるという言葉は使わず、生かされているという思いを強く持つようになりました。

次に、職業の選択から述べますと、本来廣瀬家の長男として生まれ、商売の跡取りとして生きることが定められていたのですが、病弱でそのことができませんでした。それではと医者の方に進もうと考えますが、これもいいところまでいきませんが、頼りにしていた人に裏切られ、だめになります。そして、倉重先生という人と運命的な出会いをして、学問教授という職業を見いだしていきます。

つまり、このことも自分の意思というより、天の定めの中で選択されたというふう考えたといえます。学問をする中で、自然の条理を学び、太陽が東から昇り西にせずむとか、水が高いところから低いところに流れるとか、あるいは、この世の中に男と女がいて人としてなり立つとか、条理は天の元に営まれていることに気がついていきます。仏教の無量寿や無量光の考え方を学ぶ中においても、天の営みの大きさを感じ取っています。天の営みの中で全てのが行われていることに気づかされます。では、今の三花咸宜園についての「敬天」の心とは何

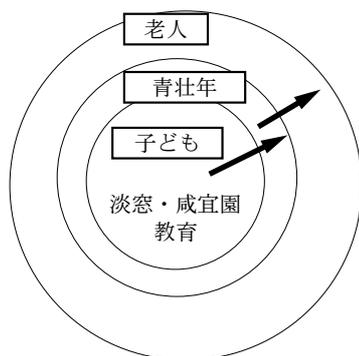
かということになります。天のものにある全てのものに対し感謝の念を持つこととそれらを大切にすることを抱き実行する」ことだといえます。今、隣にいる友達も又、一緒にいらっしやるお母さん方も大切にすることです。そんな、三花咸宜園の敬天の心を持って、今後、何事にも取り組んでほしいと願います。以上で終わりです。有難うございました。

V. 成果及び課題

(1) 平成「三花咸宜園」が開園され、三花地区への第一歩が踏み出せた

淡窓・咸宜園教育の素晴らしさを市民へ広げるきっかけが、この地区からスタートでき、大きな成果である。まずは、対象が子どもであるが、子どもを中心に据え青壮年・老人へと広げていくことができる。

具体的には、立志（夢を抱く）の心を、子どもから青壮年、老人層へとその良さを必要性を交流の中で唱えていくこともできる。又、休道の詩の朗唱を青壮年や老人の活動の場で日常化していくことも可能となった。子どもからの提案が平成「三花咸宜園」の実活動を見せることで、説得力のあるものになったといえる。



(2) 淡窓・咸宜園教育を市民に広げる草の根運動の礎が築けた

世界遺産への登録という市民の願いを叶えるためには、ハード面での努力が必要であるが、それらのことは市当局に任せるとして、ソフト面での努力は市民一人一人が行わなければならない。そのようなことから、地域での草の根運動的な努力が必要である。そんな意味でも、今回地区での公民館事業に乗せこの活動の第一歩が踏み出したことは大きな成果といえる。この事業を通して、淡窓・咸宜園の教育について講演会を開いたり、自主講座を開いたりする中で地区民への浸透が図られることは間違いない。そんな場が設けられることは、まさに草の根運動の出発点といえる。

(3) 学校教育活動から転化ができる

学校教育での淡窓・咸宜園教育をどのようにに社会教育の場で転化させるか、長

年の課題であった。今回、公民館事業の一環として平成「三花咸宜園」を開園でき、学校教育と社会教育とのつながりをしっかりと位置づけられたことは大きな成果である。

本園の園生が在学する三和小学校と連携を密にして、一体となった取り組みや学校教育で行った内容の応用も本園では実施できる。又、くらしの中での効果も検証することができ、小学校で取り組まなければいけないことも明確になり、的確な示唆もできるようになる。

(4) 学・社連携を活発なものにするための打ち合わせの時間の確保はどのようにするのか

学校教育に携わった経験から、公民館との打ち合わせの時間を確保することは難しかった。ましてや今までは、それぞれの活動内容が違っていった。違う内容を共通化するのに時間が必要であるが、その時間さえ確保することが難しかった

今回は、公民館活動に平成「三花咸宜園」が位置付き、学校教育活動の中にも咸宜園教育が位置付いていることから、何度も述べているように運動性がある。従って、内容は共通化しているので、学校と公民館が積極的に話し合いの場を持って、時間の捻出を図ることである。



■平成「三花咸宜園」第二講 方針・目的・活動内容及び実際の活動 ねらい・・・「治めて後 学ぶ」の心

1. 期 日平成二五年六月一日(土)
2. 時 間午前九時～一二時
3. 場 所三花公民館 二階研修室
4. 内 容

(1) 園生集合 午前八時三〇分～八時五〇分

(2) 園生整列 二階研修室に五男、五女、六男、六女の順に整列

(3) 朝礼

①姿勢を正してください。今から朝礼を始めます。一同「礼」

②「休道の詩」を朗唱します。

③今日の目標と一日のスケジュールを発表します。

・今日の目標は、一年間の方針や活動内容を知り、自分の目標をしっかりと持つことです。

次に一日のスケジュールをお知らせします。

・平成三花咸宜園の方針・目的、心得について園長先生よりお話があります。

・班を決めます。

・係長、副係長を決めます。

・暮会をして解散です。

④園長先生講話をお願いします。

・「治めて後 学ぶ心」について講話をする。

▽園長講話

先日の講話では、淡窓先生が一番大切にしている「敬天の心」についてお話しました。この平成の時代において「敬天の心」とは、「身の回りのいろいろなものに感謝し大切にすることだ」というように考え、実行していくことだと私は思います。この平成三花咸宜園では、話を聞くことを第一とします。今の時代、目で見ることが多いようですが、聞いて考えることは当時も含め一番大切なことだと思います。又、ここでの学習は、淡窓先生がおっしゃったことをそのまま皆さんに伝えていくことはしません。当時、淡窓先生が考え、おっしゃったことを今の時代に合わせ、私なりに考えたことを皆さんに伝え、そのことについて、皆さんはどう思い、考え、実行していくかを述べていただくという、意見交換をしてお互いに高めていく園にしたいのです。

さて、今日は「治めて後 学ぶ心」についてお話します。淡窓先生はこの心を持って学問に励むことを生徒たちに期待しました。「治める」ということは、何を治めるかということになりますが、私が考えるに「気持ち」と「態度・姿勢」だと思います。つまり、気持ちや態度を治めるということは、学習の心構えをしつかりして、態度や姿勢をきちんとした上で、学ばなければ身につかないということでしょう。私も全く同感です。がんばるぞという意欲や「よし、

やってやるぞ」というモチベーションが高いか低いかで、ずいぶん違います。「したくないなあ」とか「周りがやれというからやっている」というのでは、気分も乗らないし、手悪さや無駄話もついつい出てくるといことになります。次に、姿勢のことになります。キチンと背筋を伸ばし、話す人の目を見て聞くという態度や姿勢は、心の中のやる気を引き起こしてくれます。実際、私を見てください。このような格好をして皆さんの前に立つと身が引き締まり、やる気が出ます。「治めて後 学ぶ心」をこの三花咸宜園の二つ目の心にしたわけは、学習する前の「気持ち」と「態度・姿勢」をきちんとして取り組んでいくことが本当に大切と考えたからです。

この「治めて後 学ぶ心」、気持ちや態度・姿勢をきちんとして学習や活動をするという心について、どう思いますか。質問や意見がある人は述べてください。

(意見交換)

では、今後行っていく活動において「治めて後 学ぶ心」をいつも心に置いて取り組み、立派な人間になれるよう、がんばっていきましょう。今日の講話は、これで終わります。姿勢を正してください。礼 有り難うございました。

⑤姿勢を正してください。これで朝礼を終わります。一同「礼」

(4) 平成「三花咸宜園」の方針、目的

①方針・目的

江戸時代の咸宜園を卒業して、自分の町に帰り、「自分は日田の咸宜園で学んでいた」というと、周りの人は「すごい。あの咸宜園で学んだのですか」と一目置いていたそうです。つまり、それだけ周りから「咸宜園はすごい。咸宜園は周りの学校とは違う」という目で見えていたのです。それだけ、咸宜園での勉強はすばらしかったということです。ですから、皆さんもこの三花咸宜園で一生懸命に学び、「自信と誇り」を持てるようになってほしいということです。そのためにはまず、三花咸宜園の園生の心得をしつかり守り、きちんとした態度をとらなければいけません。別紙、三花咸宜園の園生の心得を出してください。

②園生の心得え 別紙、園生の心得えを説明し、共通理解させる。

③班活動、係活動の説明

班活動は、五年生と六年生は別々にします。五年生は三(み)の一から三(み)の三まで、六年生は花(はな)の一から花(はな)の三までとします。組み合わせは、くじ引きで決めます。班長さんを一名決めます。各班、どの班が一番になるか、各班で競ってもらいます。班長さんは各班で決めてもらいますが、みんなで、しっかりと選んでください。

係は、五つの係を設けます。各係に係長一名と副係長を二名の計三名を置きます。三名は係の計画を決めて、全体の前に提案します。その提案に沿って各班ごとに活動します。係の三人は、必要に応じて公民館に集まって計画を立ててもらうことにします。

この係は、くじ引きでなく、立候補にします。尚、塾頭一名と副塾頭一名は、園長の私が指名します。みんなの様子を見て指名しますのでまだ後になります。ここで一五分間休憩します。班決め、係り決めは休憩の後になります。休憩中は、静かに過ごしてください。体を動かしたい外は、外で過ごしてください。ただし、公民館の敷地からは絶対に出たらいけません。

(5) 班決め

- 三の一 五年 七人 班長 (吉野遙紀) 副班長 (石橋飛翔)
- 三の二 五年 七人 班長 (塚田多恵子) 副班長 (金崎礼乃)
- 三の三 五年 六人 班長 (財津優斗) 副班長 (柴田晋之介)
- 花の一 六年 八人 班長 (伊藤栄芳) 副班長 (蒲地まみ)
- 花の二 六年 八人 班長 (日隈 茜) 副班長 (太郎良亜美)
- 花の三 六年 八人 班長 (三雲花音) 副班長 (高尾智里)

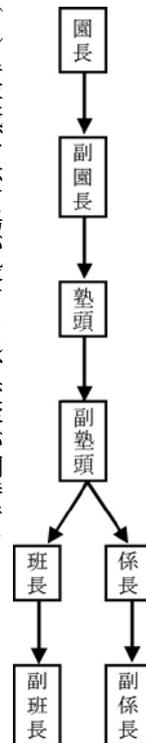
(6) 係決め

- ① 学習係係長 (伊藤栄芳) 副係長 (佐藤祐樹) (松野莉子)
- ② 生活係係長 (田中勇誠) 副係長 (大友正一) (井手洗四郎)
- ③ 遊山係係長 (武富凜花) 副係長 (高倉夏妃) (蒲地まみ)
- ④ 清掃係係長 (石橋飛翔) 副係長 (吉野遙紀) (財津優斗)
- ⑤ 食事係係長 (太郎良亜美) 副係長 (東口菜月) (梶原由美)

5. 成果及び課題

(1) 淡窓の咸宜園での自治活動の下地ができた

淡窓は咸宜園で塾生に役割分担をさせ、自治活動を実行した。主体的な活動を仕組む塾生のモチベーションを大いに高め、同時に成果が上がった。塾頭に任命されたA児、副塾頭のK児・H児は、園長の代役は自分たちが行うのだという責任感に満ちあふれていた。又、学習係長のO児、生活係長のU児、遊山係長のR児、各班の六名の班長、それぞれが自分たちの平成「三花咸宜園」という意識を大きく持ち、とても輝いていたことは、大いに評価できた。



(2) 責任感を示す場が設けられ、変容が期待できる

淡窓・咸宜園の中に職人制というのがあった。本園で、園生の希望と園長から見た適度で個々に役割を与えていった。U児に対し、「君が本園の生活面を向上するように、感じ・考え、創りだし、伝えるのだよ」と投げかけることで、U児の中で精一杯期待に応えようと頑張る姿が垣間見えた。今回、咸宜園での方策を取り入れ、個々に場を与えることで、その子なりに責任感を感じ、頑張っている、役に立っているという態度が多く感じられ、とてもたくましく思われた。

(3) 園の方針と目的・活動内容がわかり年間の見通しができた

平成「三花咸宜園」の方針(三つの心)を提示した。「敬天の心」「立志の心」「治めて後 学ぶ心」を中心に据え活動を実施することを確認した。これが、本園の特色である。この三つの心を平成の今様に解釈し、具体的な例を示しながら講義した。子どもの中にしっかりと落ち、共有化できたことは大きな成果である。又、年間の活動内容を提示し、係りや班での動きや個々の目標設定にも大いに役立ち、意欲的な活動が開かれること予想された。

(4) 限られた時間の中での効果的な方法・手立てを見いだすことこそ効果を上げる

年間二〇回の活動で、どこまでの到達を目指すのか。目標設定を明確にしておく必要があると感じた。そして、評価をしっかりと積重ねていくことが効果的だといえた。その一方策として活動後必ず自己評価の作文を書くことを取り入れた。もちろんこの作文に対し、園長の評価を書き込み、ファイルに綴じることにした。

その他、限られた回数の中で、効果を上げる方法・手立てを見いだしていくことが本園活動の課題であることもはっきり見えた。

■平成「三花咸宜園」第六講「遊山」活動の計画及び実際の活動

1. 活動内容 「遊山」 森林宿泊体験活動
2. 目的

①森林の中で自然に触れ、木々の有様を知り、人工林の役割や自然林との融合の大切さを感じ、自然を大切にすることを育てる。

②ルール、マナーを知り、集団生活の中の一員としての自覚を感じさせる。
③実体験の中から事実を捉え、感じさせ、学びを生ませる。

3. 場所 大分県平成の森キャンプ場

4. 日時 平成二五年八月八日(木)～九日(金) 午前八時～午後四時

5. 当日の日程(省略)

6. 現地までの交通手段 バス(指導体制は、園長 服部、ボランティア二名)

7. 森林体験の講師 大分県緑の森ネットワーク職員

8. 参加園生 三二名

9. 指導体制 引率者 中島龍磨、服部幸一、ボランティア二名の計四名

講師 数名 合計一〇名以上

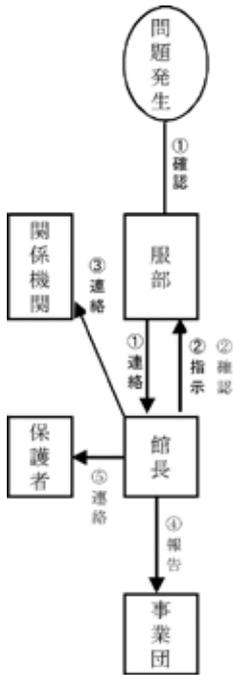
10. 活動内容 テーマ「マナー・ルールを守り、安全かつ協力し自然とふれあおう」

(1) 森林体験 人工林・自然林の有様を観察、森林の役割に気づく。

(2) 集団生活での役割

食事の用意、後片付け、様々な集団活動の中での個々の役割を掴み実行する。

11. 緊急時連絡体制



12. 始めの会における園長講話

本日の第六講の活動は、遊山で「大分県緑の少年団として県下の各少年団の人と森林観察や森林の中で集団宿泊をして見識を高める」です。淡窓先生は、自然の中で遊山の活動をよく行いました。そして、その中で感じたことや考えたことを詩に表すことを進めました。園生は、何となく遊山に参加するのではなく、目的やめあてを持って、野外に出て体験活動をし、感性を高めました。今回皆さんは、自然の中で自然体験のほか集団宿泊することなど多くの体験をします。何となく参加したり、受け身で参加するのではなく、目的やめあてをもって進んで活動に参加してもらいたいです。そして、多くの人や多くの自然に触れ、一回りも二回りも大きくなることを期待します。それがひいては淡窓先生が願う、頭で考えることと体で体験したことを結びつける知行合一につながるのです。では、ルール・マナーを守り怪我をしないようにして、元気でここに帰ってきましょう。

13. 成果と課題

(1) 成果

遊山活動の一環として、県下の多くの団員と、自然体験や集団生活体験を行った。多くのことを学び、又一段と成長した姿が垣間見られた。



県内の児童が一同に会し、行われた開会式の場。
淡窓の「治めて後 学ぶ」の心をしっかりと実行し、平成「三花咸宜園」の園生として、堂々とした態度で参加することが出来た。



夕飯作りでは、休道の詩の中にある、「君は川柳を汲め、我は薪を拾わん」の心で、しっかりと自分の役目を果たしていました。もちろん美味しい、美味しいカレーライスができあがり、みんなで食べました。一体感が出来たキャンプでした。」

(2) 課題

咸宜園の「遊山」活動を行った。目的を持たせ、主体的な活動にしていくための方法・手立てに一工夫することが目的である。実際、園生は「頑張ろう」と一生懸命に取り組んだ。成果もあったが、準備に費やす時間が少なかつたという間

題点も浮き彫りになった。学校とかでなく、公民館で行う活動では、時間的な制約がある。当然、準備の話し合いや計画立案に時間が必要である。子どもに主体的な活動をさせるためには、この事前の準備が必要である。今回この時間がとれなかったことは先にも述べたとおり問題であった。今後、この時間の捻出と効果的な活動を行うこととの関わりは大きな問題である。

■平成「三花咸宜園」第八講 「遊山」活動の計画及び実際の活動

1. 活動内容 「遊山」 淡窓の生きた時代の遺物・遺跡にふれる体験

2. 目的

- ①咸宜園・咸宜園教育研究センターに行き淡窓の生き方や咸宜園での教育方針、教育内容について聞いたり、見たりする。
- ②ルール、マナーを知り、社会生活の中の一員としての自覚を感じさせる。
- ③実体験の中から事実を捉え、感じさせ、学ばせ、淡窓の生き方、咸宜園での行いをくらしに生かす。

3. 場所 咸宜園、咸宜園教育研究センター、廣瀨資料館ほか

4. 日時 平成二五年九月二五日(水) 午前八時三〇分〜午後四時四五分

5. 当日の日程(省略)

6. 輸送方法 マイクロバス一台にて ピストン輸送

7. 講師 咸宜園教育研究センター(指導員)、秋風庵(担当者)、長生園・桂林荘(館長)、長福寺(住職)、廣瀨資料館(担当者) 月隈城公園(館長)

8. 参加園生 四四名

9. 指導体制 引率者 中島龍磨館長、服部幸一主事、ボランティア三名

計 五名

10. 活動内容 テーマ 「淡窓先生のことを知り、園の生活に活かそう」

(1) 班の構成 一班(三の一、花の一・二) 二班(三の二・三、花の三)

(2) 咸宜園教育研究センター 司会進行 全て塾長

始めの挨拶(伊藤栄芳) お礼の言葉(高倉夏妃)

(3) 秋風庵 お礼の言葉 (三雲花音)

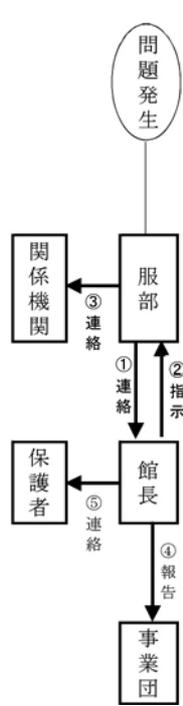
(4) 長福寺 お礼の言葉 (伊藤栄芳)

(5) 廣瀨資料館 お礼の言葉 (三雲花音)

(6) バスの座席 一班(花の二から花の一そして三の一の順) 二班(花の三から三の二そして三の三の順)

11. 経費 (1) 廣瀨資料館 0円

12. 緊急時連絡体制



13. 始めの会における園長講話及び見学場所の概要

本日の第八講の活動は、遊山です。今日は、淡窓先生の生まれ育った廣瀨家や塾を開き実際に勉強をした長福寺、桂林園、咸宜園を歩き、訪ねて、当時の様子に少しでもふれられたらいいと思います。見学のコースとしては、淡窓先生の人生を後ろからたどっていきます。まず、咸宜園教育センターを訪ね、概要をつかんでもらいます。次に、咸宜園、長生園、桂林園、長福寺、そして生まれ育った廣瀨家に行きます。これらの場所で、見て、聞いて、感じてください。その中から、自分で考え、自分ならこのことをどう生かせるのか作り上げてください。

遊山とは、ただ見学に行くのではありません。目的を持って行くのです。その目的が達成できるようにしっかりと見たり聞いたりし、その中から感じ、感じたことを考え、自分としての意見を作り出していくのです。そして、ひいてはそのことをくらしの中に生かせるようにすることです。その心構えを持って当時の咸宜園の園生たちは、遊山活動に参加していたのです。ですから、帰って先生から、「今日のことを詩で表しなさい」と言われても、しっかりと書き表すことが出来たのです。皆さんも、活動の後、作文を書いてきましたが、このような心構えで、遊山活動に参加し、作文を書けば立派な文も書けるということです。

14. 成果及び課題

淡窓の生きた環境を実際に歩き、見て・感じた。聞くと、今まででも何回か経験したことはあったという。しかし、ただ何となく見て、聞いただけで印象として、何にも残っていないというのが事実であった。しかし、今回、原田館長や武内住



秋風庵での原田館長さんの講話



長福寺での武内住職さんの講話

職に話を聞いたり、当時の遺物を見せてもらったことは、大いに効果があった。

今回の成果としては、秋風庵という小さな古い建物という意識しかなかったのに、この小

さな空間の中に、淡窓の生きてきた証が多く含まれており、五〇〇〇人という当時の若者が、日夜切磋琢磨したことが、ひしひしと伝わってきた。このことが、実体験として子どもたちの心に響いたことが大きな成果といえた。

課題としては、本園から遠いことにより、調べたいとき、ふれあいたいときに気軽にいけないので、その距離をどう縮めるかということである。

又、淡窓にしても咸宜園にしても現代の子どもからしたら距離が有り、埋めるのにあまりにも溝が深いということである。従って、いかに現代風に置き換え、身近にしていくかである。子どもであるため、学校生活の中のとえを取り出しながら、わかりやすく具体的に、時間をかけ取り組むことが、上滑りの淡窓・咸宜園の教育でなく、地道ではあるが本園の目指す教育と改めて感じた。

3. 社会教育への転用の実際

(1) 平成「三花咸宜園」の活動から

① 淡窓・咸宜園教育が浸透した

本園では、「敬天の心」「立志の心」「治めて後 学ぶ心」の三つに焦点を当て、実行した。淡窓・咸宜園のほんの一部ではないが、この三点から色々な活動を仕組んだ。例えば、毎回行う講話もしかり、常にこのことを具体例を示しながら、かつ園生の日々のくらしと結びつけて話した。又、規則正しい生活やルールを守ることや自己の態度や姿勢の厳格さなど徹底的に鍛えた。活動も係りの設定と実行、遊山活動と作文など淡窓・咸宜園の方策を模倣した。

この結果、時間的制約を受ける学校教育の場に比べ、目的とする3つの心が浸透し、活動もこのことを下地として行えた。園生は、淡窓・咸宜園をより深く意識するようになったし、三花咸宜園生としての誇りを持てるようになった。そして、淡窓・咸宜園の教育が徐々に浸透していった。

② 社会教育で「豊かな心」が醸成できた

学校教育の場で培う「豊かな心」と、社会教育の場で培うものは、方法・手段こそ違えど変わらない。何故なら、対象となる児童が同一である。平成「三花咸宜園」では、活動の下地に目的を鮮明に位置づけられることが強みである。特に、力を置いたのが「遊山活動」として位置づけた館内や館外に出て行う体験活動である。淡窓は、遊山活動で詩作をさせて、五感を鍛えた。同じように、本園では「夢トレ」を行った。「夢トレ」は、学校教育で行っていたことの活用である。「事実を捉え、感じ、考え、意見を作り出す」、この一連の思考の流れを意識付け鍛えた。

そのことで、事実を見取る目、感じる力、考える力、意見を作り出す力がついてきた。また、自己を見る目、他や周りを見る目に変化が出てきた。つまり、自己肯定感や優しさ、思いやりなどの「豊かな心」が醸成されてきた。

③ 淡窓・咸宜園教育の草の根運動が展開できた

学校教育の中で、淡窓・咸宜園教育を実行し成果も出たし、課題も明確になった。課題の中で、社会教育での活動とあり方を挙げた。今回、社会教育の場で目的を持ち実行しているが、大いに成果を上げられたことは前述した。その要因は、社会教育では、今回実践している平成「三花咸宜園」のように、目的を絞った活動がされ、活動内容はもちろん評価もしやすいということである。従って、淡窓・咸宜園のことをより多く知ることができるし、多くの成果を上げることができる。

このことで、淡窓・咸宜園が子どもにとってより身近になり、学校教育では感じることでできなかった新たな淡窓・咸宜園が子どもの中に作り上げられた。今回の平成「三花咸宜園」の活動は、まさに子どもたちにとっても、その子どもが存在する三花地区にとっても、淡窓・咸宜園教育の草の根としての広がりをもたらしたと言える。

(2) 平成「三花咸宜園」の存在から

①三花地区の誇り

平成二五年五月三一日午後七時より、平成「三花咸宜園」の開園式を行った。児童四四名、保護者四二名、関係者一〇名の約一〇〇名参加者の中、盛大に行われた。児童も保護者も新しく作られる園に対して、大きな期待が感じられた。実際、一〇月まで第九講の活動をしてきたが、毎回意欲を持って取り組んでいる。同時に、保護者をはじめ交流をした暁大学の高齢者や女性セミナーの方々など多くの関係諸氏が、本園に対し温かいまなざしで支え、応援してくれる。

私は常々、「地域活動」を活性化するには、中心に子どもを据えその部分を元気にすることと考えている。今回も、平成「三花咸宜園」の活動を活発にしている姿を見て多くの方が元気づけられている。そのような意味でも、本園の存在は三花地区の誇りである。

②地域に広げる第一歩が踏み出した

「恐れ多くも、咸宜園という名前を使っているばい」という声も囁かれた。しかし、目的と活動が見えてきて、支援者が増えてきた。今、三花公民館の掲示板に「休道の詩」がいくつも張られている。地域民が来館するたびに目になっている。「こんなものがあるとは知らなかった。覚えてみようかしら」という声も聞かれるようになった。スズメの学校で唱える地区も見かける。一方で、淡窓が唱えた「立志の心」も現代ふう「夢を抱く」と置き換え、広げている。

三和小では、このことを「夢を抱き 夢を追い 夢を成す」というスローガンとして位置づけ、意識の高揚を図り、成果を上げた。同じように、地域活動で、「夢を持つ、目的を持つ、すること・行くところを持つ」ことを色々な場で啓蒙している。休道の詩と同様に立志という淡窓・咸宜園の心が地域民に根付こうとしている気配を感じている。そのような意味でも、地域に広げる第一歩が踏み出したと言える。

③壮年、婦人会、老人会との交流を増やし、一体となった世界遺産への歩み
この層との交流での課題は、実際に実となる交流活動をどのように仕組

んでいくかということである。現在は、高齢者とランドゴルフや会食での交流をしている。しかし、壮年会や婦人会との交流はない、淡窓・咸宜園教育が一番伝えたい層である。共通のテーマを設けて、意見の交流や体験活動をするとうい効果が上がると予想される。しかし、大人は「昼間仕事があるから夜が良い」という意見が大半であり、一方で子どもは「昼間の活動が良い」と時間の確保が難しい。

それでは、日曜の昼間ということになるが、お互いに用事を持っており時間の確保が難しい。そのため、限られて時間の中で、多くの参加者を集め、効果的な交流をいかに立案し、実行していくかが課題である。大変難しい課題であるが、一つ一つ解決し、みんなが一体となった取り組みをしていきたい。そして、この三花から世界遺産登録への草の根運動を展開していきたい。

実践Ⅲ 淡窓・咸宜園教育の啓蒙

平成三花咸宜園園生の心得

1. 入室・退室時の心得
 - ・入室時は玄関で「お願いします」と一礼し、靴をそろえて上がります。
 - ・退室時は靴をはいた後「ありがとうございました」と一礼し玄関を出ます。
2. 園内での心得
 - ・廊下・階段・室内の移動は、風林火山の「風・林」の如く、黙ってすばやく動きます。
 - ・集合時は、風林火山の「林」の如く、静かにします。
 - ・学習室、活動室には一礼して入室します。事務室、特別室は「入ってよいですか」と許可を得て入室します。
3. 園長、副園長、園生間の心得
 - ・返事やあいさつは、「はつきりと」大きな声で言います。
 - ・年上の人を敬い、大切にします。
 - ・年上の人に、ていねいな言葉を使います。
 - ・年長者は、年下の人をかわいがり、やさしく導きます。
 - ・一人ひとりが夢を抱き、個人の努力はもとより、園生が励ましあって夢を追

い、夢を成します。

4. 学習の心得

- ・時間をきちんと守り、学習や活動に一生懸命に取り組みます。
- ・園長の講義は、正座をし、きちんとした姿勢で、聞きます。
- ・「夢トレ」の心で、多くのことを見つけ、疑問を持ち、解決し、学びをくらしに生かせるようにします。

- ・野外体験活動では、多くの人や物や自然・社会・文化に積極的に触れます。

5. 係り活動の心得

- ・塾頭・副塾頭は、園のリーダーとして襟を正すと共に自覚と責任を持ち、園生の手本となる行動をします。
- ・係長・係員は、係り活動の計画を立て、園生に示すと共に学びのある活動になるよう努力します。
- ・班長・副班長は、班のリーダーとして自覚と責任を持ち、充実した班活動になるよう努力します。

- ・園生は、塾頭・副塾頭、係長・係員、班長・副班長の指示に従い、みんなで素晴らしい三花咸宜園を創り上げます。

- ・園生は、三花咸宜園に誇りと自覚を持ち自己の夢の実現に向け、決まりを守り、自己責任を果たすと共に、協力してがんばります。

6. 園外活動での心得

- ・いろいろな場所での活動で、三花咸宜園園生としての誇りと自覚を持ち、何事にも堂々と、一生懸命に取り組みます。
- ・大きな声で「あいさつ」「返事」をし、積極的に人に交わり友好を深めます。
- ・「ありがとうございませす」「お世話になりました」という感謝の心を常に持ち接します。

- ・「大丈夫ですか」と声をかけ、困っている人の役に立つ行動をします。
- ・何事にも積極的にかかわり、多くを学び、人間的に成長します。

7. 園生の共通の心得

- ・安心・安全な行動をし、身体をいたわります。
- ・社会のルールを守り、園生としてはずかしくない行動をとります。

・欠席のときは、必ず前もって公民館に連絡を入れます。

■学習の順（塾頭号令）

- 1…姿勢を正してください。今から○○を始めます。「一同礼」
- 2…今日の学習の「目標」は、○○です。
- 3…園長先生、お願いします。
- 4…学習活動
- 5…姿勢を正してください。今日の学習の目標は△△でした。

これで○○を終わります。「一同礼」

■朝会の順（塾頭号令）

- 1…姿勢を正してください。今から朝会を始めます。「一同礼」
- 2…「休道の詩」を朗唱します。
- 3…今日の目標と一日のスケジュールを発表します。
- 4…係長・班長からの連絡をお願いします。
- 5…園長先生お話をお願いします。
- 6…姿勢を正してください。これで朝会を終わります。「一同礼」

■暮会の順（塾頭号令）

- 1…朝会と同じ
- 2…「休道の詩」を朗唱します。
- 3…係長・班長からの連絡をお願いします。
- 4…園長先生、お話をお願いします。
- 5…朝会と同じ
- 6…あいさつをします。「さようなら」

■平成「三花咸宜園」地域への啓蒙活動 講話

1. 期 日 平成二五年七月三〇日（火）
2. 時 間 午前九時三〇分～一〇時三〇分
3. 場 所 三花公民館 ホール
4. 対 象 暁大学 学生
5. 活動内容 講話

6. 講話の内容 生きる喜びを淡窓の立志の心からふれる

7. 講話の内容 (概要を示したため常体と敬体が混じる)

(1) 起「休道の詩を朗唱」 淡窓の咸宜園での一日のスタートを再現

自分は先輩諸氏の前で淡窓を語る資格はまだ無い。しかし、子どもたちの教育という実体験に基づいた経験を通しての話はできる。

今、日田市では咸宜園を世界遺産にという構想がある。他の地域に比べると見劣りがする。淡窓教育での教育遺産としての登録を行わない限り不可能。しかし、現実問題は大きな壁となって立ちはだかっている。

しかし、今日日田市が行っていることは、大学の先生をお呼びしての講演会が主流。淡窓や咸宜園を詳しく知る、オタクはいらない。

そこで私は、常々考えていたことがずっとあった。それは、淡窓先生は平成の時代に生きる我々に期待するものは何かという疑問である。

自分がしたことを自慢したいのではない。多くを知ってほしいと言うことではない。平成のこの時代に、淡窓が期待することは、自分が考え、実行したことを行い、引き継いでほしいと言うことだと考えた。しかし、そのまま実行することは、時代も違う今には合わない。淡窓が考えたことを今風に当てはめて、実行していかなければならないといえる。

(2) 承「淡窓の咸宜園教育の背景にあるもの」

まずは、淡窓がどのように考え、咸宜園でどのような教育をしてきたのかというところを知らなければならぬ。その上で、一つ一つを今の時代に当てはめて、私なりに解釈し、実行していくことにしてみました。まずは、今配ったプリントをご覧ください。皆さんは、淡窓、咸宜園と言えば、部分的に思い浮かぶと思います。たとえば休道の詩とか咸宜園に行けば、秋風庵の入り口に敬天という学が飾ってあります。廣瀬資料館に行けば心高身低という額があります。そのほか、三奪法とか月旦評等、聞き覚えのある言葉が出てきます。それらを私はまとめて図にしてみました。おそらくこの図を作った人はいないと思います。

今回、三花咸宜園を立ち上げましたが、私はこの図の中で特に3つ選り特徴としました。その三つとは、敬天の心と治めて後学ぶ心と今日皆さんにお話する立志の心です。

一つ目の敬天の心とは、天を敬い…生かされている、大切にする、感謝する心 具体的な例として、神様、仏様にお参りするときの仕方から万善簿を付けたわけがここにある。

二つ目は、治めて後学ぶ心です。治めて後学ぶ心とは、身や心をただして…構えや姿を見れば解るといったとえ…

学校教育でこのことを解って、何事も行わないとまさに、砂上の楼閣です。

三つ目が立志の心です。休道の詩の頭にありますように、志を持つことで何事にも頑張れると言うことです。私は、立志を今風に置き換えて、夢としています。ですから子どもには夢を持つことを常に進めています。私は、学校ではずっとこのことを、学校経営の根底に据えてきました。三和小学校でも言い続け、全員の子が夢を持っています。私が、こちらにきて、あるとき二年生の子と偶然であったとき、彼が言うに「館長さん夢は忘れていませんよね」なんですよ。私はびっくりしましたよ。

(3) 転「生活を生き生きさせる夢を持つ」

さて、いよいよ今日の話の中心になりましたが、私が夢を持つことが暮らしを生き生きさせるものだ実感したのは、まだ教員をしていたときに三年生の社会科で老人ホームに体験学習に行ったときである。

九二歳のおじいちゃん…夢があり…生き生きしていた

七二歳のおじいちゃん…夢がなく…元気がない

二〇歳の年齢を逆転させる夢を持つことの必要性を実感した。

以来、夢を持つことの大切さをずっと考えてきた。そこで、咸宜園の淡窓に出会った。淡窓が言う立志の心は、やる気を起こさせる。我慢することができると、いろいろなよい結果を生んでいる。まず、夢を持つことは、目的が生まれる、目的があると道筋が見える、その道筋をどのように行くのか計画が立ち、目標めあてが生まれる。つまり、頑張る気持ちがあわく。この気持ちがあわく、生きるべきさせるのです。「よく行くところがある。することがある」とお年寄りも毎日の暮らしに張りがある。という言葉を聞きますが、まさにこのことだと思えます。

皆さん、よく子どもの頃から明日遠足があるとか、一週間後に修学旅行に行くとか言うように目的があったとき、浮き浮きし、いやなことでも積極的にやって

いた記憶はありませんか。このことが、夢を持つと言うことの大切さにつながると思い実行してきました。

実際に、中学生、高校生で甲子園に行きたいという夢を持っている子は、練習も一生懸命にしますし生き生きしています。一方で、コンビニでぶらぶらしている高校生に、「君の夢は何ですか」と尋ねたことがあります。「そんなもんはない」とたばこの煙をふっかける始末です。

この三花咸宜園では、夢を持つことを勧めています。そして今、現在の暮らしと夢をつなぐものは何かと言うことを考えさせています。それは、目標やめあてを持つことです。夢は遠くに目標は近くにと言うことが今当てはまる言葉ではないでしょうか。皆さん方、人生の大先輩に私から指図することは恐れ多いのですが、子どもの教育に携わってきた経験から、そして、淡窓の立志の心を結びつけるならば、日々の暮らしの中に、夢を持つことをお勧めします。それはどんなものでもいいと云えます。何度も言うように、夢は目的になります。目的があることは、道筋が定められます。行く方向が見えます。そして、その中で、身近な目標を立てていくことで、目標に向かって頑張れます。この頑張っているときこそ、生き生きとしているのです。まさに生きる喜びを感じ取りながら毎日を生活できるときだといえます。

(4) 結「生きると言うより生かされているということ」+

最後になりましたが、淡窓は敬天の心の中で、決して生きるという気持ちにはならないことだと言っています。生きるという言葉を使うこと自体、おこがましいということです。生かされているという気持ちで毎日を過ごすこと、私は到底この気持ちにはなれていないのですが、生きていくという気持ちと生かされている気持ちではずいぶん違うということです。生かされているというように肩肘張らずに、気楽に毎日を過ごしていくのが、元気で、過ごして生きるといえます。

本日は、ご清聴有り難うございました。今、平成三花咸宜園ではこのような講話をしながら、講話を実際に経験させることで知と行を結びつけて実施し、この園から江戸の咸宜園に劣らないような立派な人物を輩出したいと思えます。そして、機会がありましたら交流を図りながらお互い高めていければと思います。本日は、誠に有り難うございました。

■咸宜園世界遺産講座 中之島老人福祉センター講話

期日 平成二五年一〇月二日

(1) 休道の詩からの導入

①休道の詩朗唱 詩の素晴らしさ

・一行目は、個人を励ます(個人に向けて呼びかけ)

・二行目は、友(他の存在)の良さを知らしめ

・四行目は共に生きようと呼びかけ(望ましい社会のあり方)を示している
人生の応援歌と言っても過でない。日田市の市歌の中に取り入れてもよいほど素晴らしいもの。

②この休道の詩が、忘れ去られている。軽く扱われてきた日田の歴史は少々問題ではありませんか。

○会津若松駅には、白虎隊の銅像があり、岐阜駅には信長の像があるが、日田駅には何もない。

これが世界遺産として咸宜園を登録しようとしている町かと言いたくなる。今、日田市が行っていることとはどんなことか。パトリアでの講演が主。

③淡窓先生が私たち平成の日田に生きる人々に願うものは何か

淡窓のことや咸宜園でしたことを知ってもらいたいのではない。

↓淡窓オタクを増やすのではない

考えやしたことを実行してもらいたいのではないか。

④私がやろうとしていることは、

淡窓の考えや咸宜園でしたことを、今の時代ふうに解釈して実行していくことである。

⑤どれをどのようにしていくか

そのためには、淡窓の考えや思い、そして咸宜園でしたことをしっかり整理する必要がある。 ※別紙 表を提示

⑥その中で平成「三花咸宜園」で行っていることとしているのが三つの心である。

「敬天の心」 「立志の心」 「治めて後 学ぶ心」

これらの心を今様に解釈して実行するのであるが、先ず、「敬天の心」とは、「立志の心」とは、「治めて後 学ぶ心」とは、

その中で、今日は「立志の心」について、実践を基にお話ししましょう。

別紙(表)の太枠の部分についてお話をします。このことで一時間しますが、まだまだ他の部分でも話があります。

さて、今日の演題は、「立志の心 夢を抱くことで、生き生きとした暮らしを創る」というものです。

淡窓先生は、厳しい規則やたくさんの勉強時間を塾生に示しました。しかし、同時にその大変さや苦労は「何のためのものか」ということをきちんと指し示してやっていたのです。それが、立志、志を持つと言うことです。私は、この立志を今様に「夢を抱く」ということで置き換えて子どもたちを始め、出会う人と言いつづけています。

私が、夢を抱くことの必要性を感じ淡窓の「立志の心」の大切さかと結びつけたのは次のような出来事から痛感しました。

- ・ 夢を持つことで生き生きとした生活が出来る例① 老人ホームでの出来事
 - ・ 夢を持ってないで生活が荒れる高校生の例② コンビニでの出来事
 - ・ 夢を持ち生き生きと頑張る高校生の例③ 甲子園を目指す高校野球児M君
- 皆さんも、楽しいことがあると、あと何日、など何日と指折り数え、毎日が楽しく、充実したという経験があると思います。まさにそれなんです。楽しいことという「目的」があると、人は生き生きとします。この目的こそが、夢を抱くことで有り、淡窓がいう「立志」つまり、志を持つということです。
- 淡窓は、何回も何回も大病を患っております。その都度生死の淵をさまよっておりますが、「もうだめだ」という気持ちに打ち勝ち、「頑張ろうと奮い立たせたもの何だったのでしょうか。それは、「学問教授で人のため、世のために役立つなければ」という思いでしょうか、彼の夢があったからだといえます。

小学校で、子どもたちに夢を持たせてきたことの例

- ・ 夢を抱き 夢を追い 夢を成す というスローガン
- ・ 二年生の〇児が、「まだ夢を持ってますか」と訪ねてきたときの驚きと、おかしさの逸話

私の八四才になる親父が、「百姓は、俺が頑張らねば」という目的を持って、市ノ瀬一の米作り名人と今も若いもんからいわれ、益々生き生きと頑張っている

姿がある。

淡窓は、休道の詩の中に、どんなに苦しくても、あきらめずに頑張れ、仲間がいるじゃないかと言いつづけているが、ある一面では、ここに集まった塾生たちは、目的つまり夢があったのでしようが、目的達成のために頑張れということを強く言ったといえます。

このように、夢や目的・目標を持つことは、励みとなり頑張れるし、楽しくも有り、生活は緊張感で張り詰めた生き生きとしているといえます。

私は、淡窓が素晴らしいと思う一つが、このように立志という言葉で夢や目的を抱かせ、意欲を喚起し、頑張らせる雰囲気や下地をつくり、生き生きとした咸宜園の生活を行わせていったところです。

このことこそ、今私たちが参考にし、見習い、実行すべきことではないか。

〈実行すべきこと〉

- ① 毎日のくらしの中で、夢を持つ、目標・目的を持つ、すること・行くところをいつも持つ
 - ② 感謝の心を持つ、ものを大切にすることを心を持つ
 - ③ 休道の詩を人生の応援歌として位置づけ、励みとする
- 最後になりましたが、淡窓や咸宜園を学ぶのもいいでしょう。しかし、そこで止めてしまったらただの物知りにか過ぎません。淡窓を学ぶのではなく、淡窓に学ぶや淡窓から学ぶ姿勢でなければいけないといえます。そんな意味から、今日の講座は、淡窓の立志から、夢・目的・目標を持ち日々の暮らしを生き生きとできるように実行すべきだということを学び、明日から実行していただきたいと思えます。終了

【参考資料】 廣瀬淡窓の思想・生き方に学び 学びをくらしに生かす

淡窓先生の思想・咸宜園の教育については別紙の一覧表の通りである。ここでは、これらの項について、平成の今様の解釈とそれに基づく実践とその成果・課題についてまとめる。

項目	今様の解釈	実践	成果・課題
敬天の心	①無量寿・無量光 ②生きるでなく生かされている ③感謝の念 ④周りの物・人すべてを大切にす る 尊敬・感謝・大切に	○神様、仏様をお願いするときの文句 ○お願いします。有り難うございました。を必ず始めと終わりに言わせる。 ○生かされている、60歳からはお返しの期間	▽自身の生き方が大きく変わった。 ▽生きる根底にこの心を据えている淡窓先生の生き方に賛同する一方、このままその通りに実行するのではなく、自分なりに解釈し、実行したり、そのことを広くみんなに伝えていく役目をしていくという決意をした。
立志の心	①夢を抱く ②目標・めあてを持つ ③見通を持つ ④すること・行くところがある モチベーションを高める	○3年生の社会科で施設慰問に言ったときの2人の老人との出会い ○子どもたちに夢を持つことを勧め、1年、2年と経つうちにみんなが夢を持てるようになった ○活動に目標・めあてを持たせ、授業に問いを位置づけることに力を注いだ ○リサイクルの菅嶋君、山羊の世話の山田さん	▽夢を持つことの大切さを実感し、多くの人に伝えることが出来た。そのことで、多くの人を生き生きとさせられた。 ▽菅嶋君、山田さんに代表されるように人間形成の役に立つことが出来た。 ▽夢教育、夢力という新しい言葉も創造することが出来た。
治めて後学ぶ心	①心、姿勢・態度を先ず正す ②姿正しければ構え正し、構え正しければ心正し、心正しければ行いすべて正し ③心の準備、学習する準備をしつかりして、その後勉強に取り組む 心と構えをきちんと整えて学びに入ることを徹底	○正座での学習 ○知・徳・体の心構えや基本姿勢に「治めて後学ぶ」を取り入れ全校で一体となり取り組む ○あいさつ、ローカの歩き方、清掃、靴揃えで徹底して行った ○風林火山に例えて共通項目として行った ○剣の達人「山岡鉄舟」の言葉を引用して常々指導をした	▽学習とは何かについて理解させ、意欲的に学ばせることが出来た。 ▽生活の基礎・基本が身につく人間的に成長させることが出来た。 ▽人を動かすには、目的をしつかりし、方法・手立てを正しく示し、繰り返しの努力と褒める評価をすることで成果を上げることが解った。
条 理	①成るものは成るし、成らぬものは成らぬ ②重いものが上から下に落ち、水が高いところから低いところに流れる ③日が東から上り、西に沈む 物事の成り立ちや有様には一定の決まり(法則)がある	○正しい努力の定義を教えて頑張らせる ・正しい場所 ・正しい方法 ・たくさんの頑張り ○人は男と女の1対1、お互いの役割が有り、支え助け合うこれが人の中の条理という考えで物事に対処した。	▽考えや生き方に余裕が出て、ゆとりのあるくらしが出来ている。 ▽頑張る定義や夢を持たせる方法をわかりやすく理解させ、やる気を起こさせることが出来た。
平 等	①共尊共生の構え ②自己肯定感の尊重 ③個の願いや生き方を尊重 義務や責任を果たした上での個々の権利を尊重	○発表の仕方・方法 ○答えの見つけ方、出させ方 ○考えの深め方、広げ方 深化・拡充の学習展開 ○ギリシア国の3年間の生活から学んだことをくらしの中に取り入れ色々なことに対処してきた。	▽人権感覚、男女共同参画社会についてしつかり考えられ、実行できている。 ▽くらしの中で、優しさ、思いやりなど共尊共生が出来るようになった。 ▽自己を認め、他を認め、敬う心・平等の意識を培うことが出来た。

項目	今様の解釈	実践	成果・課題
ゆとり	①目標・めあてに沿った活動 ②主体的な行動 ③心のゆとり時間のゆとり体のゆとり 目標・計画に沿った活動を主体的に実行する中での余裕	○社会科の地域教材の取り入れによる串刺し学習 ○総合的な時間での郊外体験学習の実施 ○目的を持つことでの心のゆとりは、肉体的な苦痛も苦痛と感じない。 ○六中観を取り入れた励まし、指導。	▽歴史の見方・考え方やくらしへの活かし方が身につく活用している教え子が多い。 ▽自分自身の生き方の中に、多く活かされ、自身生きる幅が大きいと感じている。
知行合一	①体験活動の取り入れ ①事実に基づいた思考の発展 事実～比較～関連～統合 ③学びをくらしに生かす ④社会に役立つ学習 体験に基づいた考え、実行してこそ本物	○王陽明、ベスタロッチの思想 ○空海思想、吉田松陰思想 ○社会科の授業で地域教材を取り入れ体験活動を多く取り入れた「宇土古墳、松原・下釜ダム、日田郡竹槍騒動、ゴミリサイクル、特攻隊、免が平古墳、農業問題」	▽知行合一の身についた子どもは、成人しても仕事場で、地域で認められる存在となっている。 ▽大人になった今でも、当時の記憶が残っていたり、我が子を育てる上で、活用しているという声を多く聞く。 ▽思いを引き継いで教員になった高倉君。
心高身低	①自己の考えをしつかり持つ ②志(夢)をしつかり持つ ③実るほど頭を垂れる稲穂の心 ④礼儀・マナーを身につけ Action 誇りを持つ感謝・優しさ・思いやり	○目上の人を大切に指導 ○大分大学付属小での希な体験を活かした生き方指導。年次の尊重と年齢の尊重 ○勝つても常に敗者のいることを忘れない指導 ○美しい日本人の心を大切に活動、接し方	▽自身の生きたかの中で大きく生かされている事実。 ▽平野君の態度、振る舞い。 ▽やってきたことが、今必要とされている「美しい日本人の心」を育てる。
全人教育	①自分のための学習 ②くらしに生かす学び ③生涯学習の中の一環 ④生き方を学ぶ学習 ⑤キャリア教育 生きる力を培う教育	○学習をする意義を、夢と結びつけて常に話してきた。 「何で勉強するのか」「今、厳しく叱られているのはなぜか」 「なぜ生きるのか」その目的と努力することを結びつけて意欲的に学習をさせてきた。	▽生きる意義、学習する意義など、生涯教育を見通した人間が育ってきたことは事実。 ▽学習したことや、学んできたことが今、生きているという教え子。
師弟同行	①指導者が率先垂範 ②体験を通した指導 ③口先だけでなく、言って・させて・ほめて、人を動かす ④いつも一緒にするのではない。 適切な指導を行う。 きちんと見て、的確な指導・評価	○あいさつ運動 毎朝校門に立ってあいさつ ○サッカー指導で毎日の継続指導 ○教師としての誇りと責任を果たす日々の取り組み。誇りがあってこそ人に教えることが出来る。	▽「これだけは譲れない」というある一線を示してきた。そのことで、子どもが縮まるし、伸び伸びするところもあった。 ○一緒に同じことをしたのでなく、その場において、よく見て、観察して、的確な評価をしてやることで師弟同行の効果を上げた。
個を生かす	①個の夢を大切に ②個のがんばりを認める ③個の夢をしつかり位置づける ④個の特技を見いだし伸ばす ⑤適材適所で能力を生かし伸ばす やる気を認め個の能力に合った道を進ませる	○夢を抱かせ、目標を立てさせ、それを目に見えるところに掲示し個の能力の中で頑張らせた。 ○高校・大学の選び方。夢実現のためにA高校を選択したN君。 ○反省作文の実施 ○個の能力に合った自主学習の実施、やる気の出る評価 ○父の死後、跡を継ぎ医者に挑戦するK君。	▽自己肯定感や自尊心が高まり、自信を持った行動がとれるようになった。 ▽常に自省の心が見られるようになった。 ▽塾にも行かず東大に合格した子が出来た。 今でも大人になった子どもに感謝される。

項目	今様の解釈	実践	成果・課題
詩作	①活動を振り返り文に表す ②事実を見つけ、感じ、考え、学ぼう力を付ける 思考力の向上を図る	○日記を書き続けたBさん。 ○活動の後の作文、必ず目的に沿って書かせる ○添削をし、目的に沿って褒め、目的に沿って方向を示唆することを常に実行した	▽書く力がついた（内容的に向上） ▽考えの基をしっかりと持てるようになった。 ▽いつでも感想、意見の挨拶が出来る。
遊山	①目的・目標・めあてを持った野外体験活動 ②広く自然・歴史・文化・社会に触れる体験活動 目的を持った学習	○チーム仲良し探検（多くの反対の中で、目的を説明し、理解を得て実行） 子どもに計画・調査・下調べ・運営全てを任せる	▽主体的な活動ができ、満足感や自信を得ることができ、そのことが他の行為によい影響を及ぼしていった。 ▽体験で培った意見や行為は自信を持たせるとともに本人を大きくする。
万善簿	①自己の行為を良さで振り返る ②他者の行為を良さで振り返る ③こだわり、継続する 自他の肯定感・感謝と継続	○さらさら言葉の実施、万善の木の制作 ○1日の生活の振り返り、一つ一つの活動にめあてと評価を取り入れ実施。	▽自分に対する自己肯定感が向上していった。（自信を持てる生活の確立） ▽他や周りの行動に目が向くようになった。（協調、共敬共生）
三尊法	①自、自他、目と周りの望ましいあり方から出発 ②責任を果たした平等 ③差別、偏見を無くす心 意欲こそが学びの源	○個々を大切にす言葉、指導 ○人権学習 ○4教科平均点 ○平等の意識、義務・責任を果たすことを基盤においた学習・生活指導の実施。	▽努力する人を認める姿、全体の意識を高める下地を作れた ▽やる気を出し、よい意味でのライバル心が生じ、成績が向上した。
月旦評	①伸びに目を付けた評価 ②伸びを褒め、怠惰を戒めやる気を喚起する指導 ③努力したものが報われる 個に応じた的確で厳しい指導	○サッカー練習、成せばなるの精神で五馬市小の弱小集団を大分県大会3位二回、優秀賞、グッドマナー賞、九州大会ベスト8に導く ○平均点の提示と同時に伸び率の提示で叱咤激励。	▽厳しいのに誰一人止めず継続していった。 ▽足を引っ張るのではなく、認め、励まし支え合いながら頑張る姿があった。退職祝いで感謝の心、成長の跡
自治	①夢・目的・目標を持つことこそ主体的な自治活動ができる ②分担・役立ち・達成感 ③個の責任を果たす義務 どうしたいという思いが積極的な動きを生む	○塾長・副塾長を決め始めの会、活動の進行をさせた ○班長、係長を設け活動の、計画・運営をさせた ○係り、委員会を任せ、見守ることで独り立ちや伸びを期待する指導の実施。	▽活動の始まり、終わりが締め切りけじめがたった。 ▽導入が縮まるので、活動全般が緊張感の中で進み、充実した。 ▽自信と次の目標の確立でさらに意欲的な活動が出来た。
休道の詩	①休道他郷多苦辛の心 ②同衾有友自相親の心 ③君波川柳我薪拾の心 個の頑張りを励まし、仲間存在を示し、共尊共生を勧める	○学級で朝・夕朗唱 ○全校で集会で朗唱 ○詩吟の吟詠 ○学級指導、国語の時間に意味指導	▽淡窓を知るきっかけができた 淡窓と一体感、咸宜園の一員の意識 ▽言葉から、生きる・頑張ろうという示唆をもらい、次の努力に繋がっていった。

「高野長英の咸宜園在塾についての考察」

深町 浩一郎

高野長英は、多くの蘭書の翻訳や著述を行なって我国の科学史上に大きな業績を遺した蘭学の先覚者として広く知られている。長英は、長崎での蘭医学の修学のうちに、日田の淡窓の許を訪れた咸宜園門下生とされている。しかし、その入門簿は残されておらず、少なからず在塾を疑問視する意見も出されている。長英の咸宜園在塾を裏付ける資料は、唯一、出身地岩手県奥州市水沢にある顕彰碑「贈正四位高野長英先生碑銘」であり、その碑文に淡窓の塾に学んだ経歴が記されていることに因っている。しかし、その経歴は単なる伝聞であつて確たる証拠ではないとする学者もいる。この碑文の記述が、証拠として不十分な虚偽的な内容といえるかどうか、また、入門簿に変名で入門した可能性のある該当者はいないのかどうか、などについて考察を加えてみたい。

(1) 「贈正四位高野長英先生碑銘」の咸宜園関係記述について

①碑文の記述について

碑文(原漢文)に記された咸宜園に関する部分は二箇所ある。碑文の初め近くの部分に「(文政)十一年、施福多(シーボルト)国禁を犯し、之に従ふ者多く連座す。先生乃ち去りて熊本に遊び日田に至り、広瀬氏の塾に入る」という記述部分、及び最後の部分の「先師淡窓先生又言ふ、吾が門下士数千、一飯の間も国を憂ふるを忘れざる者は其れ唯だ長英かと。亦以て其の人を知るべきなり」という記述部分である。

すなわち、文政十一年に起きたシーボルトの事件(シーボルトが国禁の日本地図などの海外持ち出しをしようとしたことが発覚し、国外追放になった事件)で多くの関係者が連座して罪を問われたとき、長英は熊本に逃れ、そこから日田に来て広瀬淡窓の塾に入門したということ、さらに、淡窓先生は高野長英のことを称賛して「自分の門人は数千人に及ぶが、片時も国のあり様を憂慮するのを忘れない者は、長英のみであった」

と語っていたが、それによって長英が志のある人物であったことを知ることができるといふこと、とが述べられている。

②碑文の撰者「谷口藍田」について

碑文を書いた人物について考察する。

碑は明治三十四年に建てられたもので、それに先立ち明治三十二年に碑面の顕彰の文を撰したのは、谷口藍田(名は中秋)である。谷口藍田は、肥前有田出身の佐賀藩士で、天保十年七月、「山口龍蔵」十七歳の名で咸宜園に入門し、名を韓介石と改め、位次九級下に至り都講に任じられ、天保十五年一月に塾を去っている。その後、江戸に出て羽倉簡堂の塾で学び、このときに佐藤一斎・佐久間象山・鈴木春山・窪田治部右衛門などの知遇を得、また江戸に滞在していた広瀬旭荘とも知り合った。佐賀に帰り藩校弘道館で教授し、のち郷里で塾を開いている。なお、このときの幕末動乱期のエピソードとして、日田最後の郡代になっていた友人の窪田治部右衛門に軽拳しないように忠告を送り、最終的に窪田は町中を戦禍に巻き込むことなく静かに日田を退去していったといわれている。維新後は、各地で学問教授し、晩年に東京に出て藍田書院を開き、北白川宮能久親王の聘により皇族などへの進講・教育にも従事している。明治三十五年八十一歳で歿した(注1)。

ただし、長英が淡窓に学んだとされる文政十一年ないし文政十二年の時期と、谷口藍田の在塾時期とは十数年の差があるので、二人が面識があったとは思われない。そのため、この碑文の記事が他人から聞いた単なる伝聞記事であるとされるのである。

③碑文の依頼のいきさつと「高野長運」について

「贈正四位高野長英先生碑銘」の碑は、政府から長英が「正四位」を追贈された際、宮内省御下賜金と有志の献金により、長英の曾孫にあたる高野長運らの有志者によって建設されている。それに際して、高野長運が明治三十二年に藍田に碑文の撰文を頼んでいる。碑文の最初に、そのいきさつのあらましが「今茲己亥(明治三十二年)、奥州の人高野長運、其の曾祖瑞阜(長英)先生の行状を齎し来たり、余に示して曰く『昔、

我が曾祖……吾れ同志と謀り、將に諸を不朽に伝へんとす。請ふ、子之に銘せよ」とと記されている。

高野長運の書いた『高野長英傳』（昭和三年刊行）に「淡窓の門人にして、漢詩人として有名な谷口中秋翁は嘗て著者に左の如く語った。『私の先師廣瀬淡窓は、屢ば長英先生の為人を賞揚して「吾門に出入せる者が数多いけれども、一飯の間と雖、国家を忘れざる者は、高野生只一人のみである」と言はれたことを記憶して居る』云々。明治三十二年郷里水沢に建設せる、谷口中秋翁の撰に係る長英碑銘の文末にも『淡窓先生又言、吾門下士数千人 一飯之間不忘憂国者 其唯長英乎 亦可以知其人也』とある。時に長英二十六歳であった。是れ真に長英の気魄を語るものである。』（注2）と記されており、依頼者の高野長運と谷口藍田は交友があつて撰文を依頼したことがわかる。

④谷口藍田と「羽倉簡堂」「鈴木春山」について

藍田が長運に語った言葉、及び碑文の言葉は、その文意どおりに、咸宜園で講として師淡窓と接する機会の多かつた藍田が、淡窓から長英のことを直接に聞いていたことを語つたものと考えてよいと思われる。

もしも、藍田が淡窓から直接聞いたのではないとしても、藍田は江戸で、羽倉簡堂の塾で学んでおり、また田原藩士の鈴木春山と交遊があつたので、そのため、淡窓と親しかつた羽倉簡堂から長英の人物や淡窓の長英評のことを聞いたか、あるいは長英とは親友であつた鈴木春山から聞いた可能性が十分に考えられる。碑文の中に「余、昔、羽倉簡堂氏に寓し、春山と交はり、先生（長英）の風を聞くを得たり」と記されているからである。

羽倉簡堂も鈴木春山も広瀬淡窓とは関係のある人物である。羽倉簡堂は、幼少のころ日田代官の子として日田に在住して淡窓の教えを受け、以後も交際が続いていた人物であり、鈴木春山は、田原藩の医家・兵学者で、文政十一年二月十三日に咸宜園に「鈴木春次郎」の名で入門し八月二十五日まで在塾した人物である（注3）。長英が塾を訪れた時期は文政十一年夏頃から文政十二年春頃までと思われるので、あるいはその

ころから咸宜園で春山は長英とは面識があつたかもしれない。田原藩で同藩の渡辺華山と親交し、また、渡辺華山・高野長英・小関三英らと蘭学研究をおこなつた。長英とはかなり親しく、長英に和蘭の兵学を学び、西洋兵学書『三兵答故知幾』の翻訳などを依頼し、また長英の脱獄や江戸潜伏を助けた協力者であつた。なお春山は、田原藩で渡辺華山を支援し、華山亡き後の田原藩の藩政改革を受け継いでいる。

⑤高野長運著『高野長英傳』の記述について

高野長運著『高野長英傳』（昭和三年刊行、第二増訂版 昭和十八年岩波書店）は、高野長英の曾孫に当たる高野長運氏が医業のかたわら長英の著書・書簡等の資料を収集して『高野長英全集』（昭和五年刊行）を編纂し、昭和三年に刊行したもので、今日最も標準的な伝記とされている。その記述では、長英が淡窓のもとを訪れたことは疑う余地がないものとして書かれている。

その「第七章 長崎より江戸まで」の章の記述の中で「長英が豊後の儒者、廣瀬淡窓に師事したことがあると云ふのも、筑前と肥後とを往復する途次立寄つて滞在したことを指すものであらう。……長英は熊本に永くは居らず、文政十二年の春を迎へるや、間もなく立つて、豊後日田に赴き廣瀬淡窓を訪うた。長英は已に洋学の研修に於ては其の堂に入つて居つたのみならず、素より漢学にも通じてゐたのであるから、淡窓を訪うて漢籍詩文の教を乞ふに何の不思議もないのである。長英の訳文の流暢巧妙なる、又後年よく詩を賦して述懐したるが如き、皆慙うした用意があつたからである。」と記している（注4）。また、それ以前については「想ふに長英が長崎を去つて筑前に武谷元立を訪うたのは、此の年即ち文政十一年の初冬の頃であつたらう。元立の家は、山間の僻地に在つたけれども、諸方の洋学研究の有志は、良く訪ね來つて滞在した。（中略）史実に拠れば、シーボルトが捕はれて出島に幽せられたのは、十一月であるから、長英が此の事件を知つたのは、恐らく此の時即ち元立の許に滞在して、諸生の為に蘭学を講義してゐる最中であつたらうと思ふ。それから熊本に赴くのであるが、長英の熊本行の目的が、果たしてシーボ

ルト事件を避ける為であったか、それとも学友訪問、或は其の他の目的の爲めであったか、未だ判明しない。(中略) 此の事件に関して、長英の身辺が余程危いものであったことも充分推測される。さて、筑前の武谷元立の許を立て、肥後の熊本に著いたのは、此の年も暮れに近き頃であったらう(注5)としている。そして、日田以降については「シーボルト事件が結了した頃と前後して、長英は豊後の廣瀬淡窓の許を立てたものである。そして復た筑前に武谷元立を訪ねた。今度は永くは居らずに……直に筑前を出発し……此の秋八月に廣島に著いたのである。(中略) 斯くして、此の年は熊本を立てて豊後に寄り、筑前を経て廣島に來り、到る所に洋学を積き治療に応じながら越年するに至った」(注6)と記されている。

この伝記の記述によると、シーボルトが捕われて出島に幽閉された文政十一年の十一月には、長英は帰郷の途次で筑前鞍手郡の武谷元立の許に滞在して講義していたが、事件のことを知ってこの年の暮れに熊本に逃れ、そこで正月を迎え、文政十二年春に熊本を發つて、豊後日田に赴いたとする。そして、事件の終結した頃(六月頃か)日田を發つた後、また武谷元立の許に立ち寄り、八月に廣島に到着したとする。

その根拠は、武谷元立の子である武谷祐之の『南柯一夢』の中に「高野長英・原恭篤・平井海蔵等、シーボルトに学び長崎より帰途前後、余が家に来り訪ひ、皆数月間滞留講義ありしなり」(注7)との記述があるため、その帰途前後に筑前の武谷元立の家に立ち寄ったとし、また、長英が江戸の後援者・神崎屋源造に送った文政十二年十月二日付の書簡に「小生無事、当八月芸藩到着、直様出都可仕の処、社中追々相増、当時暫時滞留に相決、……小生事も去年長崎の難を逃、爾來肥後に退き、……」(注8)とあるため、事件後に肥後に逃れ文政十二年八月には廣島に到着したとするのである。

なお、武谷元立もシーボルトに学んだ人物であり、その子の武谷祐之は、天保七年二月に咸宜園に入門し都講を務めた後、天保十四年に大坂の緒方洪庵の適塾に学び、のち福岡藩の藩医となり藩医学校を設立した人物

である。祐之は、長英の碑文を撰文した谷口藍田より三年ほど早く入門した先輩に当たり、淡窓の『懷旧樓筆記』に、天保十四年「三月朔日、祐之、大婦近きにあるを以て都講を止め、介石代つて権都講となれり」(注9)とあるとおり、祐之のあとに都講を引き継いだのが藍田である。藍田は、先輩の祐之から父元立の家に長英が立ち寄ったことなど直接聞いていたかもしれない。

⑥長英の鳴滝塾での友人「岡研介」について

長英がシーボルトの鳴滝塾で学んでいたときに、学力を競った同塾生に岡研介がいた。岡研介は、周防出身、字は子究、号は周東、恥菴、万松精舎といい、下関・大坂で開塾した著名な蘭方医で、惜しくも四十一歳で亡くなった人である。文政二年四月に咸宜園に入門し、文政五年六月に塾を去つて福岡の亀井塾で学び、文政七年二月に長崎に出てオランダ通詞吉雄権之助の塾に入門しシーボルトの鳴滝塾で学び、初代塾頭となった人物である。鳴滝塾での初期の門下生の一人で、長英が鳴滝塾で学んだときは、すでに一年半以上の先輩に当たる。ちなみに長英より五歳年長である。

ある塾生の回想によると「研介は高野長英とともに同学中の巨擘にして儕輩中に頭角を露わせり。読書力は長英が研介に勝り、文章会話は研介が長英に優れたり。当時先生(シーボルト)に面会を求むるものは皆研介の通訳を煩わしたり」(注10)と語っている。研介と長英はともに塾中の俊秀であったのである。ふたりで協力して『蘭説養生録 三卷』を訳してもいる。

長英と岡研介はかなりの交際があったものと思われ、長英は研介から咸宜園や廣瀬淡窓の評判などをよく聞いていて、研介のごとく文章に秀でるために機会があれば淡窓の許を訪ねたいと考えていたかもしれない。

⑦長英と友人であった蘭方医「伊東玄朴」「坪井信道」について

シーボルトの鳴滝塾で学びのち長英と交際の深かった伊東玄朴は、肥前神崎郡の出身で、『咸宜園出身八百名略伝集』(廣瀬先賢顕彰会編纂)では

入門簿はないものの咸宜園門下生とされており(注11)、もしそうだとすれば、咸宜園の情報について鳴滝塾内で長英にも影響を与えた可能性がある。なお、天保十五年に大坂の旭莊塾に、紹介者として子と思われる伊東玄敬(十八歳)と伊東虎吉(十一歳)を入門させている。咸宜園の内容をよく知っていたからだと思われる。

同じく、長英と交際の深かった坪井信道は、若いころ日田に滞在し淡窓とも親しかった人物である。『懐旧樓筆記』の文化十二年の項に「尾州の医生坪井環と云ふ者あり。三四年來、三松齋寿が家に寄寓して医を学び、常に余が家に來往せり。極めて才氣あり、志願あるものなり。此の年の冬、當彊を辭し去りしが、其の後も兩三度來遊せり。此の人、後年東都にあり、稱を改めて信道と云ふ。蘭学を唱へ当世の一名家となれり。余が門人、医を学ぶ者往々其の門に入れたり」(注12)とある。信道が十九〜二十一歳の頃のことと思われ、淡窓の教えを受けていることから『咸宜園出身八百名略伝集』では、準門下生としている(注13)。天保十五年に、大坂の旭莊塾に、実子の坪井信友(十三歳)と養子の坪井信良(佐渡良益・二十二歳)を、紹介者になって入門させている。なお、信道が日田滞在の後、広島に行き蘭方医・中井厚沢のもとに学んだとき、四歳年下の岡研介もいて、二人は仲の良い親友となり以後も親密な交際が続いている。

このほか淡窓の周辺には門下生を中心に蘭方医で活躍した者が多く、当時は、咸宜園で医学の基礎として漢学の素養を学ぼうとする傾向が高かったといえるであろう。長英も、文章力向上のため、さらに深く漢詩文を学ぼうとしたことが考えられる。

なお、シーボルトの鳴滝塾で学んだ賀来毅篤(佐一郎)は、豊後出身の帆足万里門下でのち島原藩医となる人であるが、長崎から淡窓のもとに岡研介の書簡を届けており、研介の友人でもあつて淡窓に教えを受けたことがあつたかもしれない。淡窓の日記『欽齋日曆』には、文政十二年「四月四日、賀来佐一郎、自長崎歸過訪、到岡研介書」(注14)とあり、この書簡で岡研介の取調べの件は解決したことを知って安心している。

⑧ 淡窓への「シーボルト事件」の情報

淡窓の自叙伝『懐旧樓筆記』によると、文政十二年二月三日の条(注15)に「加藤俊民長崎に遊んで歸り來訪す。去年來、蘭人の変事有ることを聞きしが、今始めて其の詳なることを聞き得たり」とあつてその内容がかなり詳しく記されているが、これによると淡窓は文政十一年十一月の事件後にいち早くその事件の情報を得ており、二月三日にその詳細を聞いたことがわかるのである。シーボルトが国禁の日本地図などを不正に得ていたこと、八月の暴風雨で蘭船が難破して発見したこと、シーボルトが帰国を許されずにいること、江戸の高橋作左衛門(景保)や土生玄碩・長崎の吉雄忠次郎ら多数が獄に繋がれたことなどをこのとき詳しく知るのである。なお、淡窓はシーボルト事件の内容について「総て彼国(オランダ)の学問と云ふは、格物窮理を主として、天地間一物も知らざるを以て憾とす。故に我邦の事を搜索するものにして姦謀邪計あるには非ず」と評価しており、かなり冷静な判断をしていたといえよう。また門下生の岡研介のことについて、このとき連座して獄に繋がれ、あるいは死亡したと聞いており、久しいこと心配していたが、それは誤伝で、事件当時は長崎にはいなかったことがわかったと述べている。なお、事件当時、研介は長門国赤間関にいて難を逃れたが、その後に急に長崎奉行から呼び出されて長崎で取調べを受けたので心配していたが、それは禁書である蘭書(『三山論学記』艾儒略(ジュリオ・アレニ)著)の件についての取調べで、それにはうまく答弁して事なきを得て無事であったことがのちに判ったことも語っている(のち四月四日に賀来佐一郎の届けた研介の書簡によるとと思われる)。

シーボルト事件の経過は、以下のとおりである。文政十一年八月九日に長崎を襲った暴風雨で、シーボルトが九月二十日に帰国するため乗船予定であつた蘭船「コルネリウス・ハウトマン号」が座礁し、積荷の中から国禁の日本地図などが発見押収され、十月十日に江戸でこの地図を贈っていた幕府天文方・高橋作左衛門(景保)が捕らえられ入牢、十一月一日に急使が長崎に到着しシーボルトは出島に禁固され取り調べ、十一月十日に和蘭通詞の馬場為八郎・吉雄忠次郎らが逮捕され、その後、

十二月には鳴滝塾関係者の高良翁・二宮敬作なども入塾した。なお、シーボルトは翌年の文政十二年九月に国外追放の申し渡しがあり、十二月五日に長崎を出航して帰国した。

⑨鶴見俊輔著『高野長英』の記述について

鶴見俊輔著『高野長英』（昭和五十年 朝日評伝選1 朝日新聞社）では、「長英ははじめ養父の一周忌にあたる七月までには郷里にもどろうとしたが、長旅に必要な金を用意することができずに出立をひきのぼしているうちに、シーボルト事件がおこり、熊本に難をさけた。あくる年の文政十二年（一八二九）春には、事件のほとぼりがさめたのであろうか、長英は豊後の日田に入って漢学者広瀬淡窓の塾にしばらくとまり、筑前をとおって、秋には広島についた」（注16）との記述があり、ほぼ高野長運の長英伝の説によっていると思われる。この書について「高野長運が、その生涯のほぼ三分の二をついやして書き、改訂増補した『高野長英伝』は、全国各地からかくれた資料をさがしだして集大成したもので、明治人のエネルギーを感じさせる書物である。今日も、この本を読みかえずことなく長英伝を書くことはできないだろう。私はこの本に負うところが大きい」と述べ、しかしながらこの伝記は「高野長英の肖像は、長運自身が理想とした明治の日本国民であって、その理想にあわない資料は無視されている。長英が酒をのんだことや女を好んだことや同輩にたいして傲慢であったことは、わりびいて考えられ、長英がもと芸妓を妻にもらったことや非人栄蔵に獄舎に放火させたことはまったく否定されている」（注17）とも述べ、開国に尽した愛国者といった理想にあわせて作られた長英像だとしている。

⑩佐藤昌介著『高野長英』の記述について

佐藤昌介著『高野長英』（平成九年 岩波新書）では、長英の足取を「これまでシーボルトのために多くの論文を書き、あるいは和文献を蘭訳するなどしてかれの日本研究を助けていただけに、身に危険を感じていち早く長崎を脱出し、海路、肥後に渡って、熊本界限に潜伏した。そしてほとぼりがさめるのを待って、翌文政十二年の春すぎに熊本をたち、

途中、久留米・赤間関・三田尻など、街道筋の宿場で診療に従事しながら、広島にむかった。広島に着いたのは同年八月のことである」（注18）としたあと、淡窓の長英評について「長運翁の『長英伝』には、長英が熊本を去るにあたり、豊後日田の廣瀬淡窓をたずねたことが記されていて、そのなかに、淡窓が長英を評して「わが門下生数千人のうち、一飯の間といえども、国家を忘れざる者は、高野生ただひとりのみである」といったことが紹介されている。淡窓は江戸時代後期の儒者兼詩人で、郷里の日田において学塾、咸宜園を経営したが、門人数四千人を越え、全国の知識人がこぞってここを訪れたと伝えられる。その淡窓が長英をこう評したということから、かつてこの言葉を引用してかれを誉めたたえる長英ファンがすくなくなかった。しかし、これには伝聞以外、確たる証拠があるわけではない。のみならず、長英が熊本をたつて江戸にむかう間に、旅中の診療を記録した『客中案証』によれば、かれは肥後から筑後・筑前を経て赤間関に抜けており、豊後日田を通っていない。だから、長英が廣瀬淡窓を訪れたこと自体が疑わしいといわざるをえない」（注19）としている。

淡窓の言葉が「伝聞」であって「確たる証拠があるわけではない」ということに対しては、ここでそれが全くの虚偽とする証拠を示しているわけではなく、逆に、伝聞の内容が真実であった可能性は高いと思われる。そもそも、淡窓の高弟であった藍田が、長英の子孫から直接頼まれて公けに建てる顕彰碑、しかも天皇からの下賜金で建てることとなった顕彰碑の碑文に、淡窓の偽りの言葉を書くこと自体が考えられないことである。

また「長英が廣瀬淡窓を訪れたこと自体が疑わしい」ということも断言できないと考える。この時期は、長英は身を隠しながらの逃亡生活であり、その潜伏場所や旅程自体がほとんど不明であり、長英自身詳しい記録は避けていたものと考えられるし、淡窓側の記録でも、淡窓はこの当時すでにシーボルト事件の情報を知っており、その事実の記述を避けたものとも思われので、確実な証拠がないのは当然であろう。

また、引用文献の『高野長英全集 第一巻』にある『客中案証』は、その解題には「文政十二年から天保元年にかけて九州から京都までの旅中で屢々接した疾病とその治療法とを臨床的に記述し、且つ解説したもの」(注20)とあって、内容を詳細に視ると、患者名とその症状と治療方法とを箇条書きに書き連ねた単なる診療記録以上のものではなく、日付けもまったなく、地名も所々に散見される程度のものである。地名だけをみると、「筑後久留米」「長州赤間関」「大隈村」「船木駅」「厚狭市」「萬倉村」「周防賀川村」「防州平生」「防州三田尻」「防州宮市駅」「防州花岡駅」以下、安芸(廣島)、備中、備後、備前、播磨、摂津、浪華の各地の地名が続いている。九州は筑後の久留米と大隈村(久留米郊外)、長門は赤間関、舟木、厚狭、万倉、周防は賀川村、平生、三田尻、宮市、花岡と続いて記されていて、肥後、豊後の地名はなく、明らかに筑後久留米以降の記録であろうと思われる。したがって、『客中案証』によっても、肥後から筑後までの行程は不明であり、佐藤昌介氏の書いているような「かれは肥後から筑後・筑前を経て赤間関に抜けており、豊後日田を通っていない」ことが分かるような記録ではない。

(2) 長英の変名での入門の可能性について

「高野長英」名の咸宜園入門簿は残されていない。そこで、変名で入門したのではないかという疑いが以前からあった。最もよく知られている「江戸医生・島道勇」であるという説について、その疑問点を検討してみたい。

① 「江戸医生・島道勇」であるという説

廣瀬先賢顕彰会編纂『咸宜園出身八百名略伝集』にある説で、それによれば「長英は淡窓の門下といわれているが、それは文政十一年シーボルト事件の発生より長崎より逃れて早くも身をかくし熊本・豊後等を経た当時であるが記録には確かではない。だが「文政十一年五月八日、江戸三拾間堀、島道勇」の名で入門しているのがそうではないかと推定されている」(注21)と記されている。

その記述によると、淡窓の日記『欽斎日曆』には「(文政十一年五月)八日 江戸医生島道勇及安芸医生為広杏庵入門」(注22)とあって、位次入級前に十月には権書記に任じられ、翌年一月の月旦評で一級下に位している。既に相当の経験を積んだ年齢の人と見るべきで、長英とすれば二十七歳のはずであること、また、文政十二年の二月十二日に塾を去って長崎に行き、三月四日には再び塾に帰り、三月七日には淡窓に別れを告げ塾を出て何処に行つたか明らかでなく、長英だとすれば中国地方を経て翌天保元年五月に京都に着いたものと思われることを挙げている。

② 変名・住所についての疑問と反論

この説については、シーボルト事件以前の五月に、本名ではなく変名で入門するのは不自然であると指摘されている。これについては、長英の名は蘭学者として既に広く知られており、いままら漢学塾の初学者として入門することを潔しとしなかったからではないかという見解がある。

また、住所を江戸と偽っていることの疑問については、十七歳から江戸に出て吉田長叔等に蘭学を学んで江戸に馴染んでいたもので、江戸人を装ったのであろうと説明する。

③ 在塾期間についての疑問―長崎居住説への反論

淡窓の『日記』の記述から島道勇個人の動向がすべて明らかとなるわけではないが、行動に何の変動もなければ、文政十一年五月から文政十二年二月頃まではずっと咸宜園に留まっていたこととなるので、文政十一年の八月頃に長崎に長英がいたとされる記録に反するとの指摘がなされている。その根拠は、長英がシーボルトの帰国にあわせて、シーボルトの希望する日本の記事を蘭語訳したものに『京都に於ける神社仏閣の記述』(原本『都名所車』)という論文(注23)があり、その序文の日付が「文政十一年八月二十三日 日本長崎に於いて」となっているからである。この論文は、シーボルトが九月二十日に帰国予定なので、それに間に合うように長崎に居て仕上げたものであろうとされている。

これに対しては、この論文の序文の文章をよく読むと、そこに「私の蘭語の知識が不足なため、和蘭語の性質や動詞の用法などの研究の必要を感ず

るのですが、先生の乗って母国へ帰られる和蘭船は、私の希望する程永く当地に泊つてゐますまい。それでは私の目的は水泡に帰します。これが私が自分の語学の勉強になるところの主題だけを大急ぎで仕上げる所以であります（緒方富雄訳）（注24）という記述があり、自分の希望するほど蘭船が停泊してはくれないことと、そのため精確な語学の知識による翻訳を断念して大急ぎで仕上げたことを断つていことが述べられているのである。しかし事實は、この日付の八月二十三日より先の八月九日に、九州・中国地方を襲った暴風雨でシーボルトの乗船予定の蘭船「コルネリウス・ハウトマン号」が座礁して動けなくなり出航が大幅に延期されているのであり、このとき、積荷のなから国外持出禁制の日本地図等が発見押収され以後のシーボルト事件が起きることとなるのであつて、長崎に滞在していたとすればこれほどの大暴風雨と出航延期の事実を知らないわけがなく、つまりこの序文の記述は不自然で、この出航延期の事実を知ることができない別の場所で書かれたものを、シーボルトの許に届ける際に「八月二十三日、長崎」としたものであろうと推論せざるを得ない。訳者の緒方富雄氏もこの日付について疑問を呈している（注25）。

この八月九日の暴風雨は、淡窓の日記『欽斎日曆』にもその烈しさが「百年來、未曾有の変なり」として、書齋や塾舎の雨漏りや庭樹の倒壊や各地の被害の伝聞が記録（注26）されており、『懐旧樓筆記』では「此の月九日、及び二十四日、大風なり。百年以來なき所なりとぞ。屋を覆し樹を抜くの類、挙げて数へ難し。両筑・両肥・両豊よりして防長までの間、最も甚し。我が縣、屋崩れて圧され死するもの蓋し二十人に及べり。諸国も之に準じて知るべし。両筑の間は火災所々に起れり。又、此の頃、備州より客来りしが、其の語に、来路防長及び豊前の海辺を過りしに、到る処、積屍累々として山を成せり、是は皆溺死せる者なりとぞ。九日尤も劇し、二十四日其の勢九日の半に及べる程なり」（注27）と記している。大きな被害をもたらした記録的な大暴風雨だったのである。

なお、この頃に長英の長崎での滞在が確認されるのは、文政十一年四月十二日付の叔父茂木左馬之助あての書簡である。それには「玄碩君同道、

平戸出立、長崎に四月九日に帰着仕候」とあり「大抵此の相談は五月末に出立相出候様子に御座候、左候はば七月（養父の）一周忌には帰郷可相成候、御安心可被成下候」（注28）とあるので、四月九日には長崎に帰着して滞在しており、また、知人との帰郷費用の相談が調べば五月末には長崎を發つて七月には奥州水沢に帰郷できることを報せているのである。ところが、実際には七月には帰郷していない。したがって、四月九日の翌日以降の長英の足取りは不明であり、しかも郷里に帰ろうと行動していたわけで、そのまま長崎に在任していたとは断言できない。

なお、住所もなく年号もない八月七日付けの茂木寛之丞ほか親族宛の書簡があり、『日本の名著』（佐藤昌介責任編集・中央公論社）では文政十一年の書簡として掲載（注29）されているが、『高野長英全集』の第五巻の「長英伝未載の書翰二通」では（2年後の）天保元年の京都での書簡として解説（注30）している。文中に「於長崎医学罷在候処四ヶ年已前脚氣之症相煩」とあり、長崎で医を修学（文政八年八月）して四年も脚氣症を患っていると書かれているので、文政十二年八月以降のものと考えられ、天保元年のものとするのが正しいと思われる。かりに文政十一年の八月七日の書簡だとしても、場所ははっきり記載されておらず、しかも八月九日の大暴風雨の二日前であり、先に述べるようにこの大暴風雨による事故のことを知らなかったことを考えると、長崎での書簡とすることは疑問となる。

長英が八月に長崎に確実に居たとすれば、五月初めに変名で入門以来ずっと日田に滞在していたことは矛盾することとなるが、そうでなければ、長崎を發つて五月初めに日田を訪れたことは可能性としては考えられることとなる。ただ、八月以降に入門しても、またシーボルト事件後の十一月以降に入門しても不都合はないのに、なぜ五月に入門する必要があつたかは説明できない。

④入門の紹介者について

『入門簿』の記録によると、文政十一年五月八日に島道勇と同時に咸宜園に入門したのは、安芸出身の医生・為広杏庵であり、兩人の紹介者は安芸出身の有田大助である（注31）。有田大助は、すでに文政七年に有田東六

の名で入門し、このとき五級上で副監などを務める先輩であった。この当時、廣瀬謙吉（旭荘）は最高位の八級上の別格扱いで、鈴木春次郎（春山）は客席であったが、後日の旭荘の日記『日間瑣事備忘』によると、謙吉は、自分と春次郎、有田大助、青木官次（当時六級下で東塾監、豊前出身）とが塾では仲が善かったと言い、文政十一年に鈴木春次郎と有田大助と青木官次と一緒に東去したと述べている（注32）。淡窓の『欽斎日曆』では、文政十一年八月「二十五日 大助、雍叔、春次郎、音平、還郷。官次東遊。皆来告別」（注33）と出ている。鈴木春次郎（春山）は高野長英の親友であり、脱獄後の潜伏などを支援した人であるので、この当時からすでに二人の交友があったと仮定した場合には、春次郎を通じて、その友人である有田大助の紹介による同郷の医生・為広杏庵の入門と同時に、その紹介で入門の便宜を図ってもらえた可能性も考えられる。

⑤ 岡研介の関与の可能性について

岡研介が最初に蘭学を学んだのは安芸（広島）の蘭方医・中井厚沢であり、高野長英が広島に留まったときに頼ったのが中井厚沢である。長英の広島からの神崎屋源造あて文政十二年十月二日付の書簡に「書状御遣被下候はば、芸藩屋敷便にて星野良悦・堺町二丁目、鉄砲屋町・中井厚沢方まで、御遣被下度候、此の兩人は小生の尤も世話に相成候処也」（注34）とある。島道勇と同時に入門した為広杏庵は安芸の医生で芸州佐伯郡古江村（現広島市）出身なので、中井厚沢の門人であった可能性が強く、岡研介を紹介して中井厚沢門人の咸宜園入門に便乗してもらったことも考えられる。

なお、日記『欽斎日曆』によると、鈴木春次郎について、文政十一年「六月十一日 春次郎自長崎回。致岡研介書。及気海観瀾」（注35）とあり、春次郎は長崎に赴いて岡研介に会い、研介の書簡、及び『気海観瀾』（青地林宗著の西洋物理学書）を借りて帰り、淡窓に届けている（後日、淡窓は七月二十二日に岡研介あて返却している）ので、鈴木春次郎と岡研介は以前から面識があったかもしれない。そうであれば、岡研介から頼まれて鈴木春次郎が関係したことも考えられる。

⑥ 退塾時期について

日記『欽斎日曆』によると、島道勇が塾を出るのは「文政十二年二月十二日 道勇・・・還郷」とあり、その後「三月四日 道勇自長崎帰、来見」とあるので、二月十二日に一時帰郷するとして塾を出ているが、実は長崎に行つて三月四日に塾に帰つて淡窓に会見したこととなっている（注36）。そして退塾するのは「三月七日 道勇告別」とあつて、長崎より帰つた三日後である（注37）。

これは、咸宜園にシーボルト事件の詳細がもたらされた「二月三日 加藤俊民自長崎帰、来訪止宿、始審蘭人変事」（注38）の九日後の二月十二日に塾を出て長崎に行くタイミングであり、二十日余りして長崎から帰り、すぐに退塾したこととなる。このことは、事件の詳細が分かり、それを確認するために長崎に向き、その結果、塾を離れることとなったものと考えられることもできる。その後は、肥前に行き、筑前を経由（あるいは、武谷元立の許に立ち寄ったか）して、八月に広島に着いたと推定することとなる。

⑦ 塾での成績等の記録について

道勇について、日記『欽斎日曆』によつて月旦表の記録を見ると、まず職任で「文政十一年十月二十六日 改月旦評、・・・道勇 権書記、・・・」（注39）と記されているが、職任は年齢や経験を加味するので、塾では年長者の二十五〜三十歳程度であつたのではないかと考えられる。また、成績については、文政十一年五月二十六日の月旦評で「入席」後、文政十二年一月二十六日の月旦評で「一級下」に格付けされている（注40）。この成績は入席後八カ月かかつて一級に進級しており、恐ろしく進級が遅いと言わざるを得ない。

もし高野長英であれば、この当時すでに蘭学の秀俊として知られており、しかも子供時代（七〜八歳）には祖父の医師・高野元瑞らに漢学を学んでいる経験があることからみて、このような成績は考えられない。ちなみに、時期は少し下がるが、同じく咸宜園に学んだ医生・村田宗太郎（大村益次郎）は、入席一カ月後に権々一級上になり約十カ月後には権四級上に進級し、それから四カ月のちに退塾している。島道勇のこの成績は、よほど勉

学を怠っていたか、あるいは漢学とは全く別な方面（蘭学など）の勉学をしていたかしか考えられない。

また、日記『欽斎日曆』には、文政十一年「十一月十三日、恕助、舜蔵、道勇犯約。各行出黜罰。恕助暫帰。舜蔵黜班次相卿下。道勇免書記、為侍者直日十回」（注41）とあり、その内容は分からないが道勇に規約違反があり、書記を免じられ侍者となる処罰を受けている。長英は自負心が強く傲慢な性格で人に嫌われるところのある人物であったと評されているので、あるいは規約に違反するような行為があったのかもしれないが、淡窓が日記に記録するような目立つ規約違反であったわけで、人格的に好ましい人物とはいえないだろう。

このような成績面等から見ると、島道勇は優秀な塾生であったとは考えられず高野長英の変名であったとは思われない。ただ、身を隠すために、あえて普通の塾生を装ってただ在塾のみしていたとすれば、ありえないことではないだろう。

⑧結論

島道勇が高野長英の変名であったという説は、結局はどちらともいえない。現時点では確実に違うとも言い切れないためである。淡窓の日記に記載された、可能性ある期間（文政十一年夏頃から文政十二年秋頃まで）に入門しかつ退塾した塾生を調べた結果は、他にこれといった該当者は見つからず、「島道勇」はかなり可能性が高い塾生となる。このため、従来からこの人物が長英の変名であろうとされているのも納得できることではある。

(3) まとめ

私的な見解としてまとめると、長英の顕彰碑に記されている谷口藍田の碑文は、藍田の知り得た長英の事蹟について、淡窓自身から直接に、または長英と交友のあった羽倉簡堂・鈴木春山など咸宜園と関係のある者から聞いたものであったと考えられるので、かなり信用でき得るものであると思われる、またシールボルトの鳴滝塾には岡研介などの咸宜園関係者がいて、咸宜園のことを詳しく知り淡窓を紹介してもらえる環境に長英

はいたので、碑文にあるとおり、事件のあと熊本に逃れたのち、日田の淡窓を訪れて滞在したとして間違いないものと思われる。

そもそも、淡窓の高弟であった谷口藍田が、長英の子孫の高野長運から直接に依頼され、宮内省からの下賜金等で建てられることとなった顕彰碑の碑文に、淡窓の偽りの言葉を書くことなどおおよそ考えられないことである。

入門簿に名前が見当たらないことについては、変名での入門の可能性もまったくゼロではないが、おそらく日記に「来見」「来訪」「来謁」等として淡窓の許を訪れたことが記されている人物がその偽名であったか、または長英の身を案じて淡窓があえてその訪れた記録を残さなかったかであろうと思われる。

今後、変名あるいは偽名での記録があるかどうかについては、なお詳細に調査する必要があるだろう。

(注)

1. 「儒学者 谷口藍田」（浦川晟 明德出版社）ほか
2. 「高野長英傳（第二増訂版）」（高野長運 岩波書店）二〇八頁
3. 「欽斎日曆」巻一（淡窓全集 中巻）三六三頁、巻二（同）三七九頁
4. 「高野長英傳（第二増訂版）」二〇八頁
5. 「高野長英傳（第二増訂版）」二〇六頁
6. 「高野長英傳（第二増訂版）」二二一頁、二二四頁
7. 「高野長英傳（第二増訂版）」二〇五頁
8. 「高野長英傳（第二増訂版）」二二二頁
9. 「懐旧楼筆記」巻四十九（淡窓全集 上巻）六五八頁
10. 「高野長英」（鶴見俊輔 朝日新聞社）九四頁
11. 「咸宜園出身八百名略伝集」（廣瀬先賢顕彰会編纂）四七頁
12. 「懐旧楼筆記」巻十六 二〇二頁
13. 「咸宜園出身八百名略伝集」二二四頁
14. 「欽斎日曆」巻三 四〇〇頁

- 15 「懷旧樓筆記」卷二十七 三五〇～三五二頁
- 16 「高野長英」(鶴見俊輔) 一一七頁
- 17 「高野長英」(鶴見俊輔) 三五〇頁
- 18 「高野長英」(佐藤昌介 岩波新書) 五二頁
- 19 「高野長英」(佐藤昌介) 五二頁
- 20 「高野長英全集」第一卷(高野長英全集刊行会 第一書房)「客中案証」
- 21 「咸宜園出身八百名略伝集」一二五頁
- 22 「欽齋日曆」卷一 三七一頁
- 23 「高野長英傳」二七三頁
- 24 「高野長英傳」二七四頁
- 25 「高野長英傳」二七六頁
- 26 「欽齋日曆」卷二 三七八頁
- 27 「懷旧樓筆記」卷二十七 三四五頁
- 28 「高野長英傳」一九七頁、一九八頁
- 29 「日本の名著 渡辺崋山・高野長英」
(責任編集 佐藤昌介 中央公論社) 三七九頁
- 30 「高野長英全集」第五卷(監修 高橋碩一 第一書房) 四一三～
四一六頁
- 31 「入門簿」卷二十一(淡窓全集 下卷) 三三三頁
- 32 「日間瑣事備忘」(廣瀬旭莊全集 日記 卷三) 二〇八頁
- 33 「欽齋日曆」卷二 三七九頁
- 34 「高野長英傳」二二三頁
- 35 「欽齋日曆」卷一 三七二頁
- 36 「欽齋日曆」卷三 三九四頁、三九六頁
- 37 「欽齋日曆」卷三 三九七頁
- 38 「欽齋日曆」卷三 三九四頁
- 39 「欽齋日曆」卷二 三八五頁
- 40 「欽齋日曆」卷三 三九三頁
- 41 「欽齋日曆」卷二 三八六頁

なお、注で記載した参考文献のほか、「広瀬淡窓と高野長英(松月秀雄 教育学雑誌 1968)」「高野長英の在塾を問う(岩沢光夫「敬天」第39号)」「高野長英をめぐるミステリー(次郎丸明穂「敬天」第29号)」を参考した。

資料紹介 西村天囚著『亀門の二広』について（下） 廣瀬旭莊編

溝田 直己

はじめに

本文は前回に引き続き、大阪朝日新聞社の記者であった西村天囚が、明治四一年（一九〇八）一月一日から二月一六日にわたって連載したコラム「亀門の二広」を紹介するものである。今回は、明治四一年一月二三日から二月一六日の間に掲載された廣瀬旭莊全二五回分について掲載する。西村天囚の来歴や「亀門の二広」を執筆するに至る経緯については、前回に詳しいので参照いただきたい（一）。

今回の旭莊編を紹介させていただく上で、若干追加させていただくとすれば、「亀門の二広」の連載において、天囚は淡窓について二一回、旭莊については二五回紙数を割いている。「亀門の二広」最終回において、淡窓・旭莊兄弟について、「品学兼優にして教育の功大なるは淡窓を推し、才識高くして遭遇の趣味多きは旭莊を推す」と二人の違いを指摘するとともに、旭莊については「而して旭莊は我大阪に縁故深きを以て叙述頗る詳なるを期せり」とある。これは、鹿兒島県種子島の出身であり、東京に出てのち、大阪に居を構えた天囚自身と同様に豊後国日田から大坂・江戸に出でて活躍した旭莊への思い入れ、また天囚の郷里の先輩であり、親戚（母の姨の子）でもあった種子島三七（石峰）が旭莊の門人であったことなどからか、旭莊については淡窓よりもその連載は四回ほど上回っている。

明治四〇年（一九〇七）、取材のために日田を訪れた天囚は、淡窓・旭莊兄弟の遺著を読む中で、旭莊の日記『日間瑣事備忘』の価値を見出し、朝日新聞社と大阪図書館長の今井氏の協力を得て、写本を作成した（註2）。これが現在、大阪府立中之島図書館に所蔵されているものである。旭莊のことについて書かれた「亀門の二広」については、最近徳田武氏が紹介した「増訂 西村天囚著『亀門の二広』 廣瀬旭莊」もあるので併せてご覧いただきたい（註3）。

〔付記〕

今回の資料紹介にあたって、公益財団法人廣瀬資料館の廣瀬資料館の廣瀬貞雄氏、原田俊隆氏、廣瀬洋一氏に快く許可いただきました。深く感謝いたします。また「亀門二広」の原文確認については朝日新聞社にご教示いただきました。翻刻文についての責めはすべて筆者が負うものです。

〔註1〕 溝田直己「資料紹介 西村天囚著『亀門の二広』（上）廣瀬淡窓編」

『咸宜園教育研究センター研究紀要』第三号、二〇一四、日田市教育委員会

〔註2〕 徳田武「廣瀬旭莊『日間瑣事備忘』の顕彰―亀谷省軒・牧野藻洲・西村

天囚に於ける―」『江戸風雅』第九号、二〇一四年

〔註3〕 徳田武・長田和也・山形彩美「増訂 西村天囚著『亀門の二広』 廣瀬旭莊」

『江戸風雅』第八号、二〇一四年

〔凡例〕

一、この文章は明治四一年一月一日から二月一六日にわたり、『大阪朝日新聞』に連載された「亀門の二広」と題して連載されたコラムである。底本は前回と同様に廣瀬家が所蔵しているスクラップブックとし、不明瞭な箇所に関しては、朝日新聞社「聞蔵Ⅱビジュアル」や徳田武氏（註3）を大いに参考にした。

一、原文の文字はすべて旧字体であるが、原則として常用漢字に改めた。

一、原文の表記は旧かな使用であるが、現代かな使用に改めた。ただし送りがないことができるだけ原文のままに残しておいた。

一、原文の漢字は漢数字以外ほとんど全てにルビがふられている。現代かな使用に改めてルビをふりなおした。また明らかに読みが間違っているものは適宜修正した。

一、本文中で明らかに間違っている事項に関しては修正した。また天囚段階で不明となっていた事項も現在明らかになっているものに関しては追記して記したものがあ

●龜門の二廣

(二十三) 天 四

廣瀬旭莊(一)

龜門の塾長 ▲茶山流涕 ▲宜園の若先生 ▲代官の謹斥

廣瀬旭莊は淡窓の季弟なり、文化四年丁卯五月十七日を以て日田に生る、淡窓より少きこと二十五歳、初め獻吉と稱し、後ち謙吉と改む、師の昭陽に字を請うるに、考え置かんとありて其の俛となりければ、自ら通称を分ちて名字と爲し、名を謙字を吉甫と云えり、初め秋村と号し、又其の居る所の書窓東に面して、旭光室に満ちけるより旭莊と号し、年三十比別に室を築くに及びて梅墩と号せしが、秋村の号は後年高弟の柴六郎に譲れり。

旭莊幼より兄の淡窓に仕込まれ、天稟の才氣英発せし上に、宜園第一の才子中島子玉等と切磋して、学門大に進めり、素養十分に出来たる上にて、年十七の文政六年九月、福岡に遊びて亀井昭陽の門に入れり、昭陽其の才を愛して、間もなく塾長の印綬を与えたり、千二百言の論詩長篇は、十八の時の作なり、村上佛山が年十六龜門に入りし文政八年には、旭莊二十にして猶塾長たりき、旭莊詩学を家兄に得て、更に經学文章を昭陽に学び、天才と力量と並に長進して、頗る其の中を闊にして其の外を肆にせり、此歳四月には家に帰り、更に筑後に遊びて樺島石梁を訪い、年二十二の文政十年には、備後に遊びて菅茶山の廉塾に遊べり、茶山は山陽道の宿儒、淡窓年二十七詩稿を寄せて正を請いしより文字因縁あり、九州の龜門宜園と鼎足して教育界の大明星たり、茶山時に年八十、老病を以て命旦夕に迫れり、旭莊を引見していと嬉しげに、拙者昨年に死すべかりしを、天御身に逢わしめんとてや生存しめけん、御身は天下の奇才なり、我未だ死なずして相見しは何の幸ぞや、若七十九にして歿りたらんには、曷ぞ今日の觀面を得ん、人は誠に寿なかるべからず、御身も亦宜しく養生して寿域に躋るべしと語りけり、是れ誠に才を愛する長者の言とこそ言うべけれ、五月十三日に到着して、同じく七月二十一日(詩集には閏六月五日とあり)には、別を茶山に告げければ、茶山流涕して、御身異日此の地を過ぎば、我は已に黄葉山下の土たらん、御身馬を下りて相弔わんや如何になど云いつつ訣別せりとぞ、茶山は此の歳八月十三日を以て歿りき、梅墩詩鈔の送僧寥然歸備後詩に、黄葉山前黄葉秋。師今歸処我曾游。傷心最是詩翁墓。復有二人來澆酒。と云えるは之が爲にして、

三十一年後の安政四年に、旭莊長州に遊ぶの途次、再び神辺の菅氏を訪うて、茶山の墓を展せし時に、往事追懷卅一秋。梅辺下馬上二筇丘。身體髮禿形容換。為問先生記。我不の詩を手向けしは、往日の誓を踏みしものなり旭莊の廉塾に遊びしは留学の志なりけんも、茶山の病の爲に、在塾二月許りに過ぎざりしが、発廉塾の詩に、初我来此中。新知幾誰某。俶儻多異才。規諍富益友。の句あり、亦見聞を広くせしなるべし、此行四国を経て山陽に入り、帰途には広島に頼杏坪を訪うて、坐上に佐藤一齋門下の吉村秋陽と相見又采蘋女史と共に杏坪に陪して春曦樓に月を賞し、斯くて日田に歸れり。



廣瀬旭莊画像 (公益財団法人 廣瀬資料館所蔵)

旭莊二十五の天保元年には淡窓五十、隱居して家を旭莊に伝えんとし、宜園の塾政を挙げて旭莊の手に委すべきを発表せり、宜園の弟子中には、我曷ぞ北面して孺子に事えんなど息巻く輩もありけれど、老師の命と云い、旭莊の才学と云い、到底も抗すべからざるを知りて塾議一決し、門人八十七人連署して、旭莊に事うるに淡窓に事うるの礼を以せんことを誓えり、此より旭莊は儼然として若先生の尊号を受け、翌天保二年以後は、旭莊一人して塾政を料理せり、旭莊の性質は淡窓と同じからず、淡窓は恭順にして陰気の人なり、旭莊は快活にして陽気の人なり、況や年少にして客氣を免れざるをや、無遠慮の言行も多かりけん、旭莊は痛く代官塩谷氏の忌諱に觸れ、左らぬだに干渉の弊ありしに、此に至りて試験に干渉し、規約に干渉し、果ては屢々譴責閉門の厄に遇えり、塾生も亦此の比より徒党の風を生じ、桀驁法を輕んじて、約を犯し規を乱るもの多く、益代官の察度を招けり、旭莊の日記に拠れば、代官旭莊を憎むこと甚だしく、將に不測の禍あらんとせしも、其の父忠信を以て事に任せし功績ありしより、代官も父にめんじて之を許せりとあり、其の衝突いと烈しかりしを知るべし。

●亀門の二廣

(二十四) 天 囚

廣瀬旭莊 (一)

長崎の遊▲堺の風雅▲風呂屋征伐▲京阪の交友

旭莊は代官の威炎を避けんが為にて、年二十九の天保五年には西游の途に上り、先ず福岡に旧師昭陽に謁し、佐賀に古賀穀堂を訪い、藩儒井内南涯(傳右衛門)吉村幹齋(祐平)小代布水(喜右衛門)枝吉南濠(忠左衛門)等の催せる詩会に臨み、去て多久の聖廟に謁して、草場佩川及び其徒と徴逐し、遂に長崎に遊び、高島秋帆を案内として唐蘭館を見物し、淹留二旬余にして日田に帰り、更に筑後に遊び別府に遊べり、常に代官に睨まれては、不平に堪えざる事多かりけん、遂に年三十の天保六年には、飄然上方さして故郷を出でたり、一には遠思樓詩鈔上木の用を兼ね、一には上国に旗幟を翻えさん為なり、旭莊後年の自記に云く、予れ譚を塩谷君(代官)に得しは、一時の殃にして終身の福なり、始めて書を読みて人情世態を解することを知り、一時の虚名を窃むを得たる、皆其の賜なりと、実に然り、代官の圧迫なからしめば、旭莊も亦淡窓と同く山中の村夫子として身を終りしやも知る可からず、蛟龍は池中の物に非ず、身を躍らして天下の広衢に立ちしは、夫子の才大にして日田代官に容れられざりし賜なり。

旭莊は先ず泉州堺にと身を落着けたりき、是より先き宜園の高弟にして日田の人なる小林安石(名勝、字安石)、年久しく医を堺に開きしが、往年帰省せし時、旭莊に上国の游を勧めしことあり、因て安石を以て東道の主人と為し、是の歳七月、堺の専修寺を借りて帷を下し、後ち甲斐町に借宅して塾を開き、又逍遙吟社を結びて風雅を鼓吹せり、吟社の盛なるや南北に分れ南を逍遙鵬社と云い、北を逍遙鯤社と云えり、堺はもと商賈の地にして絃誦の声も聞えざりしに、此に至りて文教漸く起りしは旭莊の力なり。

堺に在りし時は、旭莊血氣尤も盛にて、奇談も少なからず、門生十五六人あり、一日門生輩が最早彼の風呂屋には行くまじと語るを聞き、旭莊何故ぞと問えば、風呂屋の主人強慾の頑物にて、如何に熱くとも水を和べて呉れず、一日帯を解きし客には湯銭を還さずと云う、旭莊よしく我れに従い來れとて、師弟其の風呂屋に至り、衣を脱ぎて浴に就きしが、旭莊熱しく水を和べよと云う、三助大約にて二杯の水を和せしに、猶熱し和べよと云えど和べ

ず、斯くては浴し難し、いざ帰らんとて、衣を着て湯銭を還せと云えば、主婦一旦衣を脱して浴したまわぬはお客の損なりと云う、いや浴せらるる湯ならばこそあれ、此熱湯を如何にせんと云えば、此の位にて浴せられぬことやあるべきという、然らば三助を浴せしめんとて、十五六人の師弟総掛にて三助の衣を脱がせ、手足を捉えて湯の中に入れければ、熱しく死んずるぞと叫ぶ、見よや三助が死んずるほどの湯に客を入れんとする不埒さよ、汝も斯して熱湯に浴せしめんとて主婦に立向えば、許したまえと叫び、主人も出でて百拝しけり、因て水を和べさせて浴しつ、翌日門生どもは再び往くまじと云う、旭莊は彼れ我が命に服せしに、今日より日に十五六人の湯銭を失いては、何を以てか昨日の三助が苦を償わんとて、相変らず其風呂屋に往きしに、怖しき先生かなとて、大に水を和べて款待しけるとなり、此等は淡窓ならば、如何に少年の時にても為さざる所なりと自ら人に語りとぞ、この調子にては代官とも衝突を免れざりけん。

旭莊堺に足を留めて京阪儒雅の士に交りしが、大阪にては僧雲華・篠崎小竹(名弼、字承弼、称長左衛門、時に年五十六)・後藤松陰(名機、字世張、別号春草、称俊藏、小竹の女婿)・藤澤東咳(名甫、字元發、讚岐人)等にして、東咳に因て野田笛浦(名逸、字子明、称希一、丹後田辺人)に交れり、京師にては貫名海屋・仁科白谷(名幹、字禮宗、肥前人)、摩島松南(名弘、字子毅、称助太郎)等を訪えり、宜園の高弟矢上快雨海屋に学び、遂に京に住せしが、快雨死して海屋は其の寡婦を娶りしより、後年旭莊は海屋の無恥を賤しみて深く相交らざりき。

旭莊は堺に在りしこと僅に一年に滿ちずして、翌天保八年の二月には江戸に上れり。

●亀門の二廣

(二十五) 天 囚

廣瀬旭莊 (三)

江戸の檜舞台▲大阪の町儒者生涯

旭莊の仲兄南陔は、塩谷代官に信用せられて、水利新田等の事に任せしが、塩谷氏去て間もなく、諸郡より出しし経費二万兩余の用途に關して訴訟起り、南陔一身の難儀と為りけるより、羽倉簡堂に因て家難を解かんが為に、堺なる

旭莊は俄に江戸に赴く事と為れり、因て旭莊は篠崎小竹に佐藤一齋・古賀
何菴への添書を請ひ、野田笛浦に松崎慊堂・齋藤拙堂への紹介を求めなどして、
諸大家を歴訪せん準備をも整え、天保八年二月九日を以て大阪を発し、花のお
江戸へと乗込めり。

江戸にては直に羽倉簡堂を訪えり、
簡堂は幼にして淡窓に句読を受けし恩誼
もある事とて、旭莊を待つこと甚だ厚
く、之を我が家に寄寓せしめて、当代知名
の学士文人に其才を掄揚せり、簡堂博洽の
学と経済の才とを、挟みて時に用いられ、
賢良の名隆々として起り、士人喜んで
之と遊べり、而して淡窓の名は已に儒林に重くして、旭莊の才も亦世に聞えつ、
簡堂の勢力を以てして旭莊の才名を鼓吹せしを、時の大家先生皆髪を握
りて之に接せざる無く、才を待みて岬を負う者も、亦皆舎を避けて之を待てり、
此の行真に花方の旭莊が檜舞台の名題披露なりき。



菅茶山画像
〔「亀門二廣」スクラップより転載〕

旭莊は簡堂に因て、先づ当時官学の覇権を握れる林祭酒（名衡）字徳詮号
述齋の門に出入し、其莊園に遊びて二十四景及び巽園七勝の五言短古を
賦し、述齋の子藕濱（名燿）の招飲に陪して八官樓に登り、其の兄榿宇（名
就）字用翰、及び成島東岳（名司直）字邦之奥御儒者、後ち函書頭、安積良齋
（名信）称祐助、併に林門諸子と相見て、席上に五古長篇を賦し、藕濱も
亦筆を走らして相酬いつ、榿宇の雅会には、簡堂を初め、古賀何菴、岡本豊洲
（名成）字子省、称忠次郎、一号華亭、幕府史、及び成島・篠田両秘書監と
同席して、快談湧くが如く、詩を賦せずして散じき、一面には小竹・笛浦の
紹介せし佐藤一齋、松崎慊堂（名復）字明復、肥後人、齋藤拙堂（名謙）字
有終、称徳藏、伊勢人）の諸儒を歴訪し、簡堂の座上にては、越後の館柳湾
（名機）字樞卿、称雄二郎、越後人、齋藤篤信齋（名善道）字忠卿、称
彌九郎、越中劍客、立原翠軒（名萬）字伯時、称甚五郎、水戸人）を識
り、梁川星巖の玉池吟社にては、津藩の塩田隨齋（名華）字士鄂、称又之丞、
仙台の大槻盤溪（名崇）字士廣、称平次郎）等と唱和せり、其の他交る所
の名士には、市河米庵（名三亥）字孔陽、村瀬誨輔、昌谷五郎（名碩）号
精溪、津山人、池尻葛草（名始）字有終、称茂兵衛、久留米人、山田三郎

（字号を逸す、上州安中儒員甘雨亭叢書編者）、藤堂蕉石（名約）一号琴山
伊賀老臣）等、亦皆一方の雄にして、隠見同じからざるも、各一長を挟む者
たり、旭莊之と馳聘して才名益揚れり。

旭莊江戸に在ると八旬許りにして、所用も済みければ、五月十三日に羽倉
氏を辞し、帰途を木曾街道に取りて泉州堺に帰りしが、去年の夏より上木
に着手せし遠思楼詩鈔初編は、周歳の功を積みて八月の末に竣工せしより、
新版の書を携えて、九月郷里の日田に帰り、淡窓は旭莊が江戸話に興を
催し、詩鈔の刻も表装も頗る美なるに、大に老懷を慰めたりとは左もあら
ん。

旭莊は天保九年三十一の春を故郷に迎え、二月郷を出で、四月の末に大阪
に達せしが、已に江戸に花を咲かせて儒林の名題役者と為りし旭莊は、復た
偏小なる堺に割拠するを欲せず、堂々として門戸を三都の一たる大阪に張れ
り、是れ村夫子より一足飛に大家と為りしなり、文政より天保にかけて宜園に
学びし人々の、京撰に散居する者尠からざりしかば、其の周旋の力も多か
りしが如し、旭莊曩に合原氏を娶りて、三十始て故郷を出でし翌月に、兒
孝之助（即ち林外）を生みしが、此に至りて妻子をも呼迎えて、町儒者生涯
を大阪に営めり。

●亀門の二廣

(二十六) 天 囚

廣瀬旭莊 (四)

大阪住居五年 ▲大村侯の聘 ▲江戸住居四年 ▲失敗して西下

旭莊は初め居を船場西横堀船町橋東詰南入処に下し、孟浩然が江清月近
人の句を取りて月近亭と云いしが、問もなく呉服橋東南苦屋町に移り、又も北
は浮世小路南は高麗町に通ずる四軒町に転じて芝軒と名け、更に西国橋南に
入る処に引越せり。

大阪にて最初一二年間は門生も少く、生活も困難にて父兄の助を借りけれ
ど、三十四の天保十一年には、入門も益多く、翌年より一入盛に為りて、
立派に儒者生活を営みけり、三十六の時、肥前大村侯に聘せられて三月末に一
旦日田に帰り、日田より大村に入り、大村より長崎に再遊し、大村侯の入観に
従いて、九月中旬肥前を発し、途中は大村の家中廣田儀左衛門と変名し、

人より借りたる槍を立てて、館舎は太夫に準せられ、いと厚き待遇にて大阪に
歸れり、大村侯切に仕を勧められしを、旭莊辞退しければ、昔者上杉鷹山侯
紀平洲を礼待して善く其の國を治めたり、予が先生を持つこと鷹山に減せず、
而も先生若し我が藩の小なりとして辞せられなば、盛徳を汚さんとまで仰せけ
れども、旭莊は存する仔細もあればとて固辞したり、其の後大村侯は七人扶持
を給せられたりき。

旭莊は天保九年五月大阪に儒業を開きてより、天保十四年の春まで足掛六
年に及びり天保十三年の暮には、淡窓官賞を蒙りて永世の苗字帯刀を許され
しが、時に水野越州 政を執りて、羽倉簡堂其の信任する所たり、是れより
先き簡堂は旭莊に束して、越州足下の才を聞きて聘用に意ありと聞く、越州
は不世出の英傑、宜しく命に応ずべしと勧めしことあり、其の後も東上を勧め
られしより、旭莊一には養父淡窓に代りて賞典の御礼を申さん為に、一には
兄南陔に代りて簡堂に依頼すべき用件を兼ね、此の歳五月には遂に大阪の塾を
廢し、妻子を故郷日田に送還して、再び江戸に出でたり、蓋し青雲の志な
きにしもあらざりけん。

江戸に著きて早速羽倉氏を訪いに、簡堂は官命を以て大阪に赴かんとする
折とて絮語を得ず、事頗る予期と違ひしが如し、因て兄の南陔と共に印旛沼の
開墾を見物し、兄に別れて足利学校に遊び、遂に日光山に謁せしが、日光より
江戸に帰るや、九死一生の大病に罹り、病癒えて去留に迷えり、時に文化
の末に日田に來りて、三松齋壽という医師に從學し、屢淡窓の門に往來せ
し美濃の書生坪井環は、名を坪井信道(名道字信道号誠軒)と改め、蘭医の
大家として江戸に在り、來りて旭莊を訪いしが、旭莊は信道に因て伊東玄朴
(号冲齋、淵春院法印)にも交れり、信道・玄朴の二人、切に旭莊に江戸
住居を勧めけるにぞ、旭莊も亦意を決して江戸に一旗挙げんとし、遂に其の
勸に従いて此の歳十二月末に、手広なる新宅を浜町に買えり、(地代一年十
兩)代金七十九兩なり、信道・玄朴の二人諸事を拮据し、折ふし昌平校に在
りし頼三樹三郎も亦奔走して其の事を助けたりき、宅は浜町と久松町との
間に在りて、塩田淳菴の隣なり、其の塾を名けて肅舎と云えり。

旭莊の江戸住居は失敗なりき、其の才学以て徒を招くに足らざりしに非ず、
肅舎は相応に賑いしが如し、而して其の梅墩詩鈔初三篇も、亦在江戸の時
に出板に着手せり、諸名流と交遊して一個の名家たるを失わず、然れども

運命は旭莊に幸いせざりき、弘化元年七月江戸に來りて同棲せし妻の合原氏
は、其年末に病死せり、翌年正月の発会に、來客碓井玄仲刀を失ひ、四
方探索に苦心奔命せり、其の後屢盜難に遇えり、而して妬忌の徒讒を逞し
くし、依附する所の簡堂をして西歸の勸あらしむるに至れり、後ち其の疑い
は解けたれども、旭莊は天時未だ至らずと嘆じ、江戸住居は祖先の意に違え
るかど疑い、遂に浩然として歸志あり、已に帰装を整うるや、僕喜助が為に
金銀衣服を盗まれて、囊橐一空の難に遇えり、天保十四年の夏に江戸に入りて
より、弘化三年の秋まで四年にして、此の歳八月は兎も角もして江戸を去れり、
交遊別を惜しみし中にも、坪井静軒・伊東冲齋等十数人は送りて品川に至れり
き。

● 亀門の二廣 (二十七) 天 四

廣瀬旭莊(五) 大阪は故郷▲儒者評判と名流月旦▲旭莊の成功

旭莊は弘化三年の九月五日大阪に着して、故郷に歸るの思ありと記せ
り、実にも大阪は旭莊が第二の故郷なり、彼れは先ず宅を淡路御霊西へ入
処に借りて講業を開き、吹田・灘・兵庫・和泉・河内の各処に出稽古をも為
し、嘉永四年には西下豊後に歸り、同じき五年には播州に遊び、七年には山陰
道に遊歴し、安政元年には居を伏見町に移し、庭に桂樹九株あるより九桂草堂
と号し、同じき三年二月日田に歸りて淡窓の病を看護し五月上阪、淡窓死去
の為に十一月又も歸國し、同じき四年二月上阪し、此の年の冬山陽道を遊歴し
て長州に入り、日田に歸りて翌年五月上阪し、安政六年夏五月より北陸道
に遊びて、約一年半の間も旅稼を為し、萬延元年九月に歸阪し、文久元年
長子林外大阪に來りしが、此の歳二月、一旦家を携えて林外と共に日田に歸り、
新に雪來館を日田会所の山陰に築きて、居ること二年許、同じき二年の暮に
上阪して、更に居を中の島の松山侯倉邸の前に下せり、弘化三年江戸より再
び大阪に來りしより、此に至りて十七年、遂に是の歳八月十七日を以て中の島
の橋居に歿せり(この一文誤り)、享年五十七、墓は天王寺雲水の邦福寺に在り。
旭莊が大阪再住の翌年なる弘化四年に、儒者評判記なる者出でたり、京阪
の儒者詩人文士二十名を挙げて、等を分ちて品評し、最上を真極上上吉と

云い、次は極上上吉、次は大上上吉、最下を上上吉と名けたるが、篠崎小竹は最上等に在り、藤澤東咳は第二等に在り、而して旭莊を黜けて詩人列中の最下等に置けり、其の品評は悪口を主とし、上等に居る者といえども、醜詆を極めざるなく、往々閨門の隱私に及べるが、旭莊を評して、此の人淡窓の弟なるを以て、名譽頗る噪ぐも、其の詩は拙甚だし、蓋し山を為す者ならんと云えり、是れ固り当時市井の悪戯にして、無頼の小人が、才を妬み人を傷けんとする鳥澁の為なるのみ、旭莊を最下等に置くが如き、一笑に哂せず、然れども小竹存命中は、旭莊の才を以てするも猶後輩たるを免れず、嘉永四年に小竹歿して後、旭莊の潤筆は小竹と同額に進みて大阪第一流の大家たり、嘉永六年には浪華風流月旦というもの出ず、儒書畫歌俳二百余人を挙げて相撲番附に擬し、大阪の橋に比較して其の長短を分ちたるが、所謂天満・天神・浪華の三大橋は、後藤松陰、藤澤東咳、金子雲操(名大美、字不言、畫人)にして、後見・勘進元・差添人たり、並河寒泉(名朋來、字享先)・中井桐園(名及泉、字公混、稱修二履軒孫)の二人は、京橋・御成橋を配して行司たり、旭莊と奥野小山(名純、字温夫、稱弥太郎、小竹門人)とは、兩大関にして、旭莊は大江橋小山は亀井橋なり、松陰、東咳、雪操は本地の耆宿なるを以て、並河・中井は郷校の先生なるを以て、世望衆に異なる者やありけん、此は特別の事情とも謂うべし、奥野小山に至りては、固り旭莊の敵に非ず、旭莊を以て一方の大関に据えしは、稍公論に近からざるに非ざるも、軽重未だ當を得ず、別に一人を選びて小山の敵手と為し、旭莊を降せて張出横綱と為したらんには、目覚ましき大相撲たるべきなり、此より以後旭莊は實に小竹に継ぎて当時の大阪文壇に於ける泰斗たるをや、但だ其の名望の相若かざるが如き者あるを覚ゆるは、豈旭莊の徳小竹に若かざりしか、抑、小竹は養父三島以来の素望あり、旭莊は在任久しからざりしが為か、小竹の名は化政の盛時に起りて、保弘の際に鳴り、寿を享くること七十余年なり、旭莊の時は外難頻りに至りて、風保の際に鳴り、壽を享くる其の寿も亦僅に五十七に止れり、是れ其の二人者の同じからざる所以なるも、旭莊は慥に大阪文運の末造を震盪せし一大雄才なり、而して彼は成功の歴史を留めて、骨を大阪の土に埋みき、實にも大阪は旭莊が第二の故郷なりや。

●龜門の二廣

(二十八) 天 囚

廣瀬旭莊(六)

窮死せんと欲す▲儉約還債▲町儒者の面目

旭莊三十にして家を出で、三十二大阪住居の比までは、父兄の牖を嚙りけるも、三十四五より能く儒業を以て自活し、三十六にして大村侯に聘せられ、前後賜う所約二百金ありて、随分余財をも蓄え居けるが、江戸に上りて後は、日光より歸りて大病に罹り、医薬の料も多く、其の上に住宅を買入れ、且修繕を為しけるほどに、囊中無一物と為り、三十八の時に、兄棧園の江戸に來るや、其の初めて座に着くと共に金三兩を借りたるぞ借金開始なりける、其年に妻の合原氏が病氣に、引続きて病死埋葬等、百四五十金を費し、確井玄仲が刀を失いしより、探索を諸方に依頼して百余金を費し、いざ大阪に歸らんとしては、僕喜助に旅費衣服を奪われ、再度の大阪住居にも、借屋の費數十兩に及び、積りて借財五百六十兩と為り、四十一の弘化四年の歳の暮には、二進も三進もゆかぬ窮境に陥れり、旭莊の日記に拠れば、大阪人は貧乏者と交際せず、今日までは世人未だ我が窮を知らざりしも、近來は人稍我が窮迫を知りて、交漸く疎ならんとするが如し、父兄に告げて借財を還さんかとも思ひしかど、我れ猶器物書籍衣服あり、悉く所蔵を売らんに若かずと思ひ、先づ淵鑑類函等数部を売却せり、生來書籍を売払いしは之を始と為すとあり、翌嘉永元年の歳末に至りては、百債並に至りて首も廻らず、旭莊直話の筆記に曰く、詮方尽きて屢死なんと思ふ程の苦なり、因て朋友格別の交ある人にも相談したれど、金錢の事に至りては世話する風のみにて、實は一兩も貸す人なし、唯菊池溪琴三十兩を貸したり云々と、以て其の窮境を知るべし。

旭莊は儉約家なり、皮履木履の類は、一足四五年も穿き、破損用ゆ可からざるに至りて之を棄てたること日記に見ゆ、其の上斯く窮乏したりしをもて、極めて儉素を守り、飯は一日二合五勺に限り、冬は綿衣一つ、夏は絺衣一つにして暮し、嘉永二年に大村侯より賜わりし五十兩をもて、借財返済に充てしを手初として、四十五の嘉永四年六月迄に、五百余金の借財を、自力にて一銭も余さず清還せりという、是れ常人の為し難き所なり、門生の束修月謝のみにては、高の知れたるものなりけん、書を売り詩文を売りにて、斯る大金を三四

年間に返済したりしと、僉約の結果とは云え、旭荘が町儒者としての位置甚だ高く、時人の仰慕する所たりしに因らざるばあらじ、小竹の死は嘉永四年なり、小竹死後は旭荘の潤筆小竹と同額になりて、全組一枚金百匹なりしとやらん、安政三年の秋、山陽道より長崎に遊歴せし時は、約十箇月許りに及びしが、日田に至りて出納を會計せしに、金二百八十三両余を贏し得たりとあり、是より先嘉永七年作州より伯州・雲州に遊び、後年越前・加賀・能登・越中に遊歴せし時の潤筆料も、亦莫大なるものなりけん、是皆還債後の事なれば、窮して死なんとせし旭荘も、中年以後晩年に至りては、生活頗る裕なりしを疑わず、旭荘の兄弟は皆貨殖に巧にして富を致せり、淡窓といえども教授を業として、猶三千金の遺財ありしという、旭荘にして父兄に依頼せば、其窮は死を思うに至らざりけん、独力自ら儉して以て鉅債を還せしは感心なり、但其遊歴にも、常に潤筆の多少を論じて市井の気を脱せざる処、即ち町儒者の面目なるべし。

訂正 昨日の二十七回(中の島の僑居に歿せり)は誤記にて池田の僑居に歿せりに改む、旭荘は文久三年六月一日を摂州池田に転居したりしなり



曇榮禅師画像と筆蹟 (南冥の弟) (『亀門二廣』スクラップブックより転載)

● 亀門の二廣 (二十九) 天 囚

廣瀬旭荘(七) 記憶力と活字典 ▲学風は宋儒 ▲吾邦の袁子才

淡窓は記性人に絶せしが、旭荘も亦非常の記憶力を有せり、旭荘曰く、予十七昭陽先生に従遊せり、一日先生、足下涉獵する所の書を抜萃したるやと問われしかば、余答えて、大抵は記憶せり、抜萃は多事なりしと云いしに、

昭陽先生、是は信玄城を築かざるの見なりと賞せらる、當時亡友岡子究が贈序に、龜子稱曰「活字典の語あり、三十迄に涉獵せし所の大略は、三鏡、六国史、日本史、藩翰譜等の国書、十三經、漢魏叢書、十七史、弘簡錄、明史、資治通鑑、八編類纂、文獻通考李氏函海等、及び諸家の詩文集數百千卷、三十歳東遊の後、書林河茂氏(大阪の河内屋茂兵衛)の書籍を借りて、太平御覽、冊府元龜、文苑英華、說郛、知不足齋前後集、秘笈、全唐文等を三十七歳までに読みたり、三十六の歳は大村にて、群書類從、白石叢書を読み、三十八の歳江戸にて、須原屋茂兵衛に拠りて類聚国史等を始め、近世の翁草等に至るまで、写本四百余种、凡数千冊を涉獵し、又筒井紀州(後の交遊の記事に出ず)君の蔵書を借りて、津速秘書、啓禎野乘等を始め、邦典漢典二百余种を読み、又諸家に就きて(後に説明す)西洋の訳書百余种を抄録せり、是れ江戸四年間の業なり、四十の年大阪に還りては、記憶漸く衰え、初め程には未だ見ざるの書を読むの樂なし、併し手は巻を繰てず、今年迄(安政二年乙卯)十年の間粗五六千巻を涉獵せり、此の両三年来記憶益置しく、従前読む所、空濛として夢の如しと、又云く、予年十四五眼を嗜むこと衆に異り、先君屢叱責せらる、十七以後より眠ること甚だ少し、二十四五より四十に至るまで、三夜或は五夜に一時、或は二時眠る位なり、其の間は記憶甚だ強し、人の詩文も二度読めば大抵暗誦せり、四十以後は眠漸く多くなり、記憶漸く衰え、読む所の書も十に八九は遺忘せり、人は老若眠少しと云えど予は之に反せり、始めて知る一分の眠を多くすれば、一分の記憶を減ずるをど、而して旭荘は記性の衰えたる原因を語りて、予が記憶薄くなりたるは、子を喪うより起りたれども、半は借財に苦しむし故なりと云えり、旭荘は三十四の天保十一年八月、次男の悌が生後六十日に殤せしを初めとし、屢 幼児を失い、借金之苦しみは窮して死なんとせし比の事なり、其眠少かりしは神經過敏の致す所なるべし、眠多ければ記憶を失うというを、誠に面白き経験なり。

扱晩年こそ記憶も衰えけめ、中年以前の記性強烈なりしこと驚くに堪えたり、而して其の涉獵する所雜駁を免かれざるも、其の博覧は淡窓の比に非ず、宜なる故旭荘の詩の規模甚だ大にして、材を取ること頗る博きや。昭陽好んで宋儒を誣りしも、其の人は則ち物理学朱行なり、淡窓其の門に出て、而して變じて程朱を信ぜしも、亦以なきに非ず、旭荘夙に家学を奉ぜり、

故に昭陽に学びしも、其の学风は亦程朱なり、挙母の内藤侯嘗て旭荘の学风及び教授の法を問う、旭荘答えて曰く、養父求馬(淡窓)の学、義理は宋儒に從い、訓詁は或は取舍せり、其の弟子に授くるや、經史詩文、各其の性の近き所其の才の長ずる所に隨う、某一に家法に從えり、唯其の當世に行う所以の者は異同なくばならずと、其の学は宋儒の範圍を出でざるも、理氣を語らず、高遠を避けて而して切實を尚び、人情世故の閱歷より得來りて一種の見解を下すは、其の最も長ずる所なり、故に其の根柢必ずしも深からずといえども、其の論說する所は、事情に切にして鑿々聽く可し、佐藤一齋嘗て旭荘に謂て曰く、之を吉田平陽に聞く、足下経術に長ずると、願くは高見を聞かんとて、一二問答する所あり、一齋善しと稱せしと云う、經学文章の大家一齋の如き者をして首肯せしむ、其の一隻眼を具せしを知るべく、亦其の才弁に長じたりしを知るべし、蓋し旭荘の才弁は學問の力量に超えたりしが如し、才弁ありて而して人情に通じ世故に老けたり、其の學問を實力以上に發揮したりしを疑わず、旭荘の實力を知る者は松崎謙堂なり、旭荘謙堂を訪うて漢儒の取るに足らざるを論ぜしに、謙堂笑つて曰く、兄は吾が邦の袁子才なりと、其の才其風流、真に隨園と相似たる者あり、知言と謂うべし、要するに旭荘は時に性命を説くも道學者に非ず、好んで經濟を談するも政治家に非ず、雄才を挾める一個文人にして、詩は則ち成功せる大家数なり。

●龜門の二廣

(三十) 天 囚

廣瀬旭莊(八)

其の著述(上) ▲不朽の大著述

坪井誠軒旭莊に問うて曰く、僕先生の瑣事録を読むに、先生浪華に在りし時、毎日出游して、朝には彼に食し、夕には此に飲み、昨は山に杖き、今は水に舟し、加之ならず來賓陸続たるに、吐握之に接して倦色ある無し、而も先生の學日に一日より進むは何ぞや、と、旭莊が答に、浪華の事勢、実に公の言の如し、著述に暇なし、是れ僕の慷慨する所以なり、抑も世人の學は簡編に在り、僕の學は人事と我が心とに在り、世人は口を以て読み、僕は身を以て読む、是れ人と異なる所以にして、事劇しければ則ち學の進むも亦速なり、且僕生平眠少し、昼夜の間唯子丑の二牌夢を結ぶのみ、十七八年

來、毎日燈下枕上に於て、或は卷を手にし、或は思を潛め、日間行う所を点検しつづ工夫を下し、以て怠惰を補えり、但近視を以ての故に、白晝に非ざれば筆を把り字を作る能わざるを憾むのみと、學問は人事と心とに在りと為すは、王學の臭味あり、且書を読まざる者の口実に似たりといえども、學問の最上工夫は、亦実に此に外ならず、身を以て読むの一語も、亦頗る其誇を病むも、人情世故の上より學問し來れる旭莊に在りては得意の処なるべし旭莊は交遊を好みて、詩酒徵逐、殆ど虚日なく、或は泛交の嫌ある程にして、毎日寸暇もあるまじと見ゆるほどなるは、実に誠軒の言の如し、此は江戸住居の時も亦然り、大阪住居の時に至りては殊に然り、儒者・医者・書家・畫家・僧徒・酒徒・士人・町人の差別もなく、交遊往來いと煩劇にして、門生の教授だに覺束なかるべく見ゆ、まして著述の暇をや、然るに旭莊には左の如き著述あり。

日間瑣事備忘前編百十二冊後編五十四冊總計百六十六冊▲九桂草堂筆記十卷▲梅墩詩鈔四編十二冊▲梅墩文抄若干冊▲塗說二卷▲學校議一冊▲克己編一冊▲識小編一卷▲追思錄一冊▲病榻語一冊

日間瑣事備忘・梅墩詩鈔の二種は実に不朽の大著なり、九桂草堂筆記之に次がり、日間瑣事備忘は年二十七の天保四年に始り、年五十七の文久三年八月十三日、即ち其歿前五日に筆を留めたり、総て三十一年間、時勢の変遷交遊の往來より、一家の日常瑣事に至るまで、巨細遺さず、毎日日を逐うて、之を録するに漢文を以せり、国文及び和漢混淆文の日記の浩瀚なる者は、世に之なきに非ず、然れども雅馴流暢なる漢文もて、三十一年間の事を録して、百六十六冊の大著作を成せる者は、吾邦に恐らく之あらじ、是れ実に尚ぶべき好史料にして、千載に朽ちざる者なり、且漢文を以て大事を叙するよりも、日間の瑣事を録するは、難中の難なるに、叙し去て暢達、和習の多からざる、最も其の筆力を見る、予の旭莊を目するに大文章家を以するは之が為なり、然れども旭莊の文は余りに達意を尚びて妙味に乏しきを憾む、且此の書前半は自ら筆を執りて之を録したりと覺しきも、後半は門生に口授して筆記せしめし者と見え、巧拙同じからず、晩年の日記に至りては蕪雜殊に甚だし、近視眼の上にて老來多病と為りし旭莊は、未だ刪正潤色に暇あらざりしなるべし、九桂草堂筆記は、安政二年夏秋の交、百余日の間、毎朝払曉に起き、聴講の門生參集する前に、一時ばかり口授しつづ、其比在塾の長三州

(光太郎) に国文もて筆記せしめしものなり、日間瑣事は叙事を主とし、筆記は議論を主とし、史論経済説人物評などもありていと面白く、以て旭莊の學術と閑歴とを窺うに足れり、而して梅墩詩鈔に至りては、則旭莊精神の注ぐ所なり。

●龜門の二廣

(三十二) 天 四

廣瀬旭莊 (九)

其の著述 (下) ▲東国詩人の冠

梅墩詩鈔は初二三四編各三冊、総計十二冊の刊本あり、五編以下若干巻は未だ刻せず、清国近世の大儒俞曲園、(名櫟、字蔭甫、明治四十年二月五日歿、寿八十六) 我が国徳川氏以来の詩人にして専集ある者百数十家の詩を選び、四千余篇を得て、釐めて四十巻と為し、更に古来諸家の選本に就きて五百余篇を選び、補遺四巻と為し、名けて東瀛詩選と曰えり、彼の土の人を以て此の中の詩を読む、固り脱漏なきに非ざるを憾むとも、上は大友皇子より、下は明治の諸家に至るまで、苟も我國文運と大関係ある者は、蒐集殆ど遍く採択略尽きて、瑰琦陸離、人目を眩耀せり、蓋し我朝の詩は儒学の東漸と与に起りて、而して寧平の朝、稍台閣に聞け、鎌室の府、頗る叢林に伝わりしも、其の声猶淵乎たり、徳川氏に至りて、文運忽ち開けて大雅始て興り、諸家の専集、洋々として其れ盛なり、此の編主として専集ある者を選べるを以て、我が国詩運の最盛時代に於ける大観始めて備れり、而して選ぶ所の百数十家中、一人一巻を占むる者は、服部南郭、菅茶山、梁川星巖、僧慈舟の四人にして、詩を選ぶこと更に多く、一人にして二巻を占むる者は、唯旭莊一人あるのみ、旭莊が日本の詩壇に於ける位置、問はずして知るべからずや。

曲園旭莊の詩を評して曰く、吉甫の詩、才氣横溢、変幻百出し、長篇大作は、五花八陣の奇を極めて、而して片言單詞、又雋永味う可し、鉄硯学人齋藤謙(拙堂)、其の思を構うるごと、泉の湧くが若く、潮の瀉くが若く、其の口物を発し筆端に上るに及んで、馬の坡に注ぐが如く、雲の空に翻りて而して風の葉を巻くが如し、多しと雖も濫ならず、長しと雖も冗ならずと曰えり、洵に吉甫の詩を知る者なり、吉甫塵務を擺脫して仕途に入らず、親む所は、則墨客騷人、好む所は、則江山風月、宜なり其の東国詩人の冠たる

や、詩の美収むるに勝えず、故に選に入る者甚だ多し、分ちて上下巻と為せりと、昔者阿部仲磨彼の土に入て、李白・王维輩と応酬せしを初め、学生僧侶の入唐せしもの多かりしに、遣唐使廢せらるるに及びては、時に僧徒の宋元明に至りし者なきに非ざるも、彼此唱和の音漸く絶え、徳川氏に至りては往來杜絶せり、是に於て詩人文士の才を誇り雄を争うべき機会は、纔に朝鮮聘使との応酬に過ぎず、奇を好むものに至りては、長崎清商の片言を得て、之を世に誇る者すら之あるに至れり、是れ陋は則ち陋なり、然れども詩は彼の土の物なること、和歌が我が国の物なるに均しく、外人の和歌を学ぶ者、正に我が国人に就かんとことを思うに同じと為さば、亦恕す可からざるに非ず、今や清国の大儒に因て平章せらる、許多の詩人も亦地下に一笑すべし、而して外人私心を挾まず、衡を持すと頗る公なるを以て、後の詩を論ずる者、亦参考すに足れり、抑慶元以降の詩を以て家に名くる者も亦多し、而して曲園の諸名家を評するや、服部南郭には東国詩人中卓然家を成す者といひ、梁田蛻巖には詩を以て一時に蒙なりといひ、菅茶山には彼の中の有名人といひ、梁川星巖には東国詩人の卓々たる者といひ、頼山陽には詩学尤も深しと曰うに過ぎず、而してひとり旭莊を称して東国詩人の冠と為せり、旭莊是に於て乎九鼎大呂より重し、淡窓の詩に於ける、猶名家数たるを免れず、旭莊に至りては、居然たる大家なり、公論既に定まる、復た邦人諸家の旭莊を評する者を贅述するを要せず。

梅墩文鈔は家に蔵して未だ刊せず、其の詩は白日なり、何ぞ必ずしも燭火の文を白日の前に論ずるを須いんや、塗説は漢文の隨筆なり、学校議は大村侯の為に、克己論は府内侯の為に筆を執りし者なり、前举目錄の外に、浪華名流記載する所の録海二巻、明史小批二巻、異船議等は、予未だ之を見ず。

●龜門の二廣

(三十二) 天 四

廣瀬旭莊 (十)

其の出処 (上) ▲諸侯の賓師

旭莊年三十四大阪に在りし時、挙母藩の文学川口士龍、(名潜、称確助、江戸人、昌平に学びて経術文章に長じ、経国を以て自負す、西南海に周游して、名士崎人孝子節婦を訪い、後ち挙母侯に抱えられて其の腹心たり、天保

十三年二月遺書を上り、屠腹して死す、時に年四十二、人其の故を知る者なし、蓋し土龍は天保度の高山彦九郎なり」と相識れり、一日土龍を城中に訪いに、土龍介して内藤侯に見えしめんとす、旭荘礼服なきを以て辞しければ、寡君苛礼に拘らず、何ぞ礼服を用いんと勧めけれど、此の日は固辞して見えず、他日土龍に依りて侯に謁せり、是れ旭荘が諸侯に見えし始なり、旭荘の記す所に拠れば、侯年三十五六、軀幹雄偉、精神滿腹、言語勤懇、人をして心酔せしむとあり、侯は護國の学を喜び、講礼説詩、殆ど書生の如し、旭荘公と抗礼して学問を論じ、酒を賜うて献酬し、其の辞し去るや、侯起坐して之を送り、更に土龍に命じて旭荘を其の官舎に宴せしめられき、旭荘は侯が井伊大老の弟を以て、処士と相遇うこと同輩の如く、少しも尊嚴を挟むをなきに驚けりと云う、三十六の時大村侯に聘せられて、仕官を勧められしも辞退せしをは前にも記せり、旭荘は此奉朝川善菴の薦に出ずと自記せり、侯(觀瀾公)時に年二十、才智夙成、恕以て人に接し、語言尤も遜恭なり、初目見の折、小姓始め士人障隙より窺い見る者多かりしに、侯は旭荘と對話の間、始終手を席にして、弟子の教を師に受くると異ならず、衆皆私語して、廣瀬某降扈度に過ぎ、儒者の氣象に似ず、我公をして礼節に苦ましむと評せりとん、旭荘一日名臣言行録を講せしに、一章毎に難詰あり、太祖雪夜趙普を訪うの章に至り、帝が嫂を以て普の妻を呼びしは何故ぞと問わる、君臣親昵の状にこそと答えしに、侯は是れ固り然り、又普と帝と同姓の故を以てに非ずやと云われしにぞ、旭荘も某見て此に至らず、敬服の至と挨拶せし由筆記に記せり、斯くて侯は終身七人扶持を賜はりしかば、旭荘其恩に感じ、侯の江戸に参勤交代する毎に、之を伏見に送迎せり、大村侯も亦待遇の厚き、久しくして衰えざりしは、士を待つ道ありと謂うべし、三十七の時江戸にて府内侯に謁せしが、兄南陔招聘の關係もありて、其の敬事尤も厚く、待つに師礼を以し、屢召して経を講ぜしめ、又之を府内に迎へて藩政の意見をも問えり、府内侯は白河梁翁公の孫にして、年少けれど聡明の資あり、但痛癢の癢ありけるより、旭荘常に心を尽して約を納るに隔よりし、又克己編を作りて之を、上れり、旭荘の府内に於ける、実に賓師の礼にして褐を積しに非ざるも、関係尤も深きをもて、江戸にても大阪にても仮に府内の臣と称しき、旭荘江戸にては、嘗て宜園に遊びし參州田原の鈴木春山(名強、字は自強、善菴石陰に学び、又渡辺華山の勸に因て蘭学を高野長英に学び、兵学

家を以て自ら任ず、弘化三年歿、享年四十六)と善し、春山に因て田原の三宅侯にも見えたりしが、内藤侯と同じ一場の抱負を吐露せしに過ぎず、旭荘自ら大村侯の恩尤も深く、府内侯の敬尤も厚しと称せり、旭荘の諸侯に見ゆるや、常に諸侯には諸侯の学ありて、士庶人の訓誥詞章と同じからざるを説き、治國の道、三代の遺意を取りて古制に拘る可からざるを論じ、往々当世の務に及びて、侯国貧富の因に遡り、学を興し賢に任じて弊宝を一洗すべきを勧めたる、其の論穩當にして迂闊ならず、其の策切実にして詭激ならず、進言の体を得て、能く諸侯の聴を動かししは、才弁識見、並に通儒の名に負かず。

其の他浜松侯招聘の意ありしも果さず、松崎憐堂之を姫路の河合寸翁(藩老)に薦めしことありしも、寸翁歿して亦果さず、晩年紀州の国老久野丹波守紀藩の学政を託せんとして、旭荘の意を問いしも、我れ官志なし、時々出講は拒まずとて之を辞したりしが、尋ぎて大阪城代より御城入儒者の命ありき。

●龜門の二廣

(三十三) 天 四

●廣瀬旭莊(十一)

其の出処(下) ▲御城入儒者
御城入儒者とは、幕末の文久三年、大阪に新設せられし儒官の名にして、城に入りて書を講ずべき役目と見ゆ、城代松平伊豆守の後藤松陰等に語りし所に拠れば、御城入儒者の創設は將軍の意に出でたりとん、已に創設に係るを以て、其の班次を知るに由なし、當時幕威已に衰えて学を講じ治を圖る暇あらざるは、幕府も亦自ら之を知りつらん、何の為に斯る好奇を為せしぞ、想うに安政戊午の獄を始め、志士の処斬せられし者に、知名の儒生多く、幕府は自ら儒林の憤怒を買ふこと甚だしきを知れり、而して大阪は連逃の叢たり、幕吏乃ち儒林の望を維きて人心を緩和せんことを謀り、大阪在住の宿儒を羈縻するに御城入儒者の名目を以せしに非ざるか、然れども大阪の宿儒にして儒林の望を維ぎ、志士の心を慰むべきほどの価値ある者なし、真に是れ兒戯のみ。

大阪の文人中には、此の節町奉行所にて、大阪在住の儒生の履歴を取調べつつありとの評判ありて、往々羅織されんことを恐れたりき、府内倉邸役人

谷口宗助も亦呼出されて、旭莊の履歴を問われたり、或は云く、凶事ならば密々の詮議するべきに、公然の取調は吉事なるべしと、文久三年五月二十三日、谷口宗助果して町奉行所に呼出されて、奉行松平勘太郎(後の大隅守)より左の申渡を受取り。

松平左衛門尉家来

廣瀬謙吉

右謙吉儀御城入儒者可申付旨御城代松平

伊豆守殿被相達候間可被申渡候

亥五月 日

当時同じく此の沙汰を受けしは、後藤松陰、藤澤東咳、中井桐園、並河寒泉と旭莊との五人なり、中井・並河二人は、学閥と府岸の教員との故を以て、名を徵書に列するを得けん、全然処士にして徵されしは、松陰・東咳・旭莊の三人なり、松陰は諸侯に縁故なきも、東咳と旭莊とは、高松府内二藩にも相談を要するより、二人者打合あり、東咳は老病を以て辞せんと思えども、左右なくは辞退し難からんなど躊躇し居けり、是れより先き旭莊は、浪士横行して殺気途に満つるより、世を池田に避けんとして家具を搬運しつつありしかば、曖昧にして滑稽なる答弁を宗助に授けたり、曰く、謙吉事召出され、感恩尤も深きも、当人近視眼にて、座敷中も眼鏡を外されず、仕官は叶い難からん、且養生の為に池田に移居せんとしつつあり、如何致し然るべきやと、松平勘太郎曰く、官府は謙吉が才学を問うて眼鏡の有無を問わず、後藤俊藏(松陰)老人すら御請したり、謙吉も御請然るべしと、旭莊は頗る出処は迷えり。

伯兄淡窓は永世の苗字帯刀御免なり、仲兄南陰も亦一代御免なり、旭莊独り父兄の蔭に因て、刀を帯び姓を称するは、祖先に對しても口惜し、此の度の一件は差気を吐くに足れり、予れ固より朱門に出入するを好まざるも、祖先と子孫との為に屈するも亦病と為さず、然れども府内の臣を以て進むは、郷党の光と為すに足らずと、因て此の意を南陰に通じたりしが、南陰は日田代官屋代増之助に請う所あり、代官より謙吉假に府内の臣と称するも、實に扶持を受くるに非ずして日田の儒者なり、日田の儒者を以て城入儒者たらしめられんことを、松平勘太郎に照会せしめつ、府内藩も亦異存なく、謙吉の意の儘と答えたりしが、是より先き府内藩士にして宜園門下なる島精一郎(後ち惟精)

旭莊に謂て曰く、先生の為に謀るに、池田に栖遲するに若かず、近日の勢い、天下の義士、幕府の上蒙下欺を直とせず、先生一たび幕府に近かば、清議とせず、声名忽ち損せん、請う係恋する勿れと、旭莊此に至りて固辭して就かざりき。

旭莊にして城入儒者の徴に就きたらんには老人の癖に河豚を食うて死するに均しかりしなり、旭莊は固り高士に非ず、晩年猶功名の念を脱せざりしこと如此きも、時勢は彼を駆つて間雲野鶴たらしめたりき。

●亀門の二廣

(三十四) 天 四

廣瀬旭莊(十二)

遊歴(上) ▲播備▲作因雲伯石▲長州の明倫館公議

旭莊は少きより漫遊を好み、書生時代に於ては兩筑西肥に遊び、四国に遊び、三備芸防に遊び、若先生時代には長崎に遊び、豊後諸勝に遊び、堺時代には、高野山に遊び、大阪時代には紀州に遊び、摂河泉各地に遊び、江戸時代には日光に遊び、再度の大阪時代にも、常に其の徒と京撰の勝地を探りて山岨水涯に流連せしが、其の技を売らんが為に、筆を載せて遊歴せしは、四十六の嘉永五年に於ける播州及び三備の行に始まりて、四十八の安政元年に於ける作因雲伯石の行、五十一の安政四年より翌年に掛けての山陽道の行、及び五十三の安政六年に於ける北陸道の行を終れり、其が遊歴中の事跡は、亦以て當時の文人生活が如何なる者なりしやを知るに足れり。

遊歴の第一要件は東道主人にして、先容を為し周旋を為す者あらざれば其技售れず、久しく私塾を開ける儒者は、年を経るに隨いて其の門人諸州に散在するより、東道の主人なきを憂えず、旭莊の如きも亦到る処に門人故郷ありて周旋懇到なりき、播備の遊は先ず播州の国包に至り、次に備中の玉島に遊び、鴨方岡田総社倉敷等を巡遊して約九十日を費ししが、備前の医者に偽筆の上手あり、中澤雪城遊歴せし時、其の書を請うて偽筆し、雪城の囑を受けたりとて、定額の潤筆より廉に売りければ、雪城大失敗を為せしことあり、此の医者旭莊をも食物にせんとせしを、土人の注意にて厄を免れたり、然れど岡田にて潤筆を減じたるが為に、玉島の不平を鳴らし、此の行速かに去つて筆を執る勿れと、知人に忠告せられたりき、旭莊之に懲りて其の後は

潤例を一定し、鉄門限と称して其の額を減ぜざりき。

山陰の遊歴に、作州津山にては小原竹香(称慎太郎)尤も周旋に力めつ、土人旭莊を称して東来先生と云い、学問文章は一時に冠絶せるも、其の書は我が竹香先生の下に在りと云いければ、竹香我れを愚弄すと怒りしも可笑し、潤筆は小竹の例に因るべしと、竹香宣言しけるも、漫遊の事なれば二割を減ぜられたしと値切るもあり、七月末に大阪を立ち、伯州の船上に名和氏を帯り、雲州松江より杵築に至りて大社を拝し、九月の末に雲州を發せんとして潤筆を會計せしに、二百余金を贏し得たり、雲州にて商人某旭莊の書六十枚を乞い、金五兩二歩を約束して其の儘立消えしこともありしかど、石見銀山を経て十二月の末にこそ大阪に帰着したれば、猶余し得し所の者多かりしなるべし、此の行の一大光彩は、雲州神龜峽の遊記なり、惜しい哉世に出でざりしが為に、山陽の耶馬溪に於けるが如き能わざりき、旭莊後越前福井にて孝顕寺の雪爪禪師の為に、神龜峽の図を屏風に畫けり、知らず今も有りや無しや。

山陽道の遊は、播州にて河野鐵兜を主とし、安芸竹原にて日高涼臺を主とし、長州に入つては先づ坪井顔山、山本春亭を訪いしが、土屋蕭海(矢之助)周旋尤も力めたりき、長州には修行宿として藩立の客館あり、武者修行及び遊歴の儒生を宿泊せしむ、旭莊も亦修行宿に入りしに、楼上には劍客來宿し居たるが為に、楼下の一室を借れり、是より先き旭莊は江戸にて長州邸に出入り、村田四郎左衛門(後に織部号清風)初め懇親の人々も多かりしより、此の行亦頗る優遇せられ、萩藩の諸文学は旭莊を藩学明倫堂に延きて公譙を張れり、学監神名宇右衛門を初め、六戸直紀、小倉尚藏、棕梨藤太等來會し、山縣周南の孫なる大華(名文祥)の子山縣平藏も亦在り、會する者総て十余、酒間韻を鬪して詩を賦せり、旭莊の詩に云く、

講堂開宴雨來時。半是新知半旧知。竹外殘紅桃色濕。
池頭嫩綠柳條垂。朝聞猛士鳴鐘太鼓。暮見名儒習禮儀。

池頭嫩綠柳條垂。朝聞猛士鳴鐘太鼓。暮見名儒習禮儀。

禮儀。一。文事果然兼武備。豈無三良策伏三胡夷。一。是れ一個完書の遊歴文人として待遇せられしにあらで、堂々たる儒者としての礼を以て迎えし者なり、而して旭莊の詩も亦立言體を得て、後半尤も佳なり、諸儒伝観して如何の評をか為しけん、是れより教を受け字を乞いし者も亦多く、当時志士の領袖なる吉田松陰(此の時大次郎と稱す後寅次郎)の如

きも、亦土屋蕭海を介して疑いを質し又は伊娑菩薩言を贈れり、其の余知るべし、此の行十月大阪を立ちて、翌年四月田に着きしに、二百八十三兩余を余せしこと前にも記せり、蓋し潤筆よりも待遇の上にて成功せし者なり。

●龜門の二廣 (三十五) 天 囚

廣瀬旭莊(十三)
遊歴(下) ▲北陸の遊 ▲加越の逐客令

北陸の遊は、先づ越前敦賀より府中鱒江大野勝山を経て、福井に入り、横井小楠に招飲せらる、日記に小楠年五十一、進止安詳にして目撃其の常人に非ざるを知れりと記し、井上松濤(称剛介)來見る、福井第一の詩人なりとあり、或は云く、福井にては藩士旭莊待遇の礼に關し、儒者を以て待つべきや、文人を以て待つべきやと問いに、旭莊は文人の待遇を望めりと云く、此の事日記には見えず、蓋し儒者を待つのは、之を藩学に延きて書を講ぜしめ、酒を置きて詩を賦するなど、敬意鄭重なれば、其の人も亦潤筆を貪るを得ず、一個遊歴の文人なれば、斯る鄭重なる待遇をも受けぬ代には、潤筆を定めて書を售るなり、此の説或は信ならん、尋ぎて三国丸岡を経て大聖寺に入りしに、大聖寺藩の慣例として、文人の此の地を過る者は、必ず書畫を獻ぜしむるより、旭莊も亦例に仍て書を獻じたりき、山代の温泉、那谷寺の溪山、皆詩を留めて去り、小松の郷校に書を講じ、松仕の本誓寺に歳を迎え、金沢に杖を留むること五十日にして百金を得、北国人情の厚きを喜びしも、一方には藩老本多刑部の為に逐立てられて、誰謂泰虎狼、猶停逐客令の句あり、病と稱して逗留せしに、病氣ならば門を出ず可からずとありて、幽囚に均しきを嘆じ、藩に抗直の吏なく、苛政鮮を烹るが如しと罵れり、金沢にては本多刑部の臣高澤菊瀾を主としたりしが、然るべき土人は來見えざりしが如し、越中高岡に入りては、逐客の令更に嚴なり、蓋し江戸に大老井伊掃部頭の變ありしより、旅人の詮議厳しく、旅館に逗留するを得ず、病と稱して無住の尼菴に滞在せり、水見に入りては、小杉奉行今村五郎より一遍の触を下せり、大意に云く、豊後人旭莊というもの、儒に似て儒に非ず、書を売るを業とし、潤筆極めて貴し、人皆棄てて顧みざるべきに、無識の徒、送迎蟻の糞を逐うが如し、近比逐客の令下りたれば、此等人を惑わすもの速かに放逐すべしと、旭莊笑つて、宋が蘇黃の文字を禁じて、人益之を貴びしが如くなら

んのみと云えりしも、又旅館に逗留するを得ずして寺を借れり、遂に能登七尾に遊び、総持寺に詣り、再び越中の氷見伏木を過ぎ、東岩瀬より神通川を遡りて富山に入りしが、旅宿の門楣に、旭莊が鮎川酒樓の詩に次韻したる一絶を貼る者あり、辞醜詆を極めたり、結二句に曰く、字似二斃蛇、詩乳臭、厚顔敢過神通橋と、是れ藩儒杏某が一派の所為たりと聞こえたり、時に旭莊の友なる藩儒大野欽一郎、誦を被りて幽せられ、相見るを得ず、旭莊一絶を賦して寄せり、旭莊老成、人と短長を争わざりしも、藩の学館生日に旭莊の譽を伺うと聞き、人之を招くも酒樓妓席に近づくかず、此の游福井大野勝山大聖寺等は、到る処士人の来り見る者多く、東修を行う者も亦少からざりしも、金沢に至りては訂交差少く、富山の如きは一人の来りて浅深を窺う者なく、且逐客の令にすら遇えり、蓋し加越は旭莊の陳蔡なり。

旭莊此の行越後に入らんと志ししも果さず、游歴には従者を大役と爲す、師に代りて潤筆の應對に當り、師の爲に侮を禦ぎ、會計理装一切の用を爲す等、世故に慣れたる者ならでは叶わず、旭莊遂に従者なきに苦みて越後行を中止し、富山より飛騨の高山に入り、途中溪山の勝は、紀の九里溪雲の神亀峽に譲らずと称せり、高山の人情樸実、越中に比して天淵畜ならざるに別を惜しみ、萬延元年の九月末に大阪に歸れり、客年五月家を出でてより此に至りて五百二十余日なり。

四十六の播備游歴には、屏風一双五百匹の潤筆なりしが、北陸の行に至りては、屏風一双二両に飛騰せり、例に因て減額を乞う者あるも、鉄門限を破らず、加越の野に困しみしも、字を乞う者甚だ多く、大阪に歸るや金七百兩を郷里に送りて富家に託せり、此の行の贏し得し所蓋し千金に近かりけん、彼は郷人に命じて厚利を貪る勿れと云い、北游多少の金を獲しも、亦長春(父)文玄(淡窓)二君の余慶なりと称し、此の金生ずる所の利子中より、毎月幾何を寡嫂(淡窓の妻)に奉じたるが如き、亦忠厚の至なり、要するに旭莊は潤を貪らざりしに非ず、然れども此は文人生活の常として己むを得ざりし所ならん、而して其の所為は情理を守りて儒範を逸せざりしを多とす。

●亀門の二廣

(三十六) 天 四

廣瀬旭莊(十四)

交游(一) ▲井上総州と長州人 ▲筒井鑾溪の皴面 ▲川路左衛門の恭謙
旭莊の交游甚だ広し、其の交游を叙すれば、以て略天弘嘉安の際に於ける学者文人の消息をも窺うを得べし。

旭莊曰く、予交を当世の君子に納るる少からず、年十七初めて昭陽先生に謁し、十九の年は樺山石梁先生、二十一年は菅茶山先生、頼杏坪先生、二十九の年は古賀穀堂先生、三十年は篠崎小竹翁、三十一の年は簡堂羽倉君、松崎謙堂先生、佐藤一齋先生、古賀伺菴先生、前祭酒靖恪公(述齋)、今祭酒藕横公(櫻宇)、岡本華亭君、三十六の年は朝川善菴翁、三十七の年は坪井誠軒翁、四十の年は総州井上君、鑾溪筒井君なり、其他遇う所の文士は、江戸にては安積良齋、齋藤拙堂、大槻盤溪、野田笛浦、澤熊山、梁川星巖、菊池五山、塩谷弘藏、京師にては中島棕軒、梅辻春樵、仁科白谷、芸州にては坂井虎山、肥前にては草場佩川、紀州にては菊池溪琴、医人は多紀法印君、松園塩田君、伊東冲齋、新宮涼庭、奇人は高島秋帆、佐久間象山、秋元秀藏、鈴木春山、村田織部、川西確助等なりと、以上列挙せし人々は、旭莊が夢寐忘れざる所の師友なるべし、而して予既に略其の交情を叙せしもあり、今未だ其の交に叙し及ばざりし者、及び面白き逸話を録せん。



林述齋 (『亀門の二廣』スクラップブックより転載)

井上総州(名秀栄)は幕臣なり、徒士より起りて勘定奉行と爲り、備前守に任じ、天下の大計を握れり、日田代官は勘定奉行の管下なるより、淡窓田字帯刀御免の書付に、井上備前守殿被仰渡候とあるは此の人なり、水野越前諸侯の封邑を移さんとするを争うて聴かれず、越前敗れて総州も亦罷められたり、其の著書數百卷、皆理財の説なるが、羽倉簡堂其の為人に畏服して一代の人傑と爲せり、旭莊の之と相見しは其の晩年にして、総州待つに国士を以せり、人旭莊を簡堂に讒するや、総州簡堂に謂て曰く、吾れ年七旬を過ぐ、人を聞すること寡からず、旭莊が如き者海内幾人ぞ、兄其れ惑う勿れと、簡堂此に於て釈然たりき、亦旭莊の知己と謂うべし、総州官に在りし時、清白自ら持せり、一日旭莊に謂て曰く、聞く兄長州人と交ると、窃に其

欺く所たらんことを恐る、予の初め柄用せらるるや、長人俸禄数百口を贈らんとす、予辞するに貴俸を受けば、嫌を避けて周旋を停めざるを得ざるを以し、秋侯若し某が愚衷を鑑せば、後來退官貧困の時に賜う所あれ、敢て辞せざるべしと云いしに、長人大に悦び、異日緩急相恤むべきを約せし、然るに某の貶黜せらるるや、諸侯或は窃に用するものもあるも、長州人は聞知せざる者の如し、今や長人令聞を売りに官寵を得んと欲し、天下の俊傑を羅して其の邸に遊ばしむ、兄も亦一時の聞人なるを以て款接措かざるも、豈能く賢を用いんやと、弘化四年三月十七日歿す、年七十余。

筒井鑾溪(名政憲、字子恒、称左馬助、後左治右衛門)も亦幕吏にして、書院番士より南町奉行に進み、任官して紀伊守と称し、近藤守重(重藏)の獄を決して名あり、川路聖謨(左衛門尉)と共に魯使と折衝して、樺太を雑居の地と為せし一豪傑なるが、学問富瞻にして尤も経籍に精しく、又蔵書多し、旭荘の相見しは弘化二年十月にして、鑾溪七十二の時なり、旭荘は鑾溪に向かつて、某近視眼にして、眼鏡を掛けたまえ、七十の皺面何の見所かあるべきと打笑いしが、速かに眼鏡を掛けたまえ、七十の皺面何の見所かあるべきと打笑いしが、旭荘は容貌清臞辞气温雅にして精神駿発と評せり、此れより、縦に鑾溪の蔵を借讀しつ、鑾溪又梅墩詩鈔に序したりき、安政六年六月卒す、年八十二。

川路左衛門(聖謨)を簡堂の座に見る、此の人簡堂の父日田代官たりし時、日田に生れし人なるが、拔擢せられて任官するに至れり、簡堂日田に生れし人の任官は、二百年來之あらざるべしとして紹介しけるが、左衛門尉は簡堂に対して、猶故吏の礼を執れりとぞ、其の後も江戸大阪にて屢之と相見たりき。



川路聖謨
(「亀門の二廣」スクラップブックより転載)

●亀門の二廣

(三千七) 天 囚

廣瀬旭莊(十五)
 交流(二) ▲五山の御世辞 ▲諸名家の嘲罵 ▲笛浦の碁と蚊帳 ▲象山の風采 ▲

西洋通

江戸にて羽倉簡堂の座上に一老人を見る、姓名を通すれば則ち菊池五山(名桐孫、字無絃、称左太夫、高松人)なり、五山時に年七十八、猶五六十人の如し、旭莊幼より其詩名を聞きし人なれば、今も健全如此しと思わざりけり、因て詩法を問ひしに、先生は当代の韓蘇なり、吾儕詩を売りに活を為す者、安ぞ敢て喙を開かんと謙し、且淡窓先生は予の欽慕する所、其の詩第一本を購いたしと云いけるより、旭莊は願くば一本を献げんとて、翌日手束に添えて之を送れり、斯く懇懇を尽ししも、五山は之を受けて返事だに為さざりければ、旭莊怒りて復た通ぜず、五山の詩、纖巧俗佻、能く年少を悦ばしめて大方に取られず、近時江戸詩風の壞れしは此の人の力なりと罵れり。



大槻馨溪
(「亀門の二廣」スクラップブックより転載)

当時の諸名家、一日簡堂氏に会す、曰く角田九華(名簡、字大可、豊後人)時に年六十、曰く、大槻盤溪(以上出前)曰く佐久間象山(名啓、字子廸、一号滄浪、信州松代人)、曰く菊池溪琴(後に不出)、曰く西島蘭溪(名長孫、字元齡、称良佐、江戸人)及び旭莊なり、蘭溪先ず去る、座に其詩あり、衆客伝観して、一句の妥帖なる者なしと罵り、冷評盛んに起りしが、時に盤溪曰く、近比旭莊溪琴と墨田川に遊びて、鵬齋刻する所の詩碑を讀みしが、此の詩よりも拙劣なりと云う、簡堂其の詩を問う、盤溪曰く、

長堤十里白無痕。疑是澄江与月渾。飛蝶正迷三月雪。香風十里水晶村。

是れ鵬齋の詩なり、其の門人之に跋して、先生の此の詩、一時に妙絶す云々とあり、亦甚だしからずや、旭莊詩を作りて之を嘲りたりと語れば、簡堂又其の詩を問う、旭莊乃ち吟じて曰く、

十里長堤一片碑。春風吹老落花枝。落花縱是深三尺。

不下為鵬齋一埋中惡詩上。

一座大笑せり、其の後塩田松園(即ち旭莊隣家の淳菴、名は泰、本姓宮河氏、幕医塩田氏を嗣ぐ、明治四年歿、年六十七)及び溪琴・盤溪・笛浦と正福寺に遊び、

鵬齋の墓を展して、談又詩碑に及び、各詩を賦して之を嘲れり、旭莊が詩に云く、

落花深処一苔碑。道是当年好竹枝。今日人於二声律一細。

桜堤無復水晶詩。

一たびは可なり、再するは死屍を鞭つ者、稍輕薄を嫌うも亦詩壇の一話柄なり。

野田笛浦は大坂以来の交にして、江戸にても屢相往來せり、笛浦棋を善くして初段と稱し、文人能く之と抗する者なく、旭莊も亦棋を好みしが、其の敵にあらざりしが如し、一日旭莊笛浦を訪うて、風雨夜深けたり、旭莊一泊せんことを請う、笛浦曰く、某固り留宿を願えども、唯蚊帳なきを憾むのみとて、書生を貸物屋に走らして之を借らんとせしも、皆貸し尽したりと云う、笛浦思案して、一策あり、荊妻と下女と同じ蚊帳に寝さしむれば、一張を余し得べし、緩りと物語したまえと云う、旭莊恐縮々々と言ひつつ、鶏の鳴く比まで物語して、始めて寝に就きたりとぞ。

佐久間象山とは、江戸にて菊地溪琴の席上にて始て相見しが、日記に當時年三十五六、容貌雄偉にして、喜んで兵法を談じ、旁蘭書を読み、快男子なりと記せり、其の後簡堂の雅会并に舟遊にも、度々同坐して交驩せり、一日象山が阿玉が池の僑居に訪いに在らず、其の室を窺るに、塵埃掃わず、槍銃甲冑、図書の間に狼藉たりしとぞ。

旭莊松崎謙堂を訪いし時、塩谷宕陰(名世弘字毅侯江戸人)の弟塩谷實山(名誠、字誠之、称量平) 謙堂の塾に在りて交を訂せしが、宜園門下の鈴木春山も亦宕陰の門人なるより、旭莊宕陰とも亦相識りて往來し、尤も其の文と雅量とに服せり、宕陰來訪の時に酒を出しければ、某近比禁酒せりとて飲まざりきとなり。

旭莊は坪井誠軒・伊藤冲齋・塩田松園を初め、医林の交多し、大槻俊齋(名肇、字伸敏、仙台人、幕府西洋医学所督学、文久二年歿、年五十七) 杉田立卿(名予、号錦腸、小浜の蘭医玄白が庶子、弘化二年歿、年六十) 竹田玄同(名



竹田玄同 (『亀門の二廣』スクラップブックより転載)

幹、越前丸岡人、幕府西洋医学所長、明治十三年歿、年七十六) 箕作阮甫(名虔孺、字岸西、津山人、藩学調所教授、文久三年歿、年六十五) 宇田川榕菴(名榕、大垣人、幕府翻訳の功を賞して俸を賜う、弘化二年歿、年四十九) 等と善し、皆蘭学者なれば、旭莊其の訳書を借讀して、頗る西洋の事情をも研究したりしが如し。

● 亀門の二廣

(三十八) 天囚

廣瀬旭莊(十七)

交游(三) ▲篠崎小竹と訥堂▲旭莊の情義

大阪にては、先輩として忘年の友として、交情最も密なりしは篠崎小竹なり、小竹名を成すこと甚だ早く、化政度より天保弘化嘉永に掛けて、大阪の文学を代表せしほどに、儒家医生畫師印人書林古董に論なく、凡そ文雅の道に携わるほどの者は、来りて小竹を圍繞すること、衆星の北斗に向うが如くなりき、小竹は希世の雄才なり、其をして學術文章に専らしめば、一齋良齋の徒も北面せざるを得ざりしならん、彼の不幸は早く名を成ししことなり、之が為に応酬文字に忙殺して、序跋題贊に是れ日も足らず、之が為に年に六七百兩の潤筆を得て、儒中の鴻池と称せられしも、(越智高洲豆腐を好みて腐儒、早野反堂は芋を好みて芋儒、小竹は儒中の鴻池とて鴻儒の目ありき) 其の業は荒みて大著述に暇あらず、猶且才を挟みて大都に抛り、頼山陽と互に相角逐し、齋藤拙堂の如きは、常に田舎儒者として翻弄せられたり、其の門又大才を出し、安井息軒の如きも其の塾に在ること三年に及べり、亦大阪の一偉人に非ずや。

小竹旭莊より長ずること二十六

歳なり、旭莊二十三の文政十一年、詩稿を小竹に送りて正を乞いにしに、小竹一見して称揚措かず、旭莊及び坂井虎山を以て関西の二俊と稱せり、旭莊大阪に於て毀譽相平するに當り、小竹常に力を竭して回護し、勝会ある毎に、必ず旭莊を引きて



篠崎小竹画像 (『亀門の二廣』スクラップブックより転載)

俱にせり、旭莊の名を成すや、江戸に於ては簡堂、大阪に於ては小竹の力も亦多し。

天保九年の秋、出石の桜井一太郎は、小竹父子と旭莊及び後藤松陰を招きて、月夜舟を淀川に泛べしが、小竹は笛を吹き、一太郎は笙を吹けり、時に月城東に出で、空明千頃、百舟の燈光と相映して昼の如し、猷酬時を移して舟は蜷川に入り、更に北里の酒樓に飲めり、小竹吟じて曰く。

生来五十八年秋。賞月曾無二此盛游。已溯一流光。

破一萬領一更携一紅粉一登一層樓。

詩酒徵逐殆ど虚日なく、相携えて箕面の紅葉を賞し、多田の溪山を探り、清游高興、亦一時の遇合なり。

小竹旭莊と謀り、浪華の諸儒を会して詩文の社を結び、檄を藤澤東咳、那波網川(辰之助、阿波人)、後藤松陰、安藤秋里(名秉、字維義、一号介軒、大阪人)、平尾半助、福井大藏(不詳)等に移し、会費二百錢、酒肴ありて飯なく、詩文各一首を課することとして、間瀬松響(稱信之助、宇都宮倉邸史、禪を喜び劍を善し、頗る俠骨あり、安政二年歿)が家に会せり、此の会果して継続せしや否やを知らざるも、旭莊は常に小竹と經史詩文を討論して益を得たりと日記せり、小竹嘉永四年五月八日を以て歿す、年七十一、旭莊浪華に住してより、葬儀の盛なる、小竹氏の如きを見ざりきと云う。

小竹の義子訥堂(名概、字公概、一号竹陰、稱長平、江戸人)とは通家の誼、頗る厚かりき、訥堂、安政五年八月二十八日に歿せしが、當時痧病流行せり、旭莊池田に出遊して帰り、篠崎氏を弔わんと欲し、田能村小虎に至りしに、小虎は彼れ身死して妻子なし、我れ之を弔うも誰か之を知らん、且痧病の伝染を恐ると曰ふ、旭莊罵りて曰く、生は交り死には負く、輕薄も亦甚だし、何ぞ伝染を怯れんと、往きて藤井藍田に至る、藍田の言も亦小虎の如し、旭莊笑つて去り、篠崎氏に至りて賻を贈り、訥堂の門人に弔辭を述べ、門人訥堂の死状を述べて、朝来頭痛発熱せしも、出でて諸友を訪ひ、夜歸りて暴瀉二行、手足厥冷忽ち死せりと、言未だ畢らず、婢あり障子を開きしに、忽ち冷風鼻より入り、額上に冷汗を發し、倉皇辭し歸りて大患に罹り、殆ど死せんとして纒に痊えりき。

其の後萬延元年篠崎氏の旧蔵なりし李滄溟文選を買い、愴然として其の帙に書して曰く、此篠崎氏蔵書也。嗚呼篠崎氏在二儒林中一。以レ富二蔵書一聞。其

子孫不能レ守。散逸如レ是。殷鑑不レ遠。書示子孫一と、此の歳十一月二十六日篠崎氏旧蔵の公売あり、三島以来購蓄せし書畫數十百幅、悉く皆我が邦名家及び明清人の筆にして、文房諸具も亦奇品多し、旭莊嘆じて曰く、三世將となるは兵家の忌む所、儒者も亦然るか、独り怪しむ松陰猶在り、而も此に及びしを予れ、小竹翁の知を辱くせり、今日の事惋惜に勝えずとて、觀畢らずして歸りき、旭莊の篠崎氏に於ける、情義並に至れるに庶幾し。

●龜門の二廣

(三十九) 天 囚

廣瀬旭莊(十七) 廣瀬旭莊(十七) 浪華の諸儒 小山の編狭 鐵兜故人の女を購う 菊池溪琴と交游(四) 春樵紅蘭の五弦琴 棕陰冥土の土産

當時大阪の儒者には、小竹の外に藤澤東咳は古学を、泊園書院に倡えて徒に授け、後藤松陰は山陽の高足小竹の女婿を以て、名声夙に揚り、小竹の門下に於て、訥堂及び奥野小山(名純、字温夫、稱弥太郎)、安藤秋里(名秉、字維義、稱太郎)橋本香坡(名通大路稱半助上毛人)を四天王と稱し、大阪に在りて一旗幟を樹てしが、旭莊皆之と交れり、然れども小山は局量編狭にして、小竹葬儀に同門の諸子と議相合はず、遂に師の葬にも会せざりしが、常に旭莊を罵りて関西第一の惡才子と曰えり、小竹東咳等、間に居て調停せしこともあり、平生甚だ相親まざりしも、小山の歿するや、旭莊は大坂文人中尤も詩文を善くする者と稱せり、秋里歿して其の子六人ありしを、門人其の養育を分任せしに、一女子は流落して玉藤の婢と為れり、河野鐵兜秋里と善かりしを以て、旭莊の周旋を乞いて養女と為さんことを謀りしが、旭莊は元人眞西山の女を購ひし故事を引きて其の美拳を稱し、且梁山鐵巖五世の孫女が、惡漢に誘拐せられて越前敦賀の狭斜に墮ちたるを救うべしと勧めたりき、昭陽の弟子内山牧山も亦當時大阪に帷を垂れ、旭莊と往來せしも、未だ其の人を詳にせず、船町橋に居りし比、近隣



藤澤東咳 (「龜門の二廣」スクラップブックより転載)

り、拙堂も亦冷語面罵に長ぜし人なりけり、陶所後浪士の為に大阪に斬られたりき。

松林飯山(名漸、字伯鴻、大村人)と識りしは旭莊年四十六、飯山年十四、猶駒次郎と称して神童の名ありし時なり、大村侯の西帰を迎えて倉邸に謁せしに、侯詩文の法を問ひ、旭莊答うる所累数十百言に及びしを、侯駒次郎をして筆記せしめらる、駒次郎筆を下すこと風雨の如し、旭莊其の七律二章を觀て、粲然誦すべきに敬服せり、飯山後ち漸之進と称せしが、年二十三撰播に遊歴せんとせし時、旭莊の紹介状に、大村儒官松林漸之進、幼有二神童之称、長益秀達、僕之親交、若到二貴境、請善遇待とあり、旭莊又飯山と共に林外を携えて吉野山に及びしことありき。

方外の交いと多き中にも、釈龍護(名應、字子感、号観月、往二島内長光寺)は周防の人にして、昭陽の門人なるが、同門の誼を以て旭莊の大阪住居にも力を尽せり、僧月性は龍護が姪なり、詩酒清狂を以て聞ゆ、其の大阪に至るや常に旭莊を訪えり、月性の死後、旭莊は其の郷里なる周防楊井に遊び、妙円寺を訪うて月性劍舞図の前に一絶を手向けたり。

嘗笑徐君抵死痴。自留二宝剑。訣二親知。

生平謬愛吾詞筆。莫怪墓門來挂レ詩。

劍舞の図には謂あり、一日酒席に米利堅舞を作す者あり、外夷を憎める海防僧、忽ち怒つて刀を抜き其の人を斫らんとせしに、其の人驚き且遁ければ、月性遂に劍舞して燈毬を斬れり、故に此の図あり。

医者には京都の新宮涼廷(名碩、蘭医、丹波人)嘗て旭莊を其の順正書院(在南禅寺中)に延かんとして果さざりしも、旭莊其の知に感じて、往きて之を訪いしが、秋元秀藏旭莊と当世の人才を論じ、涼廷を以て第一の偉人と為せり、大阪にては緒方洪庵(名章、字公裁、文久三年歿、年五十四)、岡部玄民

尤も親善なり、旭莊も亦頗る医理に通せしと見え、往々塾生の病を治療しき、画人に小田海僊(名瀛、字巨海、一号百谷、長州人)中西耕石(名壽、魚住耕石(名毅、字仲弘、越後人)、小林石峰(名光、字伯孚、大阪人)、田中秋亭(名興、字



緒方洪庵 (「亀門の二廣」スクラップブックより転載)

子福、称左一)等を始め、名を世に知らるる者、皆旭莊と遊ばざるなし、耕石海僊と交悪かりしを、旭莊調停しき、秋亭は外滑稽にして内耿介なり、旭莊嘗て其新婚を賀す、戸に入て寂寞、主人未だ起す、一婢方に炊げり、旭莊婢に問うて曰く、聞く昨夜新に婚すと、知らず新婦何くにか在る婢曰く、妾即ち新婦なりと、旭莊門を出て絶倒せり、秋亭死する時、囊に一銭なく、又一債なかりき、田能村小虎(名癡、字顧絶、号直入)も亦当時大阪に住して、旭莊の門に出入すること虚日なかりき。

●亀門の二廣

(四十一) 天 四

廣瀬旭莊(十九) 大塩平八郎と幽霊▲吉益掃部実話▲坂本鼎齋と大塩冤罪

大阪土着の士人は与力なり、与力の文学ある者は、前に隱岐柴軒あり、後に大塩中齋、坂本鼎齋等あり、旭莊初めて堺に至りし時、中齋(名後素、字子起、称平八郎)猶在り、陽明学者として大阪に隆々たりしも、旭莊之を訪わず、江戸に在りし時に大塩の乱起れり、旭莊の門生医を吉益掃部(東洞の孫)に学ぶ者ありて、掃部と相識りしが、一日掃部旭莊に謂て曰く、拙者は嘗て大塩と懇意なりしが、其乱を起さざる前数月、月明かにして昼の如くなりし一夜、往きて大塩を訪いしに、大塩の面色死灰の如し、拙者に向て、某只今園中に立ちし折、先生御出と聞きて座敷に立返らんとせしに、忽ち婦人の生鬮體の地上に在りて、某を見て啞然として笑うを見たり、一步引退きて、月に映して之を見るに、宛然豊田相模なり、(相模は女巫にして、鬼道を以て人を惑わすより、大塩平八郎其好を發きて磔死せり、或は冤罪なりきとも云えり) 某乃ち刀を抜きて走り進み、鬮體を提げて之を空中に抛ちつつ斬落したれば、地に墮ちて輾転げつつ木屐の齒の間に入り、執りて之を視れば石なり、甚だしい故婦人一念の怨毒やと、拙者(掃部)平八郎に向い、君は平日学を講じて心を治めたまうに、斯かる妖怪を見られしとは、本氣の沙汰にあらじと云いしに、平八郎打笑つて、何ぞ其れ然らん、数日前某熊野に遊び、那智瀑布が石に激して飛揚するを觀、物激せざれば飛揚する能わざるを悟れりと云えり、拙者其言語の不倫を怪しみ、談を終えずして去り、歸りて妻子に大塩は終を克くせじと語り、此より絶交して通ぜざりしが、大塩乱の

当時、彼と懇意の人々は皆官府の疑いを蒙りしも、予は絶交の為に免れたり、此事妻子の外未だ嘗て人に語らざる所なりと、旭莊日記に記せり、物激せざれば飛揚せず、大塩の飛揚は好んで大に激せし結果か、妖怪の一事、不倫も亦甚だし、大塩当時已に心理の錯乱を来せしか、陽明学者としての中齋を研究するには好資料ならずや。



旭莊の自画贊

(『亀門の二廣』スクラップブックより転載)

旭莊後ち坂本鼎齋(名俊貞、称鉉之助、萬延元年歿年七十)と交わり、鼎齋を好みて気節ある豪傑なり、弱冠にして九州に遊び、亀井南冥を訪うて其の災後の仮宅に一宿せしことあり、大塩の乱、敵將梅田某を殺し、武功第一を以て、玉造与力より鉄砲奉行となり、御目見以上に晋めり、旭莊の対面せし時は年五十左右にして、短小精悍、風神奕々、一見して奇傑たるを知れり、大塩の事に談じ及びしに、鼎齋曰く、大塩の罪案には、首として平八郎が子息の妻を奪いしことを掲げたり、拙者思うに、君子は曖昧を以て人を罪す可からず、斯る事實は有るまじき事なり、何故となれば格之助は平八郎の養子のみ、平八実(か)に其の妻を窃まば、格之助豈平八と同じく死なんや、或は平八威を以て鉉制し、平八既に敗れて、濟之助・梶五郎等は散乱せしに、格之助のみは終始父に随えり、争でか暴威もて如此ならしむを得ん、拙者嘗て平八を訪問せしに、父子の間、頗る肅睦にして、孝慈の風あり、恐らくは聚廳に至らず、且平八未だ敗れざる前には、一人の其事を言う者なし、平八一敗して、吉見某、首て其の事を計き、萬口之に和せるも亦怪しむべきなりと、初め旭莊は鼎齋が大塩を破るを以て名を得つれば、定めて其の功を誇りて深く大塩を罪すべしと思ひけるに、其の言公平なるに服したりとなり、大塩固り國士を以て自ら矜持する者、恐らくは乱倫の事あらじ、一旦事敗るるや、百醜を以て之に帰す、而も鼎齋其の敵の為に千古の冤を白す、俠と謂うべし。

旭莊の詩を作るや、生来此の詩の如く遅成せしものあらずと云えり。

●亀門の二廣

(四十二) 天 四

廣瀬旭莊(二十)

交游(一六) ▲商人の文雅 ▲鴻池善右衛門が事 ▲舞を以て潤に代う ▲清濁並せ呑む

昔時大阪の商人に文雅の徒多く、喜んで学者文人と交りて、斐然觀る可き者多かりしは、我が大阪の花なりき、旭莊時代にも、北尾墨香(書林備禹)が如き、手塚春波(称太兵衛)が如き、呉北渚(名策、字げんぎま)が如き、元馭(称肥前屋又兵衛)が如き、阪上九山(平野屋甚左衛門)が如き、田中介眉(名節、字樹徳、称義兵衛、天満酒造家)が如き、藤井藍田(綿屋屋右衛門、唐物商、門人の部に出ず)が如き、高松舩洲(名長教、字知卿、白粉屋長左衛門)が如き、相当の商人にして、或は書画を善くし、或は詩或は篆刻に長じ、各一技ありて翰墨の場に馳騁せし者、指屈するに暇あらず、彼の大阪一の長者と聞えし鴻池善右衛門が如きも、別に一芸一技の長なしといえども、亦文雅の士と遊ぶを喜びしが如し。

一日小竹旭莊等、安雲の倉邸なる頼左一郎(名舜齋、字子晦号采眞杏坪子)が許に会せり、鴻池善右衛門も亦至る、酒酣なり、旭莊善右衛門と暮を囲みしが、小竹旁より善右衛門に向ひ、君は日本一の果報者なり、苦勞と言ふ事なかるべしと云いければ、善右衛門頭を掉り、いやとよ、鴻池の主人たるは樂しき者に非ず、事々親類に制せられて、一も自由なるを得ず、譬えて申さんに、諸先生を御請待申して一盃を献ぜんと思ふも、親類も承知せざれば、某如何ともし難し、他席に臨みては鴻池鴻池と持離されて、叮嚀なる御取扱を受くるも、我は家人の許さが為に、其の返報も出来ず、我のみ厚待を受けて、之を人に報いざる心苦しさ、苦勞と言ふ事絶え申さず、隠居せんと思へども、弟の歿りし為に叶わずと答えけり、小竹聞きて我等は君を呆子かと思ひしに、扱も言う所人情に近きこと如此し、旭莊君、鴻池の主人も亦苦勞ありて隠居したしとは、世の人も知るまじ、君の日記中に此奇語を洩すべからず、など戯れしこと日記に見ゆ、小竹が翻弄、善右衛門の披瀝、並に一場の奇談なり、然るにても鴻池の主人が豪富を挾まずして、儒雅の士と

交友せしは多とすべからずや、斯く大阪の大町人鴻池より、呉服屋酒造家の主人に至るまで、文雅風流の嗜好ありたればこそ、関東関西の学士文人、皆其倉邸を腰掛として大阪に集り、遂に足を大阪三郷に留めて一時の盛を鳴らしし所以なれ、今は如何、親類の制肘昔日の如くならずして、其好む所に從うを得べきに、絶えて文雅の会を聞かず、あらぬ遊樂に耽るもの多きは、交還も亦甚だしからずや。

当時は独り商人の文雅のみならず、歌妓仲居の如きも、亦風流の道に心を寄せたりき、文人墨客の常に杖を曳きは北野の玉藤なり、旭荘も亦其の徒と玉藤に飲むを常としけるが、阿玉・阿楨など云う仲居ども、いつも扇を出して書画を請えり、旭荘は好んで蘭を画き、又山水をも画けり、一日隣室に数妓を携うる者あり、一妓尤も姿首あり、招かざるに來りて旭荘の坐に入り、我が客人廣瀬先生の書は滅多に獲られず、汝逼りて字を乞えと申されぬ、願くば此の扇にと三拝しけり、旭荘笑つて、我れ潤筆なければ筆を下さず、卿舞うて潤に代うべきやと戯れければ、いとく安き御事なるも、三絃なきを如何にせんという、行徳玉江阿楨に、卿も三絃もて潤に代うべしと命じ、乃ち阿楨絃を鼓し、少妓起ちて舞えり、其の徒皆纏頭なくして斯る妙舞を見んことこそ容易からねと嘆したりとぞ、今の文人は妓に向て給葉書に字を乞う習とはなりぬ、世は顛倒なりけり。

年毎に正月交友を会飲するを、江戸にては発会といひ、大阪にては初会といふ、学者先生達も此の例に沿わざる能わずして、旭荘も毎年客を招きしが、親しき人々のみを招けりと見ゆるも、猶數十百人に及び、一日に二席二日にも渉れるが如し、大阪は正月及び中元毎月朔望にも、名刺を交換して賀を道う慣習あり、旭荘も亦俗に従いて賀を發せず、嘉永三年元旦の詩に、通名三百戸留跡十三年の聯あり、天保九年より文化三年迄、前後二十余年大阪に住せしを、其の交友の広きも亦宜なり、要するに旭荘は交友を好みて清濁並せ吞めりき。

●亀門の二廣

(四十三) 天 四

廣瀬旭莊(廿一)

門人▲柴秋村▲十一吟社▲鼎金城▲藤井藍田▲榎本驢齋▲種子島石峰

此の比大阪書生の学費は、一年に食費六兩、謝金一兩、小遣金三四兩、合せて十兩内外を要したりという、旭荘の塾は固り宜園の盛と日を同くして語る可からざるも、前後門に及ぶ者殆ど千人と稱せり、教育の法は宜園の家法を用いて月旦を為せり、其講釈は朝にして、塾生皆旭荘の早起に閉口せり、中にも夜の明けぬうちより起されて、日間瑣事備忘を筆記せしめらるる塾生は、余程の耐忍力を要しけるが、之が為に如何なる劣才も、約半年にして作文の法を会得したりという、然れど旭荘の門下には、文を学ぶ者少くして詩を学ぶ者多かりき、教育は旭荘の長所に非ず、門下名を成せし者亦僅に指を屈すべし、此の一點に於ては、益淡窓の大なる所以を見る。

旭荘の高足弟子は、柴秋村(名華、字綠野、称六郎、阿波人)を推して第一と為す、初め旭荘に学び、後宜園に遊べり、河野鐵兜其の詩賦の才を稱して本朝の曹子建と為せり、又善書を以て名あり、同門に推されて淡窓の墓銘を書けり、貫名海屋養うて嗣と為さんとす、旭荘曰く、矢上快雨其妻と和せず、海屋予と之を諭せしに、快雨は二先生は我が父なりと云いしが、快雨死して海屋其の寡婦を娶れり、子其れ此夫此の婦を以て父母と為さんとすかと、秋村乃ち之を辞したりき、後ち門戸を大阪に張りしも世を早くせり、長三洲も亦嘗て旭荘の塾に在りしが、もと淡窓の高足なるより、旭荘も弟子視せざりき、棚橋大作(二本松人)西島青浦(山口人)等も亦門下の一秀才なり。

門下の大阪人には藤井藍田(名徳、字伯恭、出前)鼎金城(名鉉、字子玉、称平作)、行徳玉江(名貞、字公麟、称元慎、兼医学画)、竺徹雲(誓得寺)、竺龍潭、濱名白鳩(名命、字子崇、称七兵衛)、石田綠鳩が如き、皆詩を旭荘に学べり、其の余毎月十一日に詩会あり、十一吟社と稱し、旭荘叱鞭の下に詩を学びし者いと多し、金城は画人春岳の子、幼より寒裏



藍田画長州贊
(「亀門の二廣」スクラップブックより転載)

酒屋の小僧と為り、刻苦画を學びて遂に一家を成し、南宋の能品と称せられて、田能村直入と名を齎しくし、玉江、綠塙、白塙、皆其の門に出でたり、人と為り沈黙謹慎にして、終身疾言遽色せず、人推して君子と称せり、年五十三を以て文久三年五月晦日に歿するや、旭莊嘆惜して曰く、浪華の僧医画人、予に就きて學を問う者、前後数百人、或は一二名を成し意を得る者あれば、唯ち自ら視ること太だ高く、我を待つこと友の如く、復弟子の礼を執らず、唯金城及び藍田・秀民(尾崎秀民医者)終始一の如し、而して金城は其の声愈揚りて、其の行は愈卑遜なり、尤も惋惜すべしと、大阪人の輕薄、師弟の義を知らざる亦甚だし、而して金城・藍田等の情義に篤き、尤も多とすべし、藍田師家に入して殆ど一家の如し、旭莊の歿するや、其喪を經紀し、後長州の志士と交りて国事に尽す所あり、壬生浪士に捕えられて、幕吏の為に拷掠せられ、遂に慶応元年閏五月十五日を以て獄中に死したりしが、(享年五十二)墓を雲水の邦福寺なる旭莊の墓側に営みしは、師と死生を同くする遺志に出ずとなく、亦卓々として伝うべき也。

梅墩詩鈔四編卷の二に、送三椽本生還二種島一七律一篇と、送三椽本驢齋歸二種島一七古一篇とあり、驢齋は予が郷人にして、旭莊に従游する者三年余、學成りて郷に歸りしが、間もなく早く歿せり、嘉永五年三月十六日の日記に曰く、

三月十六日種子島三七來行二東修一。聞椽本驢齋卒。驢齋聰敏恭敬。才德雙全。予門人數百千人。

未レ見一其比一。殆有「祝予嘆一。惜哉。

是れに因て之を觀れば、驢齋も亦旭莊門下の高足なり、種子島三七は石峰と号して、予が母の姉の子なるが、最も詩を能くし、又我が郷英學の祖たり、旭莊の門に我が同里の先輩二人あり、予が旭莊の伝をものすると淺からぬ因縁なりけり。

●龜門の二廣

(四十四) 天 囚

廣瀬旭莊(廿二)

風采▲性癖▲修養と工夫▲淡旭の異なる所以

旭莊は風采は一個の僧父なり、篠崎小竹・菊池溪琴等初めて相見し時、皆

曰く、吾輩生平一旭莊君ありて胸中に存せり、謂えらく長身玉立、清俊の氣眉宇に見れんと、料らざりき其の魁梧にして而も矮く、村氣体に盡れんとわと、旭莊又甚だしき近視眼にて、常に水牛緑の大眼鏡を離さず、貴人に見えて眼鏡を去れば、如何なる人なりしやを見分けず、後妻を娶らんとする見合に、其の顔の醜を弁ぜざりしなど、奇談頗る多かりけり。

旭莊は怪談を好めり、人往々儒にして鬼を説くの不倫を誹りしも、他人の短長を説くに勝れりと為せり、旭莊の幽霊話を聞きて宿屋の主婦の夜驚はれしこともありき。

旭莊の性癖は厳急なり、又健啖家にして不養生家なりしが如し。

才子才を待みて放縦に陥り易きものなれど旭莊は幼より家庭の嚴に因て檢束せられたりき、十三の時、左伝の講釈を聴きながら居睡しければ、其の父怒りて是れ過食の為なりとて、旭莊を縛して二階の欄干に繋ぎ、七日が間、食する勿れ、若し窃に食を送る婢僕あらば、必ず之を逐わんと云えり、旭莊三日目には蚊に螫さるる苦しさに、自ら縛繩を嚙切て隣家に逃れたりと云う、此より早起を努め、一生昼寝せし事なかりき、其の父の臨終に五子に遺訓せり、人々皆異りしが、旭莊に謂て曰く、汝は巧智を以て天を欺かんと欲す、天豈欺く可けんや、誠の一字を忘る勿れと、世間才子の病は巧智の二字に在り、旭莊も亦免れざりしか、然れども旭莊は工夫を以て其の病に克んとせり、年三十二に誓を立つ、一に曰く、飲食起居を節して生を養う、二に曰く、無用の工夫を費さずして心を義理文章に竭す、(一切の克己怨欲を禁ず)三に曰く、事來れば当下に即ち行い、稽閣遲滞して身惰り心困む可からずと、又一誓を立てて曰く、日間の行事、今日為す所、明日之を録し、三日を過ぎて省みざる勿れと、年三十三の時又一誓を立つ、曰く、瑣事は自ら逸して人を勞する勿れと、年四十四の歲暮の日記に云く、予れ久しく性を矯めて悉く旧習を改めんと欲す、其の目に曰く、急を改めて緩と為し、弁を改めて訥と為し、慾を改めて淡と為し、侈を改めて儉と為し、逸を改めて勞と為し、惰を改めて勤と為し、繁を改めて簡と為し、覈を改めて恕と為し、安肆を改めて端莊と為し、瞋怒を改めて和悦と為し、簡傲を改めて恭敬と為し、誇張を改めて審固と為すと、因て自ら改菴と号したりき、以上は朱子の所謂氣質變化なり、果して其行う所其期する所の如くなりしやを知らざるも、此修養と工夫あり始めて小山が所謂の悪才子たるを免るるに足れり。

其の父又嘗て淡窓に問う、汝が志如何ん、淡窓曰く、終身苟の一字をもらん、父曰く、謙汝は如何ん、旭莊曰く、終身不苟の二字を守らん、其父首肯せりと、旭莊の子林外、嘗て旭莊に徳は何処より立脚すべきやを問う、旭莊曰く、俗語の遠慮より始むと、又養生の道を問う、旭莊曰く、寡食より始むと、林外乃ち淡窓に問うに二者を以せしに、淡窓曰く、徳は無遠慮より始まり、養生は多食に始まると、某侯之を聞きて評して曰く、二廣の言は実歴より得来るか、淡窓は遠慮深き人なり、自ら遠慮に過ぎしを悔ゆることあるべく、虚弱なる人なれば少食にて、途中に飢えて病を発せし事もやあらん、旭莊は無遠慮の言行に因て後悔せし事あるべく、又健啖家なれば之が為に病を醸すより斯くは言いけん、我れ嘗て下に臨むの術を問いに、淡窓は韓非の術を勧め、旭莊は誠を以せよ術を用ゆるは至拙なりと云えり、淡窓は誠実の人、旭莊は策略の士各、自ら顧みる所ありて云いしなるべしと云えりし由、淡旭兄弟の性行各異なること如此し。

旭莊立誓ノコト八日間鎖事備忘卷十二(天保九年)ノ元日記事中ニアリ。

●龜門の二廣

(四十五) 天 囚

廣瀬旭莊(廿三)

尊王家▲旭莊と松陰▲攘夷の見解

旭莊の晩年は尊攘論の盛んなる時なり、彼の地位見解は如何ん、旭莊は幕領の日田に生れたれども、能く名分を知りて尊王の大義を弁えたりき、嘗て人に謂て曰く、田舎人一たびは三都を見ざる可からず、京を見ざれば我が邦の百王一姓万国より尊きを知らず、大阪を見ざれば、我が邦物産多く舟相便利にして万国より富みいたるを知らず、江戸を見ざれば、我が邦の人口多く諸侯輻湊して万国より繁華なるを知らずと、又国体を詠ぜし詩あり、云く、

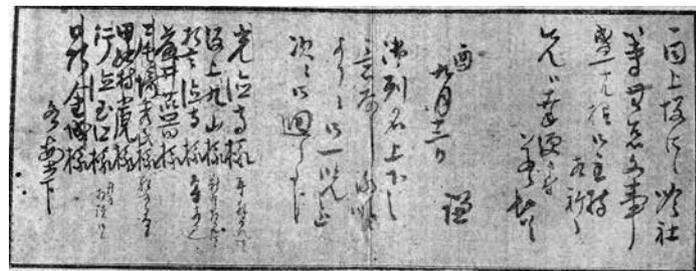
神武開レ基上繼レ天。爾來経レ歳近三三干一。

西人未レ免井蛙見。唯托周家八百年。

国体自慢はやがて尊王の大義に非ずや、大和神武陵の傍に住める渥美雲齋といふもの、一日旭莊を訪いし時、雲齋が云く、近比戸田和三郎(後大和守)官命を奉じて陵墓を探索すと承りしが、土人は官吏が民田を奪わんことを恐れて、事実を申立てまじ、彼の人若し野服して文人騒客を装いなば、必ず

其の実を得んと、旭莊聞きて我が友手塚春波というものの、彼の戸田氏と懇意なれば吾子の言を伝うべしと答え、異日春波に云々と物語り、戸田氏に告ぐべきこと猶一事あり、平城以後の天子、安德・順徳二帝の外は尊号の追諡なし、戸田氏にして平城以後光格天皇に至るまで数十世の尊号を追奉ること、淡海公の故事の如くにして、悉く院号を改めなば、不朽の盛事ならん、摺紳家は古に泥みて其の義容易ならざらんも、広く天下の諸儒に命じて諡考を上らしめんに若かず、吾子須らく戸田氏に勧むべしと云いしに、春波大に喜びたりとあれば、此の議戸田氏の耳に入りしなるべし、事行われずといへども、旭莊が心を王室に存すること如此き、亦以て其の一個売文貪潤の町儒者に非ざりしを知るべし。

然れども旭莊は世故に老熟して身家を保つに注意せり、故に幕末の諸儒往々慷慨國を憂えて其の身を危くせしも、旭莊は世外に超然として批評の地に立たり、頼三樹の処斬を聞きし時は、其の匪人と交りて自ら禍を招けるを咎めしが、所謂匪人は、池内大学を指せしか、又は浪士一輩を泛稱せしか、其の意、詳ならず、書を府内侯の知を受け



旭莊の手紙 (「龜門の二廣」スクラップブックより転載)

て藩政に参与せる兄の南陔に与えて、宜しく府内藩の人心を統一すべきを論じたる大意に、府内藩は徳川氏と同姓にして、今侯は衆翁の外孫なり、王室は祖にして幕府は父に均しく、其の子たる府内藩は、父に背きて相に与するべからず、己むを得ずんば諫めて死すべく、然らざれば寧ろ徳川氏と存亡を与にすべしと云えり、然りとて彼等は佐幕党にもあらず、晩年に吉田松陰が大原三位に上りし書及び時勢論を讀みて、勤王首倡の功は、楠・菊池・名和諸公に譲らずと評せるが如き、飽まで大義を弁じたるを見る、且松陰が外国に密航せんとして東上せし途中、大阪に立ち寄り、二度までも旭莊を訪いしに、旭莊在らずして面晤するを得ざりしを、旭莊痛く口惜しがり、其時我れ松陰を見なば、彼をして刑に罹

らしめざりしものと云えり、抑何の見る所ありて此言を發したるかを知らざるも、旭莊夙に蘭医に交りて多くの訳書を読み、此の比の学者中にては、世界の事情にも通じたる一人なりしかば、必ずや時勢の變転に關して、一見解を持せしなるべく、其をして松陰と議論を上下せしめざりしは、後人も亦其の憾を同じくする所なり。

旭莊嘗て時勢を評して曰く、幕府は和夷を名として、実は天下の貨財を網せんとし、遂に人心を失えり、今や朝廷は攘夷を以て名と為すも、実は郡国兵馬の権を収めんとするもの、名は実と違ふ、是れ曉々たる所以なりと、當時の儒生、誰か看得て此に到れる者ぞ、其の歿前二月、即ち文久三年の六月門人に謂て曰く、我れ天象を以て之を占うに、攘夷必ず行われん、近來雲將に合せんとして、必ず東風の為に吹散らされ、早既に三旬なりしが、此に至りて雲は風と闘うこと三四日、終に克ちて風を遏め沛を降せり、雲の西より興れるは京師の象なり、風の東より来るは江戸の象なり、雲能く風に克ちて甘霖を下すや必せりと、旭莊は攘夷を以て討幕と解釈せり、而して維新の甘霖は果して其の逆料する所の如し、旭莊は批評的尊王家にして奔走的志士にあらざりしなり。

● 亀門の二廣

(四十六) 天 四

廣瀬旭莊 (廿四)

去留の神闡 ▲終焉の地 ▲絶筆

旭莊初め北陸の游より歸るや、世は益騒がしく、今にも事あらん状なり、時に林外日田より來りて大阪に在り、之と去留を議して決せず、林外をして御霊の祠に至りて神闡を請わしめたり、鬼神を敬するは彼れの家法なればなり、一に妻子を帯びて郷に歸るべきや、二に依然此の地に住すべきや、妻子のみを歸郷せしめて其の身は大阪に留まるべきや、三に世變なきか、有無の間か、此の三條を神に問いて、世變有無の間と、妻子を帯びて郷に還るとの神籤を得、歸田の志、此に決せしも、旭莊の処世に巧なるや、世間静謐と為らば再來せんとて、其の徒に声息相通すべきを命じ、我れ去つて火の消えたるが如くならしむる勿れ、諸子吟社を維持して余燼を吹くに便ならしめよと云えり、是れ萬延元年の春の事なり。

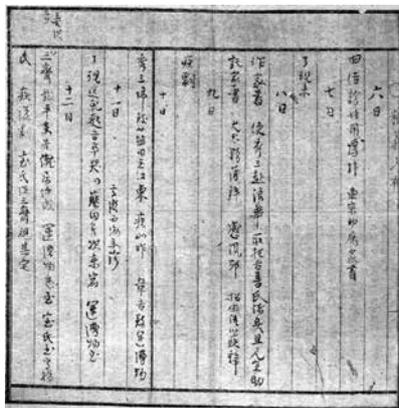
旭莊の日田に歸るや、梅墩を起して梅花三萬本を植え、以て其の中に残年を送らんとする者の如くなりき、大阪の日柳燕石(名政章、字士煥、讚岐人) 詩を寄せて曰く、

梅花三萬本。一々艶粧新。風流詩天子。擁之當二妃嬪。

絶勝漢家主。唯養三千人。

日田の小天地未だ此の豪骨を老いしむるに足らず、且面白からぬ事もありけん、我れ此の地に住するを好まずとて、旭莊は一年許りにして新築の雪來館を見棄て、又も浪華の風月にあこがれ出でたりき、其が大阪に着きしは文久二年の暮なりしが、時勢切迫、騷擾益甚だしくして、都人士は乱を僻地に避けんとする時なり、未だ幾ならずして池内陶所殺され、家里松嶠(称新太郎) 殺され、浪士の横行益甚だしく、幕府之を制する能わざるより、無頼の徒も亦名を浪士に託して、睡毗の恨を報いんとし、此処の辻にも首なき屍横わり、彼処の橋にも胴なき首暴され、血腥きこと言ふ方なし、旭莊の門人尾崎秀民切に旭莊に勧むるに地を避けんことを以す、旭莊時に脳病を病みて頭痛に悩めり、一には乱を避け、一には鬨を避けて、病を閑地に養わんと思ひ、地を相せんが為に池田に游べり、日記に拠れば、梅園を六甲山の麓に開きて一桃源をトせんせしなり、然れども此の地長州人來往の為に、笠影鞭糸復た従前の間叙に似ず、時に池田の知旧旭莊を要して教を請わんとしければ、遂に移りて池田に移りしが、旭莊終焉の地とは為りにき。

旭莊が池田に移りしは五月晦日にして、金城の柩を送りし足にて直に池田に向いしなり、其の脳病は或は起り或は伏したりしが、六月朔日より服部天神に参詣するを以て日課と為せしは、養生の為に医者の勸を容れしなり、七月五日に至りて病重り、八月十七日に歿したりしに、彼が畢生の大著述たる日間鎖事備忘は、七月五日迄門人に口授筆記せしめ、別に自筆にて七月朔日より十二日迄の簡略なる日記あり、旭莊病苦の中にも自ら筆を取りて、歿前五日迄は其の大事業を廢せず、



旭莊の絶筆 (『亀門の二廣』スクラップブックより転載)

而して十二日の記事は実に其の絶筆なり、初め旭荘の此業を始むるや、兄の淡窓之を見て、日記の記事余りに繁密に過ぐ、繁密なれば自から永続し難き者なり、宜しく要を摘みて久しきに持するを努むべしと云いけるも、旭荘は我れを耐忍持久の精力なき者とはし思いたまうかとて、其の筆法を改めざりけるに、果して死に至るまで其の業を継続せり。

●亀門の二廣

(四十七) 天 囚

廣瀬旭莊 (廿五)

死生の際▲邦福寺の墓▲妻子▲然らばよ二先生

旭莊の病漸く劇なるや、七月五日に至り服部天神より歸りて、殆ど人事を省せず、自ら性理の錯乱を覚えけるが、旭莊の日記に云く、我輩讀書し、臨終の時に當りて、禪僧の笑う所と為る可からず、平生自ら英雄を以て期したるに、今此如は恥すべし、乃ち瞑目して本心を呼覚し、良久しくして幻想稍退けりと、病苦は英雄も免れず、但死生の際に君子の重んずるところ、旭莊此の反省の工夫あり、讀書人たるに負かず、旭莊は病勢此に到る方も活理なしと信じ、遺書を作りて日田に送りしが、其の後稍瘥えて復劇しく、遂に起たざるに至れり。

浪華の俗は火葬を用ゆ、旭莊常に之を惡み、門生故旧の死する毎に、極力之を斥けたり、故に柴秋村曰く、万一先生に先ちて死するは不幸なれど、亦二幸あり、一は一篇の好墓誌を得べく、一は火葬を免るを得んと、然れば旭莊の死するや、門人藤井藍田・行徳玉江の輩、柩を奉じて之を大阪の邦福寺(天王寺雲水)に土葬せり、初め池田の門生は之を池田に葬らんとせしも、大阪の門生故旧は旭莊と大阪との縁故深きを固執して、遂に佳城を此にトせしなりとぞ、余曾て邦福寺に詣りて

旭莊の墓を展せしに、寢棺を埋めし上に、二大石を八形に置き、其の周圍三面は、丈二尺許りなる石の壁を繞らし、一面にいと大きな自然石の台石を据え、其の上に御影石の墓石を北に面して立てたり、題して旭莊



旭莊の墓
(在雲水邦福寺、現在は和氣山統國寺)

廣瀬先生墓と云う、墓前の花立一對は、空徹雲、空龍潭、石燈籠一對は藤井藍田、尾崎秀民、阪上九山、高木祠山、菴形の石燈籠一基は、手塚又兵衛(春波)、谷口惣介(府内倉邸史)、石の水鉢は、行徳玉江、西島青浦の名を刻したり、墓制の尋常に異なるは由来あり、旭莊安政四年長州行の途次、一二月十三日備後神辺に至りて菅茶山の墓を展せしに、茶山の墓は前に碑あり、(頼山陽撰一行状を刻するかと云えり)、繞らずに板柵を以し、碑後の窆棺の処は、土を崇くして市らずに輒を以し、碑前に二石燈あり、旭莊は蓋し漢土の墓様に依るものと為し、菅氏の門人能く古礼を知るに感じ、淡窓の墓未だ此に及ばずと云えり、旭莊蓋し茶山の墓に感じて、遺言して其の制を用いしか、門人私に諡して文敏と曰えり、故に郷里日田の墓は淡窓の次に文敏廣瀬先生墓あり。

旭莊は門人の婚礼に、予め五たび娶る、人の媒酌を為すべからずと辞せしことあり、其の配或は死し或は去りしが、伉儷最睦まじかりしは、江戸に歿せし合原氏と、最後に娶りし清水氏となり、前後六男三女あり、三女三男は或は殤し或は早世し、合原氏の出なる長子林外は、淡窓の後を承け、木村氏の出なる四子仁四郎は敬四郎と改称し、嘗て愛媛・熊本・神奈川三県の収税長に歴任して神奈川に歿し、清水氏の出なる末子龍吉は、現に陸軍歩兵少佐にして第十一師団に在り。

品学兼優にして教育の功大なるは淡窓を推し、才識並に高くして遭遇の趣味多きは旭莊を推す、而して旭莊は我大阪に縁故深きを以て、叙述頗る詳なるを期せり、予れ門を閉じて二翁の遺書を読みつつ、其事跡を叙すれば、或は日田の遠思楼に登りて、恭謙なる君子の聲咳に接し、或は伏見町の九桂草堂に坐して、世故に老いたる大才子の説話を聴く思あり、短小の総髮姿、水牛縁の眼鏡など、斯くやありけんと、其面影すら眼前に彷彿せしが、今は二翁の行略を叙し得て終を告げたり、然らばよ淡・旭二先生。

(亀門の二廣完結)

亀井南冥・昭陽以下、亀門諸儒の伝をものして、異彩ある学者四十五回、亀門の三女傑九回、亀門の二廣四十七回三編通計二百一回に及び、此に完結を告げたり、其の材料を蒐集するに當り、四方君子の助力を得しこと慇からず、謹んで此に謝意を表す。

明治四十一年戊申二月十五日編者天囚生白

咸宜園門下生略伝（三）

高野 長英（たかの・ちようえい）

深町 浩一郎

本名 高野讓 幼名は悦三郎、はじめ卿齋、のち長英、号は瑞草・曉夢楼主人・驚夢山人などがある。

生没年 文化元年（一八〇四）五月五日～嘉永三年（一八五〇）一〇月三〇日

◆入門簿なし 入門日不明

◆出身地 陸奥国胆沢郡水沢（岩手県奥州市）

◆月旦評 不明

◆大婦日 不明

◆職業 蘭学者・医者

◆略年譜

文化元年五月五日、仙台藩水沢領の家臣であった後藤実慶の三男に生まれ、幼いころ父に死別し、一〇歳（文化一〇年）のとき母方の伯父（母の兄）高野玄齋の養子となる。高野玄齋は侍医で杉田玄白の門に学んだ蘭方医であった。一七歳（文政三年）のおり、養父の反対を押し切って学業修行のため江戸に出て苦学した。江戸では、杉田伯元、吉田長叔に蘭医学を学び、二三歳（文政八年八月）のとき長崎に赴きシーボルトの鳴滝塾に入塾し、翌年にドクトルの称号を授けられる。引き続き長崎に留まっていたが、二五歳（文政十一年）の一月にシーボルト事件が起り、連座を恐れて長崎を逃れ九州内に身を隠した。翌年、九州を去り安芸広島で開業する。二七歳（天保元年）のとき、広島を去り京都で開業ののち、江戸に戻り開業する。診療のかたわら生理学の研究に従事し、天保三年、我国最初の生理学書『医原枢要』を著した。このころ渡辺崋山・小関三英・鈴木春山らとの「尚齒会」グループにあつて西洋学術の研究や社会対策などの実践的研究をし、天保七年に飢饉対策のための『救荒二物考』『避疫要法』を著し、また天保九年、幕府の異国船対策を批判した『夢物語』を著した。三六歳（天保十年）の五月に「蚕社の獄」がおこると、これに連座して幕政批判の罪で永牢の判決を受け小伝馬町の牢舎に収容された。獄中で『鳥の鳴音（わすれがたみ）』を書いて

無実の罪を訴え、『蚕社遭厄小記』を書いて釈明したが許されなかった。四一歳（弘化元年）の六月、牢舎に放火して脱獄逃亡し、いったん郷里水沢に帰った後、江戸市中に戻って潜伏した。この間『兵制全書』『三兵答古知幾（三兵タクチキ）』を翻訳し、四五歳（嘉永元年）には、宇和島藩主の伊達宗城に招かれ兵学書の翻訳に従事した。翌嘉永二年八月、再び江戸に再潜入し、沢三伯と変名し医業を営んでいたが、嘉永三年一〇月、幕府の捕吏に襲われて、一〇月三〇日、四七歳で自刃した。

◆業績

高野長英は、多くの蘭書の翻訳や著述を行なって我国の科学史上に大きな業績を遺した蘭学者として、また「蚕社の獄」で渡辺崋山とともに罪に問われ悲劇的な最期を遂げた先覚者として広く知られている。

その業績としては、シーボルトの鳴滝塾時代に日本の事情について蘭訳した「京都に於ける神社仏閣の記述」「鯨魚及び捕鯨について」「日本に於ける茶樹の栽培と茶の製法」「琉球島に関する記述」「小野蘭山の『飲膳摘要』」などの論文でシーボルトの日本研究に貢献したこと、『医原枢要』『漢洋内景説』『蘭説養生録』『居家備用』『験温管略説』等多くの医学書や、化学書『遠西水質論』天文学書『星学略記』などを翻訳著述し西洋医学・西洋科学知識の普及に貢献したこと、海外事情の論文『夢物語』（幕府の外国船打払い政策を批判した論文）『知彼一助』（英仏など欧米諸国の軍備財政などの研究書）や飢饉対策の書『救荒二物考』（馬鈴薯と早蕎麦の栽培等の解説）『避疫要法』（飢饉後の流行病予防法を論じたもの）を著し優れた経世の見識を示したこと、主に潜伏時代に翻訳した『三兵答古知幾（三兵タクチキ）』（歩兵・騎兵・砲兵の三兵科の実戦技術を論じたもの）『兵制全書』などの兵学書の翻訳を行ない日本の軍事に貢献したことなどが挙げられる。このほか、著書に投獄に至った事情を論じた『鳥の鳴音（わすれがたみ）』『蚕社遭厄小記』がある。

◆咸宜園での在塾について

高野長英は、長崎での蘭医学の修学ののち、日田を訪れ咸宜園で学んだとされている。しかし、その入門簿は残されておらず、淡窓の日記等にも記録されていない。長英の咸宜園在塾を裏付ける資料は、出身地岩手県奥州市水沢にある顕彰

碑「贈正四位高野長英先生碑銘」であるが、記述内容は信用してよいと思われる。

「贈正四位高野長英先生碑銘」は、奥州市水沢にある「奥州市立高野長英記念館」の入り口に建つ顕彰碑である。明治三四（一九〇一）年に建てられたもので、その碑文に淡窓の塾に学んだ経歴が記されている。

碑面の文を撰したのは、谷口藍田（名は中秋）である。谷口藍田は、肥前有田出身の佐賀藩士で、天保一〇年七月から天保一五年一月まで咸宜園に学び、位次九級下に至り都講に任じられた人である。のち、江戸に出て羽倉簡堂の塾で学び、佐賀に帰り藩校弘道館で教授し、のち郷里で塾を開いた。維新後は、各地で学問教授し、晩年に東京に出て藍田書院を開き、皇族などへの進講・教育にも従事している。明治三五年、八一歳で歿している。

碑文に記された咸宜園に關係する部分は二箇所ある。①碑文（原漢文）の初め近くの部分に「（文政）一一年、施福多（シーボルト）国禁を犯し、之に従ふ者多く連座す。先生乃ち去りて熊本に遊び日田に至り、広瀬氏の塾に入る」という記述部分、②最後の部分の「先師淡窓先生又言ふ、吾が門下士数千人、一飯の間も国を憂ふるを忘れざる者は其れ唯だ長英かと。亦以て其の人を知るべきなり」という記述部分である。

すなわち、文政一一年に起きた、シーボルトによる国禁の日本地図などの海外持ち出しが発覚し国外追放になった「シーボルト事件」で、多くの關係者が連座して罪を問われたとき、長英は熊本に逃れ、そこから日田に来て広瀬淡窓の塾に入門したということが記されており、さらに、淡窓先生が高野長英のことを称賛して「自分の門人は数千人に及ぶが、片時も国のことを憂慮するのを忘れない者は、長英のみであった」と語っていたが、それによって長英が志のある人物であったことを知ることができる、ということが述べられている。

「贈正四位高野長英先生碑銘」の碑は、政府から長英に「正四位」が追贈された際、宮内省御下賜金と有志の献金により、長英の曾孫にあたる高野長運らの有志者によって建設されている。それに先立って明治三二年に、高野長運が交友があった谷口藍田に碑文の撰文を依頼したものである。碑文の最初にそのいきさつが「今茲己亥（明治三二年）、奥州の人高野長運、其の曾祖瑞暉（長英）先生の行状を齎し来たり、余に示して曰く『昔、我が曾祖、・・・吾れ同志と謀り、將に諸を

不朽に伝へんとす。請ふ、子之に銘せよ』と」記されている。

藍田の記した碑文の記述は、咸宜園で都講として師淡窓と接する機会の多かった藍田が、淡窓から長英のことを直接に聞いていたことを記したものである。また、あるいは、藍田が江戸で学んだ羽倉簡堂の塾で、淡窓と親しかった簡堂から長英の人物や淡窓の長英評のことを聞いたか、あるいは長英とは親友であった田原藩士の鈴木春山から聞いたことを記したものであると思われる。碑文に「余、昔、羽倉簡堂氏に寓し、春山と交はり、先生（長英）の風を聞くを得たり」と記されているからである。

羽倉簡堂も鈴木春山も、広瀬淡窓とは關係のある人物である。羽倉簡堂は、幼少のころ日田代官の子として日田に在住して淡窓の教えを受け以後も交際が続いていた人物であり、鈴木春山は、田原藩の医家・兵学者で、文政一一年二月三日に咸宜園に「鈴木春次郎」の名で入門し八月二五日まで在塾した人物である。田原藩では同藩の渡辺華山と親しく、渡辺華山・高野長英・小関三英らと蘭学研究グループで親交した。春山と長英とはかなり親しく、長英に和蘭の兵学を学び、西洋兵学書『三兵答故知幾』の翻訳などを依頼し、また長英の脱獄や江戸潜伏を助けた協力者であった。なお、春山は、田原藩で渡辺華山を支援し、華山亡き後の田原藩の藩政改革を受け継いでいる。

入門簿などに名前が見当たらないことについては、長英が当時はシーボルト事件のあとの逃亡時であり、世を忍ぶ身であったため事実を記録に残さなかったものと思われる。

なお、長英がシーボルトの鳴瀆塾で学んだ時、先輩として岡研介がいたが、岡研介は文政二年から文政五年まで咸宜園で学んだ後、亀井塾で学び、文政七年に鳴瀆塾に入門し初代の塾頭となった人物である。長英と研介は塾中の秀俊として「読書力は長英が研介に勝り、文章会話は研介が長英に優れたり」と評されるほどに学力を競い合ったといわれ、協力して『蘭説養生録』を翻訳している。長英は岡研介から咸宜園と淡窓の評判などを十分聞いて知っていたものと思われ、研介のように文章に秀でるため淡窓のもとを訪問したいと考えていたとしてもおかしくないとと思われる。

《参考文献》

「高野長英傳（第一贈訂版）」 高野長運 岩波書店 昭和一八年（昭和三年）
「高野長英全集」 全六卷 高野長英全集刊行会編 第一書房 昭和五三年（昭和六年）

「高野長英」（朝日評伝選1） 鶴見俊輔 朝日新聞社 昭和五〇年

「高野長英」（山岩波新書512） 佐藤昌介 岩波書店 平成九年

「渡辺崋山・高野長英」（日本の名著25） 責任編集 佐藤昌介 中央公論社

昭和四七年

「渡邊崋山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本佐内」（日本思想体系55）

佐藤昌介・植手通有・山口宗之 校注・解説 岩波書店 昭和四六年

《参考資料》贈正四位高野先生碑銘

今茲己亥奥州人高野長運齋其曾祖瑞臯先生行狀來示余曰昔吾曾祖耀无妄之災在縲之中出獄不返拒捕而殞幸遭聖世其冤始雪詔贈正四位且賜金若干充建碑費吾與同志謀將傳諸不朽請子銘之按狀先生名長英高野氏瑞臯其號奥州水澤人本姓後藤氏爲舅氏元齋所養因冒其姓遠祖勝氏事上杉景勝有驍名子孫世仕邑主留守氏至祖父元端始以醫爲業父元齋又講蘭方先生幼而穎悟讀書敏甚季十七遊江戶入吉田長叔門及長叔歿西遊長崎用力蘭學師事獨逸人施福多醫術之外兼學兵法農事曾爲松浦侯譯分離術時人珍之文政九年七月元齋歿先生聞訃悲慟已謂不如繼述其志也十一季施福多犯國禁從之者多連坐先生乃去遊熊本至日田入廣瀨氏塾十二季歷遊藝備京阪遂還江戶迎養母氏刀圭餘暇著醫原樞要天保中五穀不登飢疫相仍先生以爲救荒之法在種馬鈴薯早蕎麥乃著二物考頒其種於四方又著避疫要法傳之於世先生有大志不欲以醫名家恆與小關三英鈴木春山渡邊崋山遠藤勝助等諸名士講究時務時人傳言英人莫利遜護送我漂民幕府將待其至而擊之先生與崋山議曰彼以好意至則我亦不可不以好意待之不然則禍不可測也即著夢物語以述其意崋山亦著慎機論痛擊攘之非幕府監察鳥居耀藏深惡蘭學見此等書思陷之會有欲開墾無人島者或告耀藏曰蘭學之徒著妖言謗廟議又欲航無人島其志蓋在通外夷耀藏告之閣老水野忠邦忠大驚先召崋山下獄又捕講蘭學者而先生抵官自訴欲白崋山冤獄吏訊鞠皆無一證左乃援二書中語誣爲誹謗錮

崋山而先生則禁獄終身已而崋山屠腹死先生在獄著書貽春山名曰鳥鳴音又著蠻社遭厄小記以貽從弟茂木恭一郎共辨己冤辭甚悲愴弘化二季獄火幕府之法火將及獄則縱囚期三日令返先生由此出獄乃決意不返匪門人內田生家潛行省母經紀後事又去入江戶是時歐米船舶過我海上邊警累至火技兵制皆取法西洋而讀洋書者不過醫家醫家又不解兵書先生乃譯三兵答古知幾此書專論步騎砲三兵運用之術書出兵家爭購之人皆疑其成於先生手於是幕府偵察益嚴乃去依崋山令江川英龍匿足柄郡者數月又去依宇和島侯爲侯譯築城鑄砲等書追跡愈急侯不能舍匿先生乘夜而逃欲更依島津公子齋彬西行入薩薩人不納乃以硝石精烙額變貌再入江戶依宮野生又匿於下總久之再歸江戶寓青山百人街改名澤三伯先生常有戒心敷木葉於中庭夜聞款款有聲提短刀出捕卒七人前後來薄先生手刃一卒又斫一卒傷其額自貫喉而斃實嘉永三季十月一日而季四十有七矣義子東英承家孫長閑曾孫即長運也先生著述數十種皆藏于親戚遠藤養民家嘗賦詩云學術窮西域心胸吞五洲看吾業成後海內仰餘流先生歿後蘭學盛行醫術兵學爲之一變果如此詩之所言余昔寓羽倉簡堂氏與春山交得聞先生風先師淡窓先生又言吾門下士數千人一飯之間不忘憂國者其唯長英乎亦可以知其人也銘曰

眼高一世 氣吞五洲 中心耿耿 唯國之憂 彼讒人者 嫉賢如讎 忠言獲罪 永爲孤囚

見縱不返 豈爲無謀 譯述匪懈 死而始休 蠻社遭厄 曾幾何秋 四海之內 皆仰餘流

明治三十二季十月一日 肥前 谷口中秋敬撰
（書き下し文）

今茲己亥、奥州の人高野長運、其の曾祖瑞臯先生の行狀を齎らし来り、余に示して曰はく、「昔吾が曾祖、无妄の災ひに罹り、縲縲の中に在り。獄を出でて返らず。捕を拒みて殞す。幸ひに聖世に遭ひ、其の冤始めて雪がる。詔ありて正四位を贈られ、且つ金若干を賜はり建碑の費に充つ。吾れ同志と謀り、將に諸を不朽に伝へんとす。請ふ、子之に銘せよ」と。状を按ずるに、先生、名は長英、高野氏、瑞臯は其の号、奥州水沢の人なり。本姓は後藤氏。舅氏元齋の養ふ所と爲る。因りて其の姓を冒す。遠祖勝氏は、上杉景勝に事へて驍銘有り。子孫世邑主留守氏に仕ふ。祖父元端に至り、始めて医を以て業と爲す。父元齋又蘭方を講ず。先生、幼にして穎悟、書を読み敏むること甚し。年十七、江戸に遊び吉田長叔の門

に入る。長叔歿するに及び、西のかた長崎に遊び、力を蘭学に用ひ、独逸人施福多（シーボルト）に師事す。医術の外、兼ねて兵法農事を学ぶ。曾て松浦侯の爲に分離術を訳す。時人之を珍とす。文政九年七月、元齋歿す。先生訃を聞きて悲慟せり。已に謂らく、其の志を継述するに如かずと。十一年、施福多（シーボルト）国禁を犯し、之に従ふ者多く連坐す。先生、乃ち去りて熊本に遊び、日田に至り、広瀬氏の塾に入る。十二年、芸備京阪を歴遊し、遂に江戸に還り母氏を迎へ養ふ。刀圭の余暇に、医原枢要を著す。天保中、五穀登らず、飢疫相仍る。先生以為救荒の法は馬鈴薯、早蕎麥を種うるに在りと。乃ち二物考を著し、其の種を四方に頒ち、又避疫要法を著し、之を世に伝ふ。先生、大志有りて、医を以て家に名づくるを欲せず。恒に小関三英、鈴木春山、渡辺崋山、遠藤勝助等の諸名士と時務を講究す。時に人伝へ言ふ、「英人莫利遜（モリソン）、我が漂流を護送す、幕府將に其の至るを待ちて之を撃たんとす」と。先生、崋山と議りて曰はく、「彼好意を以て至らば、則ち我も亦好意を以て之を待たざるべからず。然らざれば、則ち禍ひ測るべからざるなり」と。即ち夢物語を著し、以て其の意を述ぶ。崋山も亦慎機論を著し、擊攘の非を痛論す。幕府の監察鳥居耀藏、深く蘭学を惡み、此等の書を見て、之を陥れんことを思ふ。会無人島を開墾せんと欲する者有り。或ひと耀藏に告げて曰はく、「蘭学の徒、妖言を著し、廟議を誇り、又無人島に航せんと欲す。其の志は蓋し外夷に通ずるに在り」と。耀藏、之を閩老水野忠邦に告ぐ。忠邦大いに驚き、先づ崋山を召して獄に下し、又蘭学を講ずる者を捕ふ。而して先生、官に抵りて自訴し、崋山の冤を白にせんと欲す。獄吏、訊鞠するも皆一の証左無し。乃ち二書中の語を援きて誣て誹謗と為し、崋山を錮にす。而して先生は則ち禁獄終身なり。已にして崋山屠腹して死す。先生、獄に在りて書を著し、春山に貽る。名づけて鳥の鳴音と曰ふ。又蛮社遭厄小記を著し、以て従弟茂木恭一郎に貽る。共に己の冤を弁じ、辞甚だ悲愴なり。弘化二年、獄火けたり。幕府の法、火將に獄に及ばんとすれば則ち囚を縦ち、三日を期して返らしむ。先生、此に由り獄を出で、乃ち意を決して返らず。門人内田生の家に匿る。潜行して母を省し後事を經紀す。又去りて江戸に入る。是の時、欧米の船舶我が海上を過り、辺警累りに至る。火技兵制は皆法を西洋に取り、而も洋書を読む者は、医家に過ぎず。医家は又兵書を解せず。先生乃ち三兵答古知幾を訳す。此の

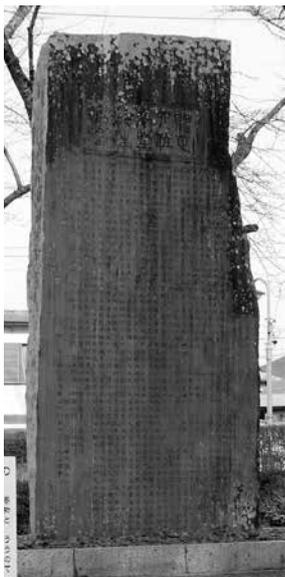
書専ら歩騎砲の三兵運用の術を論す。書の出るや兵家争ひて之を購ふ。人皆其の先生の手に成れるを疑ふ。是において幕府の偵察益厳し。乃ち去りて葦山の令江川英龍に依り、足柄郡に匿ること数月なり。又去りて宇和島侯に依り、侯の爲に築城鑄砲等の書を訳す。追跡愈急にして、侯、舍匿す能はず。先生、夜に逃れ、更て島津公子齋彬に依らんと欲す。西行して薩に入らんとするも、薩人納れず。乃ち硝石精を以て額を烙き貌を変じて、再び江戸に入る。宮野生に依り、又下総に匿る。久之して再び江戸に帰り、青山百人街に寓し、名を沢三伯と改む。先生、常に戒心有り、木葉を中庭に敷く。夜、藪藪として声有るを聞き、短刀を提げて出づ。捕卒七人、前後より来り薄る。先生、手づから一卒を刃し、又一卒を斫り其の額を傷つけ、自ら喉を貫きて斃る。実に嘉永三年十月一日にして年四十有七なり。義子東英、家を承ぐ。孫は長閑、曾孫は即ち長運なり。先生の著述数十種あり、皆親戚遠藤養民家に蔵す。嘗て詩を賦して云ふ、「學術西域を窮め、心胸五洲を呑む、看よ吾が業成るの後 海内餘流を仰がん」と。先生歿して後、蘭学盛行し、医術兵学之が爲に一変す。果たして此の詩の言ふ所の如し。余、昔羽倉簡堂氏に寓し、春山と交はり、先生の風を聞くを得たり。先師淡窓先生又言ふ、「吾が門下の士数千、一飯の間も国を憂ふるを忘れざる者は其れ唯長英か」と。亦以て其の人を知るべきなり。

銘に曰はく。眼は一世に高く、気は五洲を呑む。中心耿耿として、唯国を之れ憂ふ。彼の人を護する者、賢を嫉むこと讎の如し。忠言して罪を獲、永く孤囚と為る。縦れて返らず、豈に無謀と為さんや。訳述懈ること匪く、死して始めて休む。蛮社厄に遭ひ、曾て幾何の秋ぞ。四海の内、皆餘流を仰ぐ。

明治三十二年十月一日

肥前

谷口中秋敬撰



「贈正四位高野長英先生碑」
明治34年（1901）建立

I . 教育普及事業

1. 展示事業

(1) 常設展

会 期：平成25年 4月 1日（月）～ 6月11日（火）
 平成25年 8月 1日（木）～10月29日（火）
 平成25年12月16日（月）～ 2月14日（金）
 内 容：廣瀬淡窓と咸宜園をテーマに日田市が所蔵する咸宜園関係史料を中心に展示した。
 協 力：公益財団法人廣瀬資料館、光善寺、善教寺

(2) 企画展：「廣瀬淡窓旧宅と咸宜園」

会 期：平成25年6月13日（木）～7月30日（火）
 内 容：廣瀬淡窓の旧宅（豆田町）が新たに国の史跡として「廣瀬淡窓墓」に追加指定されたことを記念した企画である。私塾咸宜園の経営を支えた廣瀬家と咸宜園の関係を示す展示である。
 協 力：公益財団法人廣瀬資料館
 展示品：「廣瀬本家日記」（和本）
 「九桂草堂隨筆」（和本）
 「告諭」
 「塾則・咸宜園規約」
 「米錢出納控」
 「淡窓時代会計簿」 他

(3) 特別展：「九州の私塾と教育～咸宜園とその周辺～」

会 期：平成25年11月1日（金）～12月15日（日）
 内 容：江戸～明治期の九州に所在した私塾で、咸宜園に
 関係する私塾を中心に資料展示を行った。
 第1章 九州の儒学者と廣瀬淡窓の咸宜園
 第2章 九州の私塾と咸宜園教育の広がり
 第3章 淡窓の交流関係～九州儒学者とのネット
 ワーク～

刊 行：展示解説書『九州の私塾と教育～咸宜園とその周辺～』
 協 力：公益財団法人廣瀬資料館

公益財団法人亀陽文庫能古博物館
 唐澤博物館
 大分県立先哲史料館
 日出町教育委員会
 行橋市教育委員会
 求菩提資料館
 長崎市・シーボルト記念館
 多久市郷土資料館
 うきは市教育委員会
 水戸市教育委員会
 足利市教育委員会
 備前市教育委員会
 光善寺
 恒遠俊輔
 村上良春
 城戸淳一
 帆足雅晴
 賀来 敏（敬称略）

展示品：亀井昭陽著「烽山日記」
 廣瀬林外等「月旦録」
 「蔵春園入門簿」（私塾蔵春園）
 「旧点簿」（同上）
 恒遠醒窓著「恒遠醒窓日記」（同上）
 村上佛山著「佛山堂日記」（私塾水哉園）
 「入門姓名録」（同上）
 貫名海屋書「佛山堂」（同上）
 「水哉園月旦評（安政4年）」（同上）
 「帆足万里肖像」（私塾西庵精舎）
 賀来飛霞画「西庵精舎図」（同上）
 草場佩川著「佩川詩鈔」
 額田正等編『安政三十二家絶句』 他



(4) 企画展：「咸宜園とその門下生たち

—第9代塾主 諫山 菽村—

会 期：平成26年2月15日（土）～3月31日（月）
 内 容：咸宜園第9代塾主となった諫山菽村がテーマである。菽村の父・安民は廣瀬淡窓の初期の門人であるが、その後も菽村やその兄弟、子弟が咸宜園に入門している。諫山家から入門した人物の咸宜園入門簿や菽村の書幅、設立に多大な貢献をした「日田養育館」に関する資料などを展示する。

協 力：公益財団法人廣瀬資料館

展示品：入門簿（諫山安民、菽村、福七郎ほか）（和本）
 廣瀬淡窓著「淡窓日記」（和本）
 廣瀬淡窓著「懐旧樓筆記」（和本）
 『宜園百家詩』（和本）
 諫山菽村画「梅花図」（扁額）
 諫山菽村画「梅之図」（掛軸）
 松方正義書「日田養育館跡」
 養育館一件書類 他

2. 講座・講演会・イベント等

■ 講座

① 咸宜園平成門下生講座（全5回）対象：咸宜園平成門下生之会（現在、会員数約176名）参加者数 延べ346名

講座	開催日	講師と演題	場所	参加者
第1回	7月5日（金）	世界遺産登録推進講演会共催（公開講座） 「足利学校と近世日本の教育遺産」 元国立公文書館内閣文庫長 長澤孝三氏	パトリア日田 小ホール	101名
第2回	11月14日（木）	講義「淡窓・咸宜園の放学と遊山」 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊氏	咸宜園教育研究セ ンター研修室	39名
第3回	11月17日（日）	現地研修「淡窓・咸宜園の放学と遊山」 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊氏	羽野天満宮・黒男 神社など淡窓先生 が巡った市内各所	29名
第4回	12月23日（月・祝）	現地視察研修「沖ノ島・宗像関連遺産群」	福岡県宗像市	47名
第5回	平成26年2月23日 （日）	「咸宜園の日」講演会共催（公開講座） 「江戸の教育力」 東京学芸大学教授 大石 学氏 「咸宜園の世界文化遺産登録への取り組み」咸宜 園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊氏	パトリア日田 小ホール	130名



第3回 現地研修「淡窓・咸宜園の放学と遊山」



第4回 現地研修「沖ノ島・宗像関連遺産群」



第4回 現地研修「沖ノ島・宗像関連遺産群」



第5回 講演会「江戸の教育力」大石 学氏

②咸宜園教育研究センター定期講座（全5回）定員80名 参加者数 延べ231名

講座	開催日	講師と演題	場所	参加者
第1回	10月31日(木)	「亀井南冥と昭陽の生涯」 久留米大学准教授 吉田 洋一 氏	パトリア日田 スタジオ1	58名
第2回	11月7日(木)	「豊前国の私塾・蔵春園」 東筑紫短期大学非常勤講師 元求菩提資料館館長 恒遠 俊輔 氏	パトリア日田 スタジオ1	49名
第3回	11月21日(木)	「咸宜園教育の広がり～九州の私塾を中心として～」 咸宜園教育研究センター 吉田 博嗣 副主幹	パトリア日田 スタジオ1	43名
第4回	12月5日(木)	「草場佩川の生涯」 多久市文化財審議会委員 佐賀県漢詩連盟理事 徳田 武 氏	パトリア日田 スタジオ1	35名
第5回	12月15日(土)	「九州の私塾と教育～咸宜園研究史を振り返って～」 新潟大学教授 木村 政伸 氏	パトリア日田 スタジオ1 (公開講座)	46名
		鼎談「九州の私塾と教育～咸宜園とその周辺～」 新潟大学教授 木村政伸 氏 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤宗俊 氏 咸宜園教育研究センター研究員 深町浩一郎 氏		



第1回「亀井南冥と昭陽の生涯」 吉田 洋一 氏



第2回「豊前国の私塾・蔵春園」 恒遠 俊輔 氏



第4回「草場佩川の生涯」 武田 耕一 氏



鼎談「九州の私塾と教育～咸宜園とその周辺～」
左から深町 浩一郎 氏、木村 政伸 氏、後藤 宗俊 氏

③名誉館長講座（定員 30 名） 講師：咸宜園教育研究センター 名誉館長 後藤宗俊 氏（別府大学名誉教授）
 場所 咸宜園教育研究センター研修室 受講者数 延べ 290 名

	講 座	開 催 日	演 題	参加者
前 期 日 程	第 1 回	6 月 27 日（木）	奈良薬師寺・国宝東塔と大金堂の復元	40 名
	第 2 回	7 月 11 日（木）	韓国の世界遺産・古都慶州の仏国寺と石窟庵	35 名
	第 3 回	8 月 1 日（木）	平城宮跡・大極殿の復元と長屋王邸木簡の世界	38 名
	第 4 回	8 月 8 日（木）	東大寺・鎮護国家の祈りと大仏建立	41 名
後 期 日 程	第 1 回	9 月 5 日（木）	姫路城と日本の近世城郭	38 名
	第 2 回	9 月 19 日（木）	白川郷の合掌集落ーイエと家族の原像	32 名
	第 3 回	10 月 3 日（木）	安東河回（ハフェ）マウルと韓国の歴史的村落	32 名
	第 4 回	10 月 17 日（木）	室生寺五重塔～まとめ	34 名

■ 交流・教育普及事業

①第 13 回「立志の道を歩こう」

（熊本県山鹿市が主催する日田市との交流事業）

◇内 容：山鹿市（旧鹿本町）の小学生が地元出身の咸宜園
 門下生清浦奎吾（元内閣総理大臣）の歩いた道の
 りを辿る取組み

◇日 時：平成 25 年 7 月 24 日（水）
 午前 11 時～午後 1 時

◇参加団体：山鹿市 114 名、日田市 50 名

◇協力団体：淡窓会
 主要地方道日田鹿本線改修促進期成会
 JA 大分ひたスイカ部会

◇記 念 品：日田市より

- ①「淡窓先生ものがたり」
- ②「はがき・しおりと淡窓さんシールセット」



三隈川（日田市）の河川敷を歩く山鹿市の小学生



山鹿市の小学生が咸宜園に到着しました。「たんそ
 うさん」も皆を歓迎しています。



毎年恒例の秋風庵（淡窓の居宅）前での記念撮影

②夏休みは、咸宜園で学ぼう！

◇目的：自由研究等で咸宜園について学ぶことで、咸宜園教育に関心を持ってもらう機会を提供すると同時に、咸宜園を訪れてもらうきっかけとする。

◇期間：平成25年8月10日（土）～11日（日）

◇内容：「咸宜園たんけん」（咸宜園や長生園などを見学）や「古文書にふれる」（古文書の見方や戸袋の下張りをはがす作業）等を実施

◇会場：咸宜園教育研究センター研修室ほか



咸宜園教育研究センター展示公開室の見学



長生園（「廣瀬淡窓墓」など）の見学



ふすまや戸袋の下地から古文書を発見します



古文書のいろはを勉強中

3. 刊行事業

(1) 咸宜園教育研究センター研究紀要第3号

◇研究紀要

下関開業時代における岡研介の事績及び寄寓背景に関する考察
—本州西端の海港に見る文政末蘭医学の展開—

亀田 一邦

廣瀬淡窓における自省と養生について
—『自新録』『再新録』を中心に—

深町浩一郎

史料紹介 廣瀬家所蔵の「凶禮記」について（上）

吉田 博嗣

史料紹介 西村天因著『亀門の二廣』について（上）廣瀬淡窓編
咸宜園門下生略伝（二）

園田 大

溝田 直己

吉田 博嗣

原 千里

◇咸宜園教育研究センター年報（平成24年度）

◇咸宜園教育研究センター要覧



4. 訪問講座

日付	内容	申込団体	人数
平成25年 4月25日	「咸宜園・足利学校・弘道館の共通点…」	日隈公民館	20人
〃 5月9日	「咸宜園・世界遺産に向けて」	小迫辻原遺跡研究会	10人
〃 5月11日	「咸宜園と「うきは」の門下生たち」	うきは市郷土史会	75人
〃 5月17日	「咸宜園・足利学校・弘道館の共通点…」	日隈公民館	25人
〃 6月1日	「世界遺産登録推進および調査研究報告」	淡窓研究会	10人
〃 6月20日	「廣瀬淡窓がのこしたもの」	日田市中央公民館	106人
〃 6月29日	「廣瀬淡窓と咸宜園について」	日田市西有田婦人会	17人
〃 7月14日	「淡窓先生と咸宜園」	日田市朝日公民館	34人
〃 8月3日	「二代塾主廣瀬旭荘の研究状況について」	二松学舎大学	20人
〃 10月25日	「淡窓先生と咸宜園」	日田市三芳公民館	30人
〃 11月18日	「咸宜園 伊呂波歌から」	日田市老人福祉センター	25人
〃 11月24日	「廣瀬淡窓と咸宜園」	日田市西有田婦人会	10人
〃 12月2日	「咸宜園第2代塾主 廣瀬旭荘」	日田市老人福祉センター	25人
〃 12月10日	「淡窓先生と咸宜園」	日田市大鶴公民館	20人
〃 12月26日	「咸宜園教育の広がり」	日田市高瀬公民館	30人
平成26年 1月6日	「淡窓の人物像」	日田市老人福祉センター	25人
〃 1月20日	「咸宜園教育の広がり」	日田市高瀬公民館	41人
〃 1月23日	「淡窓先生と咸宜園」	日田市三芳公民館	15人
〃 1月26日	「九州の私塾と教育」	福岡県朝倉教育クラブ	23人
〃 2月17日	「世界遺産登録への取り組み」	日田市老人福祉センター	25人
〃 3月27日	「廣瀬淡窓と咸宜園」	福岡大学付属大濠中学校	160人

※計21回 746名

5. その他の取り組み

(1) 第17回「平成淡窓祭」

淡窓先生の遺徳をしのぶ平成淡窓祭が第17回目を迎えた。主催の淡窓会は廣瀬淡窓を顕彰するため、昭和27年にその前身となる組織を発足。現在の会員数は約350名を数える。11月1日は淡窓先生の命日。

日時：平成25年11月1日（金）午前10時～正午

会場：史跡咸宜園跡（秋風庵にて）

主催：淡窓会

(2) 国史跡「廣瀬淡窓旧宅及び墓」指定記念事業

平成25年3月27日、これまで国の史跡指定を受けていた「廣瀬淡窓墓」に廣瀬淡窓の旧宅が加わり追加指定された。また、その指定名称も併せて「廣瀬淡窓旧宅及び墓」に変更されたものである。所有者の廣瀬本家では、公益財団法人廣瀬資料館と協力して各種展示会やシンポジウムを行った。以下はその概要である。

1. 「廣瀬淡窓旧宅展」

会期：平成25年6月13日（木）～平成26年1月31日（金）

場所：公益財団法人廣瀬資料館

2. 「淡窓生家と廣瀬家展」（企画巡回展）

会期：平成25年6月13日（木）～平成26年1月26日（日）

場所：日田市民文化会館ギャラリー、宇佐市民図書館、別府大学付属博物館

iichiko 総合文化センター、大分空港、豊後高田市立図書館、九州国立博物館（左記の4箇所はパネル展示のみ）

3. 指定記念講演会・シンポジウム

会期：平成25年6月13日（木）

場所：日田市民文化会館小ホール

Ⅱ．調査研究事業

調査研究について

咸宜園教育研究センターでは、咸宜園や廣瀬淡窓等に関する調査研究及び関係資料の収集を行っている。以下にその概要を報告する。

(1) 廣瀬淡窓著述史料に基づく調査研究

廣瀬淡窓の「淡窓日記」等を市民団体と協働で翻刻作業を行っている。平成24年度からの継続事業。

実施内容：「淡窓日記」弘化5年(1848)月から嘉永3年(1850)月まで作業終了

委託団体：漢文日記を読む会(代表：野田高巳氏)

担当職員：深町浩一郎

(2) 門下生に関する情報の収集

1. 恒遠醒窓(門下生名：恒遠和市)に関する調査

場所：福岡県豊前市

期日：8月27日(火)

調査者：吉田博嗣・深町浩一郎

指導：鈴木理恵教授(当センター専門委員会委員)

内容：恒遠醒窓と私塾「咸春園」に関する調査で、塾の入門簿や日記の記録写真撮影を行ったほか、醒窓などが愛用した文物を調査した。

2. 恵学(門下生名：恵学)に関する調査

場所：大阪府松原市 最勝寺

期日：8月29日(木)

調査者：溝田直己

協力者：西田孝司(松原市文化財保護審議会)

内容：最勝寺の恵学は、淡窓の畿内から学びに来た最初の門下生である。大婦(卒塾)の際には淡窓が恵学のために漢詩を作り、淡窓の詩集『遠思楼詩鈔』に収載された。帰郷した恵学は畿内の浄土真宗僧を中心に咸宜園への入門を勧め自らが紹介者となったほか、淡窓の弟・旭荘が堺や大坂で開塾した際にも大いにこれを援けた。今回、最勝寺所蔵の淡窓書簡や漢詩の掛軸(新出史料)などが確認された。

3. 楠本端山(門下生名：楠本丈大夫)

楠本碩水(門下生名：佐々謙三郎)に関する調査

場所：長崎県佐世保市「楠本端山旧宅及び楠本家墓地土墳群」(長崎県指定史跡)



楠本端山旧宅(長崎県佐世保市)

期日：9月10日(火)

調査者：吉田

内容：楠本端山と碩水は平戸藩儒として活躍した人物で晩年に2人は帰郷して私塾「鳳鳴書院」を開いた。講堂(塾舎)は現存しないが、門下生と講堂が写る古写真が残るほか、旧宅には当時使用した典籍類が今も残る。

4. 芳川笛村(門下生名：吉川吉太郎)に関する調査

場所：千葉県松戸市

期日：12月8日(日)

調査者：溝田

内容：廣瀬林外の門下生であった芳川笛村(画家)の子孫宅で、昨年度確認した史料の目録整理作業を進めた。

5. 廣瀬旭荘・廣瀬敬四郎(旭荘の四男)

場所：東京都杉並区・咸宜園教育研究センター

期日：12月9日(土)

調査者：溝田

内容：昨年度、子孫から当センターに寄託された旭荘関係資料については目録作成・写真撮影を行っているが新たに資料(古写真など)が見つかったとの連絡を受けて12月9日に追加調査を行った。

6. 高野長英(入門簿なし)

場所：岩手県奥州市 高野長英記念館ほか

期日：平成26年3月28日(金)

調査者：吉田・深町

内容：長英関係の著述資料や記念館の敷地内に立碑する記念碑の銘について調査を行ったほか、生家跡の現地確認を実施した。

7. 菊池祐義(釋 祐音)

場所：青森県つがる市木造町 慶応寺ほか

期日：平成26年3月29日(土)

調査者：吉田・深町

内容：慶応寺境内の石碑(廣瀬青邨の撰文)や門下生に関する文献調査を実施した。



菊池祐義の碑(青森県つがる市)

(3) 教育遺産の調査（私塾を中心に資料を収集）

主に北部九州の私塾等の調査を実施した。

1. 村上佛山「水哉園」（福岡県指定史跡）
場 所：福岡県行橋市
時 期：7月26日（金）
調査者：鈴木理恵教授（前出）・吉田・深町
内 容：咸宜園の影響を受けたとされる私塾「水哉園」に関する史料調査。主に入門簿や日記の記録写真撮影を行った。
2. 帆足万里「西庵精舎」
場 所：速見郡日出町（私塾西庵精舎跡、帆足万里墓、町立万里図書館）
時 期：7月27日（土）
調査者：鈴木理恵教授・吉田・深町
内 容：私塾「西庵精舎」に関する史料調査。塾関係の資料は少なかったが万里の文机や書幅類、賀来飛霞が描いた精緻な塾の全体図などを確認した。
3. 恒遠醒窓「蔵春園」（福岡県指定史跡）
場 所：福岡県豊前市
時 期：8月27日（火）
調査者：鈴木理恵教授・吉田・深町
内 容：咸宜園門下生が文政7年に創めた私塾「蔵春園」に関する史料調査。主に入門簿や日記の記録写真撮影を行った。
4. 楠本端山・楠本碩水「鳳鳴書院」
場 所：長崎県佐世保市
「楠本端山旧宅及び楠本家墓地土墳群」（長崎県指定史跡）
時 期：9月10日（火）
調査者：吉田
協力者：石造文化財研究所代表 松原典明 氏
内 容：咸宜園門下生が明治14年に開いた私塾「鳳鳴書院」。講堂（塾舎）は現存しないが、現地近くに復元建物が建っている。当初の建物に係る資料としては古写真や図面などがあり、現在、端山旧宅には当時使用した典籍類が残る。また、九州では稀な儒式墓とされる楠本家墓地も実見した。
5. 草場佩川と「東原庵舎」
場 所：佐賀県多久市 多久市歴史民俗資料館
時 期：9月11日（水）
調査者：吉田
内 容：多久聖廟の側には元禄12年（1699）に創設した邑校「東原庵舎」（公立）があった。淡窓とも交流した草場佩川は最後の教授で、現在も庵舎の規約や校舎の図面など豊富な資料が多久市歴史民俗資料館に残る。

(4) 外部研究機関との共同調査

1. 福岡大学（高橋昌彦教授）

業 務 名： 「廣瀬淡窓に関わる史料の所在調査及び確認調査」

調 査 先：北九州市立図書館、国立国会図書館、大村市立史料館、大村市立図書館、長崎歴史文化博物館、国立国会図書館関西館、大阪府立中之島図書館

調査目的：廣瀬淡窓や咸宜園の歴代塾主、またその門人等に関する書簡や書幅等の史料のうち、日田市が把握していない大学等の調査研究機関の所蔵資料を当センター専門委員会委員で、近世文学が専門の高橋昌彦教授（福岡大学）に調査を委託した。この調査を通じて、咸宜園教育の調査研究や展示公開に活かし、広く咸宜園のことを周知する基礎とするため。

調査成果：これまで当市が把握していなかった多くの史料所在の確認と写真データの提供を受けた。今回の調査により、北九州市立図書館からは、『遠思楼詩鈔』初編・二編、初編・二編の抄録本（写）、『義府』、『析玄』、『約言』を確認した。また国立国会図書館からは、「梅墩詩鈔拾稿」（文久三年写）、『迂言』「自身録」（明遠館叢書所収）の書誌調査を行った。大村市立史料館では、「梅墩詩鈔」初編（版本写し）・「遠思楼詩鈔」初～三編（明治期後印）・「廣瀬淡窓漢詩碑拓本」（休道詩）・「五教館治振軒御創建」の調査を行った。長崎歴史博物館では、「淡窓先生西遊記」（懐旧楼筆記より長崎・大村関係の記述を抜書したもの）、『遠思楼詩鈔』初編・二編（明治以降の後印）の書誌調査を行った。そして大阪府立中之島図書館では、大阪府が所蔵する古典籍から咸宜園関係の把握を行った。今後も咸宜園歴代塾主を始めとする関係史料の収集に努める。

2. 別府大学文化財研究所（中山昭則教授）

業 務 名： 「廣瀬旭荘日記「日間瑣事備忘」に関する歴史地理的研究について」

現地調査：①大分県日田市・玖珠郡玖珠町
②山口県柳井市・上関町、広島県呉市、福山市鞆、香川県多度津町・琴平町

調査期間：①9月17日（火）

②3月8日（土）～11日（火）

事業内容：全国各地を遊歴した旭荘の事績を明らかにし、今後、出版物とする計画である（平成29年度印刷予定）。現地調査は、主に旭荘の日記「日間瑣事備忘」から旅の記事を抜き出し、紀行に関する部分を整理するとともに刊行に適したルートの選定や今後の出版物の内容および構成の検討を行った。

Ⅲ．史料収集事業

1. 購入史料

①廣瀬淡窓書 七言絶句「鶴」（七言絶句二行書）

- (1) 書幅 / 紙本墨書
- (2) 廣瀬淡窓の漢詩集である『遠思楼詩鈔』巻上に収録された「鶴」である。同作品は淡窓没後 110 周年の時に発行された『淡窓遺墨撰集』にも掲載がある（『淡窓遺墨撰集』13 頁、1966 年 6 月 廣瀬淡窓遺墨刊行会）。



(印)
朝遊雲水暮兼霞、島嶼洲汀總我家、但使此心此
無寵辱、何妨一上大夫車 詠鶴 淡窓(印)(印)

②廣瀬淡窓書 「醒齋」（五言絶句二行書）

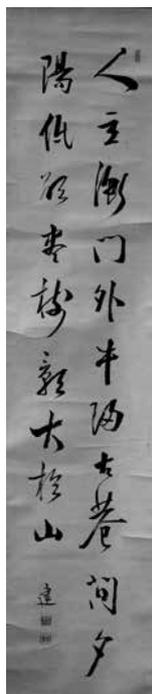
- (1) 書幅 / 紙本墨書
- (2) 『遠思楼詩鈔』巻下に収録された「醒齋」である。同作品は淡窓没後 110 周年の時に発行された『淡窓遺墨撰集』にも掲載がある（『淡窓遺墨撰集』50 頁、1966 年 6 月 廣瀬淡窓遺墨刊行会）。



(印)
夢裏逢吾友、相携花下迷、醒來
見孤蝶、飛在小欄西 淡窓(印)(印)

③廣瀬淡窓書 「即景」（五言絶句二行書）

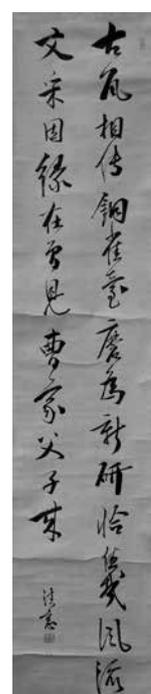
- (1) 書幅 / 紙本墨書
- (2) 『遠思楼詩鈔』第二編下に収録された「即景」である。同作品は淡窓没後 110 周年の時に発行された『淡窓遺墨撰集』にも掲載がある（『淡窓遺墨撰集』61 頁、1966 年 6 月 廣瀬淡窓遺墨刊行会）。



(印)
人立衛門外、牛歸古巷間、夕
陽低欲盡、樹影大於山、建(印)(印)

④廣瀬淡窓書 「赤司厚謙銅雀古瓦研」（七言絶句二行書）

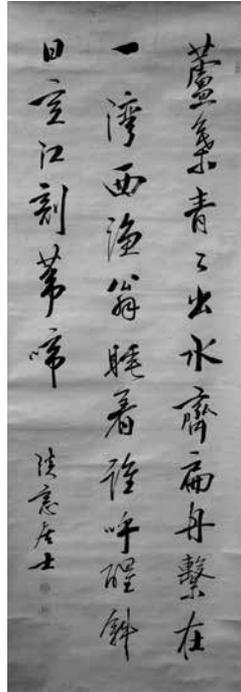
- (1) 書幅 / 紙本墨書
- (2) 『遠思楼詩鈔』第二編下に収録された「赤司厚謙銅雀古瓦研」である。同作品は淡窓没後 110 周年の時に発行された『淡窓遺墨撰集』にも掲載がある（『淡窓遺墨撰集』66 頁、1966 年 6 月 廣瀬淡窓遺墨刊行会）。



(印)
古瓦相傳銅雀臺、磨為新研恰佳哉、風流
文采因緣在、曾見曹家父子來、淡窓(印)(印)

⑤廣瀬淡窓書「題畫」（七言絶句三行書）

- (1) 書幅 / 紙本墨書
- (2) 廣瀬淡窓の漢詩集である『遠思樓詩鈔』第二編下に収録された「題畫」である。同作品は淡窓没後 110 周年の時に発行された『淡窓遺墨撰集』にも掲載がある（『淡窓遺墨撰集』67 頁、1966 年 6 月 廣瀬淡窓遺墨刊行会）。



(印)
蘆葉青青出水齋、扁舟繫在
一湾西、漁翁睡著誰呼醒、斜
日空江割葦啼、淡窓居士 (印) (印)

⑥廣瀬淡窓書「逸雲畫山水」（七言絶句三行書）

- (1) 書幅 / 紙本墨書
- (2) 廣瀬淡窓の語録や詩文を取めた『淡窓小品』下に収録されている「逸雲畫山水」。『淡窓小品』は『遠思樓詩鈔』に洩れた漢詩や刊行以降に詠まれたものがみえる。同作品は淡窓没後 110 周年の時に発行された『淡窓遺墨撰集』にも掲載がある（『淡窓遺墨撰集』38 頁、1966 年 6 月 廣瀬淡窓遺墨刊行会）。



(印)
青山繚繞水平鋪、點々風帆
似泛鳧、憶得往年瓊浦路、
玖城東畔望琴海
建 (印) (印)

⑦廣瀬旭莊書畫贊幅

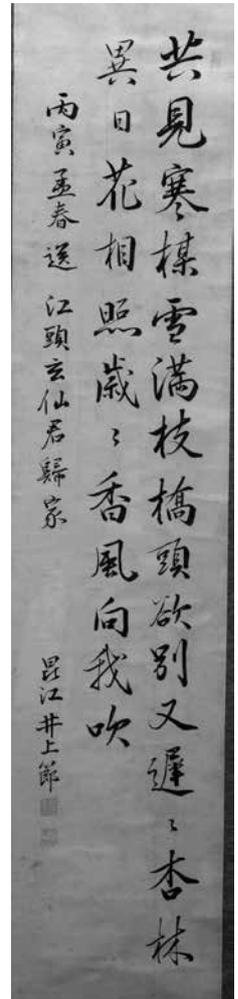
- (1) 書幅 / 紙本墨書
- (2) 咸宜園の第 2 代塾主で、淡窓の末弟である廣瀬旭莊の畫贊幅。
- (3) 旭莊の書畫幅は数点確認されているが、めずらしいもの。



(印)
疎柳靜苑、夕下長江路、不見
亭佇人、蕭々烟景暮 旭莊 (印) (印)

⑧井上昆江書七言絶句 漢詩幅

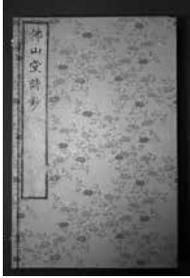
- (七言絶句二行書)
- (1) 書幅 / 紙本墨書
- (2) 井上昆江は父・直次郎のと同様に咸宜園で学び、九級まで進んだ人物である。この漢詩は井上親子が開いた『柳園塾』の門下生と思われる江頭玄仙のために丙寅孟春（慶応 2 年 1 月か）に贈ったものと考えられる。



(印)
共見寒樛雪滿枝、橋頭欲別又遲々、杏林
異日花相照、歲々香風向我吹
丙寅孟春送江頭玄仙君歸家 昆江井上節 (印) (印)

⑨ 仏山堂詩鈔初編

- (1) 和本 / 3 卷 3 冊揃
- (2) 淡窓と交流があり、咸宜園教育の影響を受けて自らも私塾を開いた村上佛山の漢詩集。
- (3) 村上佛山の代表的著作である『佛山堂詩鈔』には当代の有名な文人らが序をよせており、篠崎小竹・梁川星巖・廣瀬旭荘などの名が見られる。



⑩ 浮羽先哲遺芳

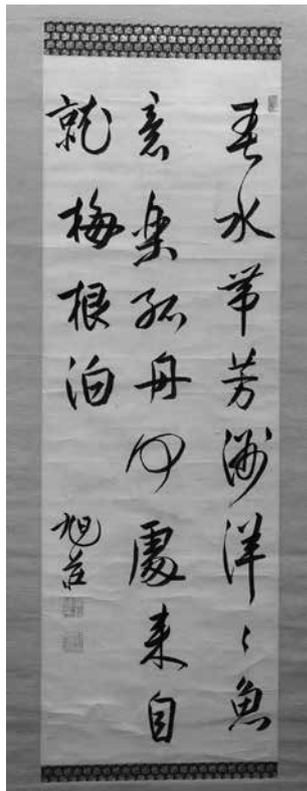
- (1) 和本 / 2 卷 2 冊揃
- (2) 1 卷 11 名、大正 4 年(1915)発行。2 卷 15 名。大正 8 年(1919)発行。浮羽地域の先哲が掲載されたもので、その中には咸宜園出身者や所縁のあるものが多数掲載されており、咸宜園にとって貴重な資料である。



2. 寄贈史料

① 廣瀬旭荘書 「題畫次可亭韻」(五言絶句三行書)

- (1) 書幅 / 紙本墨書
- (2) 咸宜園の第 2 代塾主で、淡窓の末弟である廣瀬旭荘の書幅。旭荘の漢詩集『梅墩詩鈔』四編卷之三に掲載されている「題畫次可亭韻」である。嘉永 4 年(1851)の春頃に詠まれたものと考えられる。



(印)
 春水帶芳洲、
 意樂、弧舟何處來、
 就梅根泊、
 旭荘(印)
 自(印)

3. 寄贈図書

- ・江戸時代後期天領日田における経世学の形成
西江 錦史郎
- ・日田街道—その歴史と美—展 筑紫野市歴史博物館
- ・近世文芸 研究と評論 第八十五号 山形 彩美
- ・精選古典B 漢文編 公益財団法人廣瀬資料館
- ・国土館大学経済研紀要 第24号 西江 錦史郎
- ・国土館大学経済研紀要 第25号 西江 錦史郎
- ・吉田松陰と塾生—松陰の塾生についての記録集—
松陰神社
- ・天秤宮 三十九号 原 千里
- ・「長澤文庫」解題目録 國立臺灣大學 高橋 昌彦
- ・「近世日本の教育遺産」実施報告書 足利市教育委員会
- ・儒学者 谷口藍田 熊本 一規
- ・少年物語 渡辺 崋山 田原市
- ・大分県立歴史博物館 総合案内 大分県立歴史博物館
- ・養父市まちの文化財 養父市教育委員会
- ・足利市文化財愛護協会四十五周年記念誌 廣瀬 貞雄
- ・渥美窯 国宝を生んだその美と技 田原市
- ・複製「一掃百態」図 渡辺崋山筆 田原市
- ・本居宣長の不思議 本居宣長記念館
- ・多久の肥前狛犬 開館三十周年記念特別企画展 多久市
- ・東本願寺中国布教の研究 川邊 雄大
- ・原采蘋伝—日本唯一の閨秀詩人— 明治大学 徳田武
- ・海 第二期 第10号 原 千里
- ・海 第二期 第11号 原 千里
- ・広瀬旭荘の咸宜園蔵書収集の発想について - 柴村
「肅舎義書目録序」を手がかりとして - 西江 錦史郎
- ・敬天 四十号～四十一号 淡窓会
- ・竹田市立歴史資料館年報第12号 竹田市
- ・新編古典B 公益財団法人 廣瀬資料館
- ・「廣瀬淡窓旧宅及び墓」ガイド 公益財団法人 廣瀬資料館
- ・大友宗麟 教師用指導書 大分市教育委員会
- ・府内から世界へ 大友宗麟 大分市教育委員会
- ・収蔵史料目録 1～7 大分県立先哲史料館
- ・平成24年度 秋季企画
『江戸への旅—年貢米と上乗人—』
上乗人が記録した100日を超える旅 大分県立先哲史料館
- ・史料館研究紀要 第一七号 大分県立先哲史料館
- ・史料館研究紀要 第一八号 大分県立先哲史料館
- ・閑谷学校研究 第17号 特別史跡旧閑谷学校顕
- ・嚶鳴館遺稿注釈文人編② 愛知県東海市教育委員会
- ・適塾 第46号 大阪大学適塾記念センター
- ・三毛の文化 第49号 川島 真人
- ・三毛の文化 30周年記念合本 川島 真人
- ・私たちの道徳 中学校 文部科学省
- ・資料にみる 近世教育の発展と展開 木村 政信
- ・地方税 11月号 一般財団法人 地方財務協会
- ・九州の蘭学 武雄の蘭学 大分大学 鳥井裕美子
- ・久留米大学 比較文化研究 第42・43輯
久留米大学 吉田洋一
- ・廟山文庫蔵書目録 多久市
- ・鳳岡林先生全集 第一巻～四巻 明治大学 徳田武
- ・藤樹先生 安曇川町教育委員会
- ・西日本文化 通巻464号 原 千里
- ・広島県立歴史博物館 研究紀要 第15号 久下 実
- ・福山の歴史 放浪の大名・水野勝成(下巻) 津川 淳
- ・神辺の歴史 津川 淳
- ・日本漢文学研究 第8号 川邊 雄大
- ・雙松通説 vol.17 川邊 雄大
- ・軻の津 中村家文書目録I～VII 戸田 和吉
- ・軻の津 中村家文書拾遺目録 戸田 和吉
- ・幕府のふみくら 内閣文庫のはなし 長澤 孝三
- ・泊園文庫印譜集 泊園書院資料集成2 吾妻 重二
- ・浮羽の教育史点描 袋野 富男
- ・とちぎメディカルヒストリー 内山 謙治
- ・中津地方文化財協議会 会報 第49号 川島 真人
- ・廣瀬旭荘研究(Ⅲ) - 廣瀬旭荘と僧月性 - 西江 錦史郎
- ・広島県立歴史博物館資料目録六 黄葉夕陽文庫
目録V 絵図・書跡篇(1) 広島県立歴史博物館
- ・広島県立歴史博物館資料目録七 黄葉夕陽文庫
目録VI 絵図・書跡篇(2) 広島県立歴史博物館
- ・豊後國山香郷の調査 資料編1 大分県立歴史博物館
大分県立歴史博物館
- ・大分県立歴史博物館年報2012 大分県立歴史博物館
- ・平成24年度一般財団法人北海道開拓の村 年報
一般財団法人北海道開拓の村
- ・広島県立歴史博物館資料目録二 黄葉夕陽文庫
目録 書籍篇 広島県立歴史博物館
- ・広島県立歴史博物館資料目録三 黄葉夕陽文庫
目録 木版 広島県立歴史博物館
- ・広島県立歴史博物館資料目録四 黄葉夕陽文庫
目録Ⅲ 日記・草稿篇 広島県立歴史博物館
- ・広島県立歴史博物館資料目録五 黄葉夕陽文庫
目録Ⅳ 地図絵図・記録篇 広島県立歴史博物館

4. 咸宜園関係参考文献

- ・『淡窓の申聞書 旭荘の御請書』廣瀬貞治 1923
- ・『贈従五位廣瀬旭荘先生小傳』廣瀬貞治 1924
- ・『池田人物誌』下 稲束 猛、吉田鋭雄 太陽日報社 1924
- ・広瀬淡窓と広瀬旭荘『西南文運史論』武藤長平 岡書院 1926
- ・『廣瀬家一門の光彩—淡窓先生を中心として—』大分縣日田郡教育會 1934
- ・教賢広瀬淡窓『教育学研究』3巻8—10 乙竹岩造 日本教育学会 1935
- ・淡窓先生と陰陽録『改修和語陰陽録』袁了凡 四方文吉 1935
- ・教育家としての広瀬淡窓『日本諸学振興委員会研究報告』第1篇 小西重直 文部省教学局 内閣印刷局 1937
- ・蛭雪事業鈔『伝記』5-1 森鉄三 伝記学会 1938
- ・広瀬淡窓を繰り返す『教育学論集』第3輯 小西重直 日本教育学会 新紀元社 1944
- ・「廣瀬旭荘の講學と尊皇思想」『大阪の先賢と史蹟』第三輯 長 壽吉 大阪出版堂 1944
- ・広瀬淡窓における敬天説の成立『人文社会科学研究報告』1 井上源吾 長崎大学学芸学部 1951
- ・広瀬淡窓に於ける内省と実践について『西日本史学』11 井上源吾 西日本史学会 1952
- ・遠思楼詩鈔〔広瀬淡窓〕—近世詩抄その1『学苑』152 吉田澄夫 昭和女子大学近代文化研究所 1953
- ・広瀬淡窓の思想についての諸説批判『人文社会科学研究報告』3 井上源吾 長崎大学学芸学部 1953
- ・広瀬淡窓の教育意見『人文社会科学研究報告』3 井上源吾 長崎大学学芸学部 1953
- ・広瀬淡窓の教育意見『人文社会科学研究報告』4 井上源吾 長崎大学学芸学部 1954
- ・広瀬淡窓の教育思想、とくに訓育とその方法について『人文社会科学研究報告』4 井上源吾 長崎大学学芸学部 1954
- ・広瀬淡窓の教育管見、とくに教授の方法について『人文社会科学研究報告』4 井上源吾 長崎大学学芸学部 1954
- ・広瀬淡窓の経済思想『経済學論究』8-3 東晋太郎 関西学院大学 1954
- ・広瀬淡窓の禍福応報論について『支那学研究』12 工藤豊彦 広島支那学会 1955
- ・広瀬淡窓の老荘学について『大分大学学芸学部研究紀要』4 工藤豊彦 大分大学学芸学部 1955
- ・日向と咸宜園『宮崎大学学芸学部研究時報』第1巻第3号 黒江一郎 宮崎大学学芸学部 1957
- ・黒江一郎「日間瑣事備忘録」に見える旭荘の詩名と二三の日向人『宮崎大学学芸学部紀要』第4号 宮崎大学学芸学部 1958
- ・武谷祐之著「南柯一夢」『九州文化史研究所紀要』10 井上忠 九州大学付属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門 1963
- ・「迂言」小考—その学制を中心として『弘前大学人文社会』第28号 教育・心理学篇 前野喜代治 弘前大学人文社会学会 1963
- ・広瀬淡窓の教育精神『芸文』第4巻第1号 大久保勇市 近畿大学文科学会 1963
- ・『教壇廣瀬淡窓と廣瀬八賢』廣瀬八賢顕彰会 1965
- ・大谷篤蔵「広瀬旭荘の「追思録」」『文学』34巻3号 岩波書店 1966
- ・広瀬淡窓の詩論『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』17 松下忠 和歌山大学教育学部 1967
- ・咸宜園覚書—九州紀行より『斯文』47 新田大作 欺文会 1967
- ・広瀬淡窓の老子観（人間性研究の一環として）-1-『芸文』第7巻2号 大久保勇市 近畿大学文科学会 1967
- ・広瀬淡窓の老子観（人間性研究の一環として）-2-『芸文』第8巻1号 大久保勇市 近畿大学文科学会 1967
- ・広瀬淡窓の老子観（人間性研究の一環として）-3-『芸文』第8巻2号 大久保勇市 近畿大学文科学会 1968
- ・広瀬淡窓と高野長英『教育学雑誌』2号 松月秀雄 日本大学教育学会 1968
- ・萬善簿 広瀬淡窓先生の修練ぶり『先覚と共に』第1集 青木繁 農林叢書刊行会 1968
- ・淡窓・長英をかばう『日田文化』第11号 中島市三郎 日田市教育委員会 1968
- ・広瀬淡窓門下萍華上人の話『日田文化』第12号 古川克己 日田市教育委員会 1969
- ・塩谷大四郎正義公の生誕二百年を迎えて『日田文化』第12号 中島市三郎 日田市教育委員会 1969
- ・広瀬淡窓の易理観—人間性研究の一環として〔付「義府（放言）」（天保12年稿）翻刻〕『近畿大学教養部研究紀要』1号 大久保勇市 近畿大学教養部 1969
- ・小倉落城〔慶応2年〕と日田・咸宜園—「林外日記」を中心として『九州大学教育学部紀要 教育学部門』15 井上義巳 九州大学教育学部 1969
- ・広瀬淡窓の思想と教育『日本歴史』第264号 青野春水 吉川弘文館 1970
- ・咸宜園をめぐる政治情勢—咸宜園と日田代官府との関係（近世日田とその周辺地域の総合的研究）『九州文化史研究所紀要』15 井上義巳 九州大学付属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門 1970
- ・咸宜園最後の講師勝屋明浜先生『大分県地方史』第56号 高倉芳男 大分県地方史研究会 1970
- ・広瀬淡窓と咸宜園『歴史残花』第4号 広瀬正雄他 時事通信社 1971
- ・豊後日田の広瀬家史料の調査によせて（研究余録）『日本歴史』第272号 杉本勲 吉川弘文館 1971
- ・咸宜園の財政—塾主の会計記録より見た『日本歴史』第276号 井上義巳 吉川弘文館 1971
- ・幕末経済論の一研究—経世家としての広瀬淡窓『三田学会雑誌』64巻8号 島崎隆夫 慶応義塾大学経済学会 1971
- ・井上義巳「咸宜園の財政」『日本歴史』5月号

- 第 276 号 吉川弘文館 1971
- ・幕末経済論の一研究—経世家としての広瀬淡窓『三田学会雑誌』64 卷 8 号 島崎隆夫 慶応義塾大学経済学会 1971
 - ・咸宜園と洋学『史淵』第 105・106 合輯 杉本勲 九州大学大学院人文科学研究院 1971
 - ・井上義巳「咸宜園の財政」『日本歴史』5 月号 第 276 号 吉川弘文館 1971
 - ・巻端淳印「広瀬旭荘の来越と越中咸宜園の流れ」『富山商船高等専門学校研究集録』4 富山商船高等専門学校 1971
 - ・広瀬淡窓の儒林評とその道統『近畿大学教養部研究紀要』4 卷 3 号 大久保勇市 近畿大学教養部 1973
 - ・万善簿のねらい〔広瀬淡窓〕『近畿大学教養部研究紀要』5 卷 2 号 大久保勇市 近畿大学教養部 1973
 - ・咸宜園入門者についての研究（青山学院創立 100 周年記念論文集）『青山学院大学文学部紀要』16 号 井上義巳 青山学院大学文学部 1974
 - ・田中佩刀「詩人廣瀬旭莊論」『明治大学教養論集 84 号』明治大学教養論集刊行会 1974
 - ・杉本 勲「広瀬旭荘の海外認識と海防思想」『対外関係と政治文化』第三 政治文化 近世・近代編 森克己博士古稀記念会編 吉川弘文館 1974
 - ・適材適育—広瀬淡窓とその教育思想『日本及日本人』1548 号 松井康秀 J&J コーポレーション 1978
 - ・広瀬淡窓について『東洋研究』49 号（講演）広瀬正雄 大東文化大学東洋研究所 1978
 - ・小石元瑞と広瀬淡窓の書簡『混沌』第 5 号 平野翠 中尾松泉堂書店 1978
 - ・近世教育思想研究 -3- 広瀬淡窓の教育思想『大分大学教育学部研究紀要 教育科学』5 卷 4 号 鹿毛基生 大分大学教育学部 1979
 - ・幕末私塾の学規の研究—咸宜園を中心として『教育研究』23 関山邦宏 青山学院大学教育学会 1979
 - ・近世私塾の就学形態—淡窓日録の分析を中心に『人文』27 海原徹 京都大学教養部 1981
 - ・広瀬淡窓の敬天説とその教育方法理論『IBU 四天王寺国際仏教大学文学部紀要』14 号 井内嘉美 四天王寺国際仏教大学 1981
 - ・『日本人の道德思想』[内容]：福沢以前の「天」の思想について（広瀬淡窓）壺井秀生 文化総合出版 1981
 - ・広瀬淡窓の不安—その自己と超越的なもの『季刊日本思想史』19 号 高橋文博 ぺりかん社 1983
 - ・『約言』の思想について『季刊日本思想史』19 号 工藤豊彦 ぺりかん社 1983
 - ・広瀬淡窓の教育思想『季刊日本思想史』19 号 関山邦宏 ぺりかん社 1983
 - ・教育理念としての「敬天」—『約言』『約言或問』をめぐって『季刊日本思想史』19 号 田中加代 ぺりかん社 1983
 - ・天命と人情—広瀬淡窓の敬天論をめぐって『季刊日本思想史』19 号 藤本雅彦 ぺりかん社 1983
 - ・広瀬淡窓の教育観—「教育」の語を中心に『季刊日本思想史』19 号 藤原敬子 ぺりかん社 1983
 - ・『万善簿』と『陰陽録』『季刊日本思想史』19 号 古川哲史 ぺりかん社 1983
 - ・広瀬淡窓の倫理想『倫理学紀要』1 輯 黒住真 東京大学文学部 1984
 - ・広瀬淡窓の生涯とその時代区分『日本女子大学紀要 文学部』34 田中加代 日本女子大学 1984
 - ・近世塾の近代化過程の研究—咸宜園と慶応義塾を例として - 前 - 近世塾の諸問題『論叢』（玉川大学文学部紀要）25 多田建次 玉川大学 1984
 - ・梅溪 昇『緒方洪庵と適塾生』—「日間瑣事備忘」にみえる— 思文閣 1984
 - ・近世塾の近代化過程の研究—咸宜園と慶応義塾を例として - 後 - 家塾から義塾へ『論叢』（玉川大学文学部紀要）26 多田建次 玉川大学 1985
 - ・広瀬淡窓研究史試論『国学院雑誌』第 86 卷第 5 号 三澤勝己 国学院大学総合企画部 1985
 - ・広瀬淡窓の社会思想—『迂言』を中心に—『邂逅』3 号 山崎謹哉 岡山大学倫理学会 1985
 - ・近世広島における私塾教育の研究—咸宜園の系譜—（1）『芸備地方史研究』150・151 号 鈴木理恵 芸備地方史研究会 1985
 - ・近世広島における私塾教育の研究—咸宜園の系譜—（2）『芸備地方史研究』152 号 鈴木理恵 芸備地方史研究会 1985・広瀬淡窓の府内紀行『大分県地方史』第 120 号 甲斐素純 大分県地方史研究会 1985
 - ・咸宜園の教育（伝統を活かした学校教育）『学校教育研究所年報』29 鹿毛基生 学校教育研究所 1985
 - ・日本教師論 -6- 広瀬淡窓とその師道論『東北福祉大学紀要』10 小野禎一 東北福祉大学 1985
 - ・日本教師論 -7- 広瀬淡窓とその師導観『東北福祉大学紀要』11 小野禎一 東北福祉大学 1986
 - ・広瀬淡窓「読大学」について『東洋文化』復刊第 56 号 三澤勝己 無窮会 1986
 - ・広瀬淡窓の学統と「読論語」『国史学』129 三澤勝己 国史学会 1986
 - ・広瀬淡窓と九州の儒者 緒論—同時代の交流について—『大倉山論集』21 三澤勝己 大倉精神文化研究所 1987
 - ・広瀬旭荘「日間瑣事備忘録」考—諸儒との交遊を中心として -1-『大倉山論集』22 三澤勝己 大倉精神文化研究所 1987
 - ・広瀬淡窓の学問と思想について『天領日田』第 7 号 深町浩一郎 天領日田を見直す会 1987
 - ・日本教師論 -8- 広瀬淡窓とその師道観『東北福祉大学紀要』12 小野禎一 東北福祉大学 1987
 - ・亀井昭陽の教育思想における「運命観」および「天命観」について『日本女子大学紀要』38 田中加代

- 日本女子大学 1988
- ・広瀬淡窓・旭荘の漢詩指導例—松永顕徳甫著「草稿」について—『近世文芸』49 市場直次郎
日本近世文学会 1988
 - ・「広瀬淡窓」井上義巳『國學院雑誌』89 卷 8 号
三澤勝己 国學院大學総合企画部 1988
 - ・晨霜如雪—広瀬淡窓「休道」詩の成立について—
『皇学館論叢』21 卷 1 号 鬼頭有一 皇学館大学人文学会
1988
 - ・広瀬淡窓「万善簿」について『亜細亜大学教養部紀要』
37 栗田充治 亜細亜大学教養部 1988
 - ・市場直次郎「廣瀬淡窓・旭荘の漢詩指導例」『近世文芸
49』—松永顕徳甫著『草稿』について—
日本近世文学会 1988
 - ・衣笠安喜編「江戸の学問—よみ・かき・そろばんまで」
『週刊朝日 百科日本の歴史九—近世から近代へ③』
朝日新聞社 1988
 - ・日本教育史学の確立過程下における広瀬淡窓関係記事
—明治期、師範学校用教育史教科書を中心に—『人間研
究』26 天野晴子 日本女子大学教育学科の会 1990
 - ・遠山荷塘と広瀬淡窓『明治大学教養論集』232 徳田武
明治大学教養論集刊行会 1990
 - ・三沢勝己「広瀬旭荘「日間瑣事備忘録」考（二）」
—諸儒との交遊を中心として—『大倉山論集二二号』
大倉精神文化研究所 1990
 - ・三沢勝己「広瀬旭荘「日間瑣事備忘録」考（三）」
—諸儒との交遊を中心として—『大倉山論集二二号』
大倉精神文化研究所 1990
 - ・徳田武「広瀬旭荘の耶馬溪行」詩人 広瀬旭荘伝—
『江戸文学』6 ぺりかん社 1991
 - ・徳田武「亀井昭陽塾再入門」詩人 廣瀬旭荘伝
『江戸文学』7 ぺりかん社 1991
 - ・徳田武「広瀬旭荘の亀井昭陽塾入門」『明治大学教養
論集』242 号 明治大学教養論集刊行会 1991・岡村繁『広
瀬淡窓・広瀬旭荘』江戸詩人選集九
岩波書店 1991
 - ・徳田武「追補 広瀬旭荘と遠山荷塘また旭荘と原采蘋」
詩人 廣瀬旭荘伝『江戸文学』8 ぺりかん社 1992
 - ・徳田武「論詩」の成立」詩人 廣瀬旭荘伝
『江戸文学』9 ぺりかん社 1992
 - ・広瀬淡窓私新抄 -1-『帝塚山大学教養学部紀要』35
木南卓一 帝塚山大学教養学部 1993
 - ・広瀬淡窓私新抄 (2)『帝塚山大学教養学部紀要』36
木南卓一 帝塚山大学教養学部 1993
 - ・徳田武「昭陽塾退塾」詩人 廣瀬旭荘伝
『江戸文学』10 ぺりかん社 1993
 - ・徳田武「樺島石梁訪問」詩人 廣瀬旭荘伝
『江戸文学』11 ぺりかん社 1993
 - ・福島理子「儒者の怪奇趣味—広瀬旭荘『丑時唄』をめぐっ
て—」『江戸小説と漢文学』和漢比較文学叢書第十七巻
和漢比較文学会編 汲古書院 1993
 - ・三沢勝己「広瀬淡窓・広瀬旭荘と洋学 序論」『明治聖
徳記念学会紀要』復刊八号 明治聖徳記念学会 1993
 - ・広瀬淡窓私新抄 (3)『帝塚山大学教養学部紀要』38
木南卓一 帝塚山大学教養学部 1994
 - ・広瀬淡窓私新抄 (4)『帝塚山大学教養学部紀要』39
木南卓一 帝塚山大学教養学部 1994
 - ・広瀬淡窓と「徒然草」『大倉山論集』第 36 輯 三澤勝己
大倉精神文化研究所 1994
 - ・咸宜園—広瀬淡窓の私塾教育が今日に与える意味—
『家庭科学』61 卷 3 号《特集》21 世紀の教育制度を考える
-1- 田中加代 日本女子社会教育会家庭科学研究所 1994
 - ・徳田武「「旭荘」の命名」詩人 廣瀬旭荘伝
『江戸文学』12 ぺりかん社 1994
 - ・徳田武「「廉塾」行」詩人 廣瀬旭荘伝
『江戸文学』13 ぺりかん社 1994
 - ・徳田武「未紹介広瀬旭荘詩文解説（一）」『明治大学教
養論集』268 号 明治大学教養論集刊行会 1994
 - ・小堀一正「幕末大阪文人社会の動向—広瀬旭荘と藤井
藍田・河野鉄兜らを中心として」『大阪の歴史と文化』
和泉書院 1994
 - ・廣瀬尚美『廣瀬資料館図録 天領日田の掛屋』
源流社 1994
 - ・新井白石と広瀬淡窓『季刊日本思想史』46《特集》新
井白石 三澤勝己 日本思想史懇話会 ぺりかん社 1995
 - ・山陽手批淡窓詩稿『日田文化』第 38 号
田中晃 日田市教育委員会 1995
 - ・広瀬淡窓の自然観について『中国哲学論集』21 杜栄
九州大学中国哲学研究会 1995
 - ・徳田武「「廉塾」行（二）」詩人 廣瀬旭荘伝
『江戸文学』14 ぺりかん社 1995
 - ・徳田武「未紹介広瀬旭荘詩文解説（二）」『明治大学教
養論集』279 号 明治大学教養論集刊行会 1995
 - ・中村幸彦、井上敏幸『広瀬先賢文庫目録』
廣瀬先賢文庫 1995
 - ・三沢勝己「広瀬旭荘「日間瑣事備忘録」考（四）」
—諸儒との交遊を中心として—『大倉山論集』三七号
大倉精神文化研究所 1995
 - ・寛政の教化政策と地方儒学『東洋研究』121
西江錦史郎 大東文化大学東洋研究所 1996
 - ・徳田武「「廉塾」行（三）」詩人 廣瀬旭荘伝
『江戸文学』15 ぺりかん社 1996
 - ・徳田武「未紹介広瀬旭荘書牘・資料紹介—文久三年四、
五月—」『明治大学教養論集』286 号 明治大学教養論集
刊行会 1996
 - ・徳田武「「廉塾」行（四）」詩人 廣瀬旭荘伝
『江戸文学』17 ぺりかん社 1997
 - ・西江錦史郎「広瀬旭荘研究（1）系譜と活動」『東洋研究』
126 号 大東文化大学 東洋研究所 1997
 - ・岡村繁「広瀬旭荘の遺稿とその推敲課程〔含略年譜〕

- 先儒祭記念公演『斯文』106号 斯文会 1997
- ・ 広瀬淡窓と袁枚『学林』28・29 肥田明啓
中国芸文研究会 1998
 - ・ 淡窓詩話の文章(特集 中世・近世)『解釈』44巻3号
大木正義 解釈学会 1998
 - ・ 三沢勝己「広瀬旭荘「日間瑣事備忘録」考(五)一
儒との交遊を中心として」『大倉山論集』四二号
大倉精神文化研究所 1998
 - ・ 田中加代著「広瀬淡窓の研究」『大倉山論集』44
三沢勝己 大蔵精神文化研究所 1999
 - ・ 広瀬淡窓の詩論とその源流—清代前期の詩論の受容を
中心として—『学林』30 肥田明啓 中国芸文研究所
1999
 - ・ 咸宜園における漢詩講釈の展開『教育学研究紀要』45
巻1号 山本佐貴 中国四国教育学会 1999
 - ・ 私塾 本立書院(東宜園)(特集 明治十年代の江戸)
『江戸文学』21 宮崎修多 ぺりかん社 1999
 - ・ 江戸時代の学習機会 - その2-『九州共立大学・九州女
子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター紀要』
4 Nazario Bustos 九州共立大学・九州女子大学・九州
女子短期大学生涯学習研究センター 1999
 - ・ 「松下筑陰伝放(上)」『語文研究』86・87号 高橋昌彦
九州大学国語国文学会 1999
 - ・ 徳田 武「未紹介広瀬旭荘詩文解説(三)」
『明治大学教養論集』322号 明治大学教養論集刊行
会 1999
 - ・ 大野修作『広瀬旭荘』日本漢詩人選集16 研文出版
1999
 - ・ 咸宜園門人たちの詩社「玉川吟社」に関する考察『大
分県地方史』179号 山本佐貴 大分県地方史研究会
2000
 - ・ 広瀬淡窓と老子思想『中国哲学論集』26 杜 栄九州大学
中国哲学研究会 2000
 - ・ 廣瀬淡窓の詩論と咸宜園教育との関連『立命館文學』
563号 肥田明啓 立命館大学人文学会 2000
 - ・ 女流漢詩人を探す『機』No109 高橋昌彦 藤原書店
2000
 - ・ 大野修作「『東瀛詩選』の成立と広瀬旭荘」『女子大國文』
第二百二十七号 京都女子大学国文学会 2000
 - ・ 広瀬淡窓の経世論小考『日本経済思想史研究』(1)
三澤 勝己 日本経済思想史研究会 2001
 - ・ 月野文子「広瀬旭荘の「夜過二二州橋一書二矚目」
詩: 成立事情とその推敲の態度をめぐって」
『文芸と思想』65 福岡女子大学文学部 2001年
 - ・ 月野文子「広瀬旭荘の題画詩「題春川釣魚図」の手法:
楽府詩「枯魚過河泣」と『莊子』寓喩」『文芸と思想』
66 福岡女子大学文学部 2002
 - ・ 西村富美子「〈論文〉広瀬旭荘生涯と作品: 波華大阪の地」
『紀要 言語・文学編』34 愛知県立大学外国語学部 2002
 - ・ 大野修作「広瀬旭荘と山梨稲川—『東瀛詩選』中の詩
人たち—」『女子大國文 第三百一十一号』
京都女子大学国文学会 2002
 - ・ 近世末期芸州の漢学塾を介した書籍貸借— 塾生を中心
に『長崎大学教育学部社会科学論叢』63号 鈴木理恵
長崎大学教育学部 2003
 - ・ 日本の経済発展と学校教育(1)『鹿児島大学教育学部教
育実践センター研究紀要論文』13 神田嘉延
鹿児島大学教育学部 2003
 - ・ 徳田 武「広瀬旭荘の善通寺参詣」『明治大学教養論集』
362号 明治大学教養論集刊行会 2003
 - ・ 月野文子「広瀬旭荘の天保十五年正月詩の周辺: 「肅舎」
取得と江戸開塾」『文芸と思想』67
福岡女子大学文学部 2003
 - ・ 広瀬淡窓(1782-1856)による漢詩教育のあり方1
—江戸詩壇史における位置づけ(1)『茨城大学教育学部
紀要』53号 向野康江 茨城大学教育学部 2004
 - ・ 広瀬淡窓(1782-1856)による漢詩教育のあり方1
—江戸詩壇史における位置づけ(2)『茨城大学教育学部
紀要』53号 向野康江 茨城大学教育学部 2004
 - ・ 日本漢詩人紀行(1) 淡窓の筑遊『創文』469号
林田慎之助 創文社 2004
 - ・ 丹波における明治維新前後 広瀬淡窓の思想『丹波』6号
《特集》幕末維新を馳せた丹波の人々 奥村覚 丹波史談会
2004
 - ・ 咸宜園の漢籍収集と塾生の閲覧『漢籍』12号 三澤勝己
漢籍研究会 2004
 - ・ 亀田一邦「嘉永4年広瀬旭荘の長府娶嫁及び藩儒招聘に
関する一考察」『山口県地方史研究』91 山口県地方史学
会 2004
 - ・ 『堺市博物館 書の世界—山下是臣コレクション—』
堺市博物館 2004
 - ・ 広瀬淡窓「歳暮」による授業実践報告『漢文教育』30
尾本優輝 広島漢文教育研究会 中国中世文学会 2005
 - ・ 漢文教材としての広瀬淡窓—『桂林荘雜詠示諸生』
教材化の背景—『二松学舎大学人文論叢』75号
小金澤豊 二松学舎大学人文学会 2005
 - ・ 近世都市における「知」の空間と場—豊後国日田咸宜園
を中心にして—『年報都市史研究』13号 岩本 馨 山川出版社
2005
 - ・ 淡窓漢文日記・懐舊樓筆記にみる 天保の大飢饉
『日田文化』第47号 野田高巳 日田市教育委員会 2005
 - ・ 島岡成治「9286 広瀬旭荘における住まいと都市の場所
について(建築論・場所、建築歴史・意匠)」
『学術講演梗概集』日本建築学会 2005
 - ・ 亀田一邦「広瀬旭荘晩年の赤関厄難について『日間瑣事
備忘録』に見る婚家当主清水麻之丞との粉擾顛末」
『地域文化研究』20 梅光学院大学地域文化研究所 2005
 - ・ 広瀬淡窓の「教育ノ術」礼楽刑政による解釈〔含 論評〕
『日本教育史研究』25号 齋藤尚志 日本教育史研究会
2006
 - ・ 廣瀬淡窓と陶淵明『松浦友久博士追悼記念中國古典文學
論集』林田慎之助 松浦友久博士追悼記念中國古典文

- 學論集刊行會 2006
- ・島岡成治「813 広瀬旭荘の大阪の住まいと都市へのまなざし（歴史・意匠）」『日本建築学会研究報告』日本建築学会 2006
 - ・郭穎「『東瀛詩選』における俞樾の修改—広瀬旭荘の『梅墩詩鈔』との比較を通して—」『中国学研究論集』第十六号 広島中国文学会 2006
 - ・咸宜園と白鹿洞書院—日中私塾の比較研究—『國學院大学大学院紀要』39号 朱 玲莉 國學院大学大学院 2008
 - ・広瀬淡窓、李白への挑戦「月下独酌」論『文学』10巻3号 小財陽平 岩波書店 2009
 - ・「幕末明治期の咸宜園と真宗僧」『淡窓研究会会報』川邊雄大 淡窓研究会 2009
 - ・日向菓子始め（その5）日向出身の緒方洪庵・適塾と広瀬淡窓・咸宜園に学んだ人々『九州保健福祉大学研究紀要』10号 山本郁男・井本真澄・宇佐見則行ほか 九州保健福祉大学研究紀要委員会 九州保健福祉大学 2009
 - ・広瀬淡窓における学校と社会『日本文化論叢』17号 前田勉 愛知教育大学日本文化研究室 2009
 - ・休道詩鑑賞への一考『敬天』第37号 岩沢光夫 淡窓会 2009
 - ・『近世文芸研究と評論』75号 [内容]: 広瀬淡窓と頼山陽 文化五年の交流を通して 黒川桃子 近世文芸研究と評論の会 早稲田大学文学部 2009
 - ・広瀬淡窓の教育『杵築史談会』藤井準一郎 久米忠臣 杵築史談会 2009
 - ・大野雅之「大給府内藩と廣瀬家 近説と旭荘の関係を中心に」『資料館研究紀要』14 大分県立先哲資料館 2009
 - ・亀田一邦「高杉晋作の主治医 石田精一について—変革期草医の「雅」と「侠」—」『日本医史学雑誌』第55巻 第4号 日本医史学会 2009
 - ・梅溪昇「広瀬旭荘と池田」『池田郷土研究』11号 池田郷土史学会 2009
 - ・『託明寺縁起略伝記』 託明寺 2009
 - ・『続池田学講座—人物編—新たに知る池田 改めて出会う池田—』 池田市、池田市教育委員会 2009
 - ・廣瀬淡窓の詩風について—その日本化の一側面を中心に—『アジア文化交流研究』第5号別冊《特集》幕末明治期における日本文学・歴史・思想・藝術の諸相 朱 秋而 関西大学アジア文化交流研究センター 2010
 - ・広瀬淡窓と陸游詩—淡窓詩の源流—『江戸風雅』第2号 黒川桃子 江戸風雅の会 2010
 - ・広瀬旭荘の足利学校行『江戸風雅』第3号 徳田武 江戸風雅の会 2010
 - ・苔を二広の墓碑と合原松子の墓とに掃ふ『江戸風雅』第3号 池澤一郎 江戸風雅の会 2010
 - ・広瀬旭荘と『水滸伝』『江戸風雅』第3号 徳田武・土屋和之 江戸風雅の会 2010
 - ・大野雅之「淡窓先生手書克己篇」にみる廣瀬淡窓の苦悩 末弟旭荘のこと『史料館研究紀要』15 大分県先哲資料館 2010
 - ・川崎理恵「近世社会における曆占の実態 広瀬旭荘と古谷道庵を素材に」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 史学編9』京都女子大学大学院文学研究科史学専攻 2010
 - ・亀田一邦『幕末防長儒医の研究』知泉書館 2010
 - ・神戸輝夫「旭荘の漢文日記」『潮 一月号』潮出版社 2011・合山林太郎「幕末京撰の漢詩壇 広瀬旭荘・河野鉄兜・柴秋村を中心に（特集 近世韻文の力）」『日本文学』60巻 10号 日本文学協会 2011
 - ・黒川桃子「亀井少柴小伝—父昭陽の詩文を通して—（上）」『江戸風雅 第五号』江戸風雅の会 2011
 - ・徳田 武「囲記事 広瀬林外と川路聖謨・安井息軒・大沼枕山」『江戸風雅』第五号 江戸風雅の会 2011
 - ・鈴木理恵『近世近代移行期の地域文化人』塙書房 2012
 - ・『廣瀬淡窓の生家—廣瀬家の歴史と業績—』日田市教育委員会 2012
 - ・『吹田市立博物館 大庄屋 中西家名品展』吹田市教育委員会 2012
 - ・展示解説書『廣瀬旭荘—東遊 大坂 池田—』咸宜園教育研究センター 2012
 - ・展示図録『廣瀬旭荘と池田・大坂』池田市立歴史民俗資料館 2012
 - ・徳田 武「広瀬旭荘と江戸」『江戸風雅』第七号 江戸風雅の会 2013
 - ・『廣瀬淡窓と咸宜園—近世日本の教育遺産として—』日田市教育委員会 2013
 - ・『廣瀬淡窓と咸宜園—近世日本の教育遺産として—資料編』別府大学文化財研究所・日田市教育委員会 2013
 - ・～文化財指定記念～国史跡「廣瀬淡窓旧宅及び墓」ガイドブック 廣瀬本家 2013

IV . 教育 顕 彰 事 業

咸宜園教育顕彰事業

■ 顕彰事業（「咸宜園の日」記念事業）

(1) 「咸宜園の日」記念事業及び咸宜園教育顕彰事業

内 容：記念講演・表彰式・研究発表など

日 時：平成 26 年 2 月 23 日（日）

午後 1 時半から 4 時まで

① 記念講演：「江戸の教育力」

東京学芸大学教授 大石 学 氏

特別報告：「咸宜園の世界文化遺産登録への取り組み」咸宜園教育研究センター名誉館長

後藤 宗俊 氏

② 咸宜園教育顕彰事業 表彰式

事業概要：廣瀬淡窓や咸宜園教育に関して、学術研究部門（調査研究の論文等が対象）及び教育文化部門（個人、団体、学校などが制作した作品や文化活動などが対象）を設け、毎年公募し、優秀な作品等を表彰するもの。

募集期間：平成 25 年 6 月 1 日から 11 月 1 日

③ 咸宜園教育顕彰事業 研究発表

教育文化部門 優秀賞受賞者 3 名

④ 特別発表

「咸宜園世界遺産登録推進作文コンクール」

受賞者（小学生） 3 名

主 催：豆田地区振興協議会

対 象：市内小学生

作文テーマ：① 咸宜園と廣瀬淡窓に関すること

② 咸宜園で学んだこと

応募件数：101 件

最優秀賞：「淡窓先生が残してくれた私たちへの教え」工藤桜和さん（桂林小学校）

優 秀 賞：「今に生きる淡窓先生の教え」

桜木萌々子さん（桂林小学校）

「廣瀬淡窓先生と今」

佐々木佑見子（咸宜小学校）

「みなさんは、日田の有名塾・咸宜園を開いた廣瀬淡窓を知っていますか？」

飯田朱音（咸宜小学校）

【教育文化部門】優秀賞 3 名

賞名	名前	所属	論文名
優秀賞	梅 山 秀 人 うめやま ひでと	豆田上町祇園山鉾 振興会事務局長	「廣瀬淡窓時代の日田祇園」
評 価	廣瀬淡窓の日記等から日田祇園に関する記述を全て抽出し、豆田町を中心とした江戸時代後期における日田祇園の姿を露わにした作品として優れていた。これまでの日田祇園に関する論考などは、歴史性や歴史的背景にふれることが多かったが淡窓の視点で日田祇園の姿を描いた点は斬新であり、淡窓研究の中にはなかった視点である。		

賞名	名前	所属	論文名
優秀賞	佐 藤 巧 さとう たくみ	佐伯史談会	作品①「中島子玉の日本史」「中島子玉の人物志」 作品②「若き日の松下筑陰」「松下筑陰の人物志」
評 価	佐伯藩出身の門下生で、後に佐伯藩校の教授を務めた「中島子玉」並びに若き日の淡窓が日田と佐伯で漢詩を学んだ師「松下筑陰（西洋）」について書かれた作品で、和本で製本していることや中に使用した切り絵にもオリジナル性があふれており、文芸作品としても完成度が高い。また、作成の間、佐伯市内の小生と切り絵制作の場を設けた点なども評価された。今後、各地の門下生について地域の歴史団体等がこのような活動を広げていくことが期待できる作品である。		

賞名	名前	所属	論文名
優秀賞	中 島 龍 磨 なかしま たつま	三花公民館長	「咸宜園の教えを道徳教育に取り入れ、豊かな心を培う～淡窓教育の学校教育・社会教育への転用～」
評 価	現代における淡窓教育の実践に関する計画及び実践報告。三和小学校や三花公民館で実施した「平成三花咸宜園」の活動について書かれた作品で、これまでの教員生活の経験に基づき、いかにして淡窓の教育を教材化できるかを考え、学校教育編・社会教育編に分けて実践的手法を構築した点が評価される。今後は、学校以外の公民館活動等において模範となる事例であり、また市民への広がりも期待できる。		



「咸宜園の日」記念事業 オープニング
日隈保育園児による「休道之詩」の朗読



教育文化部門 優秀賞 梅山 秀人 氏



教育文化部門 優秀賞 佐藤 巧 氏



教育文化部門 優秀賞 中島 龍磨 氏

(2) 淡窓先生に学ぶ～学校の取組み～

学校の取組みを広く市民等に知ってもらうことを目的とし、咸宜園や咸宜園教育等について関心をもってもらうきっかけとする。

◇期 間：平成26年2月18日(火)～3月1日(土)

◇展示場所：パトリア日田(ギャラリー)

◇参 加 校：小学校7校 咸宜小学校、桂林小学校、日隈小学校、
光岡小学校、朝日小学校、三和小学校、
有田小学校

中学校3校 東部中学校、三隈中学校、大山中学校



作文コンクール受賞者 特別発表



淡窓先生に学ぶ～学校の取組み～ 展示風景



咸宜小学校



光岡小学校



三隈中学校

(3) 咸宜園門下生の遺墨展(主催：日田先哲研究会)

◇展示内容：咸宜園門下生の書画等

◇展示期間：平成26年2月18日(火)～3月1日(土)

◇展示場所：パトリア日田(ギャラリー)

◇展 示 品：計32点(以下は作者名)

(掛軸23点) 廣瀬淡窓、廣瀬旭荘、廣瀬青邨、村上姑南、諫山菽村、高木豊水、手島二溪、森秋艇、清浦奎吾等
(屏風4点) 廣瀬淡窓、廣瀬旭荘、平野五岳、吉嗣拜山
(扁額5点) 廣瀬淡窓、廣瀬旭荘、平野五岳、長三洲、帆足杏雨

V . 世界文化遺産登録推進の取組

1. 世界遺産とは

世界遺産とは、地球の生成と人類の歴史によって生み出され、過去から引き継がれた貴重なものである。世界遺産にはさまざまな国や地域に住む人びとが誇る文化財や自然環境などがあり、人類の残酷な歴史を刻むものや戦争や自然災害、環境汚染などにより危機にさらされているものも含まれている。それらは国際協力を通じた保護のもと、国境を越え世界のすべての人びとが共有し、次の世代に受け継いでいくべきものである。

○世界遺産リストに記載されるまで

- ①条約締約国の推薦：締約国の政府が国内の世界遺産候補の中から、条件の揃ったものを世界遺産委員会に推薦。（各国の世界遺産暫定一覧表記載の資産から推薦される。）世界遺産委員会の事務局としての機能はユネスコ世界遺産センターが担っている。
- ②専門機関による調査：世界遺産委員会の依頼により、文化遺産はICOMOS、自然遺産はIUCNが候補地の評価調査を行う。
- ③世界遺産委員会での審議：ICOMOSやIUCNなどによる評価調査報告を受け、毎年1回開催される世界遺産委員会において、世界遺産リストへの記載物件の可否を決定する。

2. 事業の概要

日田市では平成22年度に世界遺産推進室を開設し、茨城県水戸市の弘道館及び偕楽園、栃木県足利市の足利学校と連携し、「近世日本の教育遺産群」という主題で咸宜園の世界文化遺産登録を目指して取組んでいる。

世界文化遺産として登録されるには、ユネスコが定めた基準である「顕著で普遍的な価値」を証明する必要がある。そこで、「近世日本の教育遺産群」が持つ「顕著で普遍的な価値」を証明するために、世界遺産推進室では日田市世界遺産登録検討委員会の指導の下、咸宜園に関する学術的な調査研究を咸宜園教育研究センターと両輪となって作業を進めている。また、この取り組みは行政のみで進められるものではなく、市民の機運の醸成と協力が必要となってくる。市民と行政とが一体となって取り組むことが重要となることから、調査研究の結果を公表し、情報を共有することで普及啓発につなげ、一人でも多くの市民の協力を得ることができるよう取組まなければならない。

○調査研究

平成22年度から進めてきた調査研究の成果を、平成24年度に報告書として刊行した。この報告書は水戸市や足利市と共同によるものではなく、日田市の資産（私塾・咸宜園、豆田町）について、世界遺産登録を目指す視点でまとめたものである。「本編」と別府大学文化財研究所と共に「淡窓・咸宜園の放学・遊山」についての調査結果をまとめた「資料編」がある。他に、世界遺産登録に向けて必要となる構成資産を保護するための「保存管理計画」や「緩衝地帯」（バッファ・ゾーン）の方針検討のため、岡山理科大学と共に調査を進めた。

○普及啓発

①世界遺産登録推進講演会

市民の理解と協力、機運の醸成を図るため2回の講座を開催した。

【第1回】講師に長澤孝三氏（元国立公文書館内閣文庫長）を招き、ともに連携して世界遺産登録に向けて取組んでいる栃木県足利市の「足利学校」についてご講演いただいた。

日 時：平成25年7月5日（金） 19：00 開演

会 場：パトリア日田 小ホール

講 師：長澤 孝三氏

演 題：「足利学校と近世日本の教育遺産」

参加者：101名



講師：長澤 孝三氏

【第2回】講師に大石学氏（東京学芸大学教授）を招き、江戸時代の社会の実像について、教育水準の高さなどからご講演いただいた。また、咸宜園教育研究センター名誉館長の後藤宗俊氏から世界遺産登録に向けた取組について報告をいただいた。

日時：平成25年2月23日（日） 13：00 開演

会場：パトリア日田 小ホール

講師：大石 学氏

演題：「江戸の教育力」

講師：後藤 宗俊氏

演題：「咸宜園の世界文化遺産登録への取り組み」

参加者：130名



講師：大石 学氏

②市民協同の取組（咸宜園平成門下生之会の活動）

世界遺産登録を目指す取組は市民と行政とが一体となって取組むことが重要となることから、市民による応援団体「咸宜園平成門下生之会」が平成23年度に発足した。この団体は廣瀬淡窓や咸宜園について学習すると同時に、世界遺産登録の取組みを市民の側から支援する活動を中心とする。今年度は咸宜園に関する講座や国内の暫定リスト一覧表記載資産等の視察研修を中心に活動した。（2ページ参照）

③情報発信

市ホームページの更新や広報紙の活用、各種イベント会場において世界遺産の取組を図示したパネル展示を実施し情報発信に努めた。

3. 教育遺産世界遺産登録推進協議会

①協議会の開催

「近世日本の教育遺産群」として、咸宜園と共に世界遺産登録を目指す茨城県水戸市の水戸藩藩校「弘道館」と栃木県足利市の「足利学校」。この関係三市は、相互の連絡調整の円滑化及び一体的な事業の展開を図ることを目的として、平成24年11月に「教育遺産世界遺産登録推進協議会」を設立した。協議会は、市長と教育委員会教育長、学識経験者（商工会議所会頭、専門家、県の担当課長、市民団体代表）を委員とし、国内外の教育遺産に係る調査研究、教育遺産を活用した普及啓発に関することなどを所掌する。

○幹事会 平成25年5月7日（都内）

- 報告第1号 平成24年度教育遺産世界遺産登録推進協議会事業報告について
- 認定第1号 平成24年度教育遺産世界遺産登録推進協議会歳入歳出決算について
- 議案第1号 教育遺産世界遺産登録推進協議会規約の一部を改正する規約について
- 議案第2号 平成25年度教育遺産世界遺産登録推進協議会事業計画・予算について

○協議会 平成25年5月21日（都内）

- 報告第1号 平成24年度教育遺産世界遺産登録推進協議会事業報告について
- 認定第1号 平成24年度教育遺産世界遺産登録推進協議会歳入歳出決算について
- 議案第1号 教育遺産世界遺産登録推進協議会規約の一部を改正する規約について
- 議案第2号 教育遺産世界遺産登録推進協議会の財務に関する規程の一部を改正する規程について
- 議案第3号 教育遺産世界遺産登録推進国際シンポジウム実行委員会規程について
- 議案第4号 平成25年度教育遺産世界遺産登録推進協議会事業計画・予算について

②国際シンポジウムの開催

足利市が事務局となりアメリカから専門家（研究者）を招き、10月6日に開催された。日田市からは江面嗣人委員が参加した。この国際シンポジウムは国内外及び文化庁へのPRにつながり、継続していく事業と位置づけている。

日時：平成25年10月6日（日曜日）午後1時～午後5時

会場：足利市民プラザ文化ホール

タイトル「近世日本の教育遺産」

プログラム

- ・午後1時～1時20分 開会・主催者あいさつ
- ・講演 午後1時20分～午後3時00分
「国境を越える学習文化：アメリカの学校テストの起源について」
ウィリアム・J・リース氏（ウィスコンシン大学教授）
「東アジアの学問土壌と日本的な学問開花」
深谷 克己氏（早稲田大学名誉教授）
- ・パネルディスカッション 午後3時10分～午後5時
コーディネーター：橋本 昭彦氏（国立教育政策研究所総括研究官）
パネリスト：江面 嗣人（岡山理科大学教授）
池田 雅則（兵庫県立大学准教授）
ニールス・ファンステーンパール（日本学術振興会外国人特別研究員 [東京大学]）
コメンテーター：西村 幸夫（日本イコモス国内委員会委員長 / 文化庁世界文化遺産特別委員会委員長 / 東京大学先端科学技術研究センター所長）



パネルディスカッションの様子

参加者数 450人

〈国際シンポジウム実行委員会〉

- 第1回教育遺産世界遺産登録推進国際シンポジウム実行委員会 平成25年5月21日（都内）
議案第1号 委員長及び副委員長の選出について
議案第2号 教育遺産世界遺産登録推進国際シンポジウム実行委員会事業実施計画・事業収支予算について
- 第2回教育遺産世界遺産登録推進国際シンポジウム実行委員会 平成26年3月26日（都内）
議案第1号 教育遺産世界遺産登録推進国際シンポジウム2013「近世日本の教育遺産」の実施結果について
議案第2号 教育遺産世界遺産登録推進国際シンポジウム実行委員会事業収支決算について

③専門部会の開催

これまで関係自治体による合同学術会議で検討されてきた世界遺産登録に向けた調査・研究等については、専門部会A（登録推進戦略の検討）、専門部会B（国内外の教育遺産の評価）、専門部会C（保存管理方策の検討）に分かれ、各専門部会による検討・協議を重ねる。

- 第1回専門部会B 平成25年6月11日（都内）
 - (1) 今年度の事業計画等について
 - (2) これまでの意見等を受けての修正案について
- 第1回専門部会A 平成25年7月29日（都内）
 - (1) 今後の検討課題について
 - (2) 教育遺産世界遺産登録推進国際シンポジウムの開催について
- 第1回専門部会A 平成25年10月13日（都内）
 - (1) 評価基準への適合性について
 - (2) 来年度の国際シンポジウムについて
- 第1回専門部会C 平成26年1月25日（都内）
 - (1) 検討状況中間報告について

④事務連絡会議の開催

○平成 25 年 6 月 11 日（都内）

協議内容

- (1) 世界遺産登録推進国際シンポジウム 2013 について
- (2) 市民団体について
- (3) 来年度の取組について

○平成 25 年 7 月 29 日（都内）

協議内容

- (1) 平成 26 年度教育遺産世界遺産登録推進協議会事業計画・予算（案）について
- (2) 教育遺産世界遺産登録推進国際シンポジウムの開催について
- (3) 今年度の追加事業（案）について

○平成 25 年 7 月 29 日（都内）※岡山県備前市含む

協議内容

- (1) 世界遺産登録に向けた取組の現況と今後の進め方等について

○平成 25 年 8 月 30 日（都内）

協議内容

- (1) 教育遺産世界遺産登録推進国際シンポジウムの開催について
- (2) 今年度の事業の進め方（案）について
- (3) 平成 26 年度事業計画・予算（案）について

4. 経過

日田市においては、次年度日田市で開催を予定している国際シンポジウムの内容について、検討委員から意見をいただいた。また、連携している茨城県水戸市、栃木県足利市との間においては、協議会会議のほか、有識者による専門部会や事務連絡会議を重ねた。

日程	内 容
平成 25 年 5 月 7 日	幹事会開催
5 月 21 日	協議会会議・第 1 回国際シンポジウム実行委員会開催
6 月 11 日	専門部会 B 会議・事務連絡会議開催
7 月 5 日	第 1 回日田市世界遺産登録推進講演会開催（講師：長澤 孝三氏）
7 月 29 日	専門部会 A 会議・事務連絡会議開催
8 月 9 日	第 1 回日田市世界遺産登録検討委員会開催
8 月 29 日	文化庁との意見交換会開催
8 月 30 日	事務連絡会議開催
10 月 6 日	足利市にて国際シンポジウム開催
10 月 13 日	専門部会 A 会議開催
平成 26 年 1 月 25 日	専門部会 C 会議開催
2 月 9 日	第 2 回日田市世界遺産登録検討委員会開催
2 月 23 日	第 2 回日田市世界遺産登録推進講演会開催（講師：大石 学氏・後藤 宗俊氏）
3 月 26 日	第 2 回国際シンポジウム実行委員会開催

Ⅵ . 利用状況・日誌抄

1 . 利用状況 (平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日)

月	H25 年度	市内小中学校	その他団体	一般・個人
4	1,524 名	0 団体 0 名	14 団体 686 名	838 名
5	1,451 名	1 団体 47 名	14 団体 352 名	1,052 名
6	1,303 名	1 団体 97 名	20 団体 536 名	670 名
7	1,108 名	0 団体 0 名	13 団体 293 名	815 名
8	1,315 名	1 団体 2 名	17 団体 397 名	916 名
9	1,583 名	0 団体 0 名	27 団体 586 名	997 名
10	2,054 名	4 団体 232 名	29 団体 681 名	1,141 名
11	2,715 名	11 団体 456 名	50 団体 810 名	1,449 名
12	927 名	3 団体 88 名	15 団体 279 名	560 名
1	876 名	8 団体 361 名	5 団体 91 名	424 名
2	1,051 名	6 団体 186 名	11 団体 276 名	589 名
3	2,251 名	3 団体 142 名	21 団体 699 名	1,410 名
計	18,158 名	38 団体 1,611 名	236 団体 5,686 名	10,861 名

※上記の他、パトリアでの開催事業（記念事業の講演会やシンポジウム、定期講座等）の参加人数は約 1,200 名を数える。

2 . 日誌抄

2013. 4. 1 常設展示 (～ 6.11)

咸宜園教育研究センター

4.10 「咸宜園研修」(東明中学校 1 年生)

史跡咸宜園跡・咸宜園教育研究センター

5.27 第 1 回咸宜園教育研究センター運営委員会

咸宜園教育研究センター

6.13 企画展「廣瀬淡窓旧宅と咸宜園」(～ 7.30)

咸宜園教育研究センター

6.27 名誉館長講座 (年 8 回) (～ 10.17)

咸宜園教育研究センター

7. 5 咸宜園平成門下生講座 (年 5 回)

(～ 2.23) パトリア日田小ホール他

7.24 第 13 回「立志の道を歩こう」(山鹿市主催)

史跡咸宜園跡

8. 1 常設展示 (～ 10.29)

咸宜園教育研究センター

8. 8 第 1 回咸宜園教育研究センター専門委員会

咸宜園教育研究センター

8.10～11 夏休みは、咸宜園で学ぼう！

咸宜園教育研究センター他

10.31 定期講座 (年 5 回) (～ 12.15)

パトリア日田スタジオ 1

11. 1 特別展「九州の私塾と教育」(～ 12.15)

咸宜園教育研究センター

12.16 常設展示 (～ 2.14) 咸宜園教育研究センター

1.17 第 2 回咸宜園教育研究センター運営委員会

咸宜園教育研究センター

2. 9 第 2 回咸宜園教育研究センター専門委員会

咸宜園教育研究センター

2.18 企画展「咸宜園とその門下生たち

—第 9 代塾主 諫山 菽村— (～ 3.31)

咸宜園教育研究センター

2.18 淡窓先生に学ぶ～学校の取組み～

パトリア日田 (ギャラリー) (～ 3.1)

2.23 咸宜園教育顕彰事業 (「咸宜園の日」)

パトリア日田 (小ホール)

Ⅶ．各種委員会・職員名簿

1. 咸宜園教育研究センター運営委員会委員名簿

任期：平成24年6月1日から2年間

選出資格	氏名	所属
学識経験者	大神 信 證	日田市文化財保護審議会副会長
	後藤 宗 俊	別府大学名誉教授
	廣瀬 貞 雄	公益財団法人廣瀬資料館理事長
文化団体	佐藤 誠一郎	淡窓会代表
	三宅 多加子	日田書道協会
まちづくり	武内 眞 司	社団法人日田市観光協会理事
生涯教育	武内 正 英	(一財)日田市公民館運営事業 団公民館館長会長、咸宜公民館館長
行政関係	合原 多賀雄	日田市教育委員会教育長

2. 咸宜園教育研究センター専門委員会委員名簿

任期：平成24年6月1日から2年間

選出資格	氏名	所属
学識経験者	海原 徹	京都大学名誉教授
	大野 雅之	大分県立先哲史料館主幹研究員
	後藤 宗 俊	別府大学名誉教授
	鈴木 理 恵	広島大学大学院教授
	高橋 昌 彦	福岡大学人文学部教授
	豊田 寛 三	別府大学学長
	中島 三 夫	日田市文化財保護員

(50音順)

3. 世界遺産登録検討委員会委員名簿

任期：平成24年5月25日から2年間

選出資格	氏名	所属
学識経験者	吾妻 重 二	関西大学教授
	海原 徹	京都大学名誉教授
	江面 嗣 人	岡山理科大学教授
	後藤 宗 俊	別府大学名誉教授
	豊田 寛 三	別府大学学長

(50音順)

4. 職員名簿

咸宜園教育研究センター

職名	氏名
名誉館長	後藤 宗 俊

(平成25年4月1日現在)

職名	氏名
所 長	池田 寿 生
係 長	工藤 聖 二
副 主 幹	吉田 博 嗣
主 任	原田 弘 徳
主 任	溝田 直 己
研 究 員	深町 浩一郎

(平成25年4月1日現在)

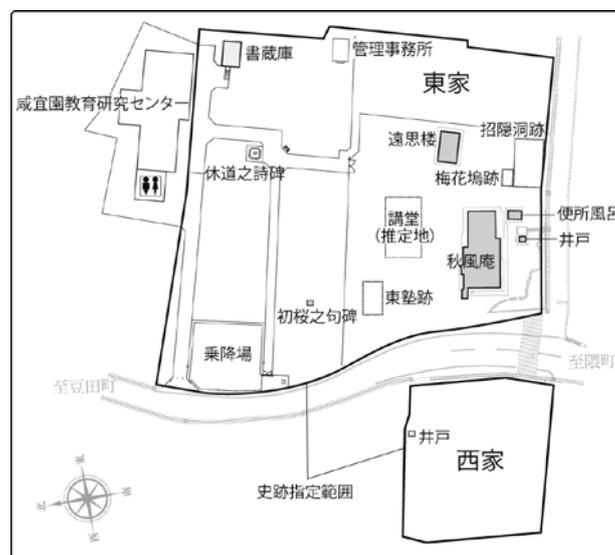
世界遺産推進室

職名	氏名
室 長	池田 寿 生
係 長	工藤 聖 二
副 主 幹	吉田 博 嗣
主 任	原田 弘 徳
主 任	溝田 直 己
主 事	坂本 裕 也
主 事	廣末 雅 代

(平成25年4月1日現在)

I. 沿革

- | | | | |
|----------------|--|----------------|---|
| 明治 30 年 (1897) | 9 月 咸宜園閉塾 | 平成 21 年 (2009) | 9 月 咸宜園教育研究センター運営検討会議開催 |
| 明治 46 年 (1913) | 淡窓先生頌徳祭
(生誕 130 年祭) 開催 | 平成 22 年 (2010) | 1 月 咸宜園教育研究センター運営検討会議開催 |
| 大正 5 年 (1916) | 淡窓図書館建設 | | 3 月 咸宜園教育研究センター運営検討会議開催 |
| 大正 8 年 (1919) | 休道の詩碑建立 | | 10 月 咸宜園教育研究センター開館
記念式典、記念事業実施 |
| 昭和 7 年 (1932) | 7 月 「咸宜園跡」 が国指定史跡に指定 | | 「咸宜園門下生子孫の集い」 開催
(日田市制 70 周年記念事業) |
| 昭和 23 年 (1948) | 「広瀬淡窓墓」 が国指定史跡に指定 | | 12 月 咸宜園平成門下生之会発足 |
| 昭和 30 年 (1955) | 11 月 淡窓百年祭 (100 回忌) の開催 | 平成 23 年 (2011) | 10 月 平成 23 年度特別展
「近世の私塾－西日本を中心として－」 開催 |
| 平成 2 年 (1990) | 3 月 『第 3 次日田市総合計画』 で咸宜園跡の保存整備を計画 | | 11 月 開館一周年記念事業「私塾フォーラム」 開催 |
| 平成 4 年 (1992) | 2 月 史跡咸宜園跡保存整備構想検討委員会発足 | 平成 24 年 (2012) | 3 月 第 1 回咸宜園教育顕彰事業 (「咸宜園の日」) 実施 |
| 平成 5 年 (1993) | 3 月 史跡咸宜園跡保存整備構想の策定 | | 8 月 廣瀬旭荘没後 150 年記念事業 (特別展・講演会・鼎談) 実施 |
| 平成 6 年 (1994) | 1 月 秋風庵等保存修理事業実施
(～平成 8 年) | | 11 月 教育遺産世界遺産登録推進協議会発足・世界遺産登録推進国際シンポジウム開催 (水戸市) |
| 平成 7 年 (1995) | 3 月 史跡咸宜園跡内秋風庵等保存修理事業委員会発足 (～平成 12 年度) | 平成 25 年 (2013) | 2 月 第 2 回咸宜園教育顕彰事業 (「咸宜園の日」) 実施 |
| 平成 9 年 (1997) | 1 月 遠思楼復元修理事業
(～平成 12 年度) | | 3 月 国史跡「廣瀬淡窓旧宅及び墓」 (国史跡「廣瀬淡窓墓」) の追加指定及び指定名称の変更) |
| 平成 15 年 (2003) | 史跡咸宜園跡保存整備委員会発足
(～平成 25 年度) | | 10 月 世界遺産登録推進国際シンポジウム開催 (足利市) |
| 平成 17 年 (2005) | 史跡咸宜園跡保存整備実施設計
淡窓先生 150 年祭 (150 回忌) 開催 | 平成 26 年 (2014) | 2 月 第 3 回咸宜園教育顕彰事業 (「咸宜園の日」) 実施 |
| 平成 19 年 (2007) | 11 月 史跡咸宜園ガイダンス棟実施設計
後の咸宜園教育研究センターの基本設計となる | | |
| 平成 20 年 (2008) | 咸宜園教育研究センター建設 (国土交通省所管のまちづくり交付金事業を導入) (～平成 22 年 3 月) | | |



咸宜園教育研究センター及び史跡咸宜園跡位置図

II. 施設の概要・組織

(1) 設置目的

咸宜園や廣瀬淡窓等に関する調査研究及び関係資料の収集、公開等を行うことにより、その理解を深め、宜風の浸透を図ることをもって、教育、学術や文化の向上に寄与する。

(2) 設置年月日

平成 22 年 4 月 1 日
(平成 22 年 10 月 2 日開館)

(3) 設置場所

日田市淡窓 2 丁目 2 番 18 号

(4) 設置の概要

公開展示室・研修室・研究室を備えた「史跡咸宜園跡」のガイダンス施設。

①構造・規模

木造平屋造 建物延べ面積

約 373㎡ (専有面積)

②開館時間

午前 9 時から午後 5 時

③休館日

・水曜日
(水曜日が国民の祝日または振替休日

に当たるときはその翌日)

・年末年始 (12 月 29 日～1 月 3 日)

④主要な施設

◇公開展示室 (約 108㎡)

常設展示

企画展示

特別展示

◇研修室 (約 73㎡)

咸宜園入門ぱくすの体験や各種研修に利用

◇研究室 (約 61㎡)

図書コーナーやパソコン閲覧コーナーを設け、廣瀬淡窓や咸宜園のことなどについて、自由に調べることが可能。ただし、図書の貸し出しは行わない

◇収蔵庫 (約 44㎡)

(5) 主な業務

①咸宜園、廣瀬淡窓、門下生等に関する研究調査並びに関係資料の収集、整理及び保管

②上記①の研究や調査成果の展示公開、情報発信等による活用

③咸宜園に関する体験学習、講座、講演会等による普及啓発

④史跡咸宜園跡の公開

(6) 組織

①咸宜園教育研究センター

名誉館長 (非常勤)

所長

係長 1

副主幹 1

主任 2

研究員 1

臨時職員 3

(内、学芸員資格者 3)

②世界遺産推進室

室長

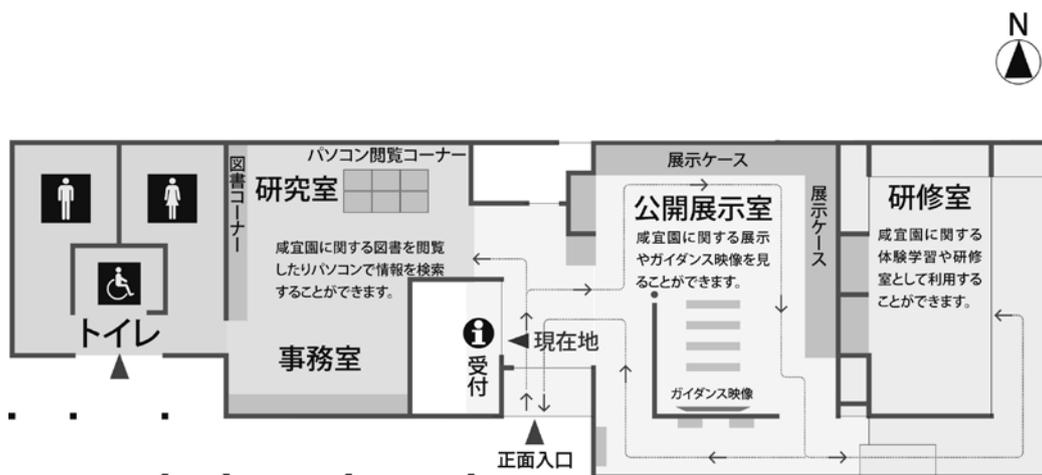
係長 1

副主幹 1

主任 2

主事 2 (兼任)

(内、学芸員資格者 4)



咸宜園教育研究センター平面図

Ⅲ. 利用案内

(1) 開館時間

- 公開展示室：午前9時から午後5時
- 研修室：午前9時から午後5時
- 研究室：午前9時から午後5時
- (入館時間は、午後9時から午後4時30分)
- 休館日：・水曜日（水曜日が国民の祝日または振替休日
休日に当たるときはその翌日）
- ・年末年始（12月29日～1月3日）

(2) 交通

- JR久大本線：「日田駅」下車徒歩約10分
- 高速バス：「市役所前」下車徒歩約7分
- 車：大分自動車道「日田IC」から約5分
- ・専用駐車場には10台駐車可能
- ・乗降場は大型バス3台まで乗降可能



IV. 条例・規則

1. 咸宜園教育研究センターの設置及び管理に関する条例

平成 22 年 3 月 24 日
条例第 9 号

(設置)

第 1 条 咸宜園や廣瀬淡窓等に関する調査研究及び関係資料の収集、公開等を行うことにより、その理解を深め、宜風の浸透を図ることをもって、教育、学術や文化の向上に寄与することを目的として咸宜園教育研究センター（以下「センター」という。）を設置する。

(名称及び位置)

第 2 条 センターの名称及び位置は、次のとおりとする。

名称 咸宜園教育研究センター

位置 日田市淡窓 2 丁目 2 番 18 号

(業務)

第 3 条 センターの業務は、次のとおりとする。

- (1) 咸宜園、廣瀬淡窓、門下生等に関する研究並びに関係資料の調査、収集、整理及び保管
- (2) 前号の研究や調査成果の展示公開、情報発信等による活用
- (3) 咸宜園に関する体験学習、講座、講演会等による普及啓発
- (4) 史跡咸宜園跡の公開
- (5) 前各号に掲げるもののほか、センターの運営に関する事務のうち、教育委員会が必要と認める業務

(開館時間及び休館日)

第 4 条 センターの開館時間は、午前 9 時から午後 5 時まで（入館時間については、午前 9 時から午後 4 時 30 分まで）とする。ただし、教育委員会が必要と認めるときは、開館時間を変更することができる。

2 センターの休館日は、次のとおりとする。ただし、教育委員会が必要と認めるときは、休館日を変更し、又は臨時に休館日を定めることができる。

- (1) 水曜日（その日が国民の祝日に関する法律（昭和 23 年法律第 178 号）に規定する休日にあたるときは、当該休日以後の直近の休日でない日）
- (2) 12 月 29 日から翌年 1 月 3 日まで

(入館料)

第 5 条 センターの入館料は、無料とする。

(入館の制限)

第 6 条 教育委員会は、センターの入館者が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、入館を拒み、又は退館を命ずることができる。

- (1) 公の秩序又は善良な風俗を害するおそれがあるとき。
- (2) センターの建物、設備、展示物等を汚損し、損傷し、又は滅失するおそれがあるとき。
- (3) その他センターの管理上支障があるとき。

(原状回復義務又は損害賠償)

第 7 条 故意又は過失によりセンターの建物、設備、展示物等を損傷又は滅失した者は、直ちにこれを原状に復し、又はその損害を賠償しなければならない。た

し、教育委員会が特別の事情があると認めるときは、損害賠償義務の全部又は一部を免除することができる。

(研修室の利用の許可)

第 8 条 研修室の利用（体験学習の利用を除く。以下同じ。）をしようとする者は、あらかじめ、教育委員会の許可を受けなければならない。許可を受けた事項を変更しようとするときも、同様とする。

2 教育委員会は、前項の許可をするに当たっては、管理上必要な条件を付することができる。

(利用許可の制限)

第 9 条 教育委員会は、その利用が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、研修室の利用の許可（以下「利用許可」という。）をしないことができる。

- (1) 公の秩序又は善良な風俗を害するおそれがあるとき。
- (2) 研修室の建物、設備、展示物等を汚損し、損傷し、又は滅失するおそれがあるとき。
- (3) その他研修室の管理上支障があるとき。

(利用許可の取消し等)

第 10 条 教育委員会は、利用許可を受けた者（以下「利用者」という。）が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、利用許可を取り消し、又は研修室の利用を停止し、若しくは制限することができる。

- (1) 利用許可の条件に違反したとき。
- (2) 偽りその他不正な手段により利用許可を受けたことが明らかになったとき。
- (3) この条例又はこの条例に基づく教育委員会規則の規定に違反したとき。
- (4) その他研修室の管理上支障があるとき。

2 教育委員会は、前項の規定による利用許可の取消し等によって利用者が損害を受けても、その賠償の責めを負わないものとする。

(目的外利用又は権利譲渡の禁止)

第 11 条 利用者は、研修室を利用許可を受けた目的以外に利用し、又はその利用する権利を他の者に譲渡し、若しくは転貸してはならない。

(使用料)

第 12 条 利用者は、別表に定める額を使用料として前納しなければならない。ただし、教育委員会が特別の事情があると認めるときは、使用料を後納することができる。

(使用料の減免)

第 13 条 教育委員会は、前条の規定にかかわらず、次の各号のいずれかに該当するときは、使用料を減額し、又は免除することができる。

- (1) 市及び市の執行機関が市の行政上のために利用するとき。
- (2) 市長又は教育委員会が特に必要と認める者が第

1 条に規定する設置目的に沿って利用するとき。
(使用料の不還付)

第 14 条 既に納入された使用料は、還付しない。ただし、次の各号のいずれかに該当する事由に基づいて利用を中止したときは、既納の使用料の全部又は一部を還付することができる。

- (1) 研修室の管理上必要があるため、その利用許可を取り消したとき。
- (2) 利用者が自己の都合により 2 日前に利用許可の取消しを申し出たとき。
- (3) 災害その他やむを得ない事情により利用することができなくなったとき。

(咸宜園教育研究センター運営委員会の設置)

第 15 条 センターの適正かつ効果的な運営を図るため、咸宜園教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会の所掌事務、組織その他必要な事項は、教育委員会規則で定める。

(委任)

第 16 条 この条例の施行に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附 則

(施行期日)

1 この条例は、公布の日から起算して 7 月を超えない範囲内において教育委員会規則で定める日から施行する。ただし、第 15 条及び次項の規定並びに附則第 3 項の改正は、平成 22 年 4 月 1 日から施行する。

(平成 22 年教委規則第 11 号で平成 22 年 10 月 2 日から施行)

(準備行為)

2 教育委員会は、施行の日前においても、この条例に規定する事務の実施について必要な準備行為をすることができる。

(日田市特別職の職員で非常勤の者の報酬及び費用弁償に関する条例の一部改正)

3 日田市特別職の職員で非常勤の者の報酬及び費用弁償に関する条例（昭和 31 年条例第 167 号）の一部を次のように改正する。

[次のよう] 略

別表（第 12 条関係）

区分	単位	金額	備 考
研修室	1 時間 につき	320 円	1 常設電灯以外の電気を利用するときは、1 回につき 410 円を加算する。 2 冷暖房を利用するときは、1 時間につき 200 円を加算する。

備考 1 日の利用時間は、原則として 3 時間を限度とする。

2. 咸宜園教育研究センターの設置及び管理に関する条例施行規則 抄録

平成 22 年 3 月 25 日
教委規則第 2 号

(利用申請)

第 2 条 条例第 8 条第 1 項の許可を受けようとする者（以下「申請者」という。）は、咸宜園教育研究センター研修室利用許可申請書（様式第 1 号。以下「利用許可申請書」という。）を教育委員会に提出しなければならない。

(寄贈及び寄託)

第 11 条 センターは、咸宜園に関係する資料の寄贈及び寄託を受けることができる。

2 前項の資料の所有者は、センターに当該資料を寄贈し、又は寄託しようとするときは、資料名、数量等を明記した寄贈・寄託申込書（様式第 8 号）を教育委員会に提出しなければならない。

(資料の館外貸出し)

第 12 条 収藏品等の資料は、館外貸出しを行わないものとする。ただし、教育委員会が、博物館、図書館、学校等において学術上の調査研究又は教育普及の目的で使用され、かつ、取扱い上安全性が確保されると認めるときは、この限りでない。

2 前項の館外貸出しを受けようとする者（以下「貸出し申請者」という。）は、咸宜園資料貸出し許可申請書（様式第 13 号）を教育委員会に提出しなければならない。

3 教育委員会は、前項の館外貸出しを許可したときは、

咸宜園資料貸出し許可書（様式第 14 号）を貸出し申請者に交付するものとする。

(撮影、複写等の許可)

第 13 条 収藏品等の資料を学術上の調査研究等の目的で撮影し、若しくは複写し、出版物等への掲載をしようとする者又は模写、模造等をしようとする者（以下「撮影等申請者」という。）は、咸宜園資料撮影等許可申請書（様式第 15 号）を教育委員会に提出しなければならない。

2 教育委員会は、前項の規定による撮影等を許可したときは、咸宜園資料撮影等許可書（様式第 16 号）を撮影等申請者に交付するものとする。

(運営委員会の所掌事務)

第 14 条 条例第 15 条に規定する咸宜園教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）は、教育委員会の諮問に応じ、条例第 3 条各号に掲げる業務に関する事項について審議し、及びこれらの事項について教育委員会に建議する。

咸宜園教育研究センター

研究紀要 第四号

二〇一五年三月二七日印刷発行

編集 日田市教育庁咸宜園教育研究センター

〒八七七・〇〇一二

大分県日田市淡窓二・二・一八

咸宜園教育研究センター

発行 日田市教育委員会

印刷・製本 尾花印刷有限公司

THE KANGIEN EDUCATION RESEARCH CENTER
BULLETIN

Vol.4

The Hita Gion Festival for Hirose Tanso .

UMEYAMA Hideto

Nakashima Shigyoku's Japanese history, Nakashima Shigyoku's
work included in The Chinese poem collection 「Toei shisen」
The Chinese poem collection "Yochou-hen" by Matsushita Chikuin.

SATO Takumi
SATO Takumi

The lessons of Kangien are introduced to moral education and minds
are enriched.

NAKASHIMA Tatsuma

Investigation about whether Takano Choei definitely entered Kangien.

FUKAMACHI Koichiro

Introduction by Nishimura Tenshu about Hirose Tanso and Hirose Kyokuso
who went to Kamei's private school.

MIZOTA Naoki

The biographic background of the students of Kangien. (3)

FUKAMACHI Koichiro

Research Center Annual Report (Fiscal 2013)

Research Center Directory

March.2015